群馬県前橋市

引切塚遺跡

分譲住宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和60年度

前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

序

前橋市は、赤城山の裾野に古代から地方行政の中心地として、発展した地域で、最近は上越新幹線の運転開始や関越自動車道の全線開通によって高速時代を迎え、両毛線の高架化などで市内の交通整備が進み、教育文化施設の充実など首都圏都市県都として、高度の発展が期待され工業団地の造成や官民の住宅地造成事業が計画され着々と事業実施が進められています。これらの開発事業と埋蔵文化財の保存との問題は常に裏腹な利益関係にあり、本市教育委員会も文化財保護の観点から開発行為者と鋭意調整に努力している所であります。

この度の前橋市青柳町地内の引切塚遺跡の発掘調査に付いては、都市計画法第２９条に規定する開発行為の許可申請の事前協議書の提出を受けて、現地調査を実施したところ埋蔵文化財の包蔵地であることが確認されたので、開発行為者と協議し開発区域全域に付いて記録保存することになり、開発行為者の委託を受け、前橋市埋蔵文化財発掘調査団が発掘調査を実施した記録であります。

調査の結果、縄文時代の土器、石器等、古墳時代の住居址２７軒、奈良時代の住居址３軒、堀立遺構１軒、土坑１０箇所、古墳の石室１基等が検出され、この地域の歴史を解明して行くに当たっての資料を加えることが出来ました。ここにその成果の一端を報告致します。

この調査を実施するに当たり、御協力、御指導を受けた関係諸機関の方々並びに開発行為者の市川建設株式会社に厚くお礼申し上げ、感謝を表する次第であります。

昭和６２年１２月１日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団　長　　関　口　和　雄

写　真　図　版　目　次

図版－1　1　引切塚遺跡（上空より）
2　遺跡近景（東側より）
3　遺跡近景（西側より）
4　遺跡近景（南側より赤城山を望む）
5　遺跡近景（北側より）
図版－2　1　1号住居址全景
2　同　遺物出土状況
3　同　土層断面
4　同　カマド全景
5　同　カマド近景
図版－3　1　2号住居址全景掘り方
2　同　生活面
3　同　貯蔵穴
4　同　土層断面
5　同　カマド全景
6　同　カマド近景
図版－4　1　3号住居址全景掘り方
2　同　生活面
3　同　遺物出土状況
4　同　土層断面
5　同　遺物出土状況近景
6　同　カマド近景
図版－5　1　4号住居址全景
2　同　掘り方
3　同　遺物出土状況
4　同　カマド近景
5　同　遺物出土状況
図版－6　1　5号住居址全景
2　同　遺物出土状況
3　同　貯蔵穴遺物出土状況
4　同　遺物出土状況
5　同　カマド近景
図版－7　1　6号住居址全景
2　同　掘り方
3　7・8・28号住居址全景
図版－8　1　7号住居址全景
2　同　遺物出土状況
3　同　貯蔵穴土層断面
4　同　カマド付近遺物出土状況
5　8号住居址全景
6　同　カマド土層断面
7　同　カマド全景
8　同　カマド内遺物出土状況
図版－9　1　9号住居址全景
2　同　遺物出土状況
3　同　遺物出土状況近景
4　同　遺物出土状況近景
5　同　遺物出土状況近景
図版－10　1　9号住居址遺物出土状況
2　同　カマド近景
3　10号住居址全景
4　同　遺物出土状況
5　同　遺物出土状況近景
図版－11　1　10号住居址遺物出土状況
2　同　遺物出土状況近景
3　同　カマド近景
4　同　土層断面
5　11号住居址全景
図版－12　1　11号住居址遺物出土状況
2　同　遺物出土状況近景
3　11号住居址カマド近景
4　同　土層断面
5　12号住居址全景
図版－13　1　12号住居址遺物出土状況
2　同　遺物出土状況近景
3　同　貯蔵穴近景
4　同　カマド全景
5　13A・13B住居址全景
図版－14　1　13A・13B住居址全景
2　13B号住居址貯蔵穴近景
3　13A号住居址遺物出土状況
4　同　羽口出土状況
5　13A号住居址遺物出土状況

図版－14　6　１３Ｂ号住居址
カマド内遺物出土状況
7　１３号住居址土層断面
図版－15　1　１３Ａ号住居址カマド全景
2　１３Ｂ号住居址カマド全景
3　１４号住居址遺物出土状況
4　同　全景
5　同　土層断面
6　同　カマド全景
図版－16　1　１５号住居址全景（掘り方）
2　同　遺物出土状況
3　同　近景
4　同
5　同
図版－17　1　１５号住居址カマド近景
2　同　集石
3　同　土層断面
4　同　カマド全景
5　１６号住居址全景
6　同　生活面
図版－18　1　１６号住居址遺物出土状況
2　同　近景
3　同　カマド全景
4　同
5　１７号住居址遺物出土状況
図版－19　1　１７号住居址遺物出土状況近景
2　同
3　同　カマド
4　同　カマド付近遺物出土状況
5　１８・１９号住居址全景
図版－20　1　１８号住居址遺物出土状況
2　同　土層断面
3　同　カマド全景
4　同　カマド内遺物出土状況
5　１９号住居址遺物出土状況
図版－21　1　１９号住居址貯蔵穴遺物出土状況
2　同　集石
3　同　カマド全景
4　同　カマド土層断面
5　18・19・20
・22号住居址全景
図版－22　1　２２号住居址カマド全景
2　同　カマド土層断面
3　同　土層断面
4　２１号住居址全景
図版－23　1　２１号住居址遺物出土状況
2　同　カマド全景
3　同　遺物出土状況近景
4　同　カマド土層断面
5　２２号住居址全景
図版－24　1　２２号住居址土層断面
2　同　掘り方
3　同　遺物出土状況
4　同　カマド全景
5　同　カマド土層断面
図版－25　1　２３号住居址全景
2　同　遺物出土状況
3　同　土層断面
4　同　カマド土層断面
5　同　カマド全景
6　同　天井石除去状況
図版－26　1　２４・２５号住居址全景
2　２４号住貯蔵穴土層断面
3　同　カマド全景
4　同　遺物出土状況
5　同　カマド土層断面
図版－27　1　２６号住居址全景
2　同　土層断面図
3　同　カマド付近遺物出土状況
4　同　カマド土層断面
5　同　カマド全景
図版－28　1　２７号住居址土層断面
2　掘立遺構全景
3　[illegible]穴近景
4　同　全景
5　同

図版－29　1　２８号住居址全景（掘り方）
2　同　遺物出土状況近景
3　同　カマド付近
4　７・２８号住居址カマド
5　同　全景
図版－30　1　引切塚１号墳石室
2　同
3　同　刀子出土状況
4　９号土坑全景
5　同　土層断面
図版－31　１号住居址遺物No.１
２号住居址遺物No.１・２・３・４
３号住居址遺物No.１
４号住居址遺物No.３・４
５号住居址遺物No.１
図版－32　４号住居址遺物No.５・６
５号住居址遺物No.２・３・７・８
図版－33　５号住居址遺物No.１２
６号住居址遺物No.１
７号住居址遺物No.１・２・７・８・９・１２
図版－34　７号住居址遺物No.１５
８号住居址遺物No.１・２
９号住居址遺物No.１・３・４
10号住居址遺物No.１・５
図版－35　10号住居址遺物No.６（上・下半部）
11号住居址遺物No.１・４・６
12号住居址遺物No.１・２
図版－36　12号住居址遺物No.３・５・６
13号住居址遺物No.１・２・４・５
図版－37　13号住居址遺物No.６・８・10・12
13号住居址遺物No.13（上半部・下半部）
14号住居址遺物No.１・２
図版－38　14号住居址遺物No.３・４
15号住居址遺物No.２・３・４・５
６・８・12
15・16
図版－39　15号住居址遺物No.18・19・21
23・24・25
図版－40　15号住居址遺物No.26・28・33
34・35
16号住居址遺物No.１
図版－41　16号住居址遺物No.２
17号住居址遺物No.１・３・４・５
６・７・８
図版－42　17号住居址遺物No.９
18号住居址遺物No.１・２
19号住居址遺物No.１・２・３・４
21号住居址遺物No.２
図版－43　21号住居址遺物No.４・５・６
22号住居址遺物No.１・２・３・４
５・６
図版－44　23号住居址遺物No.１・２・３・４
24号住居址遺物No.１
26号住居址遺物No.１・２・３・４
引切塚１号墳遺物No.２
図版－45　28号住居址遺物No.15
（葉脈痕）３号住居址遺物No.２
（羽口）１３号住No.13・14・15
（　〃　）１５号住No.36
（石製模造品）５号住No.14
９号住No.５
１３号住No.１９
１８号住No.３
（土錘）３号住居址遺物No.３
１２号住居址遺物No.８
（石鏃）No.１　Ｍ－１６グリット
No.２　１５号住居址覆土
No.３　１２号住居址覆土
No.４　１８号住居址覆土
（石斧）No.１　１２号住居址覆土
No.２　表土一括
No.８　Ｋ－２グリット
（鉄鏃）引切塚１号墳遺物No.３
（刀子）引切塚１号墳遺物No.１

例　　言

1. 本書は、都市計画法第２９条（開発行為の許可）の宅地造成事業実施に先駆け、開発区域内の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、前橋市教育委員会のもとに組織された、前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団　長　奈良三郎　昭59. 4. 1就任　・　団　長　関口和雄　昭62. 1. 1就任）が実施した。
3. 所在地及び調査期間

   所在地　　前橋市青柳町字引切塚８７５－１他（遺跡略称６０Ｂ－１３）

   期　間　　昭和６０年６月２５日～昭和６１年３月３１日

   調査面積　２,９４０m^2
4. 調査担当者　福田紀雄（市文化財保護係長）　　浜田博一（市文化財保護主任）

   金子正人（スナガ環境測設株式会社専務取締役）
5. 本書はスナガ環境測設株式会社の埋蔵文化財調査部が作成に当たり執筆及び編集の総括を金子正人が担当し、遺物の復元・実測・図版作成を（萩原弘子、小林裕美、佐々木智恵子、角田朱美、蛯子とみ子、高橋充子）があたり、作業事務を柴崎信江が担当した。
6. 発掘調査の作業に付いては、土木機械や運搬車輌などの運転と安全管理を今井芳生、荻野博巳が担当した。発掘作業及び作業員の指揮・指導の総括に金子正人が当り、今井芳生、生方茂、船藤亨、荻野博巳が担当した。

   測量業務の計画及び指導は須永眞弘（測量士第５２６１４号）が担当した。
7. 本遺跡の発掘調査では次の方々に御指導戴きました。記して感謝の意を表す次第であります。

   市川建設株式会社　代表取締役　市川友久

   群馬県教育委員会文化財保護課

   群馬県埋蔵文化財発掘調査団

   大胡町教育委員会

   富士見村教育委員会社会教育課　　地元関係者
8. 発掘作業参加者

生方　茂	荻野博巳	今井　修	内山春夫	奥村公一
門倉喜代美	樺澤健治	小池キクエ	小島吉之助	小西サトミ
斉藤洋一	坂西恭輔	佐々木智恵子	佐藤恵美子	鈴木淳彦
関口智正	角田朱美	角田昌美	中川きくよ	長谷川千代乃
長谷川とめ	原　音次郎	樋口静子	深沢一也	深沢近子
船津かほる	宮崎千代子	吉沢富美雄		

凡　　例

1. 各遺構実測図の縮尺は次の通りである。
   住居址（生活面・掘り方）1／60、カマド 1／30、掘っ立て遺構・土坑 1／60 を原則とした。
2. 各遺構実測図断面等に記した基準線は標高で表した。
3. 遺物実測図の縮尺は次の通りである。
   土器・土器拓本・羽口・石器 1／3、鉄製品 1／2、臼玉・紡錘車・石鏃 1／1 を原則とした。　なお同一図面中に異なる縮尺を使用した時はそのつど記した。
4. 遺構及び遺物挿図中のスクリーントーンは下記の事を示す。

カマド構築ネンド部分　 地山

羽口ガラス質部分　 羽口赤褐色部分　 羽口灰白色部分

5. 出土遺物に付いては観察表を作成した。
6. 住居址実測図中に示す遺物番号は遺物観察表の番号と一致する。
7. 遺跡全体図は「付図」として、縮尺は 1／300 とした。
8. 住居址の主軸はカマドを持つ壁とその反対側の壁を結ぶ軸を主軸とした。

目　　次

1. 発掘調査にいたる経過 ---------- 1
2. 引切塚遺跡の位置と環境 ---------- 2
3. 調査の方法 ---------- 3
4. 基本土層 ---------- 4
5. 検出された遺構と遺物 ---------- 4
   (1) 古墳時代
      住　居　址 ---------- 5
      引切塚 1 号墳 ---------- 79
      掘立遺構と柱穴群 ---------- 82
   (2) 奈良・平安時代
      住　居　址 ---------- 83
   (3) その他の遺構遺物
      土　坑 ---------- 89
      縄文時代の遺物（石器） ---------- 91
6. 成果と問題点
   (1) 縄文時代 ---------- 94
   (2) 古墳時代
      住居址の規格と規模 ---------- 94
      出土遺物に付いて（甕・甑・坏・羽口） ---------- 97
   (3) 奈良・平安時代の住居址に付いて ---------- 99
   結　　語 ---------- 99

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡の位置図 ---------- 2
第２図　基本土層 ---------- 3
第３図　１号住居址・カマド実測図 -------- 4
第４図　１号住居址出土遺物実測図 -------- 5
第５図　２号住居址実測図
　　２号住居址貯蔵穴 ---------- 6
第６図　２号住居址カマド実測図 --------- 7
第７図　２号住居址出土遺物実測図 -------- 8
第８図　３号住居址実測図 ---------- 9
第９図　３号住居址カマド・出土遺物実測図 - 10
第10図　４号住居址・カマド実測図 ------- 12
第11図　４号住居址出土遺物実測図 ------- 13
第12図　５号住居址・カマド実測図
　　５号住居址実測図 1／120 ------- 15
第13図　５号住居址出土遺物実測図(1) ----- 16
第14図　５号住居址出土遺物実測図(2)------ 17
第15図　６号住居址・出土遺物実測図 ----- 19
第16図　７・８・２８号住居址実測図 ----- 20
第17図　２８号住居址カマド
　　・出土遺物実測図 ---------- 21
第18図　７・２８号住居址出土遺物実測図--- 22
第19図　２８号住居址出土遺物
　　・７号住居址カマド実測図 ------- 23
第20図　９号住居址・カマド実測図 ------- 26
第21図　９号住居址出土遺物実測図 ------- 27
第22図　１０号住居址カマド実測図 ------- 28
第23図　１０号住居址出土遺物実測図 ----- 29
第24図　１１号住居址・カマド実測図 ----- 31
第25図　１１号住居址出土遺物実測図(1) ---- 32
第26図　１１号住居址出土遺物実測図(2) ---- 33
第27図　１２号住居址実測図 ---------- 34
第28図　１２号住居址カマド実測図 ------- 35
第29図　１２号住居址出土遺物実測図(1) ---- 36
第30図　１２号住居址出土遺物実測図(2) ---- 37
第31図　１３Ａ・１３Ｂ号住居址実測図 ---- 39
第32図　１３Ａ・１３Ｂ号住居址
　　カマド実測図 ---------- 40
第33図　１３Ａ・１３Ｂ号住居址
　　出土遺物実測図(1) ---------- 41
第34図　１３Ａ・１３Ｂ号住居址
　　出土遺物実測図(2) ---------- 42
第35図　１３Ａ・１３Ｂ号住居址
　　出土遺物実測図(3) ---------- 43
第36図　１５号住居址・カマド実測図 ------- 45
第37図　１５号住居址出土遺物実測図(1)------ 46
第38図　１５号住居址出土遺物実測図(2)------ 47
第39図　１５号住居址出土遺物実測図(3)------ 48
第40図　１５号住居址出土遺物実測図(4)------ 49
第41図　１５号住居址出土遺物実測図(5)------ 50
第42図　１６号住居址・カマド実測図 ------- 53
第43図　１６号住居址出土遺物実測図 ------- 54
第44図　１７号住居址・カマド実測図 ------- 55
第45図　１７号住居址出土遺物実測図(1)------ 56
第46図　１７号住居址出土遺物実測図(2)------ 57
第47図　１８号住居址・カマド実測図 ------- 59
第48図　１８号住居址出土遺物実測図 ------- 60
第49図　２０号住居址・カマド実測図 ------- 61
第50図　２１号住居址・カマド実測図 ------- 62
第51図　２１号住居址出土遺物実測図(1)------ 64
第52図　２１号住居址出土遺物実測図(2)------ 65
第53図　２２号住居址・カマド実測図 ------- 66
第54図　２２号住居址出土遺物実測図 ------- 67
第55図　２３号住居址・カマド実測図 ------- 69
第56図　２３号住居址出土遺物実測図 ------ 70
第57図　２４・２５号住居址実測図 --------- 71
第58図　２４・２５号住居址・カマド実測図 --- 72
第59図　２４・２５号住居址出土遺物実測図 --- 74
第60図　２６号住居址・カマド実測図 ------- 75
第61図　２６号住居址出土遺物実測図 ------- 76
第62図　２７号住居址実測図 ---------- 77
第63図　引切塚１号墳石室実測図 -------- 79
第64図　引切塚１号墳断面・平面図 -------- 80
第65図　引切塚１号墳出土遺物実測図 ------- 81
第66図　掘立遺構実測図 ---------- 81

第67図　8号住居址・カマド実測図 ------- 83
第68図　8号住居址出土遺物実測図 ------- 84
第69図　14号住居址・カマド実測図 ------ 85
第70図　14号住居址出土遺物実測図 ------ 86
第71図　19号住居址・カマド実測図 ------ 87
第72図　19号住居址出土遺物実測図 ------ 88
第73図　土坑実測図 ---------- 89
第74図　石鏃実測図 ---------- 90
第75図　石斧・凹石実測図 ---------- 91
第76図　磨製石斧実測図 ---------- 92
第77図　甌穴列実測図 ---------- 92

表　目　次

1号住居址出土遺物観察表 ---------- 5
2号住居址出土遺物観察表 ---------- 8
3号住居址出土遺物観察表 ---------- 10
4号住居址出土遺物観察表 ---------- 13
5号住居址出土遺物観察表 ---------- 16
6号住居址出土遺物観察表 ---------- 17
7号住居址出土遺物観察表 ---------- 24
28号住居址出土遺物観察表 ---------- 25
9号住居址出土遺物観察表 ---------- 27
10号住居址出土遺物観察表 ---------- 30
11号住居址出土遺物観察表 ---------- 33
12号住居址出土遺物観察表 ---------- 37
13A・13B号住居址出土遺物観察 ------ 43
15号住居址出土遺物観察表 ---------- 51
16号住居址出土遺物観察表 ---------- 54
17号住居址出土遺物観察表 ---------- 58
18号住居址出土遺物観察表 ---------- 60
21号住居址出土遺物観察表 ---------- 63
22号住居址出土遺物観察表 ---------- 68
23号住居址出土遺物観察表 ---------- 68
24号住居址出土遺物観察表 ---------- 73
25号住居址出土遺物観察表 ---------- 74
26号住居址出土遺物観察表 ---------- 77
引切塚1号墳石室寸法 ---------- 78
引切塚1号墳出土遺物観察表 ---------- 80
8号住居址出土遺物観察表 ---------- 82
14号住居址出土遺物観察表 ---------- 84
19号住居址出土遺物観察表 ---------- 88
石鏃観察表 ---------- 90
石器観察表 ---------- 90
住居址の規格 ---------- 93
住居址の方位 ---------- 95

第１章　発掘調査に至る経過

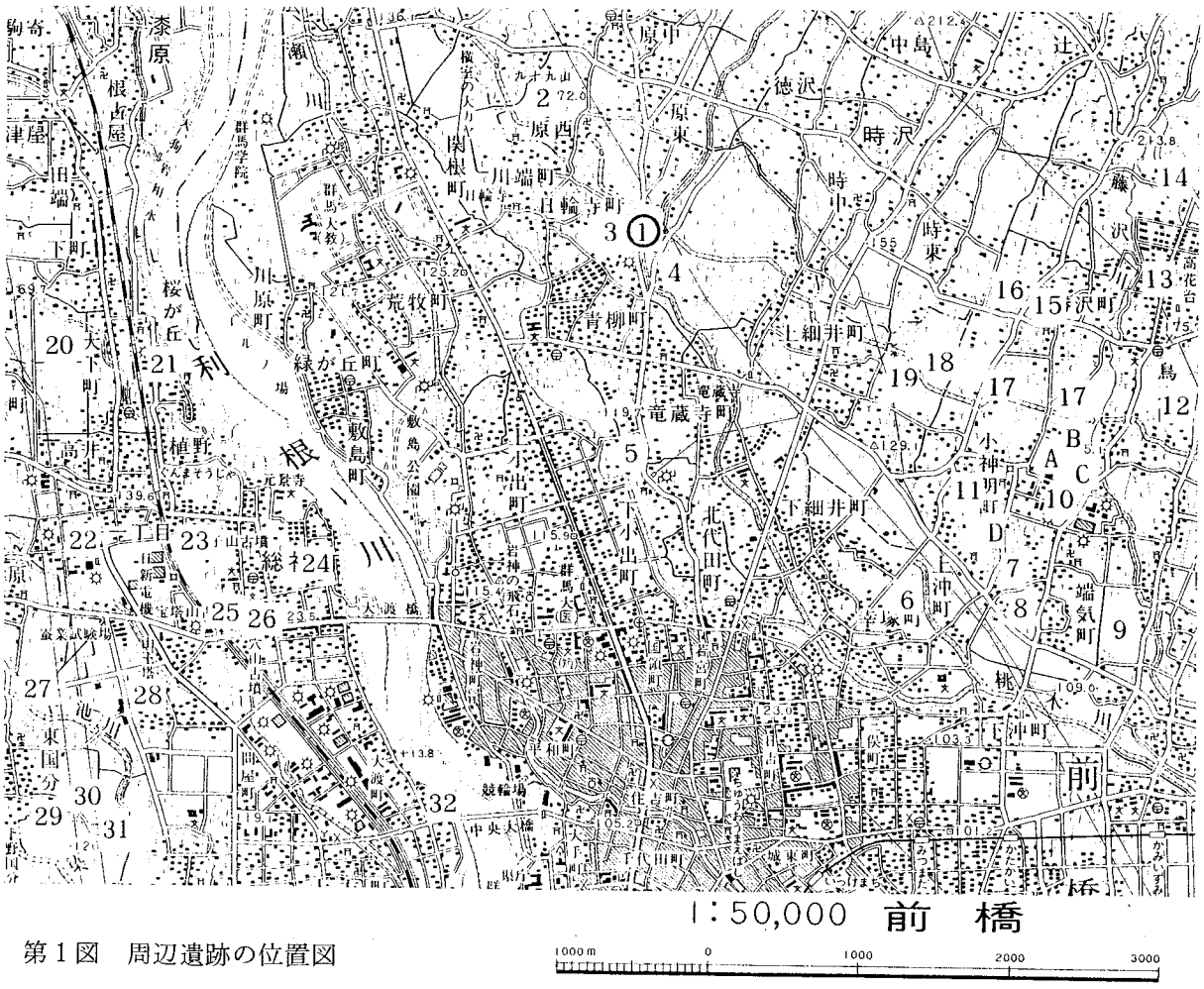
本報告書は引切塚遺跡群馬県前橋市の北西に位置する。前橋市青柳町字引切塚８７５－１で宅地造成事業に先駆けて発掘調査が行われたものである。当遺跡を含む前橋市青柳町字引切塚の地域は群馬県遺跡台帳によれば「№１２４引切塚古墳所在地前橋市青柳町字引切塚８７５－１、面積2,940㎡、地目現況　山林　私有地　古墳時代墳墓　保存状況はやや良い　県道前橋－溝呂木線の富士見村との境界線に接する位置にある　径１５ｍ　高さ４ｍ程の円墳でこの辺においては比較的原形を保っている。上毛古墳綜覧南橘村第４０号墳」と記載されている地域である。

昭和５９年１２月７日市川建設株式会社より都市計画法第２９条の規定により試掘調査の依頼があり昭和59年１２月２１日、２２日の両日試掘調査を実施した。開発予定地の北から５ｍ間隔で３本、１０ｍ間隔で１本更に西側に１本、計５本幅２ｍの試掘溝を掘った。上記の方法による確認調査の結果古墳時代後期と平安時代前期の住居址を１３軒、その他に溝１条、土坑２基それから引切塚古墳に関する遺物を検出した。以上の事から本調査地は全面に埋蔵文化財を包含している所なので開発行為に先立って事前に発掘調査の必要があると判断された。

発掘調査は昭和６０年６月２５日～昭和６０年１１月１３日にわたって実施した。

６月２５日　機械機材搬入
　　２７日　基準測量打ち合せ
７月　４日　表土はがし
　　６日　起工式
　　８日　Ｓ＝１：１００平面図作成　確認面のコンターを入れる。
　　１１日　発掘作業員１３名採用通知する。
　　１７日　４ｍグリットを作成する。
　　１８日　Ｓ＝１：１００平面図
　　３０日　群馬県文化財保護課 巾隆之氏来跡
８月　６日　群馬県埋蔵文化財調査事業団より４名来跡
　　１３号住居址より滑石製の玉・羽口等が出土する。
　　７日　１５号住居址より多量の土器の出土あり。
　　１８日　Ｓ＝１：１００平面図
　　２０日　前橋市教育委員会関係者１２名来跡現場視察
９月１２日　富士見村元教育長来跡
　　１９日　土坑 1／20平面　断面図を取る。
１０月１９日　空中撮影
　　２１日　玄室内に刀子出土
　　２９日　現場作業終了・片付けのための連絡を取る。
　　プレハブ解体
　　機械機材搬出

第２章　引切塚遺跡の位置と環境



第１図　周辺遺跡の位置図

1. 引切塚遺跡
2. 九十九山古墳
3. 青柳宿上遺跡
4. 宿上遺跡
5. 青柳寄居遺跡
6. 西新井遺跡
7. 端気遺跡群Ⅱ
8. 端気遺跡群Ⅰ
9. 大日塚古墳
10. 芳賀西部団地遺跡
11. 小神明遺跡群
A 倉本遺跡
B 九料遺跡
C 西田遺跡
D 大神明遺跡
12. 芳賀東部団地遺跡
13. 芳賀北部団地遺跡
14. 東公田古墳
15. オブ塚古墳
16. オブ塚西古墳
17. 小神明遺跡群Ⅰ
18. 南田之口遺跡
19. 丑子塚古墳
20. 長久保遺跡
21. 桜ケ丘遺跡
22. 柿木遺跡
23. 総社二子山古墳
24. 遠見山古墳
25. 宝塔山古墳
26. 蛇穴山古墳
27. 国分寺境遺跡
28. 山王廃寺址
29. 国分僧寺遺跡
30. 国分寺中間地域遺跡
31. 国分尼寺遺跡
32. 王山古墳

前橋市は地形地質の特徴から北東部の赤城火山斜面、南西部の洪積台地（前橋台地）及び両者に挟まれて地溝状になった沖積低地（広瀬川低地帯）そして現利根川氾濫原の４地域に分けられる。（註１　前橋市史）

当遺跡の立地する赤城火山斜面地帯は、旧利根川によって作られた崖の上に位置する。赤城山の噴出物による台地で中小の河川により枝状に削られている。海抜 140 m～ 142 mの標高にあり、津久田停留所前橋線（通称石井県道）東沿いで大正用水が当市と勢多郡富士見村との境界をなしている地域である。

現在急峻な赤城白川が旧利根川左岸に到達する地点が現在の青柳町である。広大な旧利根川の河川敷（地溝状沖積地）に赤城白川の扇状地が形成されている。

周辺遺跡としては、総社・元総社地区利根川右岸近くに６世紀前半に川原石で構築された王山古墳、６世紀末から７世紀初頭の構築で前方部・後円部共に石室を持つ総社二子山古墳、７世紀の構築と考えられる巨石石室を持つ愛宕山古墳、主軸長７０mの遠見山古墳、高い石造技術で作られた石室を持つ終末期の宝塔山古墳及び蛇穴山古墳があり古墳時代後期この地に有力な豪族の存在を窺うことが出来る。また奈良・平安時代の地方の政治と文化の中心地（国府の地）元総社地区では近年区画整理事業に伴い継続的に発掘調査が行われ、古墳時代から平安時代の住居及び大溝等が確認されている。

一方赤城火山斜面では、芳賀東部・西部・北部団地遺跡で縄文・奈良・平安時代の住居と古墳及び掘立遺構、製鉄址・端気遺跡群Ⅰ・Ⅱ、大日塚古墳　倉本遺跡　九料遺跡　西田遺跡　大神明遺跡　東公田古墳　オブ塚古墳　オブ塚西古墳　丑子塚古墳　南田之口遺跡　九十九山古墳　青柳宿上遺跡　宿上遺跡　この赤城白川扇状地の先端部に青柳寄居遺跡がある。

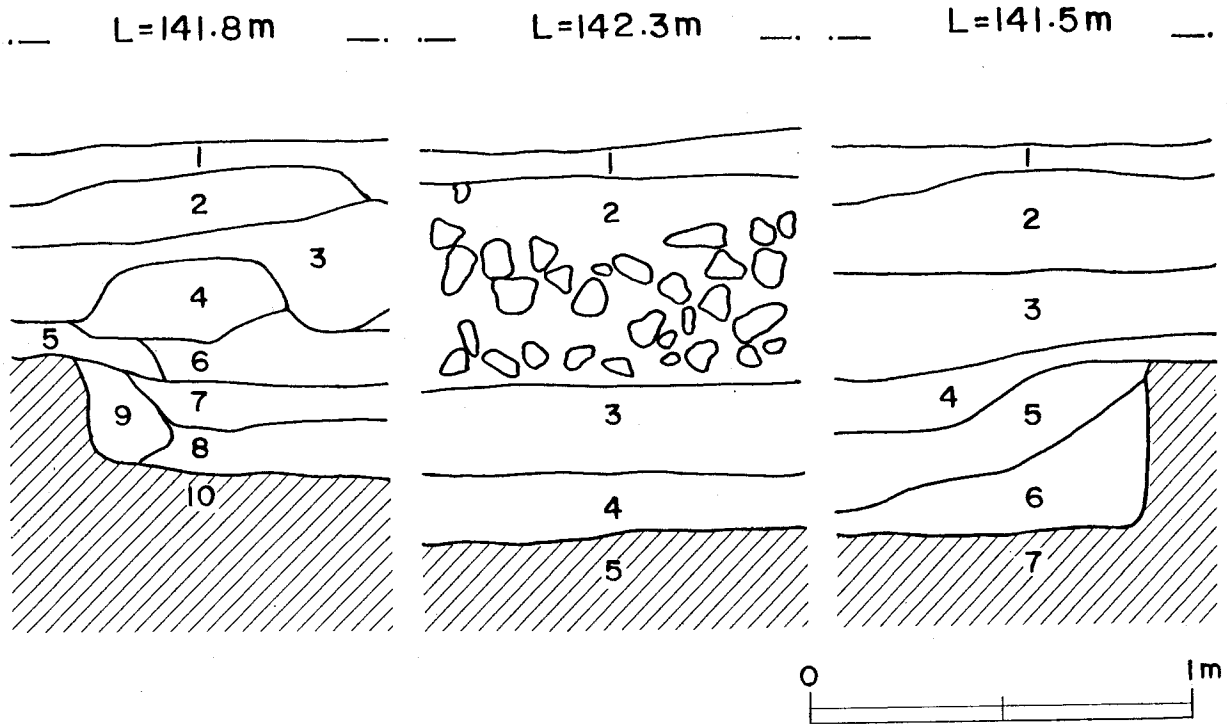
以上のように旧利根川左岸の台地には、縄文から弥生・古墳・奈良・平安時代までの住居址・古墳・掘立遺構・製鉄址・井戸・土坑等が確認されている。当遺跡付近の赤城白川両岸での調査例は少ないが、勝沢・鳥取・小神明遺跡等で同じ様な埋蔵文化財が近年相次いで発見されている。

第３章　調査の方法

本遺跡は県道前橋～津久田線（通称石井県道）に隣接し前橋市と富士見村との境界に立地する。本調査に際し県道上の座標点　X＝47,679.731m、Y＝－68, 309,759 mと座標点　X＝47, 706. 139m Y＝－68, 307. 073mの両点を基準としX＝47,700,000 m　Y＝－ 68,300,000m を求めこれを元にＡ－０点（X＝47, 712. 000 m、Y＝－68, 274, 000m）を施置し、４mピッチのグリットを設置した。このＡ－０点より南方向へアルファベットで Ａ．Ｂ．Ｃ‥‥‥と東方向へアラビア数字で 1. 2. 3‥‥‥と呼称する事とした。

水準点については、前橋市竜蔵寺町２５９－１前橋(4)－３（１５－３４４）が道路工事により多角点が不明なので前橋市荒牧町８１５－２｛(４)－１０(１５－３４５)｝より移した。（国土地理院データーによる）

第４章　基本土層



北　側

1. 砂質の耕作土
2. ロームブロックを含む耕作土
3. 砂質の１より締りのある耕作土
4. 畝状を示す褐色土層
5. 砂質のローム粒を含む黄褐色土層
6. 0.1～1.0cmの軽石を含む黒褐色土層
7. ネンドと焼土を含むローム質の褐色土層
8. ロームを含む砂質の黄褐色土層
9. 粘土と砂とロームを含む黄褐色土層
10. 地山の黄褐色、砂質層

西　側

1. 砂質の耕作土
2. （0.5～1.0cm）の軽石を含む黄褐色土層
3. （0.5～1.0cm）の軽石を３～40％含む、黄褐色土層　引切塚１号墳の裏込め石
4. １mm以下の軽石を含む褐色土層
5. 地山のソフトローム層

南　側

1. 砂質の耕作土
2. １よりも多量に砂を含む耕作土
3. 軽石とシモフリ状のロームを含む黒褐色土層
4. ３よりもローム質の黄褐色土層
5. 細かい軽石を僅か含む黄褐色土層
6. 軽石を多量に含む黒褐色土層
7. 地山の黄褐色砂質層

第５章　検出された遺構と遺物

(1)　古墳時代・調査区全域から後期の住居址２６件が発見され良好な一括資料が得られた。狭い地域から数多くの住居址と土器の検出はこの時代の変遷を知る上で注目される。

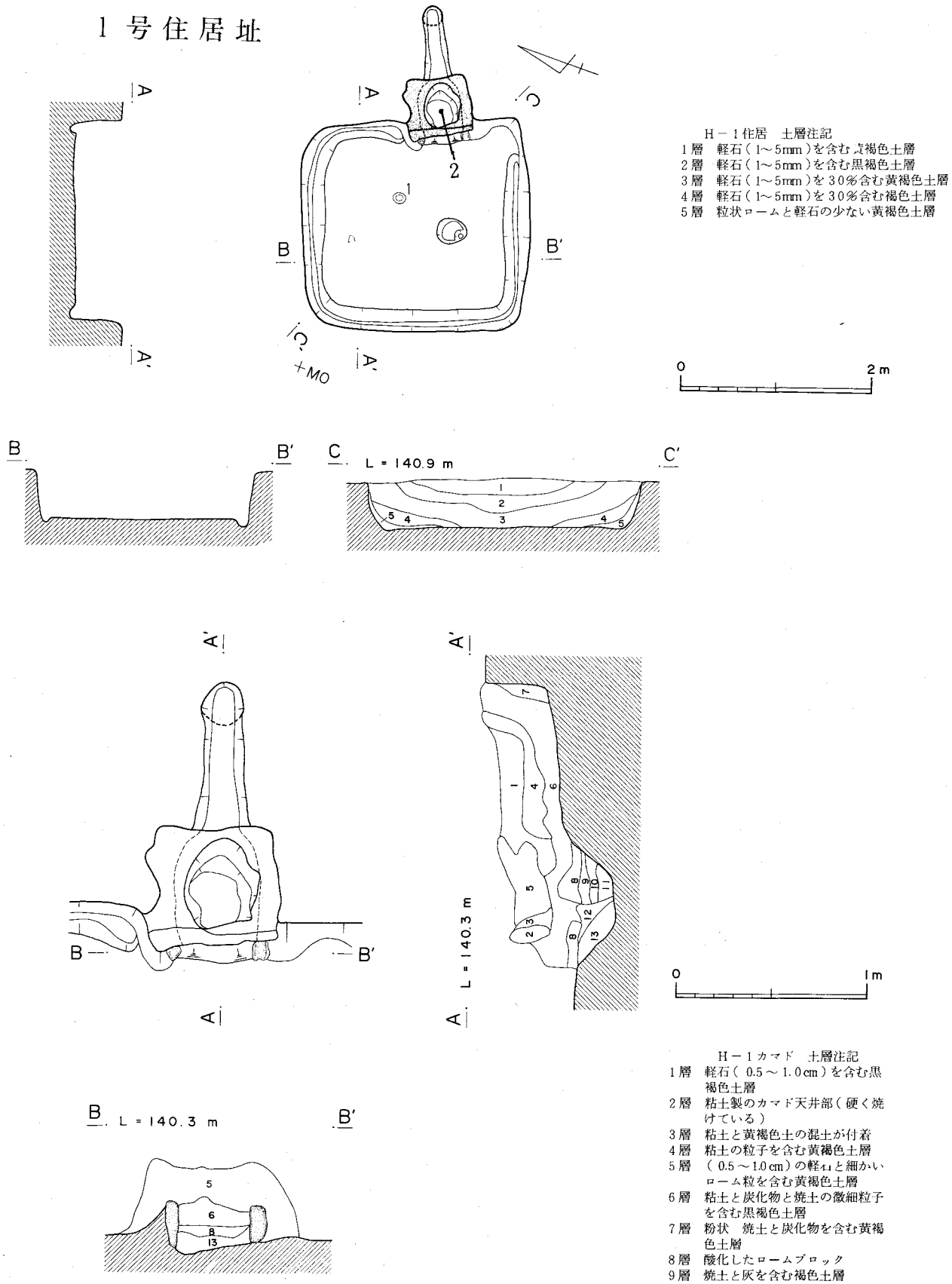
（引切一号墳）西側の地層断面精査中に発見された。石室から羨道部の根石一石づつのみで２段目以上の壁石は既に取り除かれていた。

（掘立遺構）　調査区南側中央部の柱穴群の中から、Ｍ－６グリットで掘立遺構が確認された。

(2)　奈良・平安時代の住居址、古墳時代の住居址に比べ、奈良時代の住居址が３軒しか確認されなかった事は何らかの意味があろう。

(3)　その他の遺構遺物　　土坑は１７基確認されたが土層プランの上から１２基について記述した。縄文時代の遺物は相当数出土しているが遺構は確認されなかった。

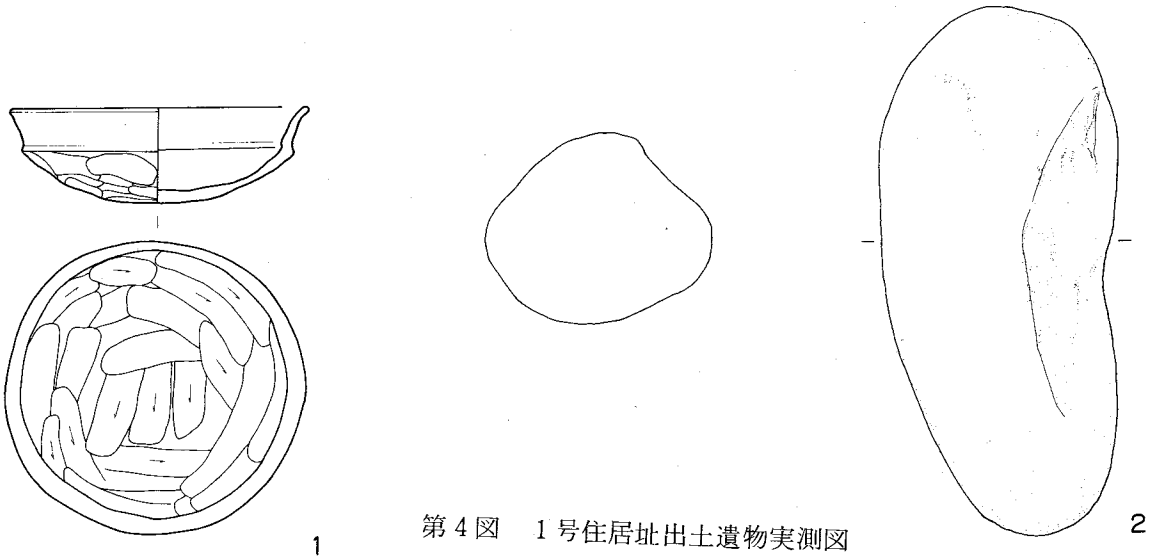
(1) 古墳時代・住居址



H－1住居　土層注記
1層　軽石（1～5mm）を含む黄褐色土層
2層　軽石（1～5mm）を含む黒褐色土層
3層　軽石（1～5mm）を30%含む黄褐色土層
4層　軽石（1～5mm）を30%含む褐色土層
5層　粒状ロームと軽石の少ない黄褐色土層

H－1カマド　土層注記
1層　軽石（0.5～1.0cm）を含む黒褐色土層
2層　粘土製のカマド天井部（硬く焼けている）
3層　粘土と黄褐色土の混土が付着
4層　粘土の粒子を含む黄褐色土層
5層　（0.5～1.0cm）の軽石と細かいローム粒を含む黄褐色土層
6層　粘土と炭化物と焼土の微細粒子を含む黒褐色土層
7層　粉状　焼土と炭化物を含む黄褐色土層
8層　酸化したロームブロック
9層　焼土と灰を含む褐色土層
10層　灰層
11層　僅かに灰を含む黄褐色土層
12層　灰と多量の焼土を含む赤褐色土層
13層　黒色の灰層

第3図　1号住居址・カマド実測図



第４図　１号住居址出土遺物実測図

１号住居址出土遺物観察表

法量の( )は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	床面直上	坏	口：12.0 高：3.9	細砂粒混入 良	赤橙	口縁部にやや歪みあり口縁部は外反し体部との境に稜を有し底部は丸底である。	外面：口縁部横撫で底部右方向篦削り 内面：丁寧な撫で凹凸有り 底部：ひび割れが僅かに見られる。	完形
2	カマド内	支脚石	長辺 21.0　短辺 8.4　厚さ 7.3　石質は黒雲母安山岩上部⅓燃焼により変色　重量1837.3g					

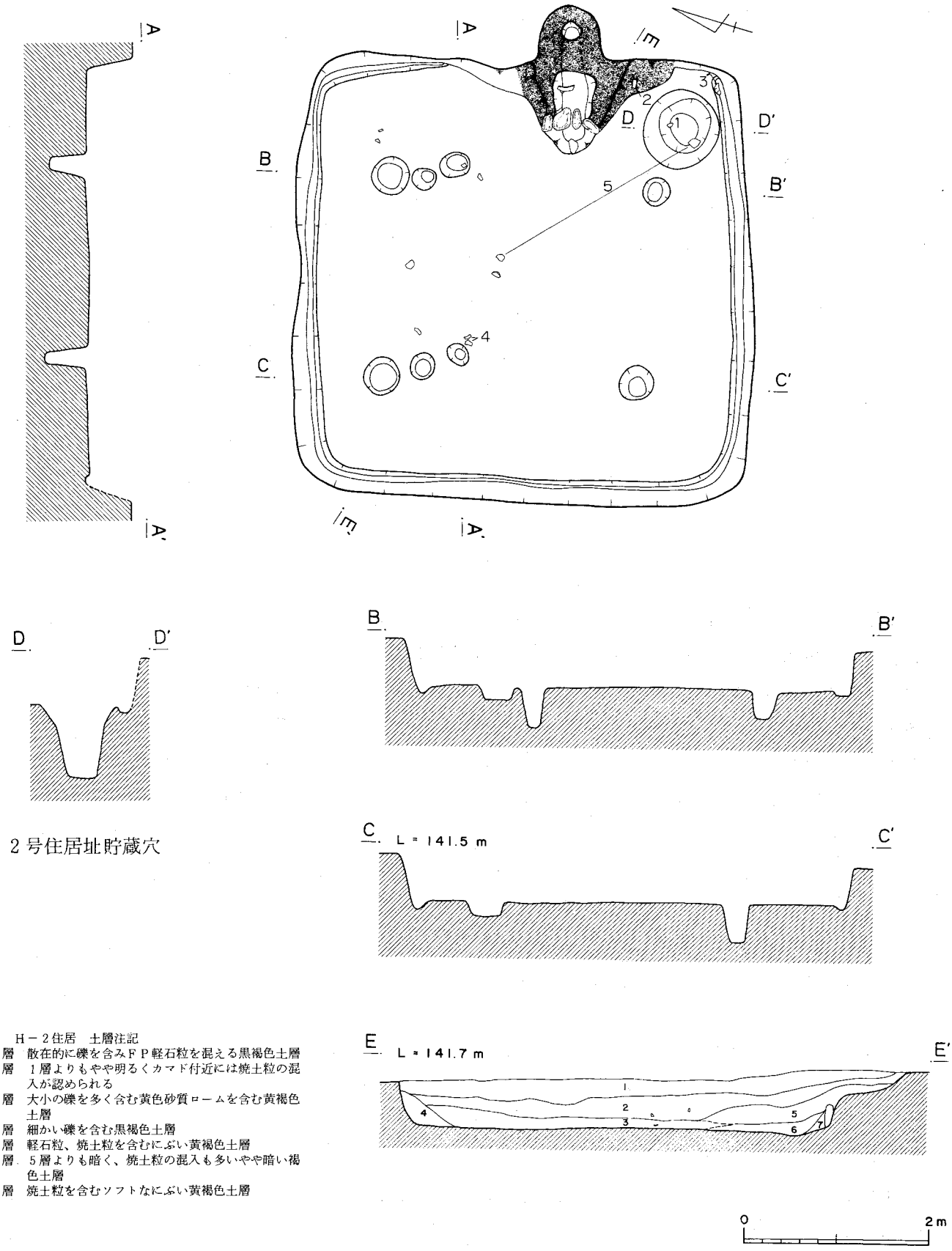
１　号　住　居　址

本住居址は、遺跡の南西隅、（Ｌ－0，　Ｍ－０）グリットに位置する。北壁2.15ｍ、西壁2.30ｍ、南壁2.20ｍ、東壁2.39ｍを測り、隅丸方形を呈する。ほぼ正方形の形状を呈する当遺跡における最小の住居址である。主軸はＮ－70°　－Ｅにとる。掘り込みは、黄色の砂質層に達しており、確認面から48㎝～51㎝、各辺とも垂直に近い立ち上がりを見せている。覆土は黒褐色土と二ツ岳軽石の混土がレンズ状に堆積し、大きく５層に分層出来、壁付近は壁の崩壊時に生じた粒状ロームとの混土となっている。土層断面の所見から、本住居址は長期間において埋没したと推定される。床面は、カマド前面において比較的よく踏み固められており、壁周辺は軟弱であった。柱穴は１箇所検出された。周溝は、カマド左袖際から南東コーナーまでほぼ一周する。深さは、北壁側が４㎝、南壁側が10㎝を測る。断面は「Ｕ」字状を呈する。

カマドは東壁中央部上半分を穿って構築しており、天井部、袖部とも遺存状態は良好であった。荒掘りの段階で位置と形状を決めた後に、褐色粘土で壁体を整えている。袖は東壁に密着し、内側は僅かに赤褐色を呈していた。火床は床面と同レベルに置き、黒色土と灰と焼土が15㎝程堆積していた。焚口には褐色粘土（日干しレンガ状）のブロック、幅10㎝、長さ40㎝の長方形を呈する褐色粘土（上記）ブロックが鳥居状に組まれていた。この褐色粘土ブロックは内側が10㎝×20㎝、火炎を受け赤褐色に変化していた。支脚石（№.２）は中心線よりやや北寄りに垂直状態で、又正方形の天井部は中央に掛け穴を残して検出された。煙道は壁外へ77㎝突出し、始め緩やかな傾斜で進み、煙出し直下で75°の傾斜を持つ。所見から当カマドは比較的長期間使用されたと推定される。

遺物は本住居においては小量であり、カマドと南東コーナーの間に１点検出された。器種は土師器坏(№.１)である。掘り方は荒掘りにおける凹凸は僅かである。壁周辺部が浅くなる傾向が認められ、凸面の上部に合わせて床面を設定する。凹面に黄褐色土と黄色砂質層の混土を貼り床としている。

2 号住居址

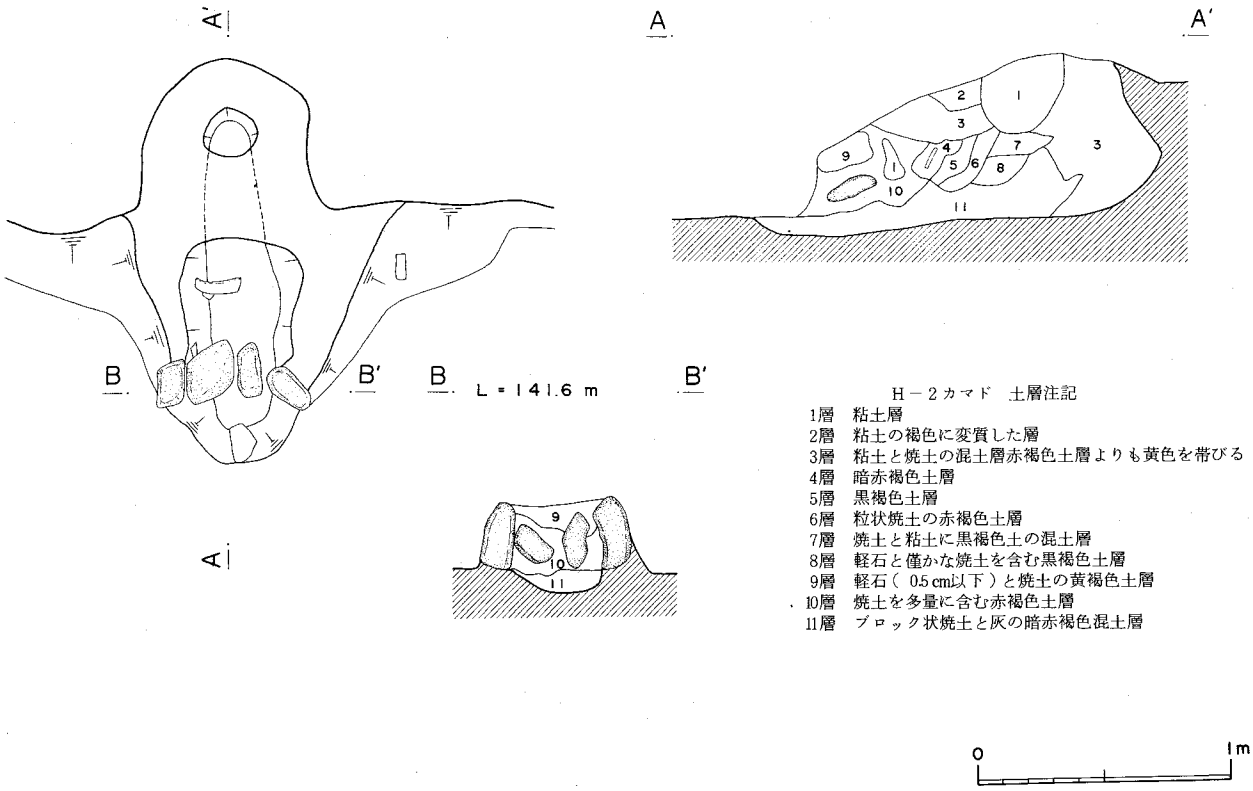


2 号住居址貯蔵穴

H－2住居　土層注記

1層　散在的に礫を含みＦＰ軽石粒を混える黒褐色土層
2層　1層よりもやや明るくカマド付近には焼土粒の混入が認められる
3層　大小の礫を多く含む黄色砂質ロームを含む黄褐色土層
4層　細かい礫を含む黒褐色土層
5層　軽石粒、焼土粒を含むにぶい黄褐色土層
6層　5層よりも暗く、焼土粒の混入も多いやや暗い褐色土層
7層　焼土粒を含むソフトなにぶい黄褐色土層

第5図　2号住居址実測図

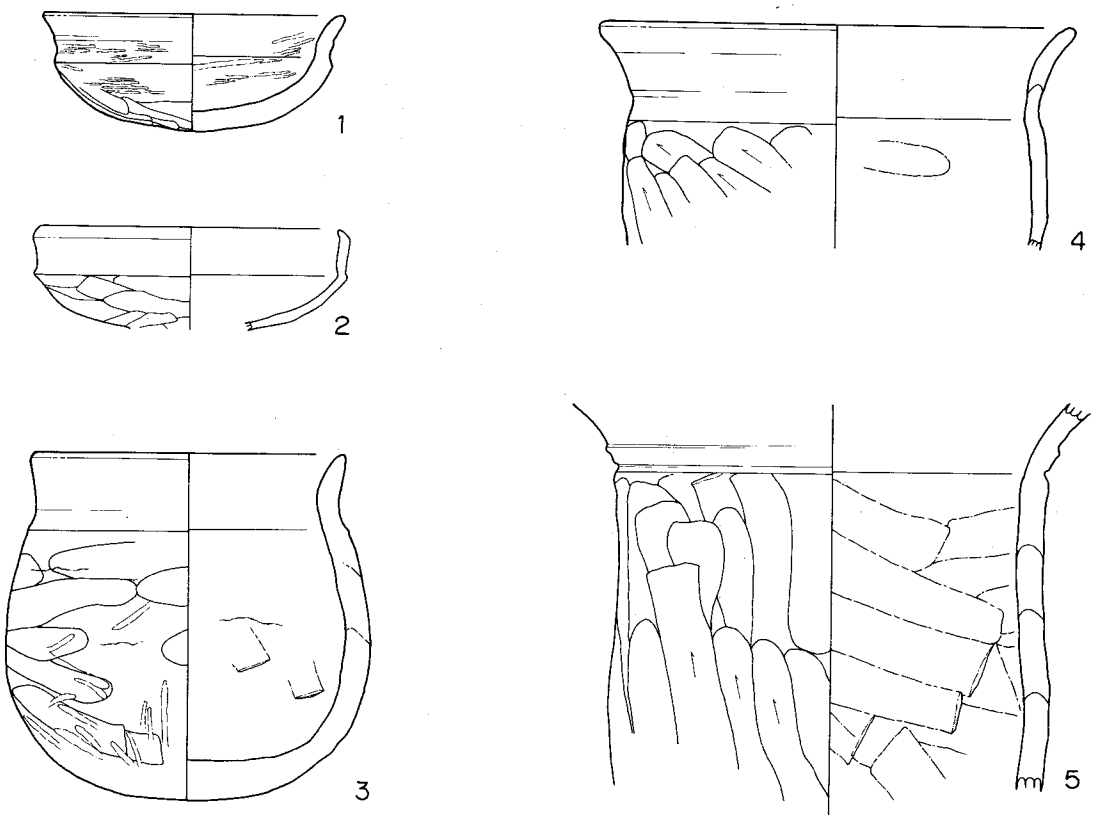


第６図　２号住居址カマド実測図

２　号　住　居　址

本住居址は、遺跡の西側Ｈ－（ 3･4 ）グリット、Ｉ－（ 3･4 ）グリットに位置する。北壁 4.58m、西壁4.85 m、南壁 4.88 m、東壁 4.63 mを測り隅丸方形を呈する。主軸はＮ－ 74°　－Ｅにとる。掘り込みは白川氾濫原の砂礫層まで達しており、壁は 40 cm～ 50 cm と深く良好である。覆土は黒褐色土と二ツ岳軽石の混土を主体としているが、床面付近は崩壊土と思われる黄色砂礫が混入する。床面は平坦で、全面的に堅く踏み固められており、中央部カマド前面において顕著である。またカマド前面および右袖付近にカマド構築材としての褐色粘土が検出された。貯蔵穴は南東コーナーに所在し 83 cm × 85 cm、深さ 77 cm を測りほぼ円形を呈する。内黒土器の検出がみられる。柱穴は生活面において３箇所、Ｐｉｔ １（ 径 40 cm× 42 cm、深さ 15 cm ）とＰｉｔ ５（ 径 25 cm× 23 cm、深さ 43 cm ）、Ｐｉｔ ６（ 径 26 cm× 30 cm、深さ 43 cm ）とが検出され、掘り方精査の際にＰｉｔ ２（ 径 40 cm× 43 cm、深さ 15 cm ）、Ｐｉｔ ３（ 径 38 cm× 40 cm、深さ 40 cm ）とＰｉｔ ４（ 径 28 cm × 32 cm、深さ 30 cm ）が検出された。周溝はカマド左袖から南東壁コーナーまで周っている。幅 7 cm～ 15 cm、深さ 6 cm～ 8 cm、断面「Ｕ」字状に掘り込まれている。

カマドは東壁のほぼ中央南寄りに壁を掘り込んで構築されており、断面は逆台形を呈する。長さ 1.6 m、焚口幅 32 cm、煙道の長さ 55 cmを測り、天井部は良好な状態で検出された。床面とほぼ同レベルを火床とし煙道は約 90° の傾斜で立ち上がる。焼土は中央部において黒褐色と粘土等を混入して 28 cm～ 33 cm堆積していた。カマド全体が良質の褐色粘土にスサを含めて構築されている。遺存状態は非常に良好であり、壁から左袖 77 cm、右袖 78 cm住居内に作り出されていた。内面は強く焼かれて赤褐色を呈していた。焚口部には左（ 22 cm × 12 cm ）、右（ 29 cm× 11 cm ）の安山岩を使用し、また（ 17 cm× 10 cm ）と（ 21 cm× 9 cm ）の長方形を呈する凝灰岩がＶ字形に折れた状態で存在していた。状況、位置等から前述の焚口に架かり、鳥居状に組まれていたと推定される。



第７図　２号住居址出土遺物実測図

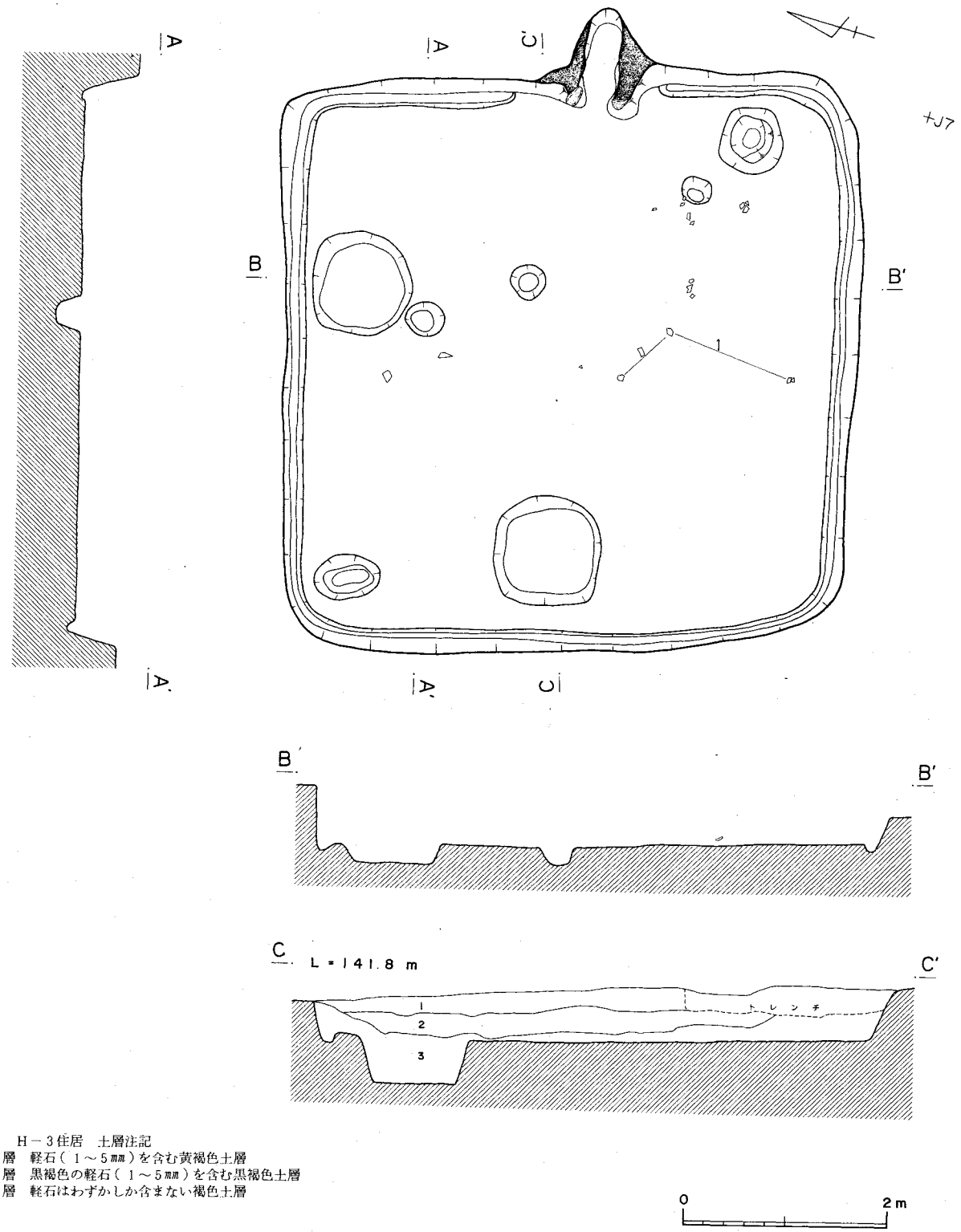
２号住居址出土遺物観察表

法量の( )は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	貯蔵穴内	坏	口：12.0 高：4.8	砂粒を多量に含む 堅緻	外：灰褐色 内：黒	口縁部外反し体部から底部は器厚である。稜を有し丸底で中央部は煤付着	外面：口縁横撫、体部篦削り後丁寧な篦撫で 内面：丁寧な撫で　細篦による磨き後全体に黒色処理。底部：細かに剥れが見られる	1／3残
2	カマド付近	坏	口：12.0 高：(4.1)	暗赤褐色砂粒多量に混入　堅緻	赤橙	口縁部は直線状に立ち上がり口唇部は内傾する。体部は薄く丸底を呈す。稜を有する。	外面：口唇部篦調整後口縁部横撫で　体部篦削り後撫で。 内面：丁寧な撫で　赤色塗彩	1／2残
3	覆土一括	小型甕	口：12.4 胴：14.5 高：13.8	微砂粒混入 良	浅黄橙～黒褐色	口縁部は外反気味に直立し、長胴形を呈す、器肉は厚く丸底である。稜を有する。	外面：口縁部横撫で、体部篦削り後磨き、胴部に炭化物が付着し黒色を呈す。 内面：丁寧な撫で後黒色処理がされている。	1／2残
4	床面直上	甕	口：18.8 胴：(16.8)	1㎜大の粒子多量に混入 やや軟	暗褐色	口縁部下位より外反、口唇部は丸味を持つ、胴上半部に僅か脹らみを持つ。	外面：口縁部横撫で、胴部斜方向篦削り。 内面：口縁部横撫で、口縁に１本頸に２本弱い沈線有り。	口縁と胴上半部 1／3残
5	貯蔵穴	甕	胴：(17.4)	3㎜程の砂礫を混入 良	褐色	頸部と胴部の境に段を持ち口縁は外反する。 輪積み痕が見られる。	外面：胴部は底→口縦方向篦削り。口縁部横撫で。 内面：口縁部横撫で。胴部篦撫で篦あて痕有	同上半部

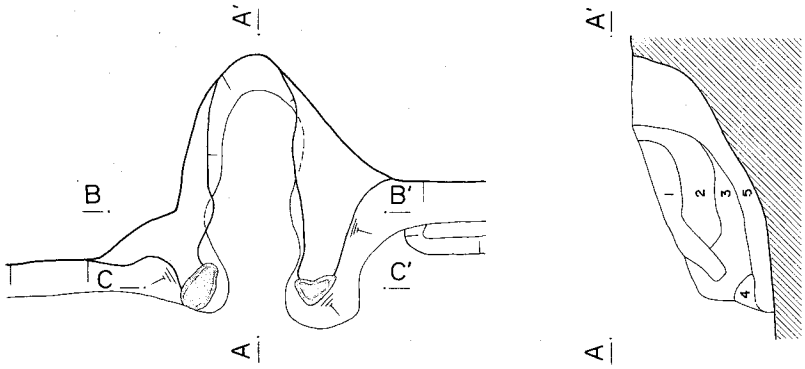
遺物は全面的に出土したが、特にカマド周辺、南東コーナーに集中していた。器種は土師器坏（No. 1, 2）、甕（No. 3, 4, 5）の出土がみられた。坏、小型壺には内黒処理（No. 1, 3）が施されている。掘り方は荒掘りの段階で住居中央部を高く、壁下および周辺を深く掘り込む工法が認められた。中央部と周辺部の最下位とでは５cm～１０cmの差である。貼り床は全体的に薄く、黄色砂礫層の上に、僅か３cm～５cmの黒褐色土と砂質黄色土の混土をもって貼り詰めている。

3 号 住 居 址

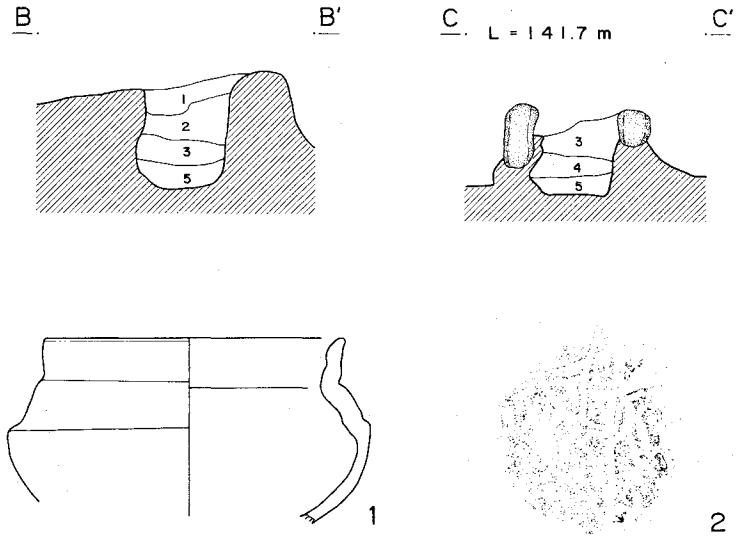


H－3住居　土層注記
1層　軽石（1～5㎜）を含む黄褐色土層
2層　黒褐色の軽石（1～5㎜）を含む黒褐色土層
3層　軽石はわずかしか含まない褐色土層

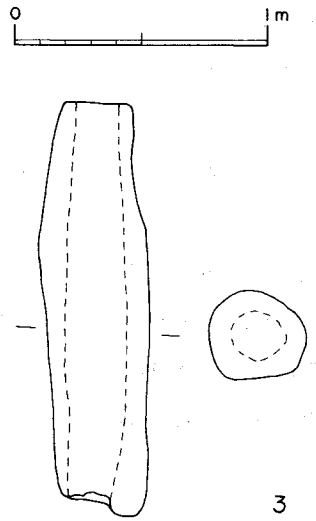
第8図　3号住居址実測図



H－3カマド　土層注記
1層　軽石と焼土を含む黒色土層
2層　焼土ブロックを含む赤褐色土層
3層　焼土粒と軽石を含む暗赤褐色土層
4層　焼土層
5層　焼土粒を含む赤褐色土層



第9図　3号住居址カマド・出土遺物実測図



土錘 1／1

3 号 住 居 址 出 土 遺 物 観 察 表

法量の( )は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	床面直上	小型甕	口：12.0 胴：14.4 高：(7.4)	黄褐色粘土に細砂多量に混入　堅緻	内外面黒色処理	体部は球形で肩に稜を有す　肩から頸部は内傾し口縁部は直状に直立する。	外面：胴部は篦削りを僅か残し殆ど剥離している。頸部と口縁部は丁寧な横撫で 内面：丁寧な横撫で、爪痕有り、須恵器の模倣	底部を欠く
2	覆土一括	甕 土師器	底：7.5	2～3mmの砂粒を少量含む　良	淡黄褐	底部のみ。胴部は大きく開くと思われる器形である。	外面：指押え篦削り、大きな一枚の葉脈有り 内面：横ナデ　指頭圧痕が見られる。	底部のみ 葉脈痕有り
3	覆土一括	土錘	長さ5.2幅8～13mm孔径4mm重量8.130g褐色で床面より25cmから出土　他に長さ3.6cm幅8～12mm孔径4.5mm重量8.545gと長さ5.4cm幅7.5～16mm孔径5.5mm重量5.028gの3点が出土している。海抜141.34m					ほぼ完

3 号 住 居 址

本住居址は、2号住居址の北東4.10m、H－（5,6）グリット、I－（5,6）グリット、J－（5,6）グリットに位置する。北壁5.55m、西壁5.43m、南壁5.50m、東壁5.65mを測り、南北に長軸を持つ隅丸方形を呈する。主軸をN－73°－Eにとる。掘り込みは深く白川氾濫原の砂礫層に達しており38cm～52cmを測る。壁付近は、壁の崩壊時に生じた黄色砂礫土と黒褐色土の混土となっている。床面は多量の焼土により、東側（カマド寄り）2／3程が赤褐色を呈し、よく踏み固められているが、西側1／3は軟弱で凹凸が目立つ。また北壁寄り中央部柱穴には焼土が多量に存在した。南壁付近は、砂質の黄色土と黒褐色土により60cm×90cmの範囲で固く貼られており床面とは1～6cmの差が見られた。柱穴は主柱穴4本が検出された。北壁5.9m、西壁5.9m、南壁5.6m、東壁5.7mを測り、20cm～30cmの差違が生じる。多少のずれがあるが、ほぼ各コーナーを結ぶ対角線上に乗っている。貯蔵穴はカマド右側に1.0m離れて確認された。60cm×65cm、深さ67cmの円形を呈する。貯蔵穴としてはやや小規模である。周溝はカマドを除き全周する。断面は「U」字状を呈し、9cm～12cmの深さを有する。

カマドは東壁中央右寄りに、壁を58cm掘り込み全体が褐色粘質土で構築されている。天井部分は残存せず、火床は床面とし煙道は緩やかな傾斜で立ち上がった後65°の傾斜で煙り出しに至る。火床は赤褐色に強く焼けていた。

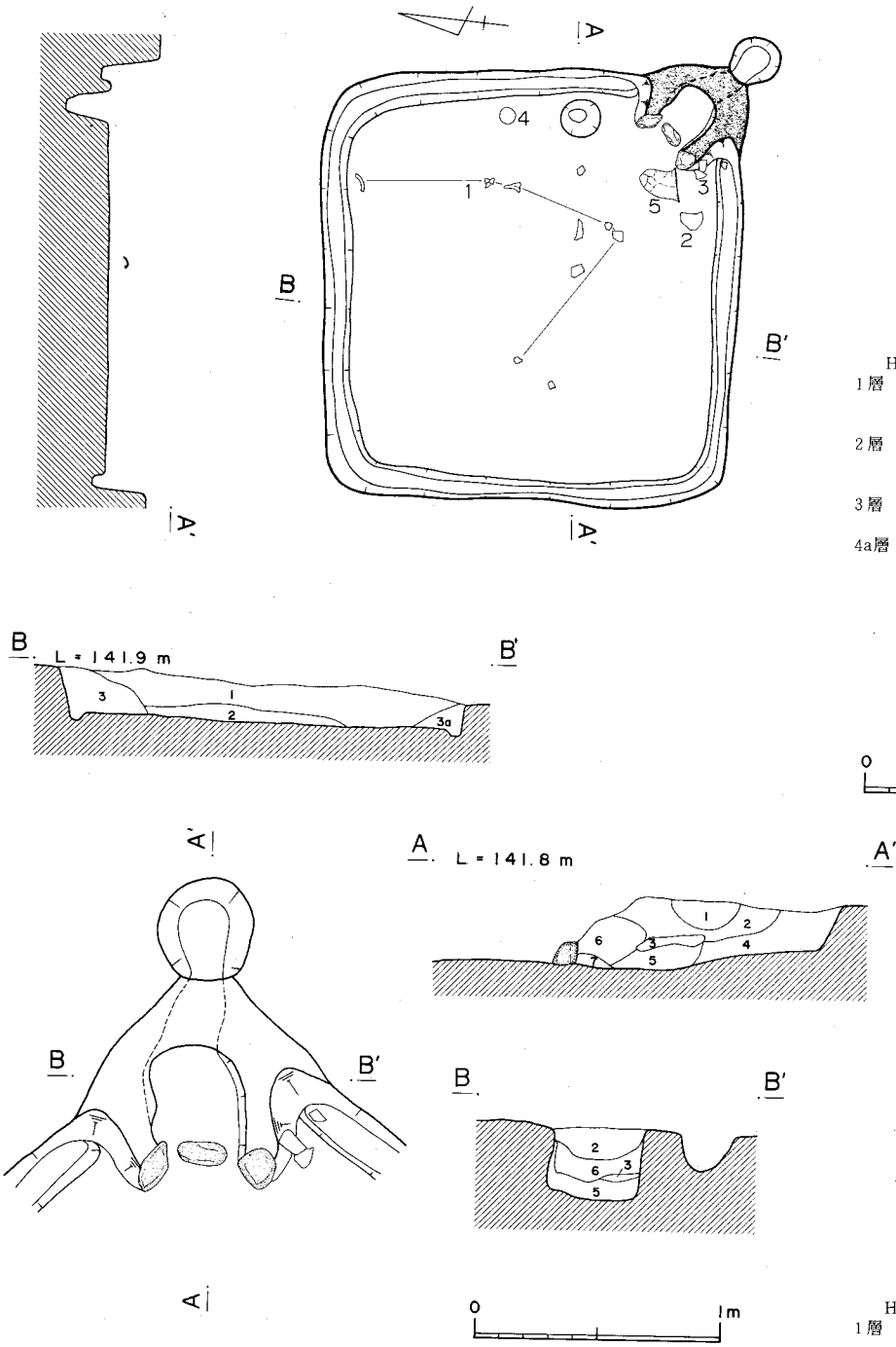
遺物は住居内全域から出土したが、主に南東コーナーに集中していた。器種は土師器坏、甕（No.1,2）を主体に、特に土錘（No.3）2点が検出された。掘り方は荒掘りの状況を観察すると、住居中央部は円形に浅く残し、壁下周辺を深く掘り込む工法が認められた。特に、西壁側は深く掘られ、中央部との比高差は20cm～49cmが測れた。南西コーナー付近には一度掘った所に黒褐色土と砂質の黄色土で固く締めた部分が確認された。黒褐色土と砂質の黄色土の混土の貼り床が見られる。床下土壙1は（100×117）cm 深さ31cm、土壙2は（103×98）cm 深さ26.5cmの2箇所が確認された。

4 号 住 居 址

本住居址は3号住居址の東2.6m、H－（7,8）グリット、I－（7,8）グリットに位置する。北壁3.45m、西壁3.40m、南壁3.28m、東壁3.48mを測り、東西に対し南北が僅かに長い隅丸方形を呈する。主軸はN－85°－Eにとる。掘り込みは10cm～38cm、砂礫層中に築かれている。南側壁面の崩壊が特に著しい。覆土は砂礫と二ツ岳軽石の混土で床面との区別に注意を要した。床面は砂礫の凹に僅かに黒色土で埋め戻して構築されており軟弱である。柱穴は検出されなかった。カマド左側に径30cm、深さ57.5cmの貯蔵穴と思われるPitが検出された。周溝はカマド左袖脇から始まり、南東コーナーカマド手前で終了している。

カマドは、北東コーナー壁を掘り込んで構築している。このカマドの中心線は、ほぼ対角線の延長方向に取っている。天井部は現確認精査面と同一レベルに完全な形で残存していた。コーナーを利用し褐色粘質土で壁の高さと水平に覆い、火床は床面とし、煙道は焚口から195cm行った所で50°の傾斜で煙出しへと続く。天井部、火床とも長期間使用されたと思われ、赤褐色に強く焼けていた。

遺物は、本住居址においては小量であるが、覆土中より土錘1点が検出された。またカマド焚口部に復元可能な甕（No.5）と小型壺（No.4）が出土した。前述した通り白川の氾濫原により多量の礫を含むので掘り方は浅く床面下5cm～10cmで、しかもカマド部分は残して荒掘りしている。床面構築後、周溝とカマドを掘っている。僅かの差であるが中央を高く残す工法に従っている事が認められる。



H－4住居　土層注記

1層　直径（3～10cm）程の円礫と多量のＦＰ・Ｃ軽石さらに焼土粒・炭化物も僅か含む色土層

2層　ＦＰ・Ｃ軽石を含むが1層より少量、直径（2～3cm）の円礫も含む黒色土層

3層　軽石類を殆ど含まない2層に比べやや褐色味を帯びる黒色土層

4a層　3層と同質でやや軽石類ＦＰ・Ｃが多い黒色土層

H－4カマド　土層注記

1層　天井部粘土内側は良く焼けている

2層　粒状の焼土と軽石（1～5㎜）を含む暗赤褐色土層

3層　焼土ブロック

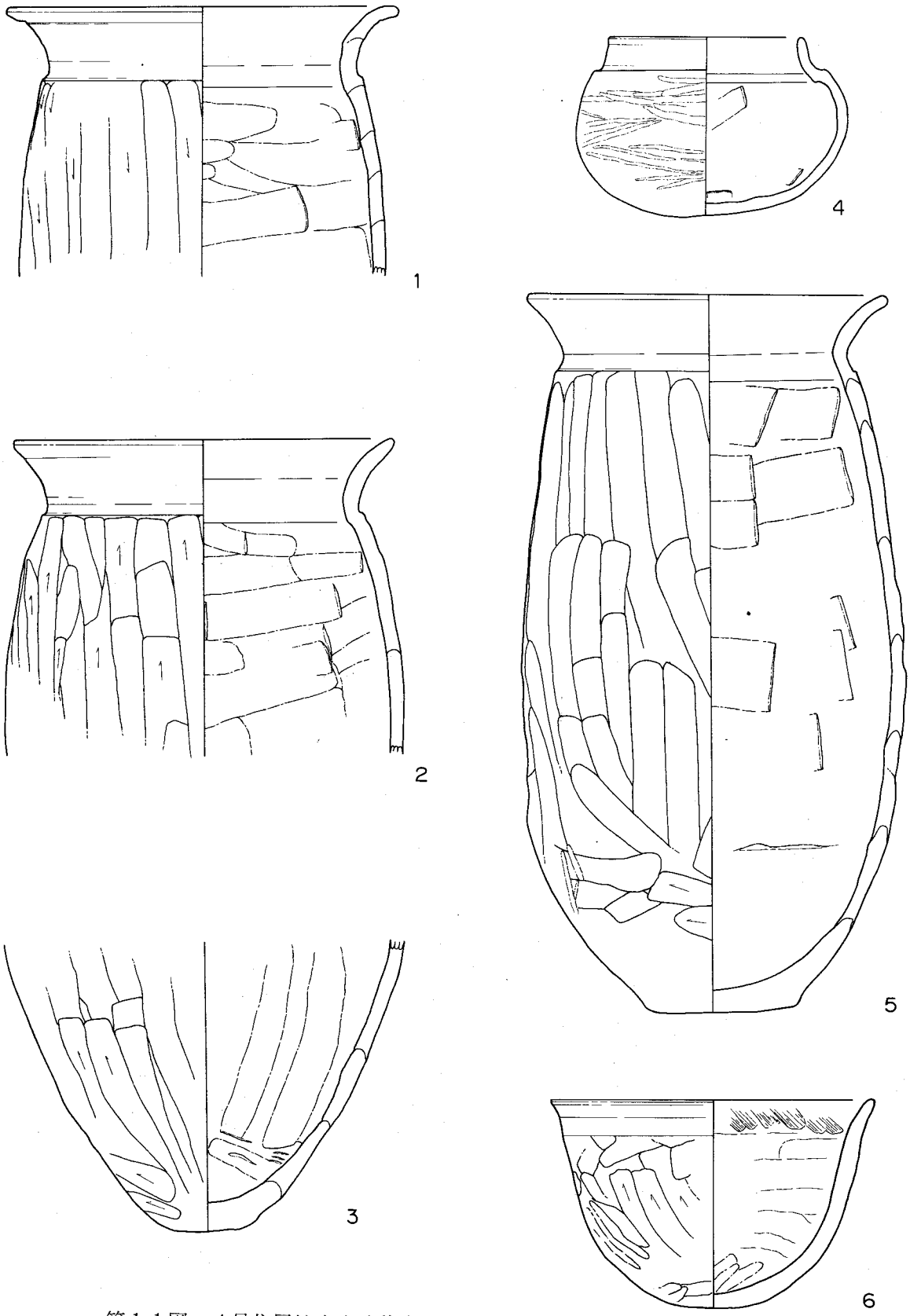
4層　礫（1～5cm）を含む黒褐色土層

5層　焼土と灰を含む黒色土層

6層　ブロック状の焼土と軽石（1～5㎜）を含む褐色土層

7層　軽石と焼土を含む黒褐色土層

第１０図　４号住居址・カマド実測図



第１１図　４号住居址出土遺物実測図

4 号 住 居 址 出 土 遺 物 観 察 表

法量の( )は推定値

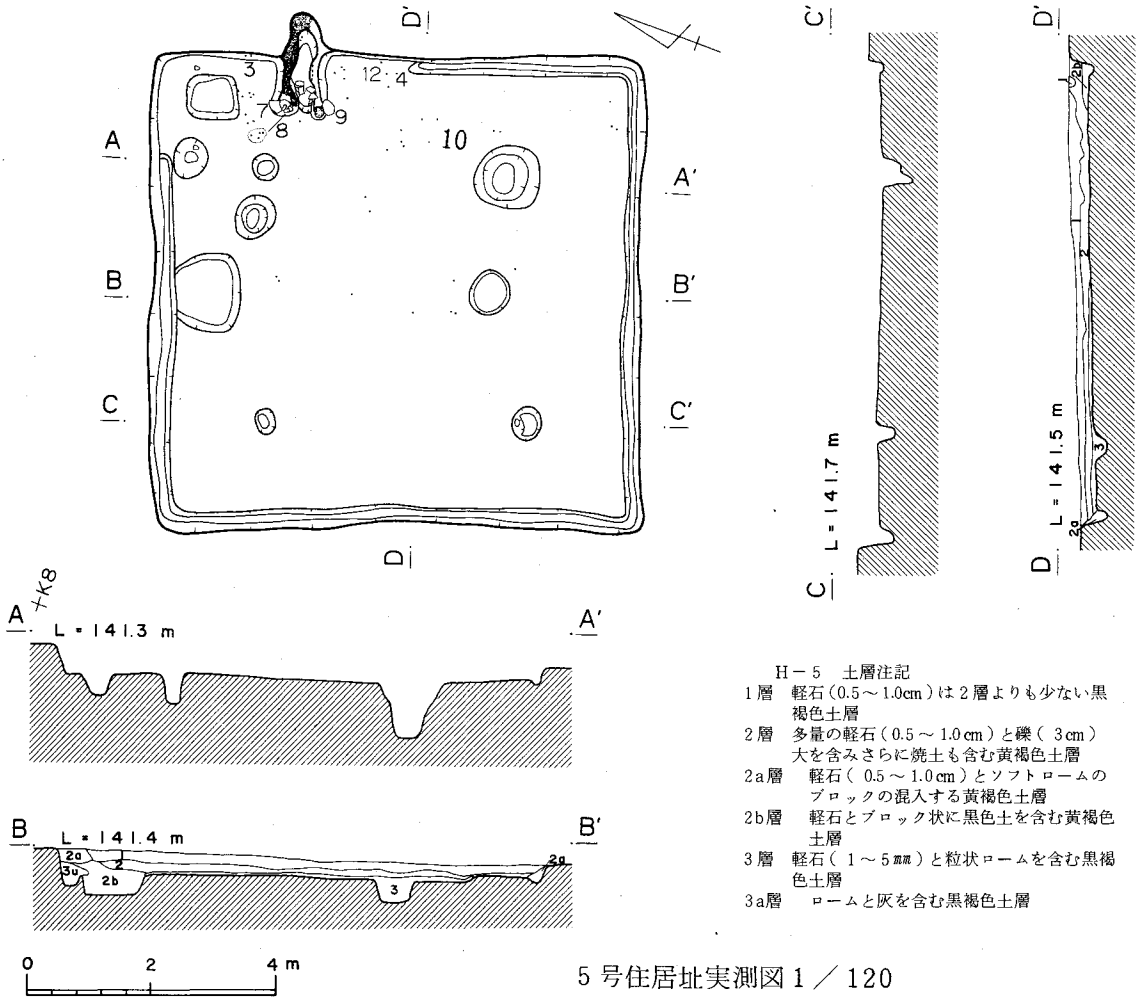
番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	床面直上	甕	口：20.0 胴：(18.5)	砂礫混入 良	浅黄橙	口縁部は外反し肩部に外稜を有す。口唇部は丸く外傾する。輪積み痕有り。	外面：口縁部横撫で、胴部口→底方向篦削り表面は粗雑な造りである。 内面：口縁部横撫で、胴部丁寧な撫で。	口縁から胴上半部
2	カマド右脇付近	甕	口：(19.6) 胴：(20.2)	2mm大の白色粒子混入（軽石） 堅緻	暗黄褐	口縁部と胴部の接合明瞭、口縁部は外反し肩部に稜を有す。胴部は緩やかに張らみを持つ。	外面：口縁部横撫で、胴部底→口縦方向篦削り。輪積み痕あり。 内面：口縁横撫、胴横方向篦撫篦あて痕明瞭	口→胴上半分1／3残
3	カマド右脇	甕 土師器	底：4.0 高：(14.7)	細砂粒混入 やや良	暗褐色内面にぶい黄褐	底部に厚みを持ち傾斜する。胴部は内湾ぎみに立つ	外面：胴部縦方向篦削り。 内面：全体篦調整篦押え痕明瞭。	胴下半部と底部1／8残
4	東壁付近	小型壷	口：9.8 胴：13.5 高：9.1	暗赤褐色砂粒を含む　堅緻	赤橙	口縁部は直立し肩部に稜を持ち胴部は張らみ球形を呈す。底部は丸底	外面：篦削り篦撫で。口縁部には篦撫でが見られない。赤色塗彩。煤付着。 内面：口縁は横撫、胴～底部は篦削り篦撫で	完形
5	カマド前	甕	口：18.1 胴：19.3 底：7.6 高：36.4	砂粒混入 堅緻	橙	口縁部は外反する。胴部中央に最大径を持つ。底部は器厚で僅かに立ち上がる。肩部撫でによる外稜あり。	外面：口縁部横撫で、胴部縦方向篦削り細篦による撫で。底部篦撫で。 内面：口縁部横撫で、胴部横方向篦削り篦あて痕明瞭。	完
6	覆土一括	小型鉢	口：(16.0) 高：10.4	砂粒混入 堅緻	赤褐色	底部から口縁部に向かって直線的に開きロ縁部は僅か外反する底部は丸底	外面：口縁部横撫で　頸部から底部迄篦削り 内面：口縁部指押え　胴中位迄篦撫で胴下半迄指撫。内面全体外面の一部赤色塗彩	体部1／5残

5 号 住 居 址

本住居址は当遺跡のほぼ中央でJ－（8, 9, 10）グリット、K－（8, 9, 10）グリット、L－（8, 9, 10）グリットに位置する。北壁7.68m、西壁7.80m、南壁7.54m、東壁7.94mを測る。本調査区域において、古墳時代後期に属すると思われる、住居址群の中で最大の床面積を有する隅丸方形の住居である。主軸はN－70°－Eに取る。掘り込みは20cm～44cm、白川砂礫層中に築かれた住居である。覆土は黒褐色と砂礫と二ツ岳軽石の混土である。床面は、カマド前面から中央部では、容易に剥離できるほどであった。南壁から約1.0mについては一段高く、黄色砂質土がよく固められており、5cmの比高差が見られる。西壁から北西隅にかけては、凹凸があり軟弱さが目立った。貯蔵穴はカマド左側60cmに存在する。長軸83cm、短軸70cm、底面の長軸65cm、短軸52cmを測る。平面形は隅丸方形を呈する。85°～90°の角度で鋭く掘り込まれている。内部よりNo.5, 9, 11が出土した。No.5は12cm、No.9は8.5cm、No.11は21cm、貯蔵穴床面から浮いた状態で出土した。柱穴は対角線に4箇所Pit 1（径44cm、深さ27cm）、Pit 2（径45cm、深さ24cm）、Pit 3（径106cm、深さ89.5cm）、Pit 4（径42cm、深さ44cm）、支柱穴と思われるもの6箇所を検出した。Pit 1～2間は3.74m、Pit 2～3間3.16m、Pit 3～4間3.14m、Pit 1～4間3.64mを測る。（Pit 1, 3）（Pit 2, 4）コーナーを結ぶ対角線状に乗っている。周溝は北東コーナー1.4mから始まりカマド右袖際迄掘り込まれている。幅は18cm～28cmを測る。深さは8cm～24cmと一定していない。

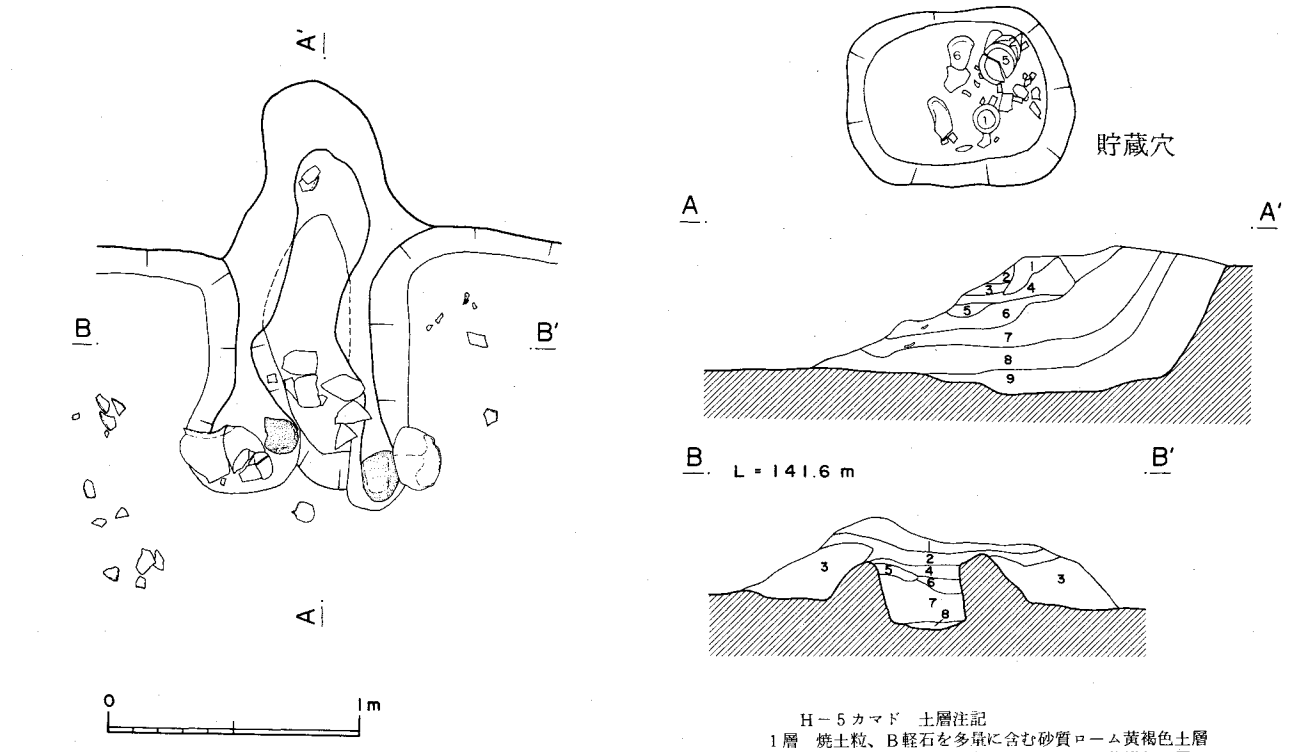
カマドは東壁北側1／4の位置に構築している。壁を幅68cm、長さ73cmに掘り込み、約73°の角度で立ち上がり煙出しに至る。左袖幅23cm、長さ70cm、右袖幅12cm、長さ81cmを住居内に作り出している。天井部は崩落して残存していない。焚口部の左右袖端には川原石を設置し、火床は床面に置き、燃焼部は僅かに窪む。カマド全長1.57mを測る。長期間使用されたと思われ、壁内面はレンガ状を呈していた。

遺物は全面的に出土したが、特にカマド周辺、および貯蔵穴内に集中していた。掘り方は全面的に凹凸が顕著であるが、中央部付近を高く残し北西コーナーから東南コーナーにかけては、壁から1.0mの所を直線的にPit 3迄掘り込んでいる。床面構築の際に西壁側の凹地には黒褐色土と黄色砂質土の混土で一度に埋填され、中央部凸部は薄く3～5cmの貼り床の工法が認められる。



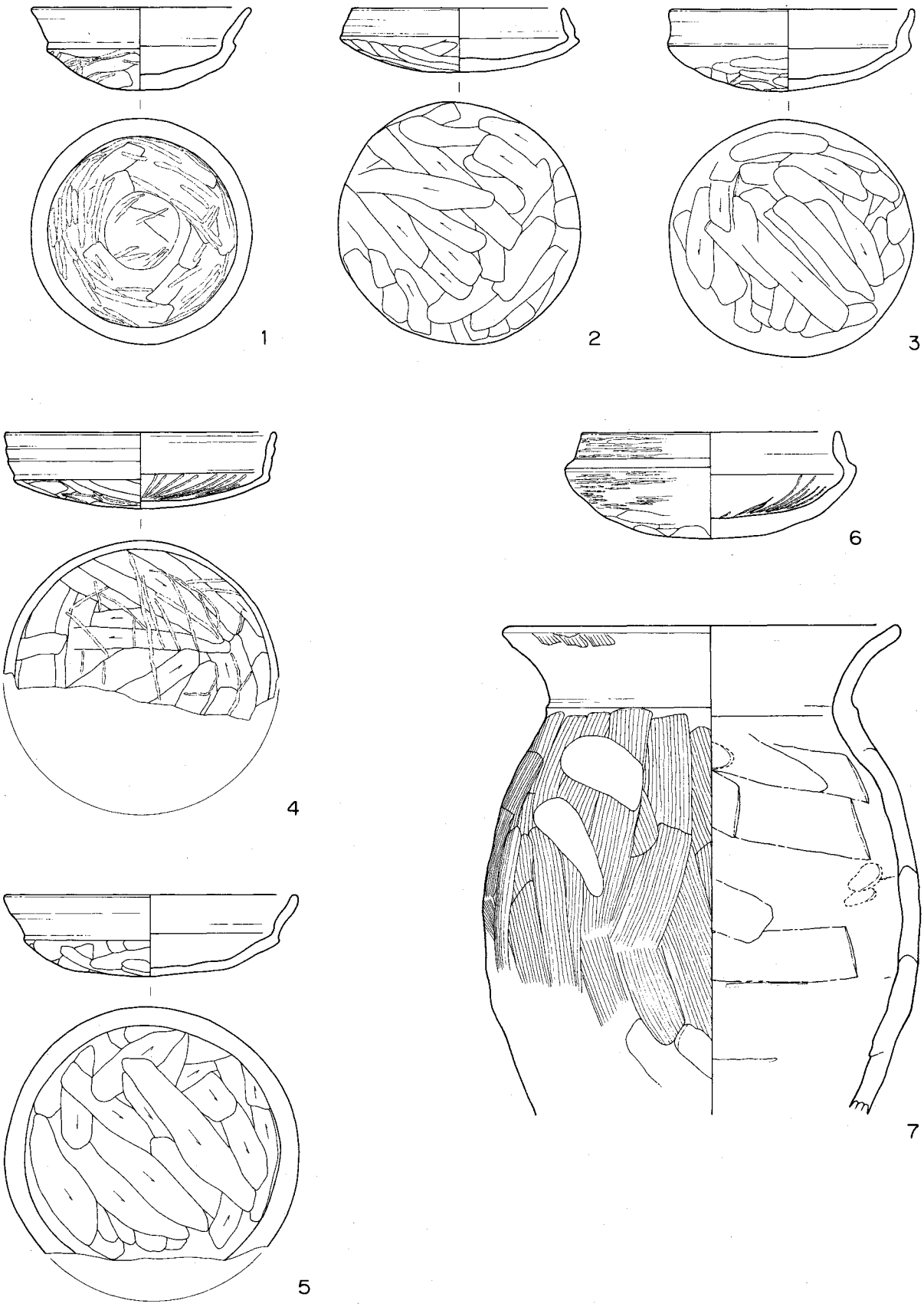
H－5　土層注記
1層　軽石（0.5～1.0cm）は2層よりも少ない黒褐色土層
2層　多量の軽石（0.5～1.0cm）と礫（3cm）大を含みさらに焼土も含む黄褐色土層
2a層　軽石（0.5～1.0cm）とソフトロームのブロックの混入する黄褐色土層
2b層　軽石とブロック状に黒色土を含む黄褐色土層
3層　軽石（1～5mm）と粒状ロームを含む黒褐色土層
3a層　ロームと灰を含む黒褐色土層

5号住居址実測図 1／120

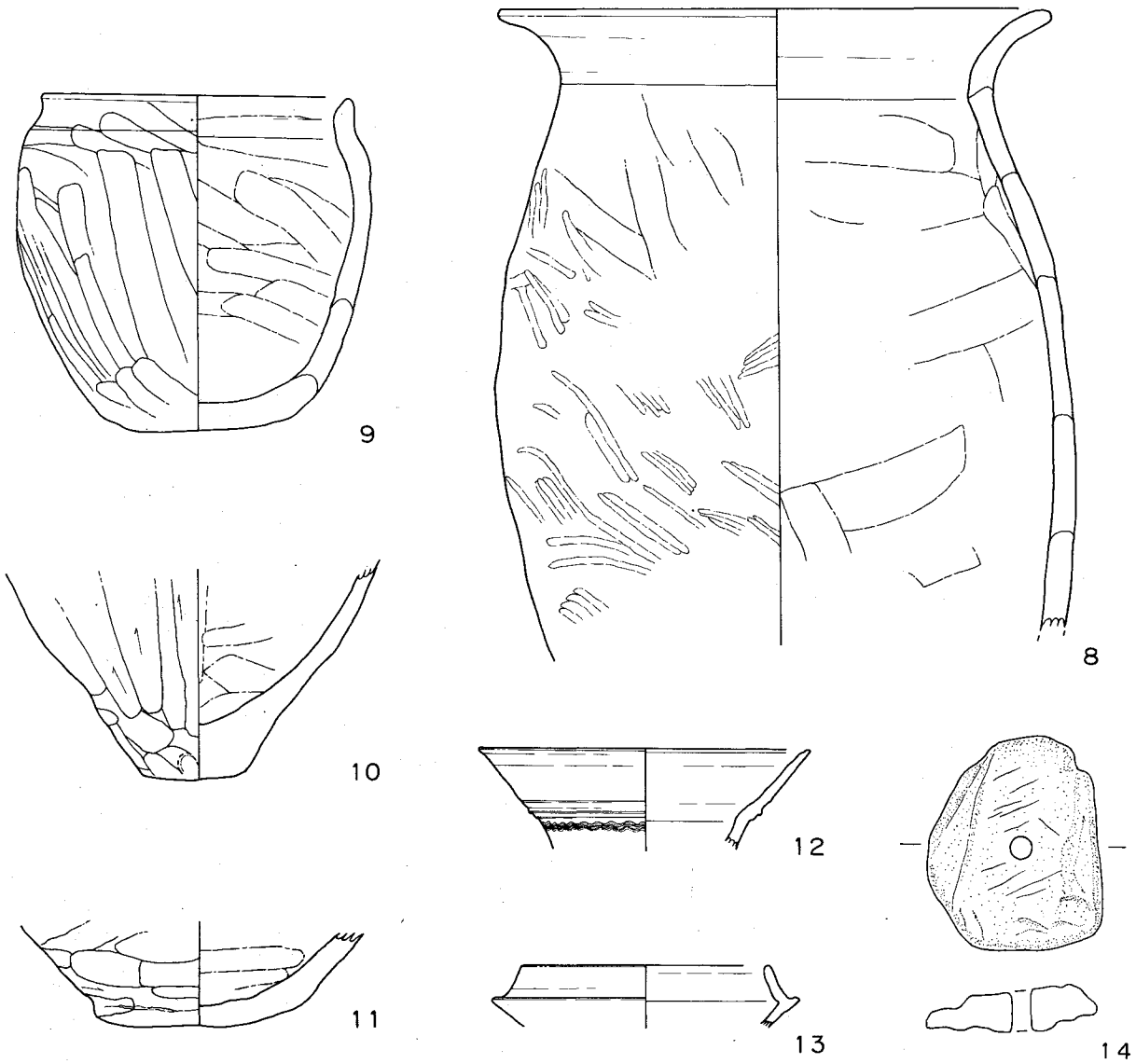


H－5カマド　土層注記
1層　焼土粒、B軽石を多量に含む砂質ローム黄褐色土層
2層　黄褐色粘土（天井部）と焼土混じりの黄褐色土層
3層　1層に似るが全体にソフト
4層　所謂　灰層焼土粒を含む

第12図　5号住居址・カマド実測図



第１３図　５号住居址出土遺物実測図(1)



第１４図　５号住居址出土遺物実測図(2)　　石製模造品 1／1

５号住居址出土遺物観察表

法量の( )は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	貯蔵穴内	坏	口：11.4 高：4.3	軽石と砂粒を含む 堅緻	外面　褐色 内面　黒	口縁部は外反し体部との境に稜を持ち体部は丸みを持つ。	外面：口縁は横撫で体部は篦削り後細い篦で撫でられ底部は僅かに平に削れている 内面：全体に丁寧な篦撫でがされ黒色処理	完
2	貯蔵穴内	坏	口：11.0 高：3.4	砂粒混入 堅緻	外面　橙 内面 2／3 黒褐色	底部中央に丸みを持ち、体部は偏平で口縁部は内湾する。 底部は丸底	外面：口縁部横撫で、稜を持ち左方向篦削り 内面：全体右回転、丁寧な撫で	完
3	カマド左脇	坏	口：12.7 高：4.2	砂粒を含む 堅緻	褐色	口縁は僅か外反し直状に立ち上がり口唇部で僅か内傾する。	外面：口縁横撫で、体部篦削り 内面：撫で、口縁横撫。炭化物の付着目立つ	完
4	カマド右脇	坏	口：15.2 高：4.0	黒色砂粒混入 堅緻	橙	口縁は直状に立ち体部との境に稜を持ち口縁中位に弱い段有り体部は浅い。	外面：口縁部横撫で、体部篦削り後篦磨き 内面：丁寧な撫で後細い篦による放射状暗文あり。	3／5残
5	貯蔵穴内	坏	口：15.0 高：4.2	細砂粒と軽石粒混入 堅緻	黒色	口縁部は僅かに外反しながら立ち上がり口唇部で内傾。体部との境に稜有り。強い篦削り痕	外面：口縁部は刷毛による横撫で、体部外面は荒い篦削り 内面：丁寧な撫で底部中央に凹が見られる。	口縁部1／4欠

5 号 住 居 址 出 土 遺 物 観 察 表

法量の( )は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
6	貯蔵穴内	坏	口：(13.2) 高： 5.6	砂粒を多量に含む 良	黒色	口縁やや内傾し器厚。受け部ほぼ水平。丸底。内外面黒色処理	外面：口縁～体の一部回転撫。底篦削り磨き 内面：口縁～底丁寧な回転撫で後放射状暗文	口1／4残 体2／3残
7	カマド付近	甕	口： 20.2 胴：(22.6)	微細砂粒混入 良	浅黄橙	口縁部下位より外反、口唇部は丸味を持ち内側に平坦面を持つ胴部中位に張らみを持つ。	外面：口縁部横撫で、胴縦方向の刷毛目状撫で、肩部に稜を有す。 内面：口縁部横撫で、胴横方向篦撫で、下半部は弱い篦撫で。指頭痕	口 3／4 残 胴 1／3残
8	カマド付近	甕	口： 23.3 胴： 24.2	微砂粒混入 良	赤褐色	口縁「く」字状に外反し胴中央にやや張らみを持つ。ほぼ均一した厚み。全体に器厚 口端は丸	外面：口縁横撫で、胴篦削り後斜方向篦磨き 内面：口縁横撫で、胴篦撫で後弱い篦磨き。摩耗	口 1／5 残 胴上半部 2／3残
9	カマド付近	小型甕	口： 14.0 胴： 16.0 底： 7.0 高： 15.0	砂粒を多量に含む 堅緻	上半暗褐色 下半赤橙	胴は内湾気味に立ち上がり肩でやや張りを持つ、口縁は短く直立し口唇部で僅かに外反する。底は楕円形で平底、全体に器厚最大径を胴上半部に持つ。	外面：篦削りでやや粗雑 口縁部は横撫で胴部の歪みが目立つ 内面：篦撫で 胴下半と底部は荒い撫で	ほぼ完形 網目痕付着
10	床 面	甕	底： 4.5	砂粒混入 良	外 赤褐色 内 浅黄橙	底部はやや丸味を持つ平底で立ち上がりが見られる。	外面：縦方向篦削り、炭化物の付着有り。 内面：篦撫で。	胴下半部と底部
11	覆土一括	甕底部	底： 8.0	黒色微砂粒混入	浅黄橙	底部はやや丸味を持つ平底。底部の一部に立ち上がり有り。	外面：横方向篦削り。煤付着。 内面：横方向撫で。	底部½残
12	カマド右脇	ハソウ	口：(14.0) 高： (4.3)	白色微砂粒を多量に含む 堅緻	青灰色	口縁部は一旦外反してのち段を造って外上方へまっすぐ延びる	外面：頸部と口縁部との境界には僅かに摘み出した鋭い凸帯が巡る。頸部に櫛描き波状文を施している。入念に平滑化鈍い光沢を持つ 内面：外面と比べて粗い横撫で	口縁部 1／3 残
13	覆土一括	坏	口：(10.5)	白色砂粒を多量に含む 堅緻	青灰色	立ち上がり縮小化し全体に浅く偏平である。受部は水平に外方へ延びる。	外面：受部の上面に一条の凹線を施している体部から底部に回転篦削りが施されている。 内面：全体に回転横撫で。	口縁部 1／4残
14	覆土一括	石製模造品長辺3cm短辺2.4cm厚さ6mm 緑灰色 両面とも稜が無く、摩耗によりほぼ水平で板状を呈す。重量6.880g						

6 号 住 居 址

本住居址は、5号住居址の北東2m、I－(10, 11)グリット、J－(10, 11)グリットに位置する。北側半分が調査区域外に延びるため全容は不明である。遺構は北西コーナーから南西コーナーと南東コーナーを確認できた。壁は西壁で長さ3.4m、高さ21.5cm、南壁で長さ4.38m、高さ5.5cm～12.5cmを測る。長軸をN－83°－Eにとり隅丸長方形の平面形を呈するものと推定される。覆土は二ツ岳軽石を混入する黒褐色土が埋没せしめており、上層は下層に比べ、二ツ岳軽石の粒子が粗くなる。西壁側の床面は攪乱により掘り込まれていたが、全体としては平坦に整えられており、よく踏み固められていた。柱穴は各コーナーに3箇所検出され、Pit 1(28cm、深さ46cm)、Pit 2(32cm、深さ39cm)、Pit 3(29cm、深さ43cm)が測れる。貯蔵穴はPit 3のコーナー寄りにあり(63×45)cm、深さ57cmを測り、楕円形を呈している。この貯蔵穴底面近くから口縁部を欠く小型壺が出土している。周溝は調査範囲内では全域で確認された。

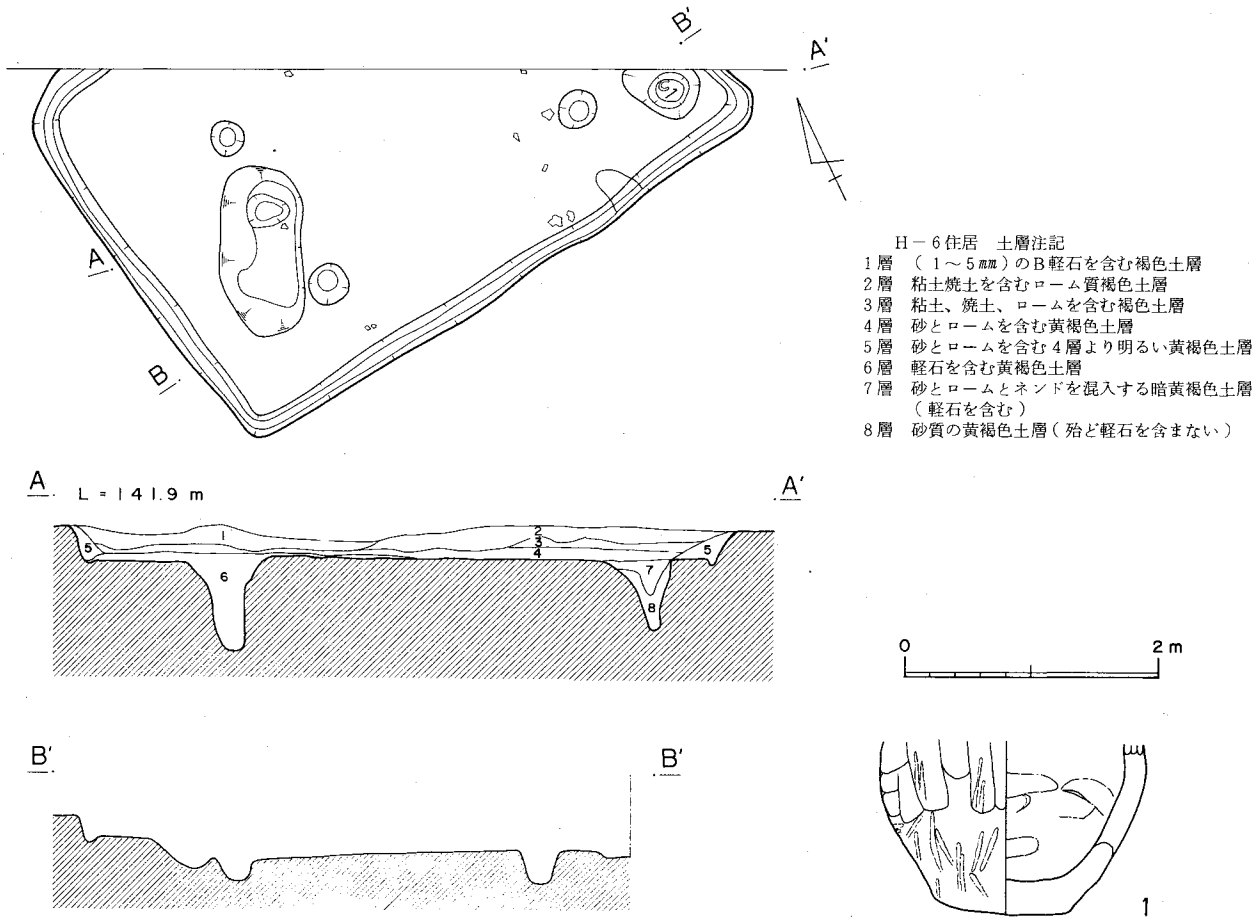
カマドは北側セクション内に粘土と焼土が多量に含まれることから、貯蔵穴に隣接しているものと思われる。南壁にかけて白色の粘土魂が検出された。

遺物は少なく、貯蔵穴内に出土した№1以外は破片のみである。掘り方は13cm～20cm、ほぼ同じ深さで掘り込まれている。なおPit 1、Pit 3は掘り方により確認された柱穴である。

6 号 住 居 址 出 土 遺 物 観 察 表

法量の( )は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	貯蔵穴内	甕底	胴：(10.5) 底： 5.3 高：(6.6)	砂粒と黒雲母を多量に含む 良	外面赤褐色 内面黄褐色	胴部は張らみ底部の近くで締まる。底部は緩い丸底。	外面：胴部から底部方向篦削り、縦方向篦撫で底部もよく撫でられている。 内面：撫で 底部中央が黒色を呈す。	底部のみ



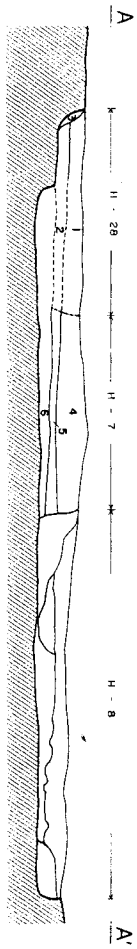
H－6住居　土層注記
1層　（1～5㎜）のB軽石を含む褐色土層
2層　粘土焼土を含むローム質褐色土層
3層　粘土、焼土、ロームを含む褐色土層
4層　砂とロームを含む黄褐色土層
5層　砂とロームを含む4層より明るい黄褐色土層
6層　軽石を含む黄褐色土層
7層　砂とロームとネンドを混入する暗黄褐色土層（軽石を含む）
8層　砂質の黄褐色土層（殆ど軽石を含まない）

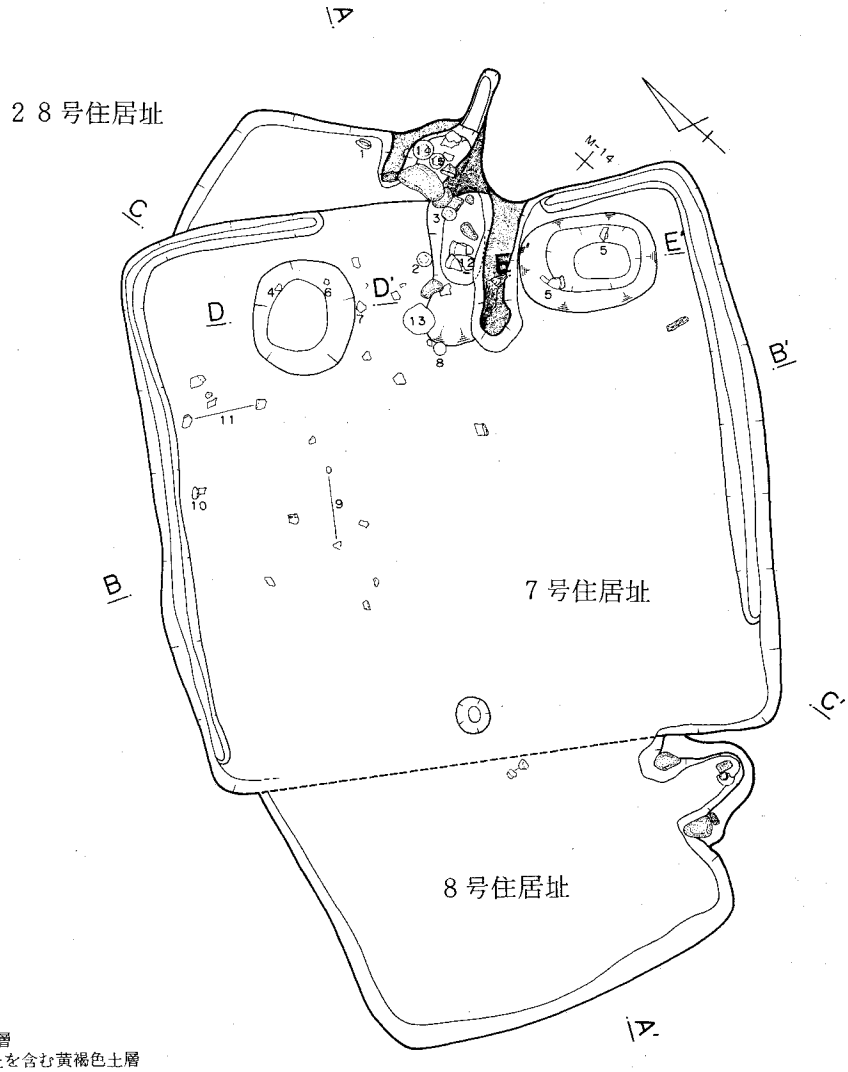
第15図　6号住居址・出土遺物実測図

7　号　住　居　址

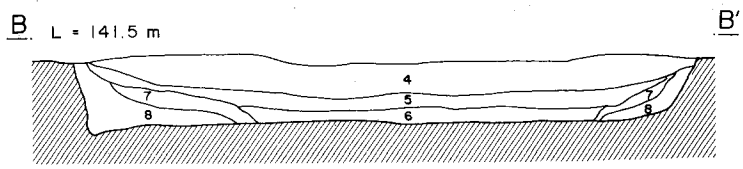
本住居址は5号住居址の東8.2m、L－（12, 13）グリット、M－（12, 13）グリットに位置する。北壁はH－28号に切られ、南壁は8号住居と重複する。北壁4.41m、西壁4.64m、南壁4.56m、東壁4.72mを測る。南北方向に長軸を持ち、東西方向とでは36cmの差を生じている隅丸方形住居である。主軸をN－40°－Eにとる。各壁は70°～80°前後の立ち上がりとなり、重複部分を除いて良好である。掘り込みは褐色土まで掘り込まれており、確認面から床面まで42cm～57cm、掘り方は床面まで含めると52cm～68cmである。北壁は28号住居構築の際に、また南壁は8号住居構築の時に破壊されている。覆土は二ツ岳軽石を多量に混入する黒色土に埋没する。床面は二ツ岳軽石と褐色土の混土でカマド周辺は平担でよく踏み固められているが、周溝付近においては軟弱である。カマドは右側北東コーナーに115cm×77cmの立派な貯蔵穴が存在していた。土層は焼土と灰が層をなしている。北西コーナーからカマド左袖の間、径85×90cm、深さ27cmの土壙が確認された。柱穴は掘り方でも検出できなかった。周溝はカマドを除き全周するものと思われるが、8号住居と重複する部分では明瞭な掘り込みが確認できなかった。

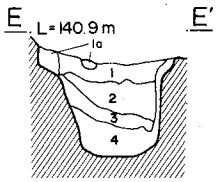
北壁中央部に構築されたカマドは28号住居構築時に左袖を破壊され、右袖は28号住居東壁として利用されたので残存したものと思われる。

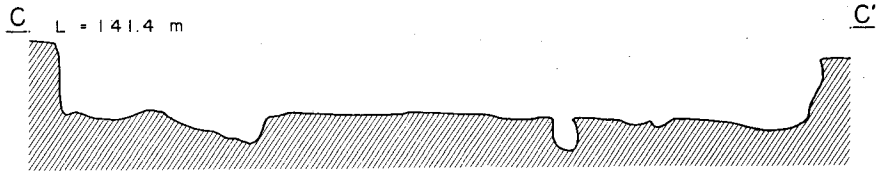




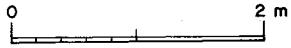
Ｈ－７・28住居　土層注記
1層　軽石を含む黄褐色土層
2層　焼土を含む暗黄褐色土層
3層　地山の細かい粒子を含む暗褐色土層
4層　軽石（ 0.5 ～ 1.0 cm ）と微量の焼土を含む黄褐色土層
5層　軽石（ 5 mm以下 ）と焼土粒を含む褐色土層
6層　焼土粒と僅かに軽石を含む黄褐色土層
7層　軽石（ 5 mm以下 ）を含む黒褐色土層
8層　東側は炭化物、西側は焼土と灰のブロックを含む褐色土層



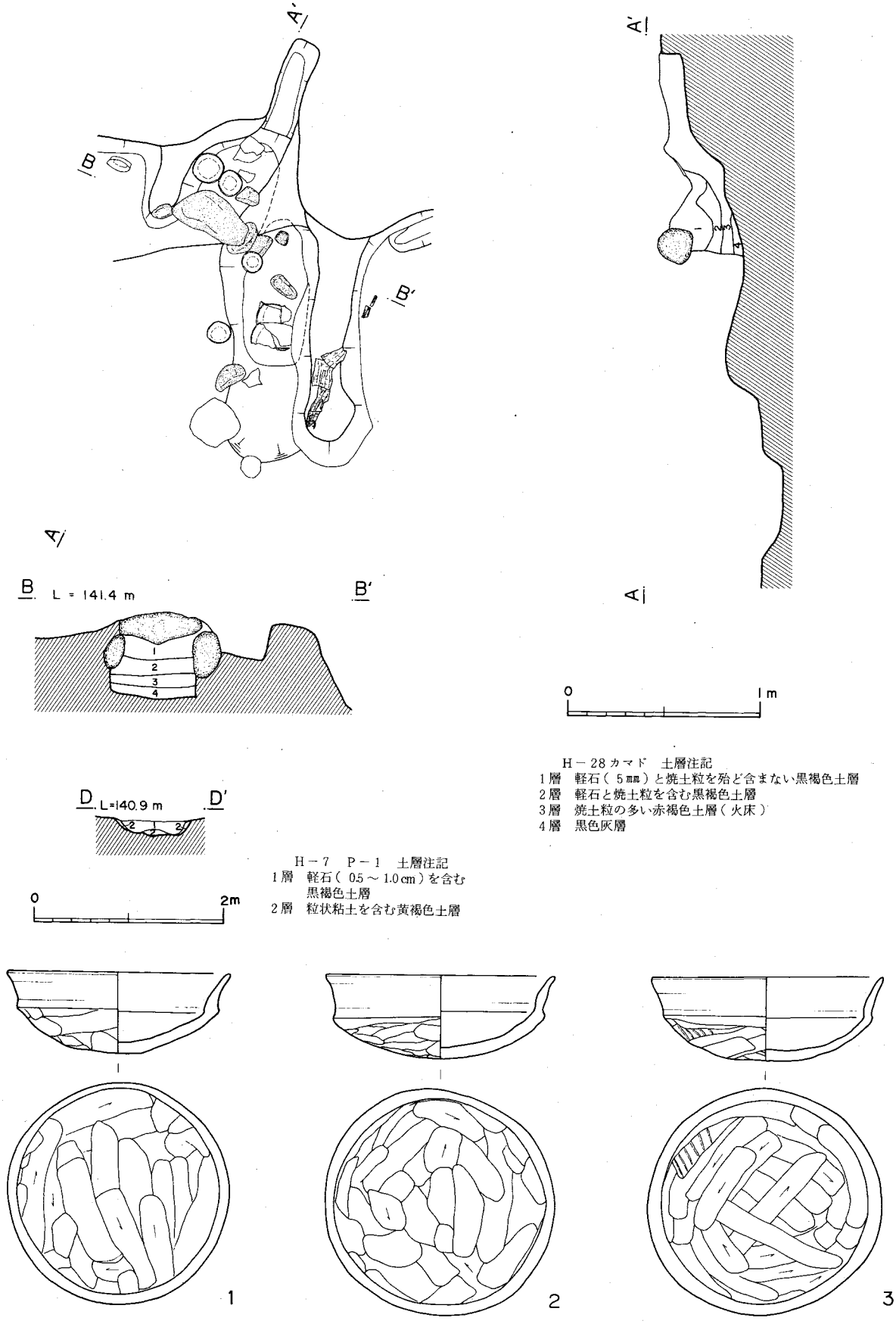




Ｈ－７　貯蔵穴　土層注記
1層　軽石（ 0.5 ～ 1.0 cm ）、粒状焼土と粘土を含む黒褐色土層
2層　1層よりもローム質を含む黄褐色土層
3層　焼土粒を多量に含む暗赤褐色土層
4層　灰と軽石と僅か焼土を含む黒色土層



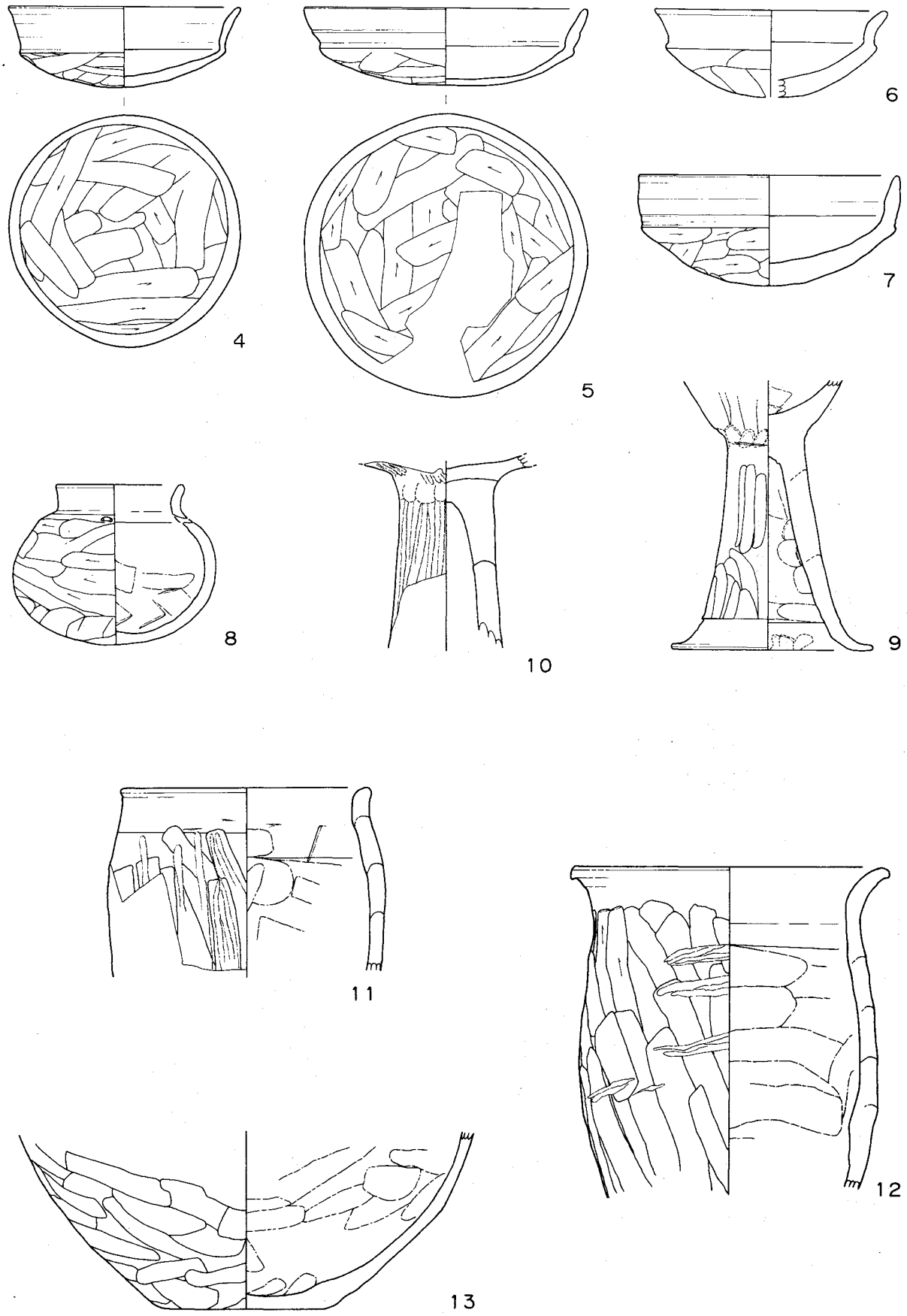
第１６図　７・８・２８号住居址実測図



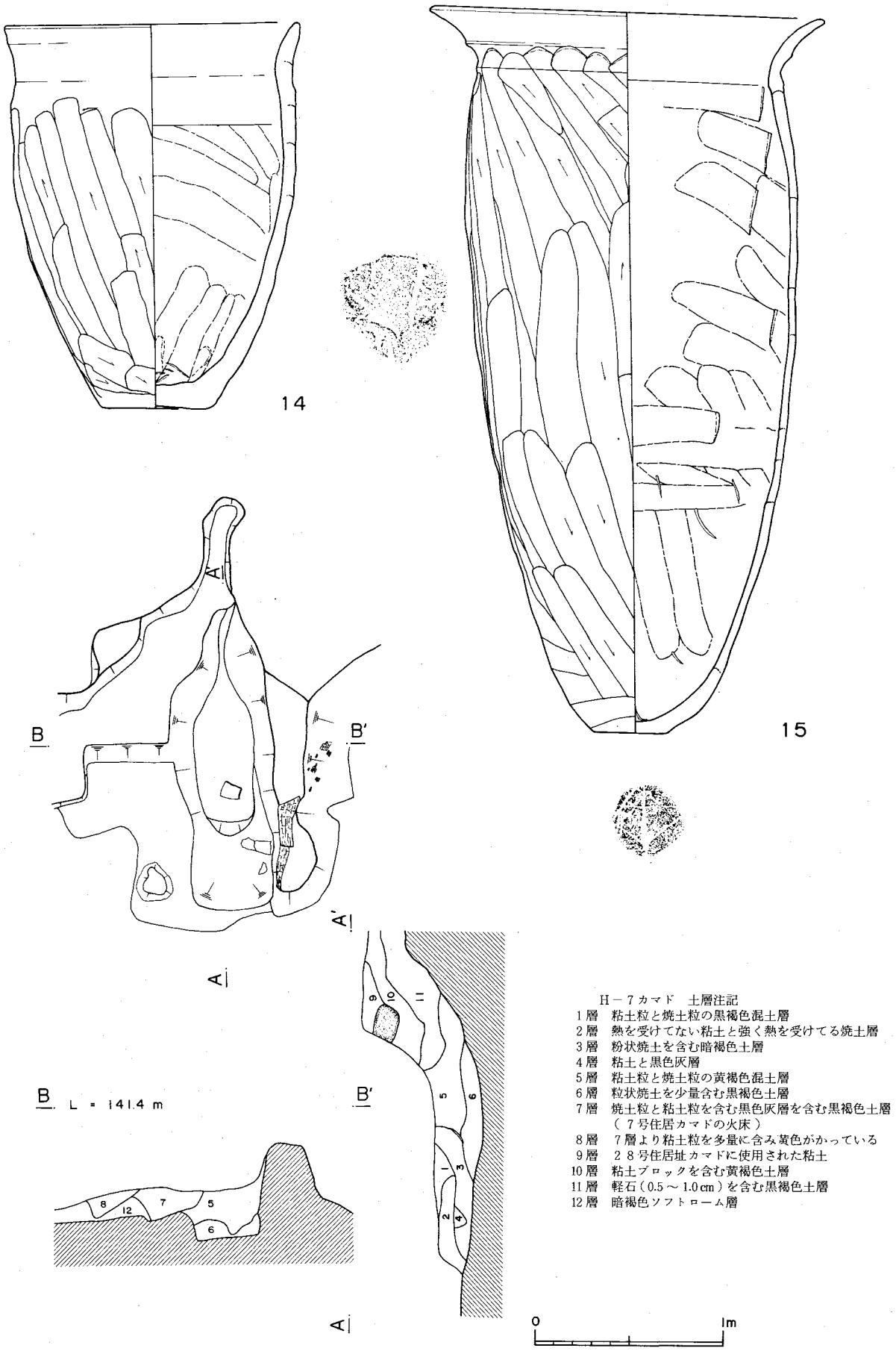
H－28カマド　土層注記
1層　軽石（5㎜）と焼土粒を殆ど含まない黒褐色土層
2層　軽石と焼土粒を含む黒褐色土層
3層　焼土粒の多い赤褐色土層（火床）
4層　黒色灰層

H－7　P－1　土層注記
1層　軽石（0.5～1.0㎝）を含む黒褐色土層
2層　粒状粘土を含む黄褐色土層

第１７図　２８号住居址カマド・出土遺物実測図



第１８図　７・２８号住居址出土遺物実測図



第１９図　２８号住居址出土遺物・７号住居址カマド実測図

袖部、掛け穴は住居内で、煙道のみ住居外に僅か出ている程度の型式のカマドである。燃焼部は床面を１１cm程掘り窪めている。煙道は緩やかに立ち上がった後、35°の傾斜で煙出しに至る。右袖には炭化物が密着して出土している。

遺物は坏が３点（No. 5, 6, 7 ）、甕１点（No.11）、高坏脚２点（No.9, 10）が出土している。掘り方は10cm～11cm、ほぼ同じ深さに窪めており、カマド左前方部を高く残し、周辺を掘り窪めている。

7 号 住 居 址 出 土 遺 物 観 察 表

法量の( )は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
5	貯蔵穴縁	坏	口：14.9 高：4.2	砂粒を多量に混入 良	黒色	口縁広く直線状に開き体部との境に稜有り、口縁中位に段有り	外面：口縁部横撫で、体部篦削り。 内面：口縁横撫で、体部丁寧な撫後黒色処理	底部 1/3欠
6	覆土	坏	口：16.2 高：(4.6)	砂粒を多量に含む 堅緻	褐色	体部の器肉は厚く、口縁はやや薄く外反。底部を欠失し稜有り	外面：口縁部横撫で、体部は粗れている。 内面：丁寧な撫で、1/3 程煤付着	1/3 残
7	覆土	坏	口：13.6 高：5.9	黒色細砂粒混入 堅緻	外 橙 内 黒褐色	直立した口縁部は中位で脹らみが見られる。体部は深く器厚である。	外面：横方向篦削り、体部と口縁部の境に篦掻き沈線５本有り。底部摩耗 内面：丁寧な撫で後黒色処理、中央部剥離	1/4 残
9	床面直上	高坏 脚部	脚：(5.0) 裾：10.5	砂粒・細砂を含む 堅緻	暗赤褐色	坏部を欠失する。脚は緩やかに開き、裾はなだらかになる。	外面：縦方向篦削り後磨き、裾部横撫で、脚と裾の境に２本の沈線有り。 内面：篦撫で、指押え。	坏部内黒処理
10	覆土	高坏 脚部	脚：(6.0) 高：(10.2)	細砂を多量に含む 堅緻	橙 一部黒色	坏部を欠失する。脚は緩やかに開き裾部を欠失する。	外面：細篦による撫で。 内面：坏部は赤褐色と黒色に変色	高坏の 接合部
11	覆土	小型甕	口：13.3 胴：14.8	砂礫混入	赤褐色	頸～口縁はほぼ直立し、口唇部で僅か外反。胴は少し張り出す	外面：口縁横撫、胴篦削、幅の狭い工具にて撫 内面：口縁横撫、胴部は篦撫で痕が残る。	赤色塗彩
12	カマド内	小型甕	口：16.8 胴：15.7 高：(17.5)	砂粒を多量に混入 堅緻	赤橙	口縁部は「く」字状に外反する最大径を口縁部に持つ。輪積み痕有り。	外面：口縁部横撫で、胴部篦削り後篦撫で、胴中位に脹らみが見られる。 内面：口縁部横撫で、胴部篦撫で。	底部欠
13	カマド内	甕	底：8.8	砂粒を多量に含む 良	橙	底部から胴部は大きく開く。弱い丸底を呈する。	外面：篦削り後磨き。煤付着 内面：丁寧な篦削り後磨き。黒色処理。	胴下半～底部

28 号 住 居 址

本住居址は７号住居址の北側、Ｌ－（ 12, 13 ）グリットに位置する。本住居址のカマドは調査当初７号住居址のカマドと考えられた。７号住居址の北壁際いっぱいの位置に存在し確認面から42cmに構築されている。両袖端には川原石（左袖10cm×18cm、右袖14cm×24cm）を設置し、その上には偏平な川原石（縦19cm、横41cm、厚さ10cm～15cm）を鳥居状に組み床面より焚口部（海抜140.89ｍ）が窪んでおり燃焼部（海抜141.0ｍ）から40°の傾斜で立ち上がり煙道部へ続き煙道も35cmの緩い傾斜の後、最後は垂直に煙出しとなっている。

カマドの全長は1.11ｍである。掛け穴には小型甕（No.14 ）の完形品が口縁を水平にして出土している。北壁は2.25ｍを測る。西壁は1.2ｍで７号住居址に重複し、東壁は７号住居址のカマド右袖の残存状況により約1.3ｍを測った。28号住居址の東壁が７号住居址のカマド右袖と合致したものと考えられる。床面の高さは海抜141.1ｍ～141.2ｍ前後と推定される。１号住居址の調査例がなければ28号住居址と見なすことも不可能であったであろう。形状は隅丸方形を呈していたものと推察される。

遺物は小型住居址としては豊富である。長甕完形２点（No.15は試掘時に取り上げた物で位置はカマド掛け穴に推定される）、坏４点（No.1,2,3,4）であった。小型壺（No.8 ）と横瓶の破片は28号住居址に伴うものと推察される。

28号住居址出土遺物観察表

法量の( )は推定値

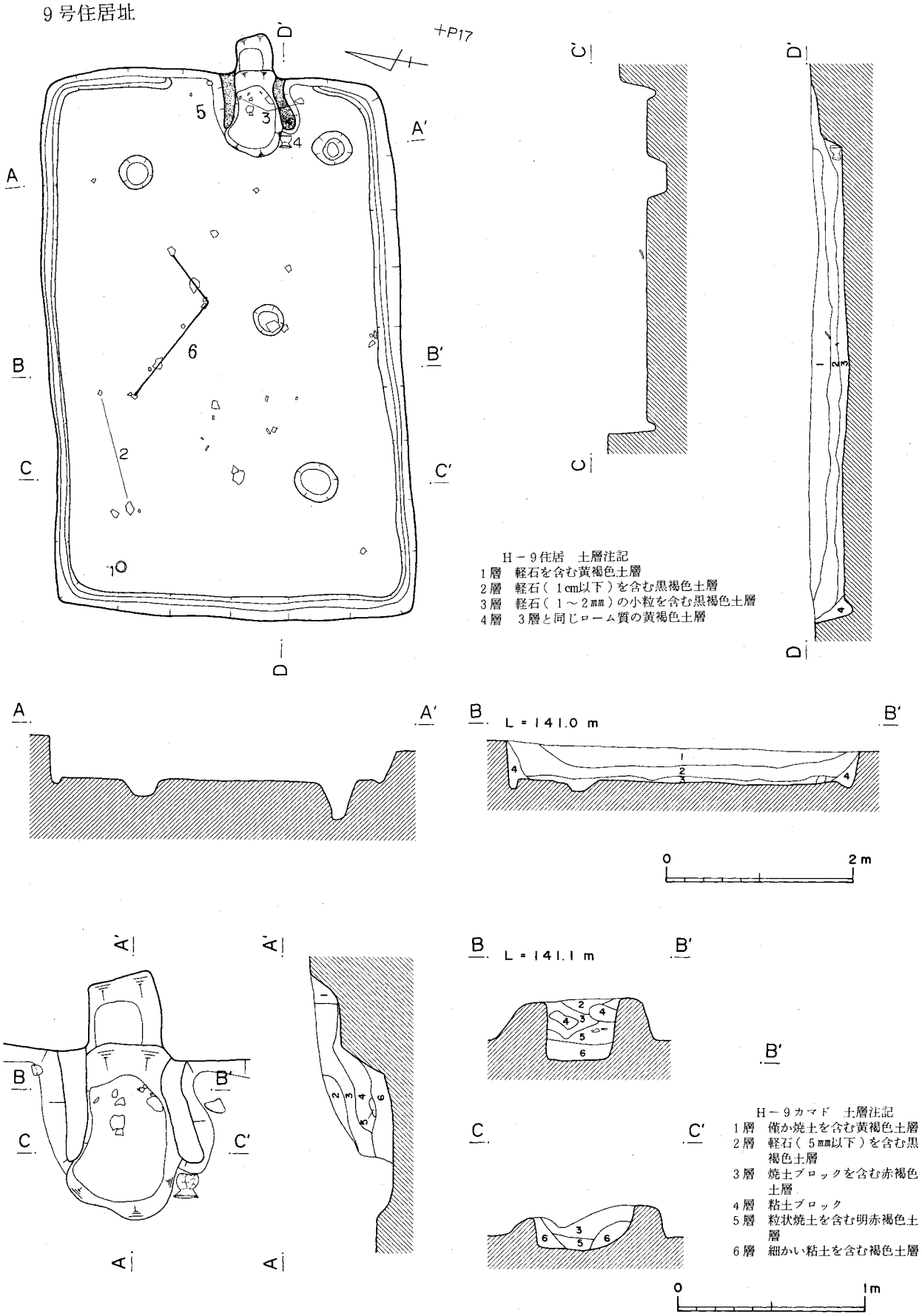
番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	カマド左脇	坏	口：11.8 高：4.4	白色砂粒混入 堅緻	橙	口縁部は緩やかに外反し稜を有する。やや歪がみられる。	外面：口縁部横撫で、体部外面篦削り 内面：撫で、凹凸有り。ややきめが粗い。	完形
2	カマド前	坏	口：12.0 高：4.4	黒色微砂粒混入 堅緻	橙 外面底部黒	直立気味の口縁部はやや器厚の作りで緩やかに口唇部は外反し稜を有する。やや歪がみられる	外面：口縁部横撫で、体部外面篦削り、体部に粘土痕付着。 内面：撫で、凹凸有り。	完形
3	カマド右脇	坏	口：12.2 高：4.4	黒色微砂粒混入 良	橙 底部外面黒	全体に薄く口縁部は緩やかに外反し稜を有する。やや歪む。	外面：口縁部横撫で、体部外面篦削り。 内面：撫で、中央部に細かな剥離有り。	ほぼ完
4	覆土	坏	口：12.3 高：4.4	白色砂粒、礫含む 堅緻	橙	直立気味の口縁は口唇部で僅か外傾。稜を有し丸底で歪み有り	外面：口縁横撫で、体部篦削り一部赤色塗彩 内面：撫で、一部に粘土痕付着。	完形
8	床面直上	小型壺	口：6.7 胴：10.7 高：8.5	砂粒を多量に混入 良	黄橙色	球状の胴部から直立気味に外反し口縁部に移行する。	外面：口縁部横撫で、胴部は横方向篦削り。胴から底部は篦撫で。 内面：頸部に対角線状に2つの孔が穿けられている。底部に煤付着。	完形
14	カマド掛部	甕	口：15.8 胴：15.3 底：5.8 高：20.6	2～3mmの砂粒を含む 良	外 1／2 黒褐色 内 赤褐色	口縁部は直線状に外傾する。胴部は幾分張らむ、輪積痕有り、底部に葉脈痕が見られる。平底胴部上位に僅か張らみを持つ。	外面：口縁部横撫で、胴部縦方向篦削り。底部→口縁部方向 内面：口縁から胴上部にかけて横撫で、底部から胴下半部に指圧痕その後篦調整	完形
15	カマド掛部	甕	口：21.0 胴：17.6 底：3.9 高：38.0	砂粒を多量に混入 良	橙	口縁部は強く外反し最大径を持つ。胴上位で僅かに張らみ中位から底部に直線的に窄まる。	外面：口縁部横撫で、頸部に篦の先端部の痕がみられる。胴中位に煤付着。葉脈痕 内面：口縁部横撫で、胴部は篦削り篦撫で。	ほぼ完

9号住居址

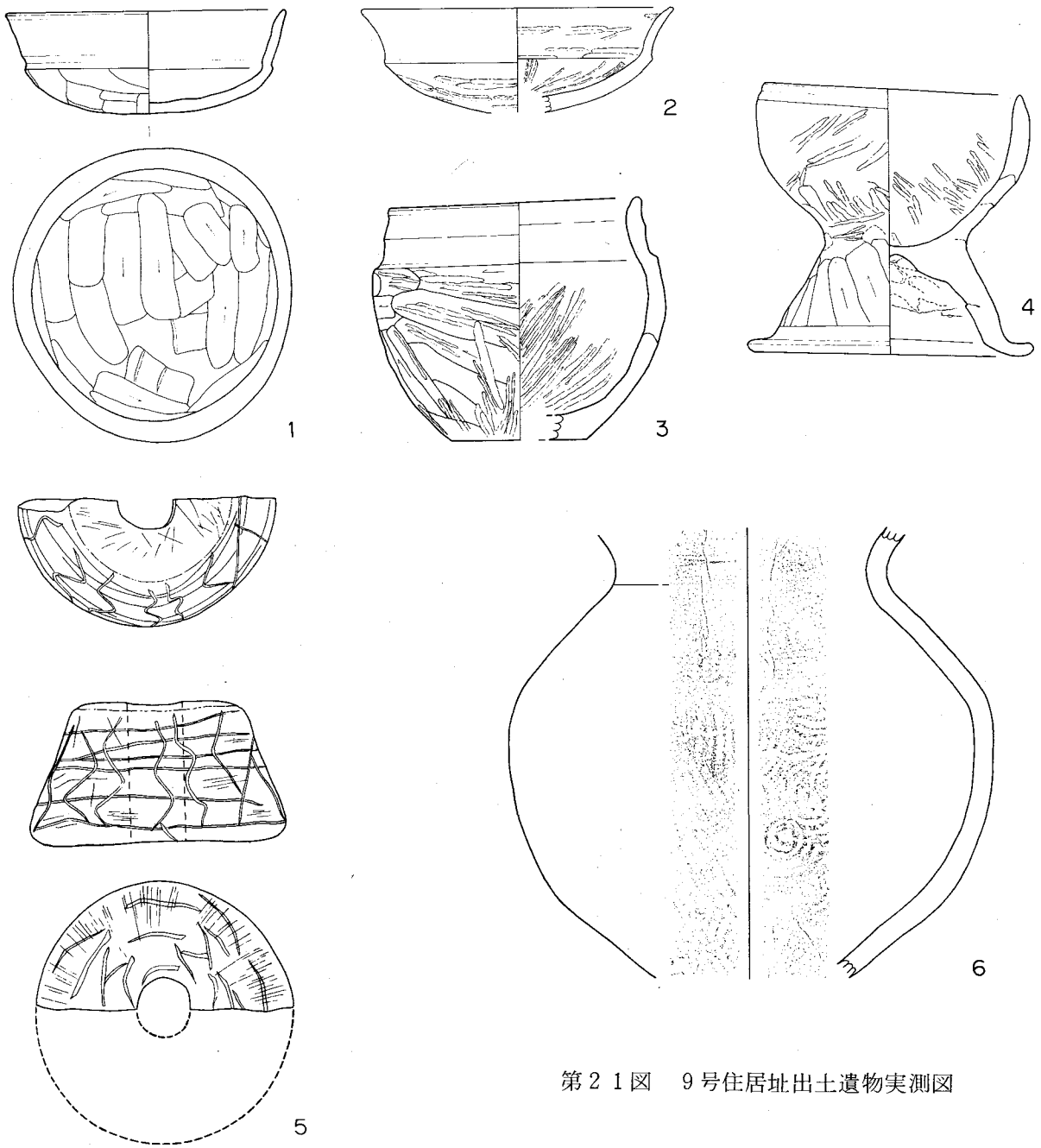
本住居址は7号住居址の南東方向10m、O－(15, 16)グリット、P－15グリットに位置する。北西と南東コーナーは鈍角、南西と北東コーナーは鋭角で不正形の隅丸長方形を呈する。長軸5.85m、短軸3.80m、長方形で主軸はN－80°－Eにとる。北壁5.52m、西壁3.80m、南壁5.67m、東壁3.52mを測る。掘り込みは確認面から床面まで28cm～44cmを測り、掘り方床面を含めると55cm～63cmになる。壁の立ち上がりは75°～80°の傾斜となっている。覆土は4層に分けられる。第1層は二ツ岳軽石を含む黄褐色土層がレンズ状に埋没せしめている。2、3層は細かい軽石を含む黒褐色土層であり、4層は壁の崩壊土であるロームを混入する黒褐色土で壁下を覆っている。床面はカマド周辺でよく踏み固められているが他の部分では比較的軟弱さが目立った。周溝は左袖50cmから始まり右袖20cmまでほぼ全周する。幅は12cm～15cm、深さは3cm～9cm、断面は「U」字状を呈している。西側は6cm～9cmでやや深めになっている。貯蔵穴は南東コーナーに所在する。長径42cm、短径31cmで深さ44cmの小楕円形を呈している。

カマドは東壁南側に壁高の1/2を掘り窪め主軸を住居長軸方向と一致させて構築されている。荒掘りの段階を観察すると、壁を掘り込む際にカマドの火床面を長さ67cm、幅は一定していないが50cm程の楕円形に掘り窪めている。遺存状態は良好で左袖50cm、右袖63cmを住居内に作り出し、褐色粘質土で形成する。天井部は赤褐色に焼けカマド内に崩落し残存していた。

遺物は、住居中央部に集中して出土した。北西コーナー寄りから坏の完形1点・内黒坏3/4・須恵器(表面が格子目文、内面は同心円文が施文)広口壺(口縁部と底部欠損)・高坏の坏部1/2残・小型甕(器高11cm、胴部13.4cm)、又カマド左袖脇から石製紡錘車の出土がみられた。掘り方は中央部で約8cm、南西コーナーと北東コーナーでは、約20cm荒掘りがされている。床面は褐色土に細かい軽石を含む混土で貼られている。



第２０図　９号住居址・カマド実測図



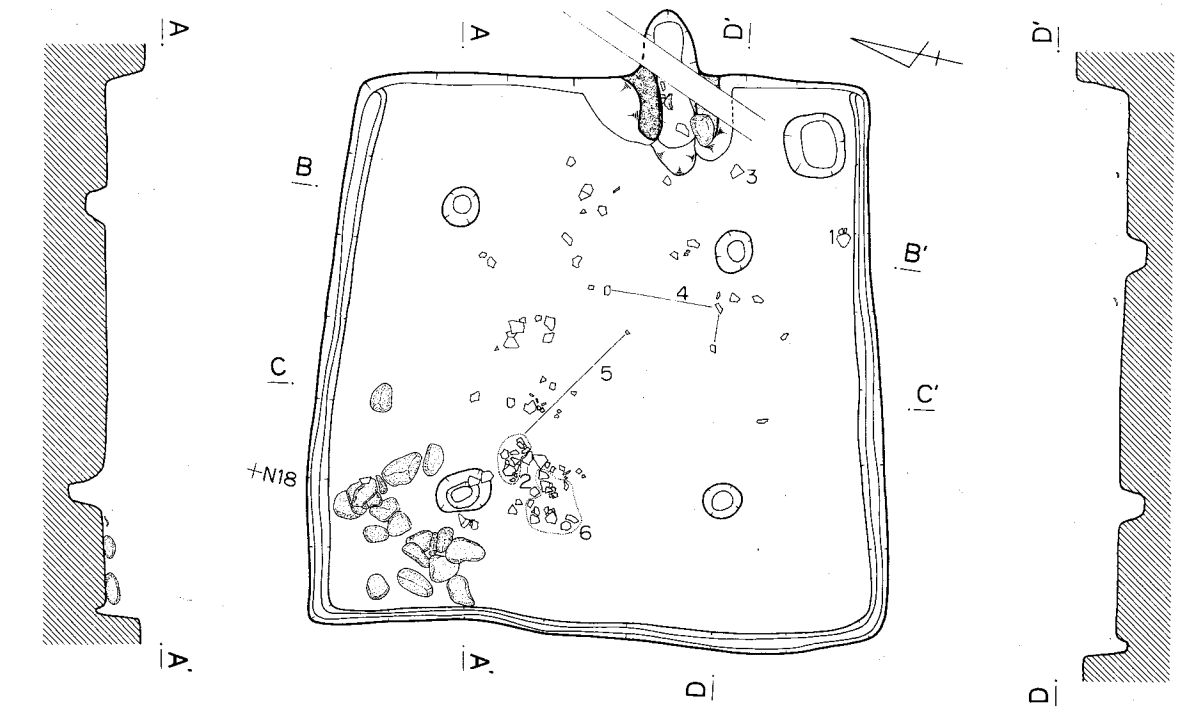
第２１図　９号住居址出土遺物実測図

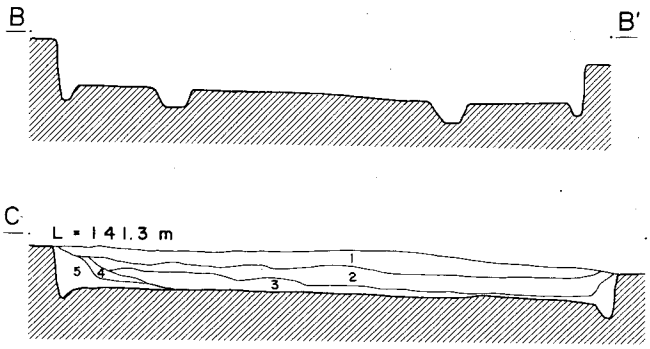
９号住居址出土遺物観察表

法量の( )は推定値

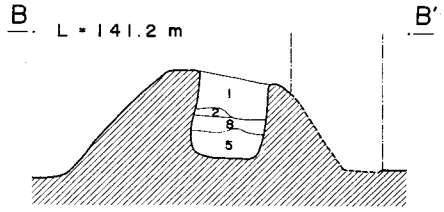
番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	北西コーナー 床面直上	坏	口：12.9 高：4.7	微砂粒混入 やや軟	赤橙	口縁部は直線状に直立する。体部との境に稜を持ち底部は丸底	外面：口縁部刷毛による横撫、体部は篦削り刷毛撫で更に刷毛目を刷り消している 内面：刷毛目を刷り消し、中央部に凹有り	完形
2	床面直上	坏	口：14.4 高：(4.8)	砂粒を混入 堅緻	外　褐色 内　黒	口縁部は外反し体部は肥厚。稜を有す。	外面：煤付着、口縁横撫で、体部篦削篦撫で 内面：丁寧な撫後細篦の放射状撫、黒色処理	1／3残
3	カマド 内外	小型甕	口：11.5 胴：13.4 底：6.1 高：11.0	2～3㎜の軽石と暗赤褐色の砂礫 堅緻	にぶい橙	全体に器厚である、胴部は球形を呈し口縁部直立し撫でにより段を持ち肩部に明瞭な稜を有す平底。底部と胴下半に煤付着。	外面：口縁横撫で(肩左→右方向)、胴は篦削り後斜方向篦磨き、底部篦磨き篦撫 内面：口縁部横撫で、胴上半部軽い撫で、胴中位から底部は細い篦による磨き。	2／3残
4	カマド 右脇	高坏	口：11.8 体：12.5 高：12.2	細砂粒混入 良	褐色 (一部黒色)	坏部は半球形で深い、口縁部はやや内傾し、脚部は「ハ」字状に開く。端部で水平に張り出す	外面：坏部篦削り後篦撫で、脚部篦削り。 内面：坏部篦削り後篦磨き、接合部指撫で、裾部横刷毛撫で。内黒処理	ほぼ完形
5	カマド 左脇	紡錘車	滑石　暗緑灰色截頭円錐形である。上面直径2.5㎝、下面径3.9㎝を測る。穿孔はほぼ均一である。上面、左斜方向の削痕側面には水平方向の削痕と強い沈線が縦横に施されている。材質は蛇紋岩。重量22.779ｇ					1／2残
6	覆土３層	壷 須恵器	口：(13.8) 胴：22.1	白色微砂粒混入 堅緻	青灰色	口縁部は「く」字状を呈する。体部はやや肩の張りが見られる	外面：平行叩き目文一部重なり網目状を呈す 内面：同心円文、胴一部横撫で、刷消し手法	口縁部と底部欠失

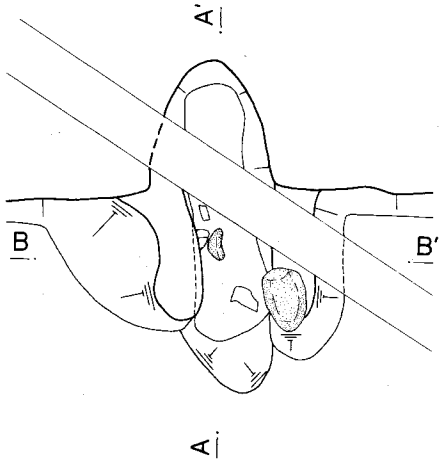
10 号住居址

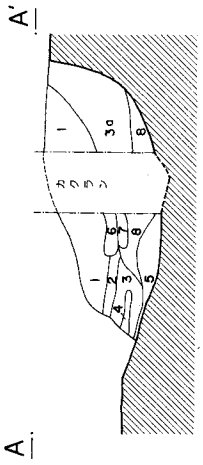




H－10住居　土層注記
1層　焼土粒を含む黒褐色土層、細かい軽石を含む
2層　（ 0.5～1.0cm）の軽石と焼土を含む黒褐色土層
3層　少量の軽石を含む黄褐色土層（焼土を含む）
4層　2層と同じ軽石を含む黒褐色土層
5層　軽石を少し含む黄褐色土層

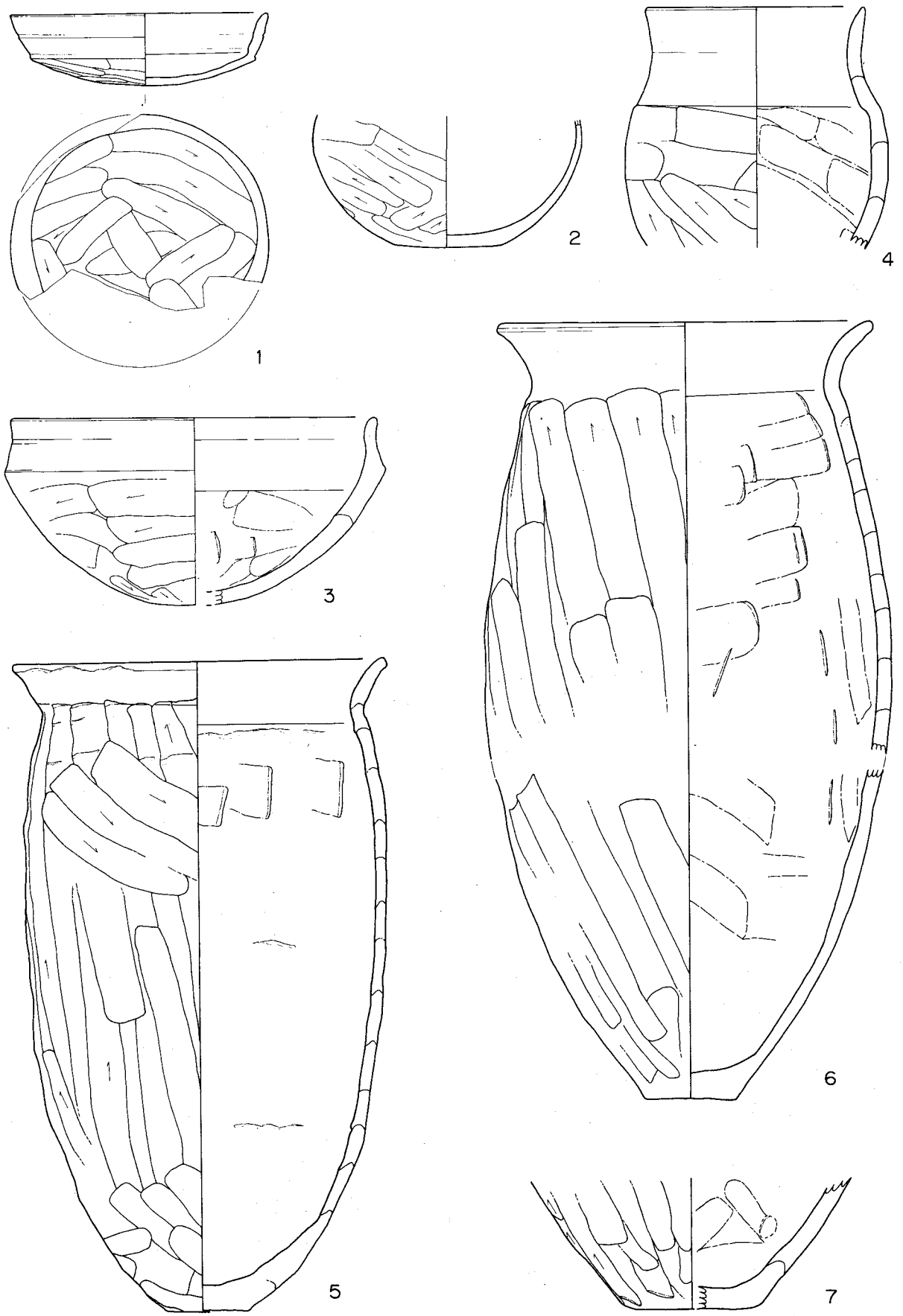






H－10カマド　土層注記
1層　粘性の強い粘土
2層　粒状焼土を含む赤褐色土層
3層　粒状焼土を多量に含む赤褐色土層
3a層　3層に軽石を僅かに含む赤褐色土層
4層　灰を含む黒色土層
5層　黒色の灰を多量に含む黒褐色土層
6層　焼土ブロックの明るい赤褐色土層
7層　5層に類似、焼土を含む暗赤褐色土層
8層　7層より焼土を含まない地山に近い褐色土層

第22図　10号住居址カマド実測図



第２３図　１０号住居址出土遺物実測図

10 号住居址

本住居址は9号住居址の北東方向4.5m、L－（18, 19）グリット、M－（18, 19）グリットに位置する。北壁4.28m、西壁4.48m、南壁4.46m、東壁4.0mを測る。不正形隅丸方形を呈する。カマド部分を耕作の溝で攪乱されている。主軸はN－80°－Eにとる。壁高は北側35cm、西側27cm、南側30cm、東側30cm、75°～80°前後の立ち上がりとなっている。覆土は第1、2層は二ツ岳軽石と焼土を含む黒褐色土、第3層は細かい軽石と焼土を含む黄褐色土、第5層は壁の崩壊土であり、ロームを混入する黄褐色土である。床面は北東コーナーから中央部では東壁より2/3まで、南東コーナー貯蔵穴手前までよく踏み固められている。中央部は50cm×85cmの広がりを持つ部分が強く焼けており、北西コーナーには多量の川原石が堆積していた。柱穴はPit 1（37cm×36cm）深さ14cm、Pit 2（43cm×48cm）深さ27cm、Pit 3（37cm×44cm）深さ19cm、Pit 4（30cm×35cm）深さ15cm、貯蔵穴は南東コーナーに所在し48cm×50cmのほぼ隅丸方形を呈し、深さ19.5cmであった。周溝は北東コーナーから南東コーナーまで周っており、幅8cm～15cm、深さ8cmであった。

カマドは東壁中央より壁を約50cm掘り込んで構築されている。燃焼部を溝で切られており全体を把握しがたい、褐色粘質土を使用し住居内に右袖65cm、左袖65cmの作り出しがあったと推定される。天井部は殆ど確認できなかったが壁全体は赤褐色によく焼けている。火床は床面より8cm掘り窪められている。煙道は緩やかな傾斜で立ち上がっている。

遺物の器種は長甕3個体（No. 1, 2, 3）、鉢1/6残・小型甕、坏（各1個体）カマド前から北西コーナー方向にかけて多く出土した。掘り方は粒子の細かいローム質の褐色土まで床面が到達している。周溝近辺では周溝の底（5～10cm）まで、中央部では15～20cmほど掘り下げている。この住居では北西コーナーに川原石が壁の崩壊と同時期に堆積しており床面直上まで達している。この堆積は住居の廃棄と同時性を強く感じるものであった。

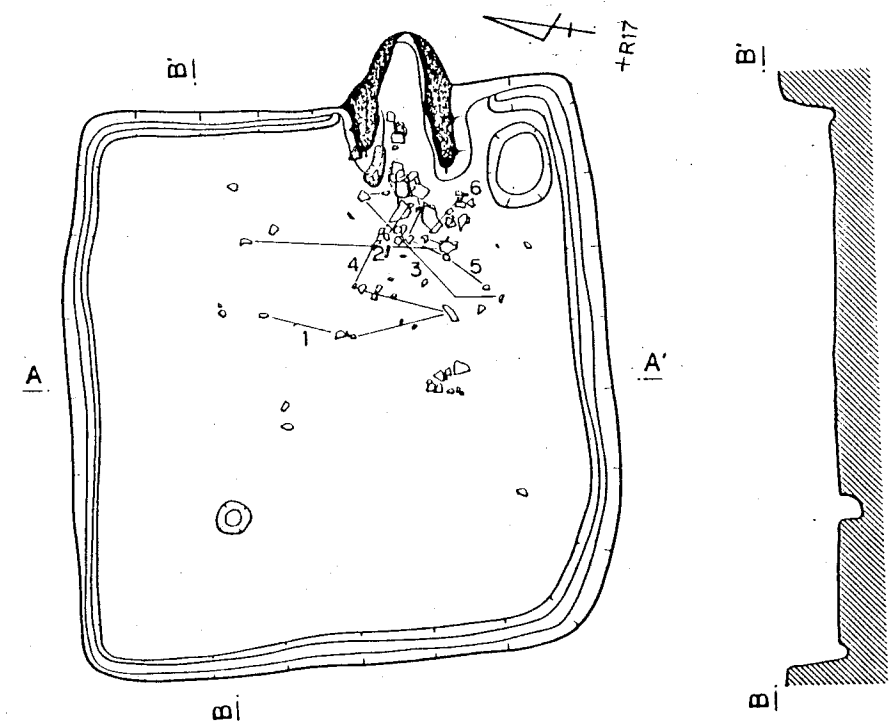
10 号住居址出土遺物観察表

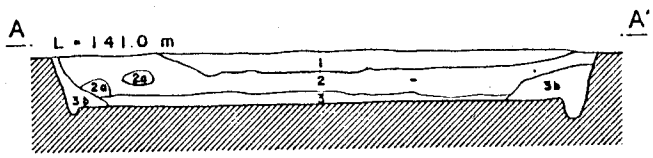
法量の( )は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	南壁脇	坏	口：13.8 高：3.9	礫と砂粒を混入 堅緻	外：1/2黒 内：褐色	口縁直状に開き中位に段あり。体との境に稜を持ち底は丸底	外面：口縁撫　底篦削痕有剥離し一部不明瞭 内面：丁寧な撫で	口辺1/3欠
2	床直	埦	口：(14.1) 高：6.7	砂粒混入 良	赤橙	体部から口縁方向に次第に薄く全体として球形を呈す　平底	外面：全体に斜方向篦削り。摩耗が激しい 内面：丁寧な撫で	完形
3	カマド前	鉢	口：(19.5) 稜：(20.3) 高：(10.0)	白色砂粒混入 堅緻	橙　口縁部内外面黒褐色	口縁部はやや外反気味に立つ、肩部に強い稜を持ち底部は不明	外面：口縁部横撫で　体部外面は剥がれにより調整痕不明。 内面：篦削り篦磨き、篦あて痕2ケ所有り。	1/6残
4	中央床直	小型甕	口：(11.6) 胴：(14.0)	黒色砂粒混入 堅緻	赤褐色	長い口縁部は中位でくびれが見られる。胴部は器厚である。	外面：口縁部横撫で、体部篦削り篦磨き，摩耗 内面：口縁部横撫で、丁寧な篦磨き。	口～胴1/3残
5	中央床直	甕	口：20.0 胴：19.3 底：4.5 高：34.7	細砂粒混入 軟	黄橙	口縁部外反、頸部不明瞭な稜を持つ。胴部やや脹らみを持つ。下半部に丸味を持つ。底は平底	外面：口縁横撫で。胴上半、底部付近は斜方向篦削り。肩部と胴中央は縦方向篦削 内面：口縁部横撫で。胴上半部横方向篦削り篦あて痕有り。	口縁と胴一部欠
6	西壁より	甕	口：20.0 胴：(21.5) 底：4.8 高：(41.4)	細砂粒混入 やや軟	浅黄橙	口縁部は「く」字状に外反する口端部は丸い。比較的小さな平底からなだらかに立ち上がり、胴中央部に最大径を持つ。	外面：口縁部横撫で、胴は下→上方向篦削り底部篦削り、表面摩耗。 内面：口縁部横撫で。胴から底部全体撫で。底の一部に煤付着。	輪積痕
7	覆土一括	甕	底：7.0	微細粒混入 やや軟	黒褐色	胴下半から直線的に底部に至る底部は丸味のある平底。	外面：縦方向篦削り。 内面：篦撫で。	胴下半～底部1/2残

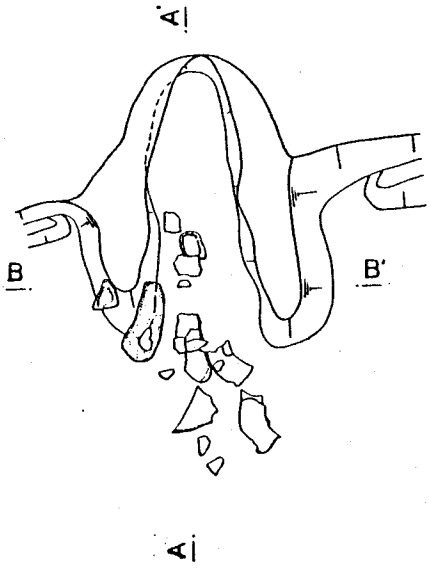
11 号住居址

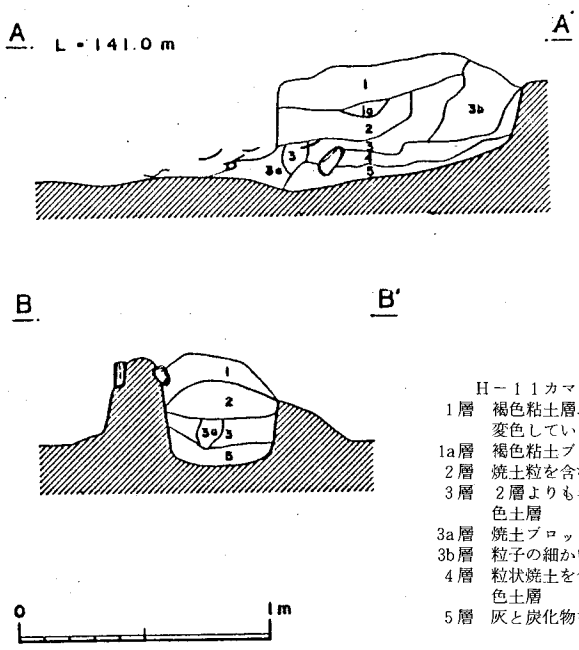
本住居址は9号住居址の南3.6m、P－（16）グリット、Q－（15, 16）グリット、R－（15, 16）グリットに位置する。北壁4.70m、西壁4.06m、南壁4.52m、東壁4.06mを測る。





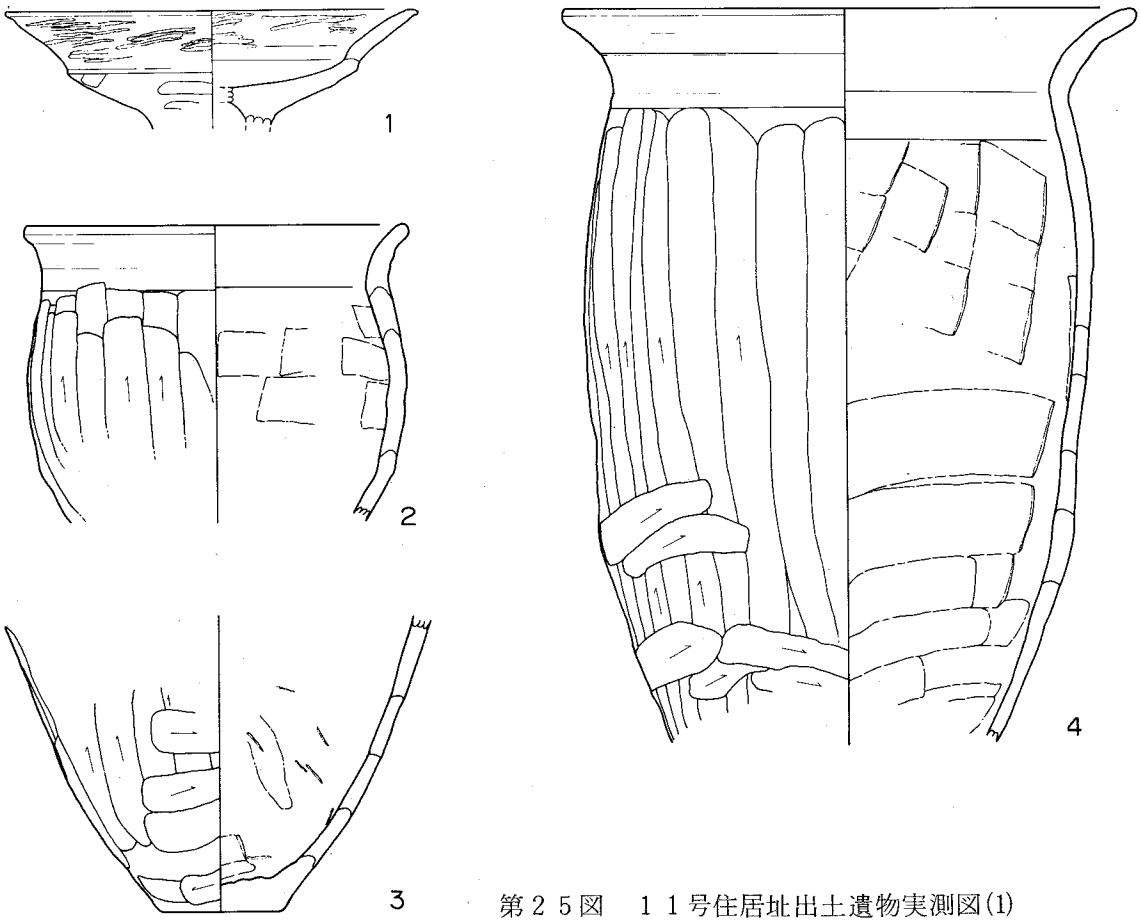
H－１１住居　土層注記
１層　焼土と軽石（ 1.0～1.5㎜）を少量含む黄褐色土層
２層　１層よりも粗い軽石を含む黒褐色土層
2a層　黒褐色土中に、黒色の軽石を含むブロック状土層
３層　軽石はごく僅か含む、ソフトロームの黄褐色土層
3b層　僅かな軽石とロームを含む黄褐色土層





H－１１カマド　土層注記
１層　褐色粘土層、下面は僅か熱を受け変色している
1a層　褐色粘土ブロック
２層　焼土粒を含む赤褐色土層
３層　２層よりも多量の焼土を含む赤褐色土層
3a層　焼土ブロック層
3b層　粒子の細かい粘質の赤褐色土層
４層　粒状焼土を含み締まりの悪い赤褐色土層
５層　灰と炭化物を含む黒色土層

第２４図　１１号住居址・カマド実測図

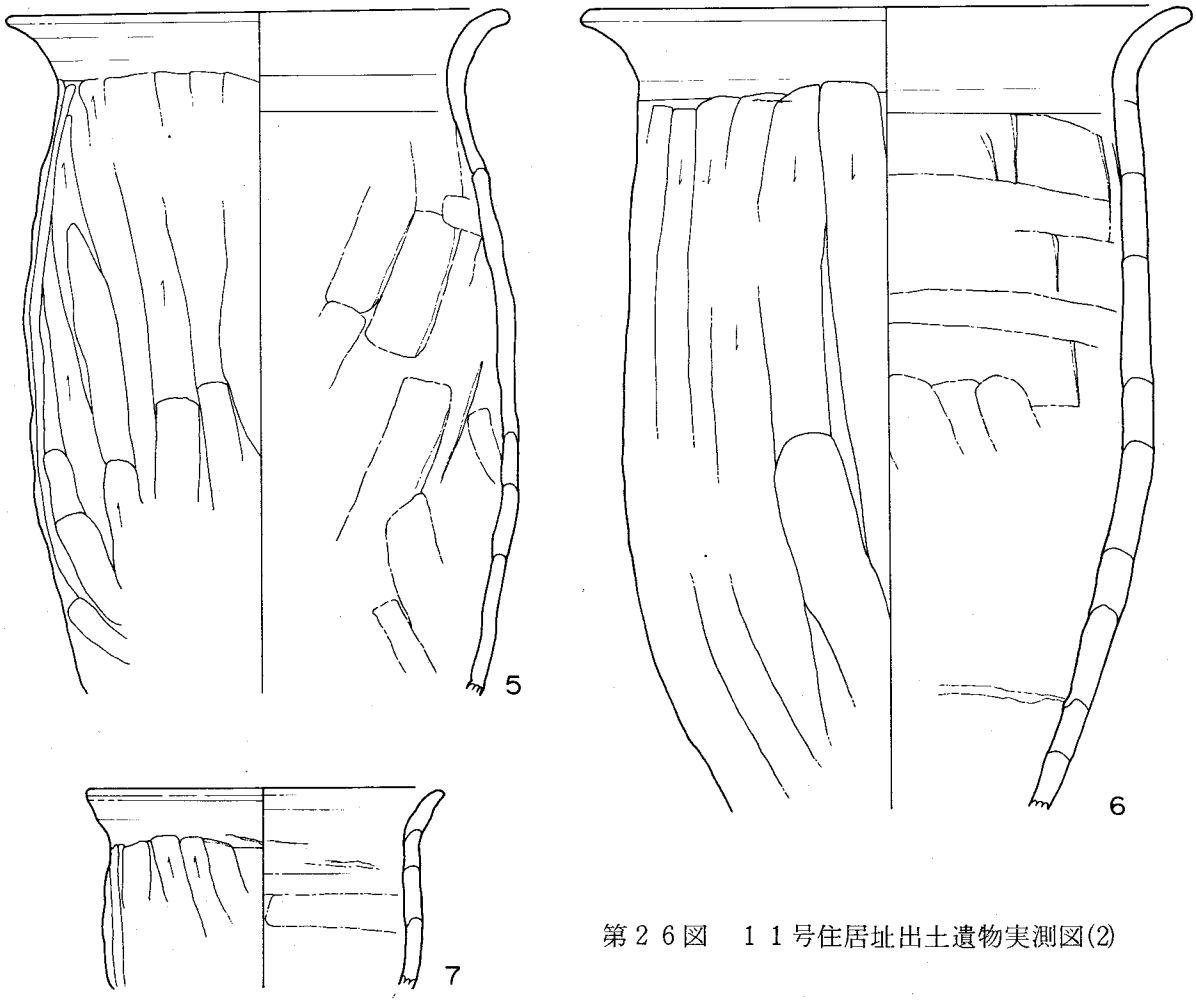


第２５図　１１号住居址出土遺物実測図(1)

不正形隅丸長方形を呈する。長軸4.70m、短軸4.45ｍで主軸はＮ－79°－Ｅにとる。壁高は北側40㎝、西側40㎝、南側35㎝、東側38㎝、80°の立ち上がりとなっている。掘り込みは40㎝、掘り方を入れて50㎝～63㎝になる。覆土は第１層では、二ツ岳軽石を含む黄褐色土、第２層は、ほぼ第１層と同じだが第１層より黒味を帯びている。第３層は微量の軽石を含むローム質の黄褐色土。第４層は、ロームを含む黄褐色土である。床面は北壁1/4から中央部1/2、南壁1/4、カマド寄り（東側）は、よく踏み固められていた。固い床の方に土器が多く、他の部分では自然石が多く検出された。柱穴は、北西コーナーにＰｉｔ１（25㎝×30㎝、深さ16㎝）のみ確認された。貯蔵穴はカマド右側に50㎝×70㎝、楕円形、深さ56㎝であった。周溝はカマド部分を除いてほぼ一周し、幅10㎝～17㎝、深さ4㎝～10㎝、南側のみ15㎝であった。

カマドは、東壁1/4の南側に壁を50㎝、馬蹄形に彫り込み構築されている。褐色粘質土を使用し、住居内に右袖65㎝、左袖40㎝の作り出しが確認された。左袖先端には、自然石（32㎝×13㎝、厚さ17.5㎝）が存在した。天井部と崩落した焼土から、長い期間使用されたことが想像される。火床は床面に置き、燃焼部には土器片と支脚用と思われる自然石が存在した。煙道部は80°傾斜になっている。

遺物は、長甕№1（口縁の径21.6㎝、器高29.3㎝）、№2（口縁20.1㎝、器高27.0㎝）、№3（口縁24.2㎝、器高31.9㎝）、甕№4（底部4.7㎝）、小型甕№5（口縁24.4㎝、器高11.8㎝）、長甕№6（口縁のみ14.2㎝）、高坏№7（口縁16.4㎝、坏部１／2）が検出された。掘り方は、壁近くでは浅く（5㎝～15㎝）中央部で深く（13㎝～23㎝）床面より掘り下げている。土器は固い床の部分に集中している。自然石が多量に堆積していることが特筆される。



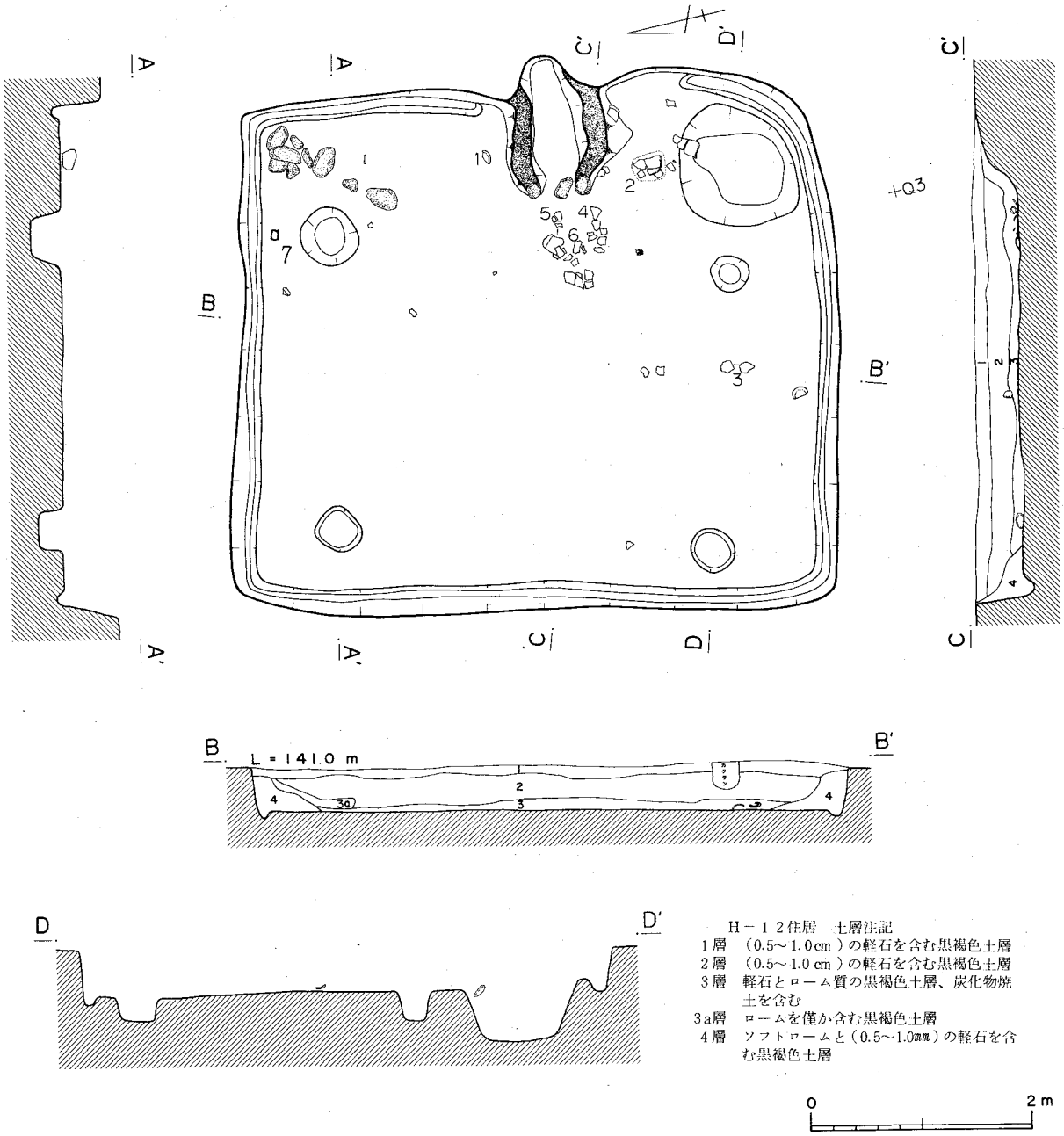
第２６図　１１号住居址出土遺物実測図(2)

１１号住居址出土遺物観察表

法量の( )は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	住居中央覆土	高坏	口：16.4 杯部：(4.7)	細砂粒混入 堅緻	黒色	体部は偏平で外稜を持ち、口縁部は直線的に立ち上がる。	外面：口縁部は横撫で、ひび割れが目立つ。口端部は丸味を持つ。 内面：丁寧な横撫、口縁と体部の境に段有り	坏部 1／2残
2	カマド前	小型甕	口：15.2 胴：15.1 高：(11.8)	砂粒混入 やや軟	黒褐色	口縁は緩く外半し胴部は丸味を持って下半で窄る。比較的均一な器厚である。	外面：かなり摩耗、口辺撫で。 内面：口縁部撫で。	口～胴 1／3弱
3	カマド前	甕 底部	底：4.7	白色鉱物砂粒を多量に混入 良	外　褐色 内　灰褐色	底部に厚みを持ち平底で胴部は僅か内湾気味に立つ。	外面：縦方向と水平方向篦削り。底部は平底よく整えられている。 内面：胴部は横篦撫で。底部は指撫で。	底3／5残
4	カマド前	甕	口：22.7 胴：20.0	白色砂粒混入 やや軟	赤褐色 内面浅黄橙	口縁部に最大径を持ち厚味があり外反する。口端部は丸く胴部緩やかに張む。胴上半部煤付着	外面：口縁部横撫で。中位に沈線有り、縦方向篦削り胴下半に横方向刷毛撫で。輪積痕有り。 内面：口縁から頸部まで横撫で。胴部横方向篦撫で。	底欠 胴2／3欠
5	カマド前	甕	口：20.1 胴：19.6	砂粒多量に混入 やや軟	外　橙 内　浅黄橙	胴部は僅かに張らみ輪積痕が歪みとなって残る。口縁外反する	外面：口縁部横撫で。　底→口縦方向篦削り 内面：口縁～頸部横撫で、胴部斜方向篦撫で	口縁～胴中位
6	カマド前	甕	口：24.2 胴：21.0	砂粒を多量に含む やや軟	外　赤褐色 内　黄橙	口縁部は外半し頸部には僅か稜を持つ。胴部は張らみを持ち中位で最大値を示す。	外面：口縁横撫胴縦方向篦削り一部煤付着 内面：口縁横撫で。胴上半横方向篦撫で中位は斜方向篦撫で、下半部には明瞭な輪積痕の段差が見える。	口1／3欠 底部欠 胴1／2欠
7	カマド前	小型長甕	口：14.2 胴：(12.7) 高：(8.0)	白色砂粒を多量に含む やや軟	黒褐色	口縁部は頸部より外反し口唇部で丸味を持つ。胴上半部に丸味を持ち輪積痕有り。	外面：口縁部横撫で、胴縦方向篦削り。 内面：全体横撫で、口縁部は丁寧に撫でられている。	胴上半部～口縁 2／3残

12号住居址



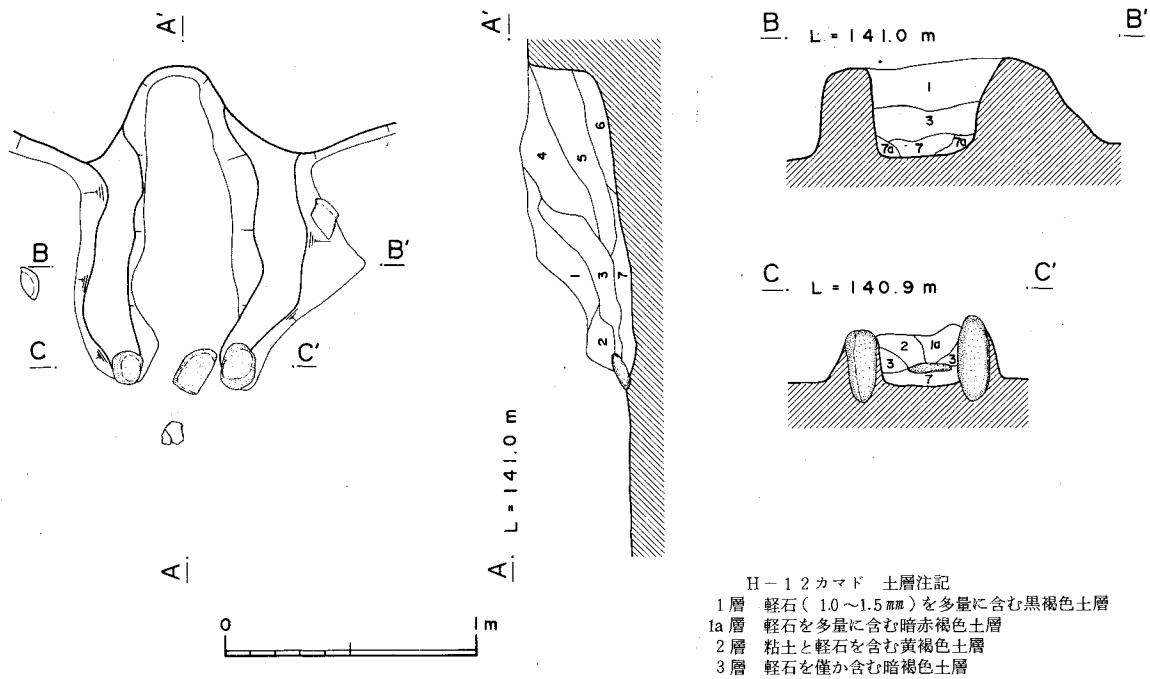
第27図　12号住居址実測図

本住居址は8号住居址の南方向5m、O－(12, 13)グリット、P－(12, 13)グリットに位置する。南東コーナーが曲線を描き不正形であるが隅丸長方形を呈する。北壁4.46m、西壁5.43m、南壁4.35m、東壁5.0mを測る。南北方向に長軸を持ち、主軸をN－83°－Eにとる。壁高は北側60cm、西側47cm、南側30cm、東側38cmを測り、掘り方床面を含めると55～95cmになる。壁の立ち上がりは、80°～85°の傾斜となっている。覆土は4層に分けられる。第1層は細かい(1～0.5cm)軽石を含む黒褐色土層がレンズ状に本住居址を埋没せしめている。第2層は第1層と同様に二ツ岳軽石を含む黄褐色土層、第3層軽石の粒子はさらに細かく(1～0.5mm)ローム質を含む黒褐色土層、第4層はソフトロームを含む黒褐色土層である。床面は全体を平坦によく整えている。中央部で僅かに高くなり、特にカマド前面、南東寄りの部分がよく固められ

て居る。周溝はカマド右袖60㎝手前を除き、ほぼ一周する。幅は10〜15㎝深さ7㎝、断面は「U」字状を呈している。貯蔵穴は南東コーナーに所在する。径（110×105㎝）、深さは54㎝、底面は60×65㎝、ほぼ円形である。土層断面を見ると、底面から10〜20㎝焼土が多量に堆積していた。柱穴は主柱穴と思われる4本が検出された。それぞれの規模はPit1（40×55）㎝、深さ21㎝、Pit2（38×40）㎝、深さ20㎝、Pit3(32×35)㎝、深さ26㎝、Pit4（53×52）㎝、深さ25㎝である。各柱穴間の距離はP1〜P2は3.42m、P2〜P3は2.5m、P3〜P4は3.5m、P4〜P1は2.61mで長方形を呈している。

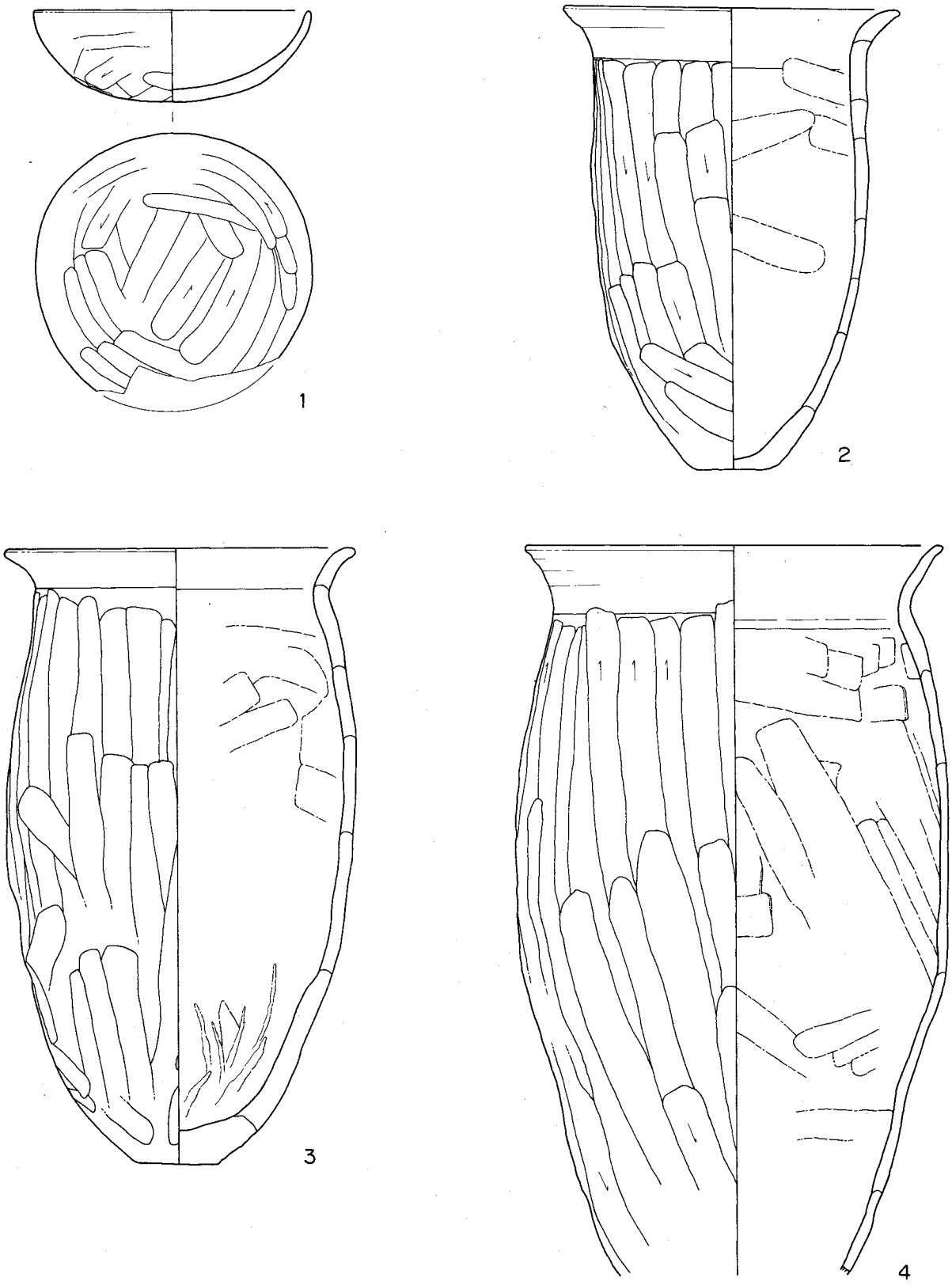
カマドは東壁中央に構築されている。主軸は住居長軸方向から75°程の角度を持っている。壁を半円形に10㎝掘り込み、褐色粘質土で袖部を築いている。左袖80㎝、右袖75㎝を住居内に作り出し、焚口には川原石を直立させ、カマドの補強をしている。焚口部両袖の間に存在した石は支脚に使用されたものと推定される。火床は床面に置き、よく赤褐色に焼けていた。煙道は火床から緩やかな傾斜で進み、煙出し直下で急激に70°ほどの傾斜で外部に導かれている。

遺物はカマド前面と貯蔵穴との間に集中して出土した。No.1，2，3は焚口部周辺に、No.5，6は貯蔵穴周辺に、No.4はカマド左側から出土した。すべて床面直上であった。掘り方状況を見ると全面的に凹凸が著しく、特に西壁際で著しい。中央部とカマド前面では11〜13㎝程の掘り込みであった。中央部西壁寄りでは、ブロック状焼土の埋め込みがみられた。貼り床は厚い所で30㎝、薄い所で5㎝であった。

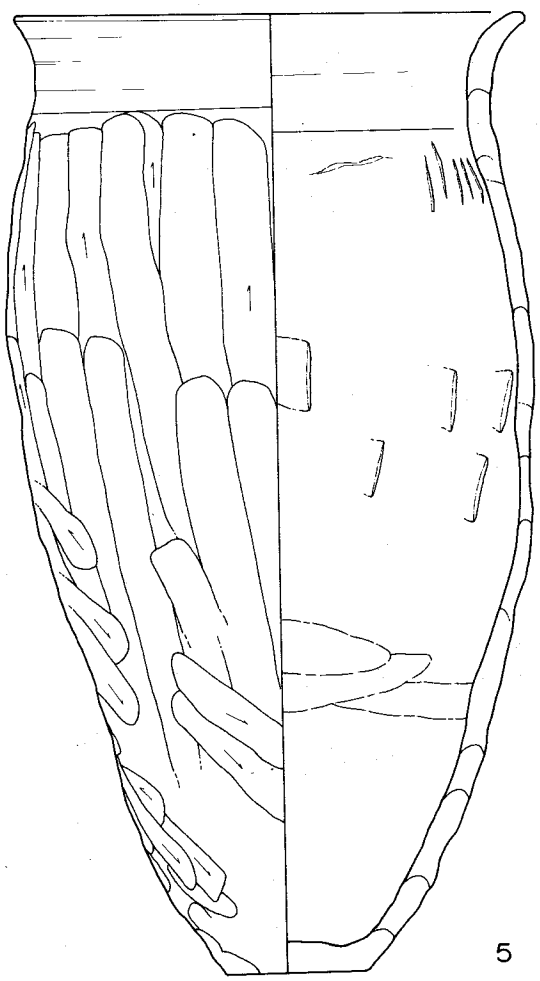


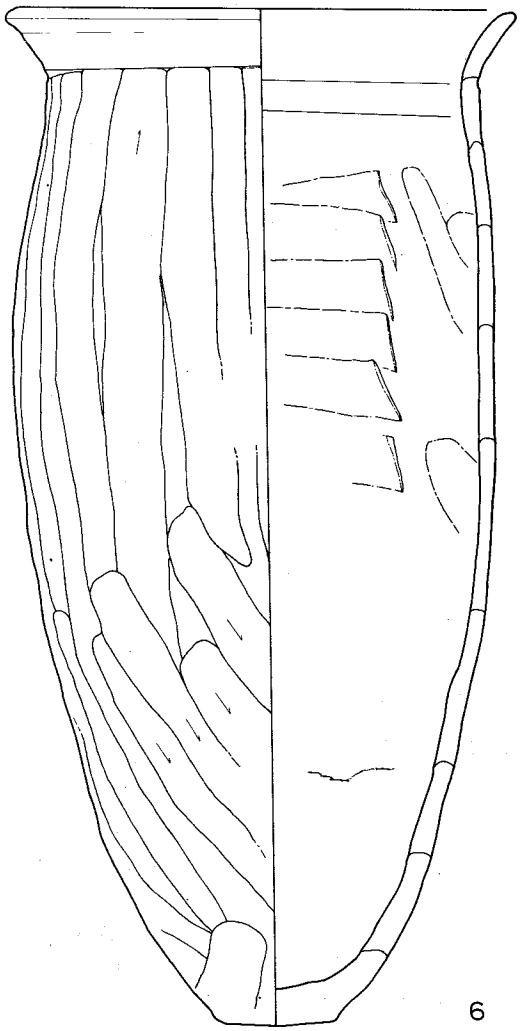
第28図　12号住居址カマド実測図

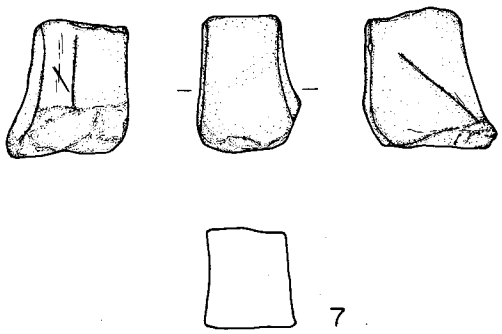
H－12カマド　土層注記
1層　軽石（1.0〜1.5㎜）を多量に含む黒褐色土層
1a層　軽石を多量に含む暗赤褐色土層
2層　粘土と軽石を含む黄褐色土層
3層　軽石を僅か含む暗褐色土層
4層　多量の焼土を含む赤褐色土層
5層　焼土ブロックと軽石を含む黒褐色土層
6層　焼土層（カマド床面）
7層　灰を含む暗赤褐色土層
7a層　粉状の焼土を含む暗褐色土層



第２９図　　１２号住居址出土遺物実測図(1)







第３０図　１２号住居址出土遺物実測図(2)

１２号住居址出土遺物観察表

法量の( )は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	カマド 左脇	坏	口：14.0 高：4.7	微砂粒混入 良	橙 外一部黒	底部は丸底で口縁部は内湾気味に立ち上がる。器厚な作り。	外面：右方向篦削り、煤付着。 内面：丁寧な撫で。	ほぼ完形
2	カマド 右脇 覆土	甕	口：16.8 胴：13.8 底：4.1 高：23.3	微砂粒多量に混入 良	橙	口縁と底部の一部欠、胴部は篦削りにより薄い	外面：口→底縦方向篦削り、口縁部内外面横撫で、底僅かな丸底。 内面：胴上半部に炭化物の付着が見られる。胴から底部篦調整。	完形

12 号住居址出土遺物観察表

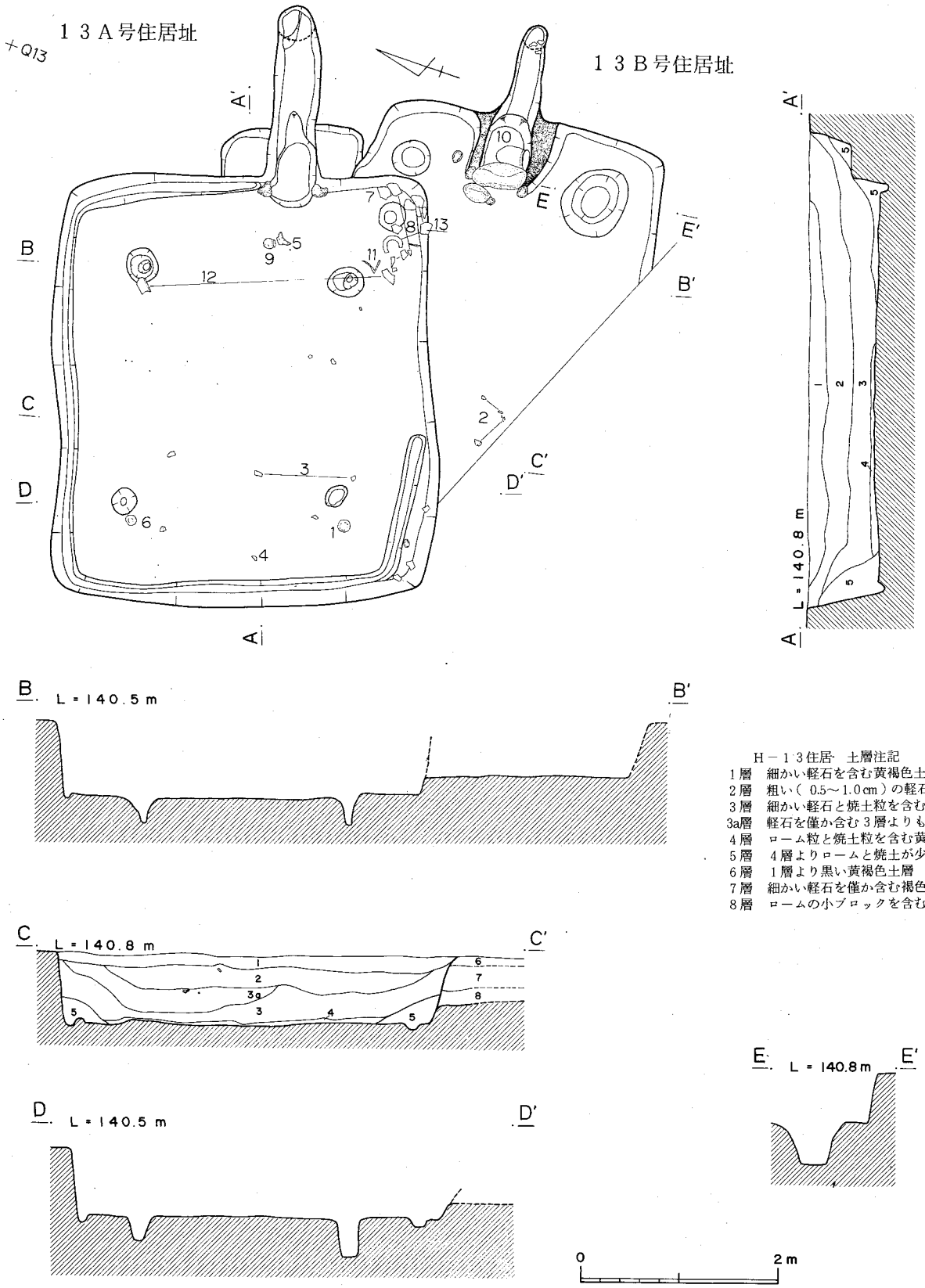
法量の( )は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
3	南壁付近	甕	口：17.7 胴：17.4 底：4.0 高：31.0	砂粒を多量に混入 やや軟	赤褐色	口縁部外反する。胴中位最大径と口縁部径がほぼ同じ。 底部は平底。	外面：口縁横撫で、胴縦方向篦削り、底部篦削り。輪積による表面歪有り。 内面：口縁～頸部横撫で。胴上半篦撫で、胴下半から底部篦磨き。	ほぼ完
4	カマド付近	甕	口：20.5 胴：21.7	2mm大の白色砂粒混入 やや軟	橙 1／2 褐色	口縁部は外反する。胴部は長胴形で歪みが見られる。ほぼ均一の厚さを持つ。	外面：口縁横撫で、胴縦方向篦削り、輪積痕明瞭。胴部に煤付着。 内面：口縁横撫　胴上半横篦撫 胴中位斜削撫	底部欠 胴 1／3欠
5	カマド付近	甕	口：20.2 胴：21.0 底：5.6 高：38.4	1mm大の白色砂粒混入 やや軟	橙 内　黄褐色	口縁は直状に立ち上がり短く外反する。胴部は歪み有り。胴下半部は締まる。	外面：口縁撫で。胴上半縦方向、下半部斜方向篦削。底部篦削りで平底。輪積痕有り。 内面：口縁部横撫で、胴部に篦あて痕あり。	胴1／4欠
6	カマド付近	甕	口：20.6 胴：19.0 底：4.9 高：40.4	細砂粒混入 やや軟	橙	口縁部は外反し胴部の脹らみが少なく歪みが見られる。底部は厚みを持ち平底である。	外面：口縁横撫で、胴上半部縦方向篦削り、下半部は斜方向篦削り。 内面：口縁部撫で、胴上半部は横篦撫で、輪積痕有り。	口、胴一部欠　ほぼ完
7	北壁付近覆土	砥石	長さ5.0cm　幅3.9cm　厚さ3.2cm　4面使用痕が見られ、その内2面が多用されている。一方の端が欠損している。 石質は粘板岩					151.6 g
8	覆土一括	土錘	幅1.0　孔径4～6mm　　褐色　3号住居址から出土したものより表面が丁寧に撫でられている。当遺跡の環境としてこのような土錘を使っての漁業が可能な場所として古利根川の存在が考えられる。重量7.940 g					

13 A 号住居址

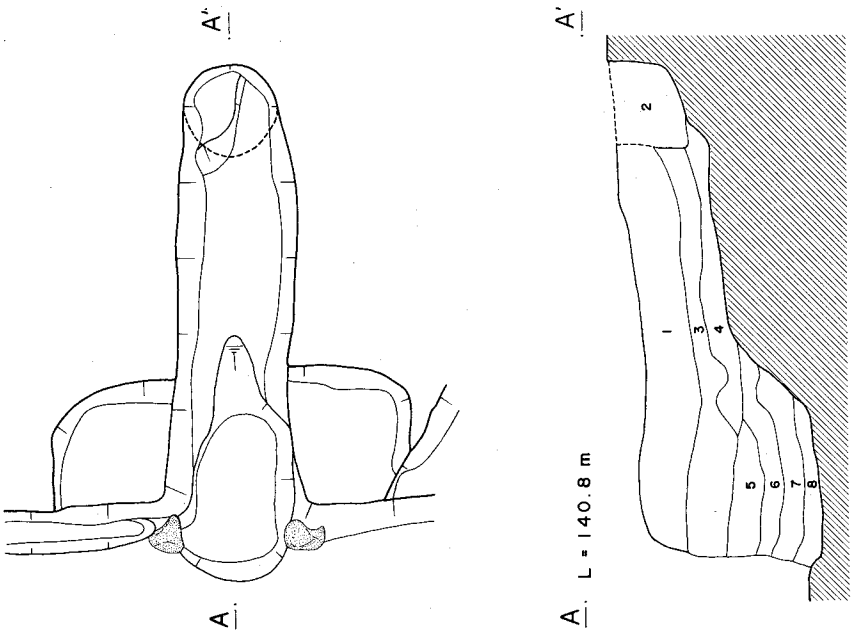
本住居址は、12号住居の南方向1.5m、Q－(11, 12, 13)グリット、R－(11, 12, 13)グリットに位置する。南壁は、13B住居と重複している。北壁4.24m、西壁3.76m、南壁4.33m、東壁3.74m。壁高は、北壁約70cm、西壁70cm、南壁は不明、東壁70cmを測る。長軸を東西方向に持つ。主軸をN－69°－Eにとり、隅丸長方形の整然とした平面形をしている。北壁と西壁で73°～75°、南壁と東壁ではほぼ90°の立ち上がりを見せている。掘り込みも当遺跡の中で最も深い住居でありローム層まで達し、確認面から床面まで69cm～71cmを測る。さらに掘り方床面まで含めると75cm以上となる。覆土は5層に分けられる。第1層は、細かい軽石を含む黄褐色土。第2層は、粗い二ツ岳軽石を含む黒褐色土層。第3層は、焼土粒と細かい軽石を含む黄褐色土層。第4層は、細かい僅かな軽石とローム粒・焼土粒を含む黄褐色土層。第5層は、第1次堆積層で軽石はほとんどなくロームと焼土粒を含む黄褐色土層である。床面は平坦に整えられているが比較的柔らかであった。柱穴は主柱穴4ケ所、Pit 1(27×26)cm深さ24cm、Pit 2(20×25)cm深さ42cm、Pit 3(30×37)cm深さ31cm、Pit 4(35×35)cm深さ26cm、P1～P2の距離は2.2m、P2～P3は2.2m、P3～P4は2.07m、P4～P1は2.38mを測る。貯蔵穴は南東コーナーに(27×29)cm深さ21cm、貯蔵穴としては小さい。周溝はカマド左袖脇から南西コーナーまで確認された。断面は「U」字状を呈し幅6cm～10cm深さ6.5cm～12cmを測る。

カマドは東壁中央部南寄りに構築されており遺存度は良好であった。東壁面を長さ1.98m幅60cm舌状に掘り込み両袖末端には川原石を埋め込み、焚口は東壁掘り込み地点に設置している。左袖石は(14×12)cm 高さ25cm右袖石は(13×16)cm高さ26cmを床面下に6～7cm埋め込んでいる。住居内に袖の作り出しは見られない。焚口を壁面に設置することで住居内が最大限に生かされている。燃焼部火床は床面より5cmほど掘り窪め、深さは焚口で73cm煙道部始まりが33cm煙出し直下で32cmを測った。煙道部まで約30°の傾斜で登り、煙道は緩やかで、煙出し直下まで約90cm計測できた。煙出しはおよそ60°の角度で確認面に到達する。本住居址の遺存状態は良好なので、カマドに付随する棚状施設の検出は、当時の生活状況を知る上で特筆すべきことと思う。左棚は南北40cm東西38cmこの両辺は弧を描いて結んでいる。右棚は南北36cm東西49cm隅丸長方形を呈し、左右の差はあるがほぼ対象と言える。



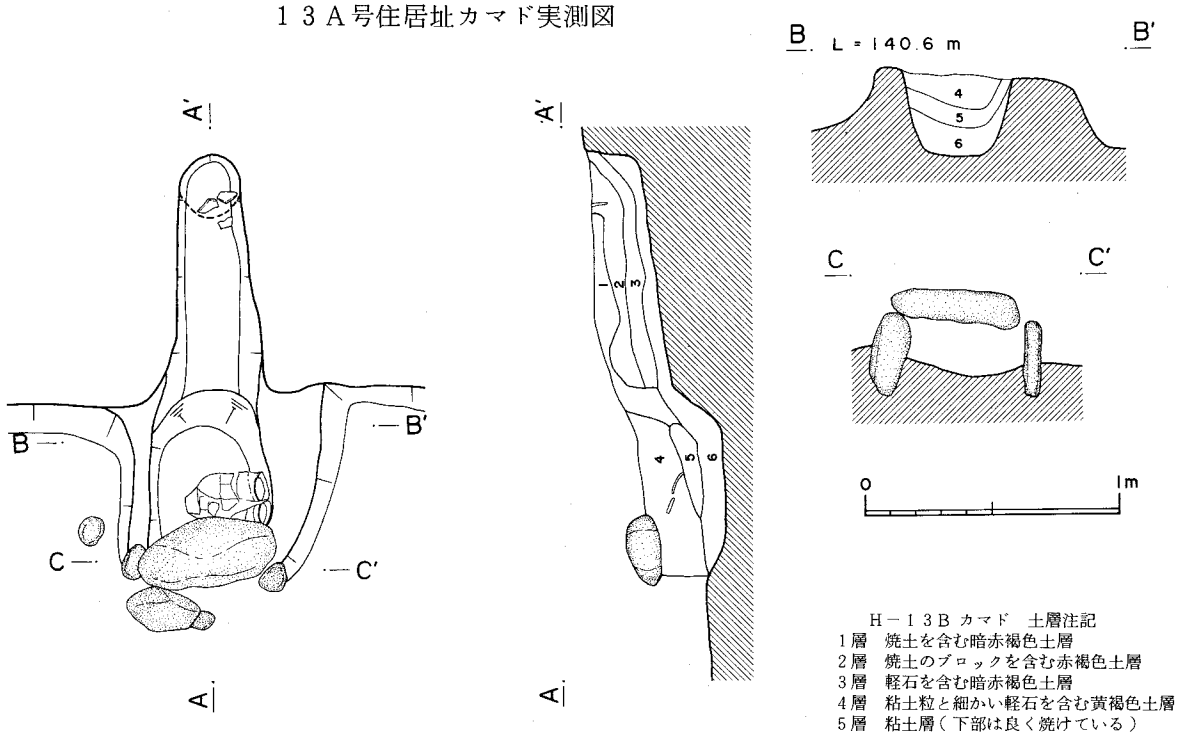
Ｈ－１３住居 土層注記
1層　細かい軽石を含む黄褐色土層
2層　粗い（ 0.5～1.0㎝ ）の軽石を含む黒褐色土層
3層　細かい軽石と焼土粒を含む黄褐色土層
3a層　軽石を僅か含む３層よりも黒い褐色土層
4層　ローム粒と焼土粒を含む黄褐色土層
5層　４層よりロームと焼土が少ない黄褐色土層
6層　１層より黒い黄褐色土層
7層　細かい軽石を僅か含む褐色土層
8層　ロームの小ブロックを含む黄褐色土層

第３１図　１３Ａ・１３Ｂ号住居址実測図



H－１３Ａカマド　土層注記
1層　ロームブロックと軽石を含む褐色土層
2層　焼土粒と粘土を含む赤褐色土層（煙道）
3層　（５㎜）以下の軽石を含む黄褐色土層
4層　白色の灰と焼土粒を含む黒褐色土層
5層　軽石を含む黒褐色土層
6層　粒状粘土を含む黄褐色土層
7層　焼土粒を含む暗赤褐色土層
8層　灰と焼土の混在する赤褐色土層

１３Ａ号住居址カマド実測図

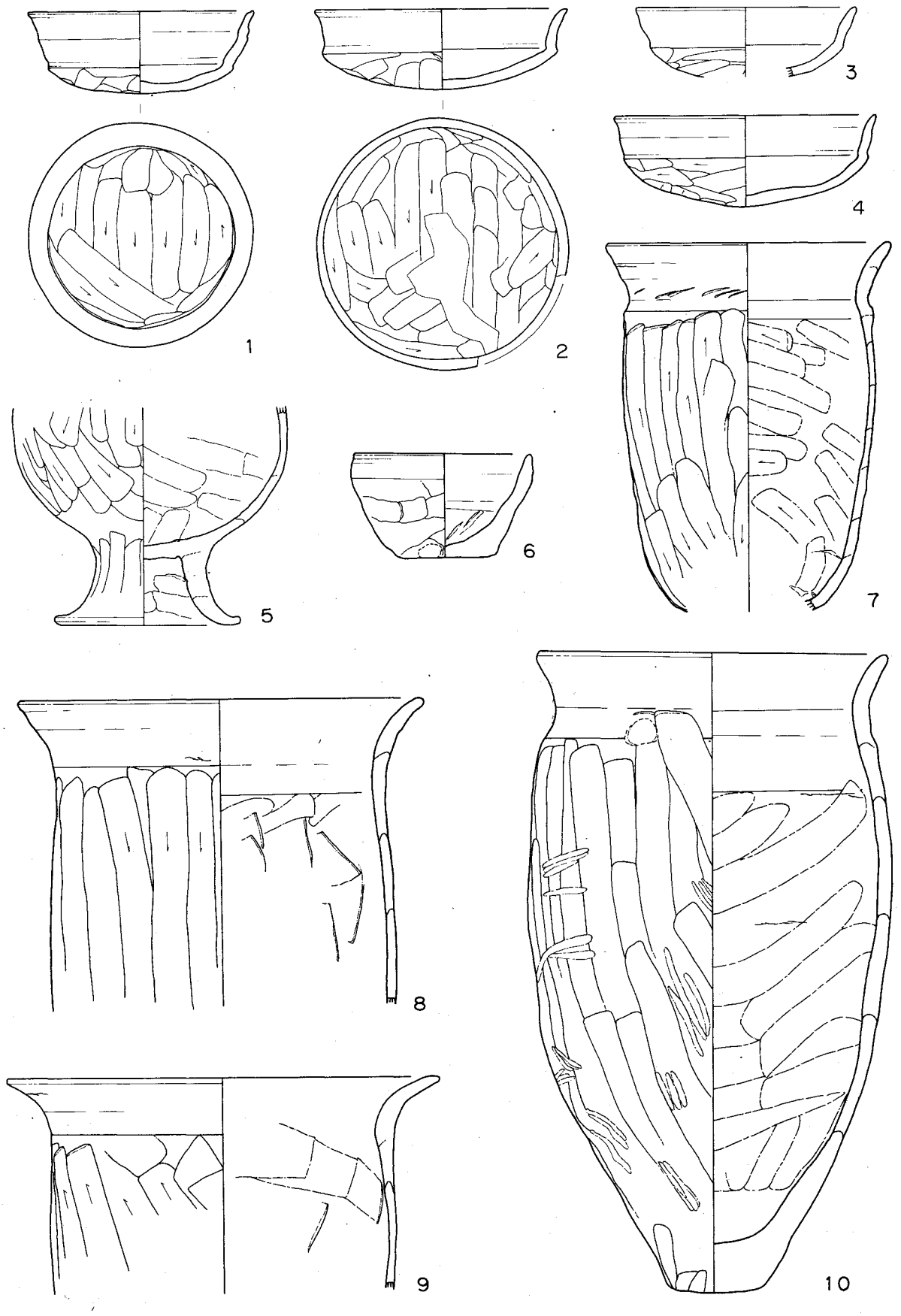


H－１３Ｂ カマド　土層注記
1層　焼土を含む暗赤褐色土層
2層　焼土のブロックを含む赤褐色土層
3層　軽石を含む暗赤褐色土層
4層　粘土粒と細かい軽石を含む黄褐色土層
5層　粘土層（下部は良く焼けている）
6層　灰を含む黒褐色土層

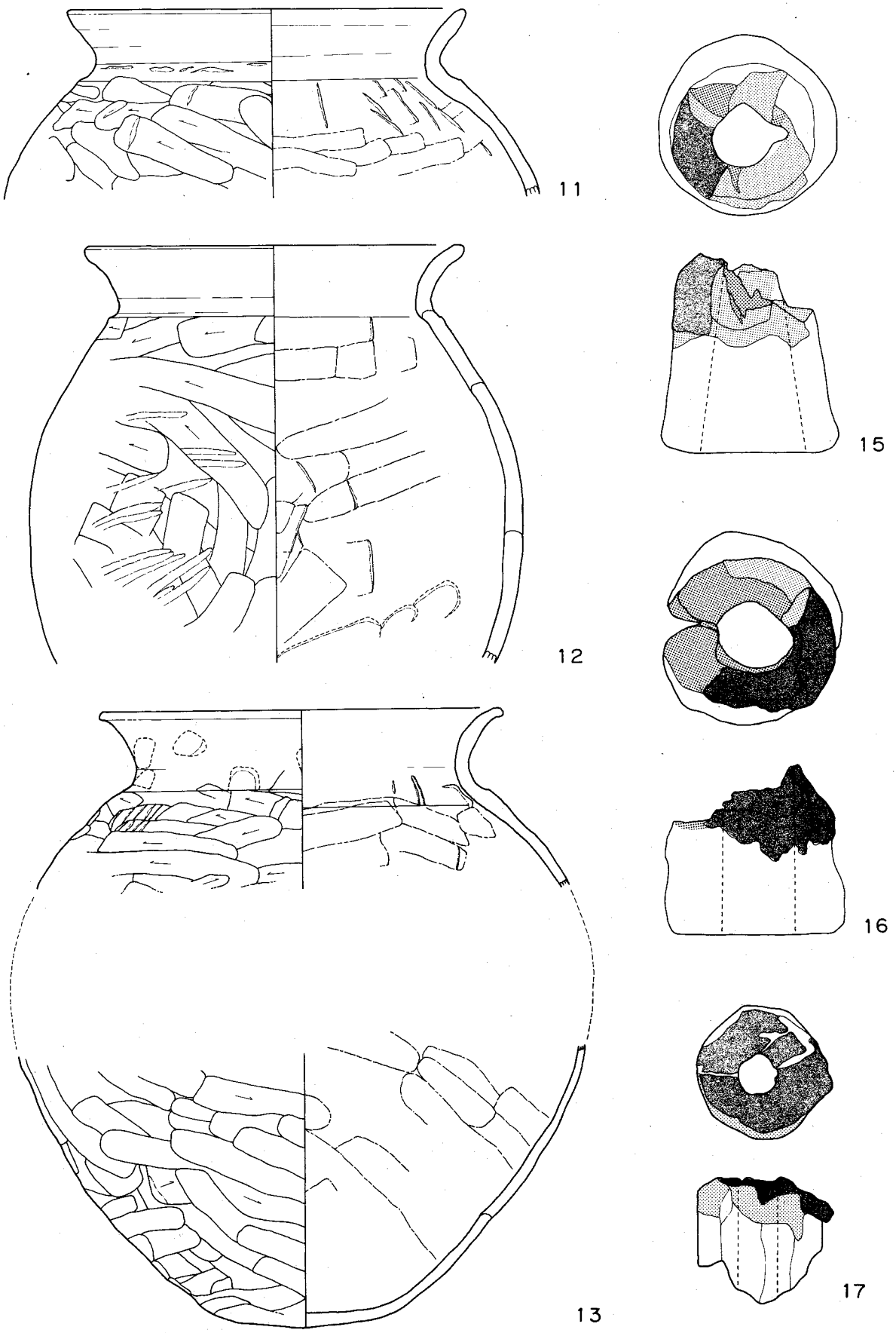
第３２図　１３Ａ・１３Ｂ号住居址カマド実測図

深さは確認面から約２０～２６㎝あるが底面は平坦に整えられ、レベルも左右ほぼ同一となっている。右側の棚上には縄文時代（前期）の土器片が密着して出土した。当初このカマドを調査するに当たり棚状遺構に気付かず、トンネル状のカマドと考えていた事は調査データーの不足を免れない。

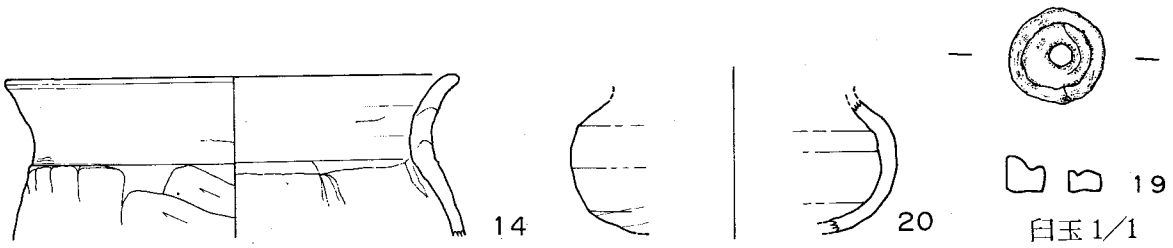
遺物は住居址の全面から出土していたが、特に南東コーナーから多量の土器が検出された。長甕№（２，３，１１）小型甕№１、壺№（４，５，６）坏№（７，８，１２）台付壺№１４、羽口３点、鉄滓１点、滑石製臼玉１点等の出土がみられた。掘り方は当遺跡で黄色のローム層を切っている唯一の住居である。比較的平坦に掘られており、ロームと黒褐色土と微細軽石の混土で床面全体を貼っている。貼り床は１０～１５㎝であった。

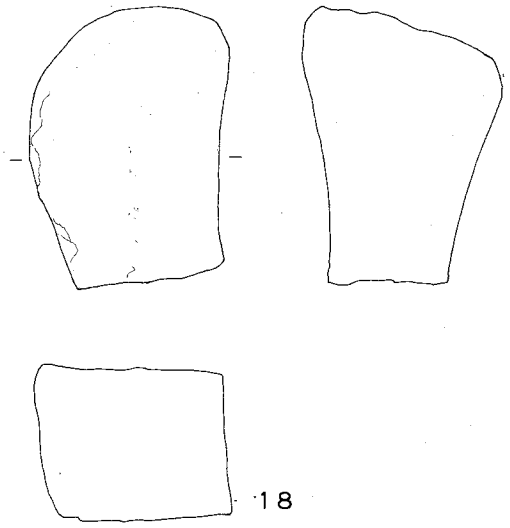


第３３図　１３Ａ・１３Ｂ号住居址出土遺物実測図(1)



第３４図　１３Ａ・１３Ｂ号住居址出土遺物実測図(2)





第３５図　１３Ａ・１３Ｂ号住居址出土遺物実測図(3)

１３Ｂ号住居址

本住居址は調査区南東隅に位置する。北壁は１３Ａ号住居址に切られ、西壁・南壁は調査区域外のため全容は不明であるが２２号住居址を僅か小規模にした位と推定される。東壁の長さ3.05ｍを測り隅丸長方形を呈する。主軸はＮ－81°－Ｅにとる。覆土は４層に分けられ第１層は細かい（１㎜程度）軽石を含む黄褐色土層、第２層は軽石の量が少ない褐色土層、第３層はロームの小ブロックを含み軽石を極僅か含む黄褐色土層、第４層は床面直上の第１次堆積層で第３層と殆ど同じである。床面は平担によく踏み固められており、カマド前面においては覆土が容易に剥離出来るほどであった。貯蔵穴はカマド右袖に隣接されており、長軸７４㎝、短軸６２㎝、深さ42㎝、底面33㎝×25㎝の楕円形を呈している。柱穴は２本検出された。Ｐｉｔ１（40×36）㎝深さ23㎝、Ｐｉｔ２（20×21）㎝深さ12㎝、以上のように柱穴としては浅い。

カマドは東壁やや北寄りに構築されている。壁を幅42㎝長さ93㎝に掘り込んでいる。左袖幅７㎝長さ47㎝右袖付け根部分で23㎝長さ52㎝を住居内に作り出している。天井部は崩落して残存していないが、袖末端部には川原石で袖を補強している。袖石の上に鳥居状に組まれた偏平な自然石（55×27）㎝、厚さ12㎝が架けられた状態で出土した。壁内面は赤褐色によく焼け火床は床面より20㎝掘り窪めてあった。火床から煙道へは38°の傾斜で上がり、煙道部は緩い傾斜が続き煙出し直下70°で外部へ進む。使用途中の長甕が燃焼部に落下した状況で検出された（№10）。

遺物としては全体に小破片が散在していた。掘り方は５㎝～10㎝の貼り床が確認された。

１３Ａ・１３Ｂ号住居址出土遺物観察表

法量の( )は推定値

番号	出土位置	種類	法量(㎝)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	南西コーナー覆土	坏	ロ：12.0 高：4.4	微砂粒混入 良	橙 底　黒褐色	底部は偏平にして口縁部は長く三段の稜を持ち、口端部は外反する。	外面：口縁部中位に段を有し稜を持つ、口縁部横撫で、底部篦削り。 内面：口端部に細い摘みが見られる。内面全体に撫で、凹凸がある。５㎜の礫の抜け痕有り。	完形
2	１３Ｂ号中央	坏	ロ：13.3 高：4.4	赤褐色微砂粒混入 堅緻	褐色	口縁部は緩やかに外反し口端部で強く外反する。底部やや偏平	外面：口縁部横撫で、底部は篦削り、篦削りによる粘土付着。 内面：口縁部横撫で、体部～底部は撫で。	ほぼ完形
3	１３Ａ号中央覆土	坏	ロ：(11.6) 高：(3.7)	微砂粒を僅か含む 堅緻	赤橙	口縁部は緩やかに外反する。外稜はやや不明瞭。	外面：口縁部横撫で、底部篦削り、摩耗が激しく不明瞭。 内面：丁寧な撫で、口縁部は横撫で。	1／5 残
4	１３Ａ号西壁覆土	坏	ロ：(13.8) 高：4.9	砂粒を含む 堅緻	黄褐色	口縁部は直線的に立ち口唇部で外反する。底部はやや偏平で肥厚を呈す。	外面：口縁部横撫で、底部は篦削り。煤付着篦削りによる粘土付着。 内面：丁寧な撫で、凹凸有り。	1／3 弱

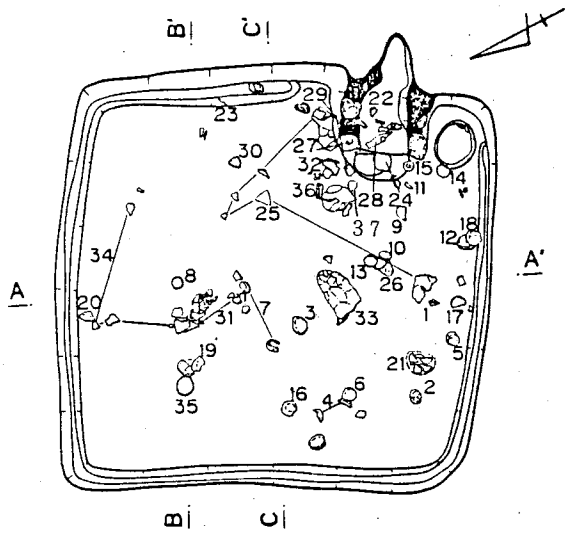
13A・13B号 住居址出土遺物観察表

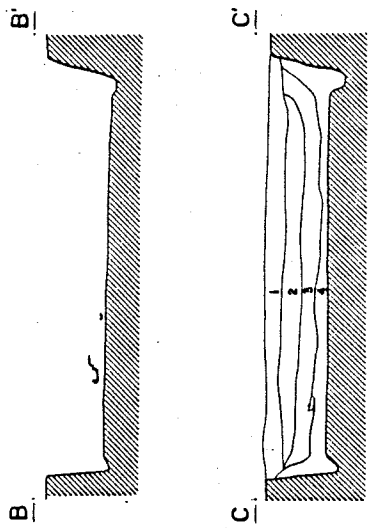
法量の( )は推定値

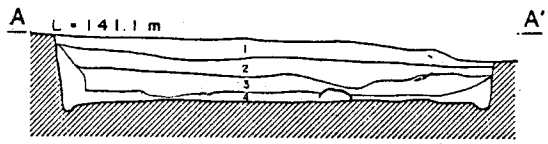
番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
5	13A カマド前	台付甕	体：(14.6) 脚：(6.8)	微砂粒混入 堅緻	内 浅黄 外 橙	胴部は球形を呈し脚部は外傾しながら開く。	外面：裾部は「ハ」字状に広がる。篦削り。 内面：篦削り。	胴～脚部 1／3 残
6	北西コーナー	浅鉢 手捏ね土器	口： 9.2 胴： 9.4 底： 5.2 高： 5.5	微砂粒多量に混入 5～6mmの軽石粒を含む 良	黒褐色	胴部は簡単に篦撫で、底部平底で良く整っている。口縁部は尖りその他の部分は器厚な事から特殊用途の土器と思われる。	外面：口縁部横撫で、ひび割れが目立つ。 内面：口縁部横撫で、内外面煤付着。	完形
7	南東コーナー	小型甕	口： 14.8 胴： 13.4 高：(19.5)	1～2mmの白色砂粒混入 良	にぶい赤褐色	口縁は直線的に外反。胴下半部に張らみを持ち、頸部は横撫でによる稜を有し、胴部に輪積痕	外面：口縁横撫、頸部篦あて痕、胴部上・中位は上方向、下半部は下方向篦削り 内面：口縁左回転撫で、胴部篦削り篦撫で。	胴 1／2 底部欠
8	南東コーナー	甕	口： 21.8 胴：(18.3)	2mmの細砂粒混入 良	浅黄橙	口縁部に最大径を持ち外反する口端部は丸い。輪積痕明瞭。	外面：口縁横撫で、胴は口から底方向へ篦削り。一部に煤付着。 内面：口縁から頸部横撫、胴部篦撫篦あて痕	口縁部1／2 胴部 1／4 欠
9	13A カマド前覆土	甕	口：(23.0) 胴：(18.0)	細砂粒多量に混入 堅緻	暗褐色	口縁は強く外反し平坦面を持つ。頸部僅か稜有り。胴部は直線的	外面：頸部指押底→口方向篦削口縁輪積痕 内面：口縁横撫で、胴部篦撫で。	口縁～胴上半部1／2残
10	13B カマド掛部	甕	口： 18.0 胴： 19.1 底： 4.8 高： 34.0	微砂粒混入 堅緻	黒褐色 内面浅黄橙	口縁部は短く外反する。胴部は緩やかに張らみを持ち最大径は胴中位に有る。底部はやや丸味を持つ平底。	外面：口縁横撫、胴は口→底方向へ篦削り後篦磨き。底～頸迄黒色。指頭圧痕有り 内面：口縁から頸部まで横撫で。胴下半迄篦撫で。胴下半から底部は撫で。	完 13B竈内より出土
11	南東コーナー	甕	口：(20.8)	2mm砂粒雲母混入 堅緻	外 褐色 内 黒	口縁「く」字状に外反する。ほぼ均一した厚みで、口端部は厚い	外面：口縁横撫、頸に篦あて痕とその下方に撫でによる外稜を持つ。 内面：口縁横撫。頸部内稜有り。胴斜方向篦撫で篦あて痕明瞭。	口～胴上半 1／4
12	13A 床直	甕	口：(19.8) 胴：(26.0) 頸： 16.5	砂礫混入 堅緻	褐色	口縁部は「く」字状に外反する胴中位に最大径を持つ。口端部は丸い。	外面：口縁横撫で、頸稜有り。篦あて痕明瞭胴部は斜方向篦削り痕。 内面：口縁横撫胴上半篦撫下半部指撫で痕	口 1／4 残 胴 1／5 残
13	南壁覆土	甕	口： 21.0 胴：(30.0) 底： 9.4 高：(32.6)	細砂粒混入 堅緻	褐色	頸部から口縁に厚みを持つ。底部は偏平で最大径を胴中央部に持ち球形を呈す。口端部は丸い	外面：口縁横撫で、指圧痕、肩から胴部は横方向篦削り、下半部は斜方向篦削り。 内面：口縁横撫で、胴下半部篦削り。黒色処理。	胴中央部欠
14	カマド一括	甕	口： 18.3	砂粒混入 やや軟	褐色	口縁は外反し頸部に撫でによる稜を有し胴部はやや丸味を持つ	外面：口縁部横撫で、胴部篦削り。煤付着 内面：口縁～頸部横撫で、胴篦撫で、煤付着	口 2／3 残
15	覆土・南西	羽口	先端部 外径6.0内径3.0尻部外径9.0内径5.5全長10.7砂流を多量に含む 軟 褐色 円錐形を呈す。先端部は細く尻部の口径大、篦で良く撫でられている。内面篦撫で、先端部 1／4 欠 重量504.2g					
16	覆土・南西	羽口	先端部 外径8.0内径3.0尻部外径10.0内径5.0全長8.8砂流を含む 軟 浅黄褐色 円錐形を呈し口径の大きな羽口である。先端部は気包化したらSiO_2によるガラス質に変化している。内面篦撫で重量418.5g					
17	覆土・南西	羽口	先端部 外径6.3内径2.2尻部外径7.0内径2.4全長6.8砂流を含む 軟 浅黄褐色 円筒形を呈し先端部にガラス質の(灼熱)付着が見られる。外面は9角形の篦撫で整形 孔内は篦撫で 重量174.2g 上半部のみ残					
18	北東コーナー	砥石	長辺：11.0 短辺：7.5 厚さ：6.7 重量660.6g 安山岩(浅間の火山弾) 4面使用、その内3面が多用されたことが認められる。一端部欠損する。					
19	覆土一括	臼玉	直径1.1cm 3～4mmを測る。重量1,042g 滑石製上面では孔と端の間に窪みが見られる。 完形					
20	覆土中央	短頸壺	胴：(13.0)	微細砂粒混入 堅緻	青灰色	頸で締まり肩に張りを持つ、肩部はやや薄く口縁～底部は器厚	外面：胴下部は横方向篦削りを施す。篦描き沈線2状。内面回転撫で。	胴 1／4 残

15 号住居址

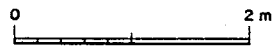
本住居址は14号住居址の北50cmにあり、N－9グリット、O－(9, 10)グリット、P－10グリットに位置する。北壁3.58m、西壁3.56m、南壁3.50m、東壁3.66mを測り、主軸をN－30° －Eにとり、整然とした隅丸方形を呈している。掘り込みは北側で83cm、西側53cm、南側34cm、東側54cmを測る。本調査区域において、古墳時代後期の住居址の中で最も出土遺物の多い住居である。覆土の第1層は細かい軽石を含む黄褐色土層、第2層は1層よりも粗い軽石を含む黒褐色土層である。第3層は微細軽石と焼土粒を含む黒褐色土層、第4層はソフトロームを含む1次堆積層である。床面は黄色砂質層まで掘り込まれており、凹凸はあるが良く踏み固められている。特にカマド前面においては覆土が容易に剥離できるほどであった。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴はカマド右脇南東コーナーに(45×43)cm、深さ11.5cm、楕円形を呈していた。土器が2点出土している。周溝はカマド左袖際から貯蔵穴脇までほぼ一周している。幅7cm～15cm、深さ5cm前後、断面は「U」字状を呈している。

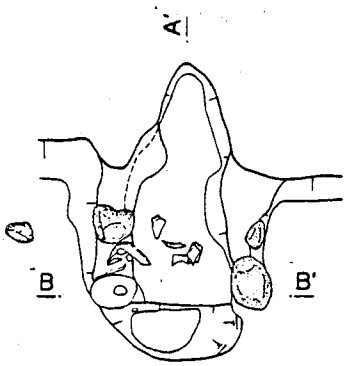


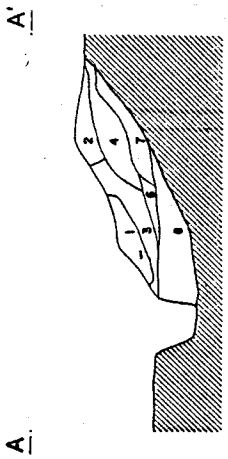




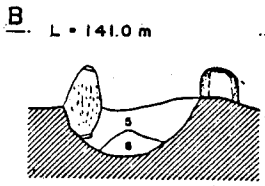
Ｈ－１５住居　土層注記
1層　（１～５㎜）の軽石を含む黄褐色土層
2層　（0.5～1.0cm）の軽石を多く含む黒褐色土層
3層　微細の軽石と焼土粒を含む黒褐色土層
4層　ソフトロームと軽石を僅か含む一時堆積土



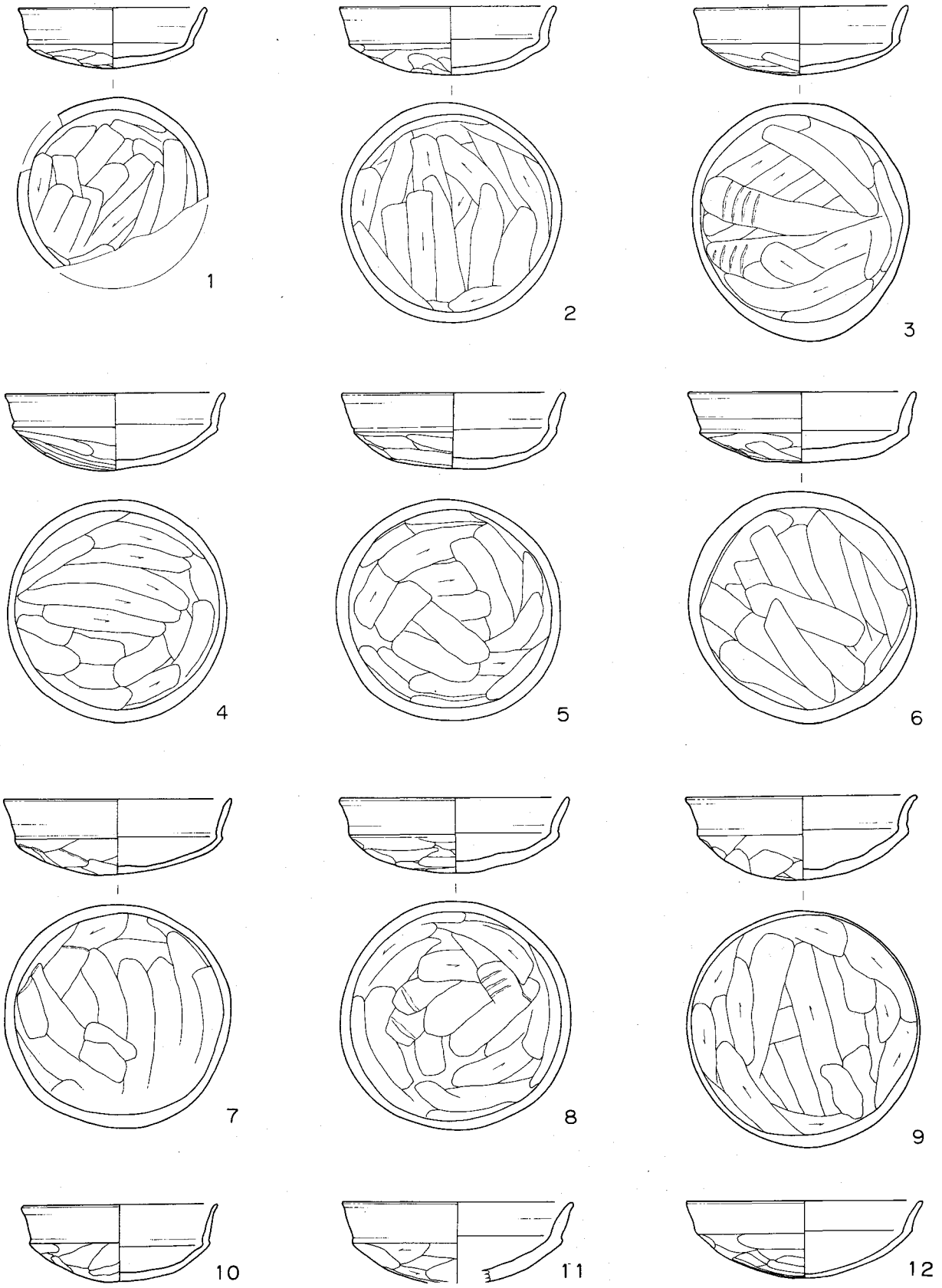




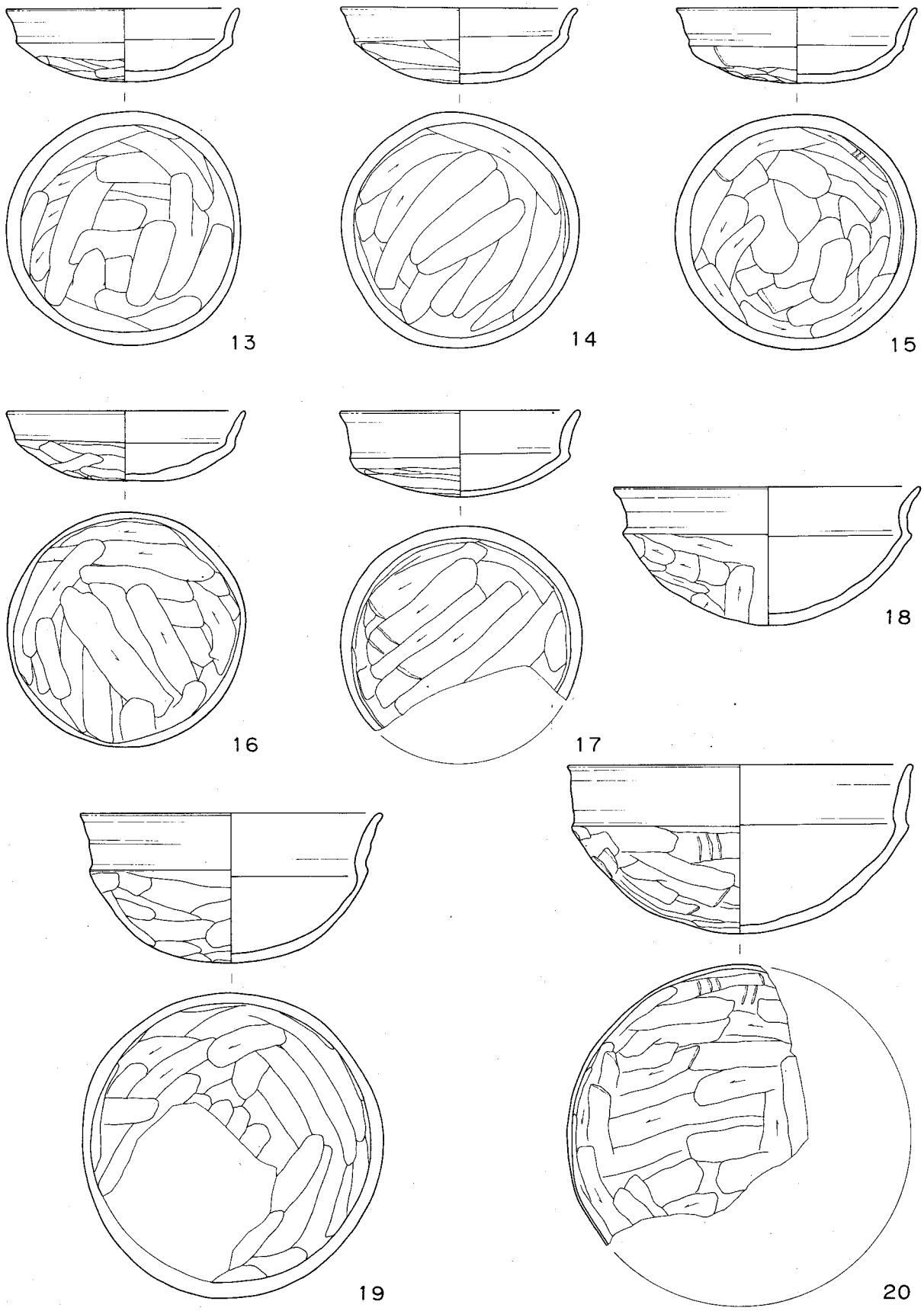
Ｈ－１５カマド　土層注記
1層　粗い（0.5～1.0cm）の軽石を含む黄褐色土層
2層　軽石と粘土を含む褐色土層
3層　粒状焼土と粘土、軽石を含む暗赤褐色土層
4層　軽石とローム粒を含む黄褐色土層
5層　灰白色の灰層
6層　灰、焼土、軽石を含む黒褐色土層
7層　ソフトロームと僅かな軽石と灰を含む褐色土層
8層　ロームブロックで堅く締まった赤褐色土層（火床部）



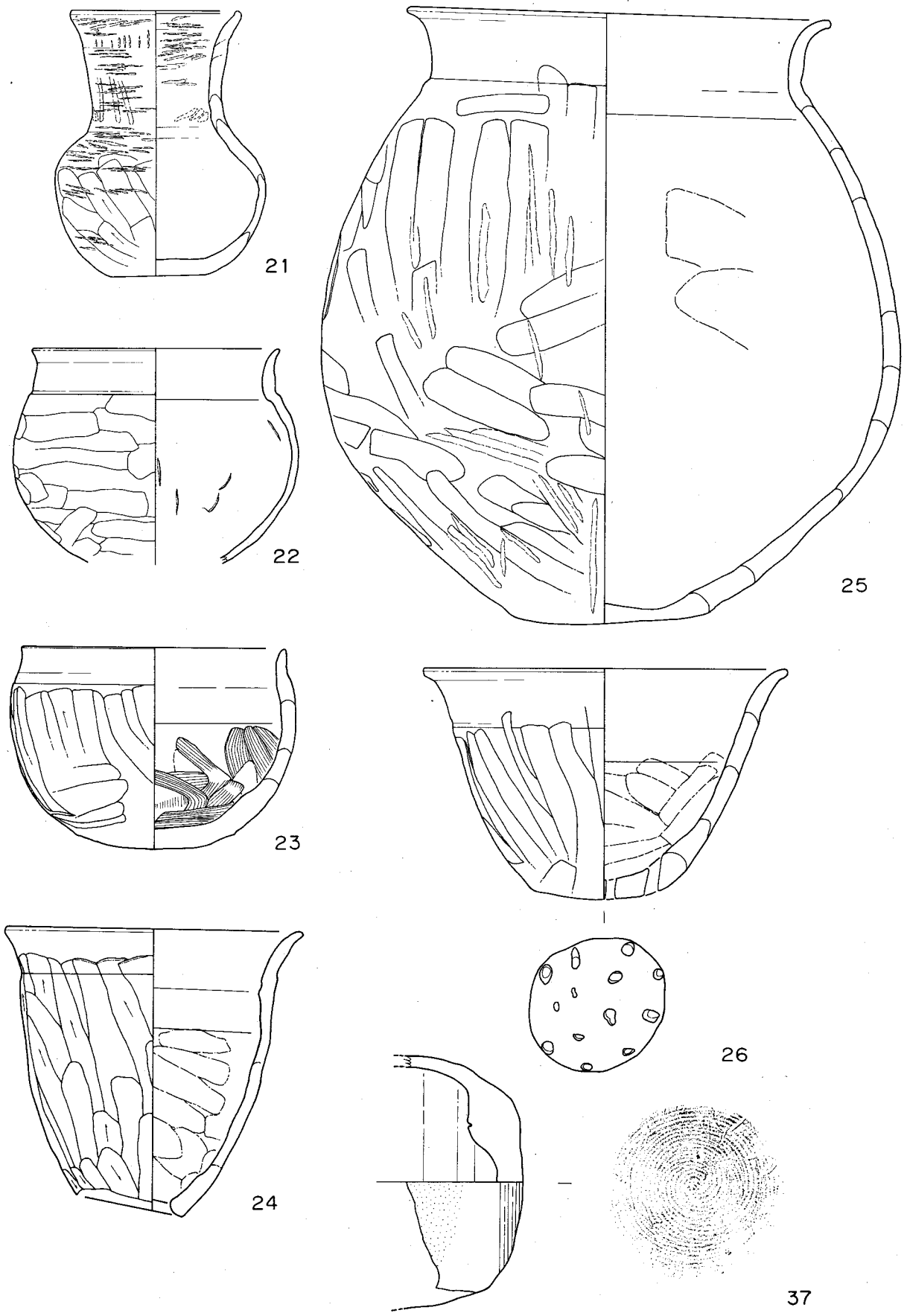
第３６図　　１５号住居址カマド実測図



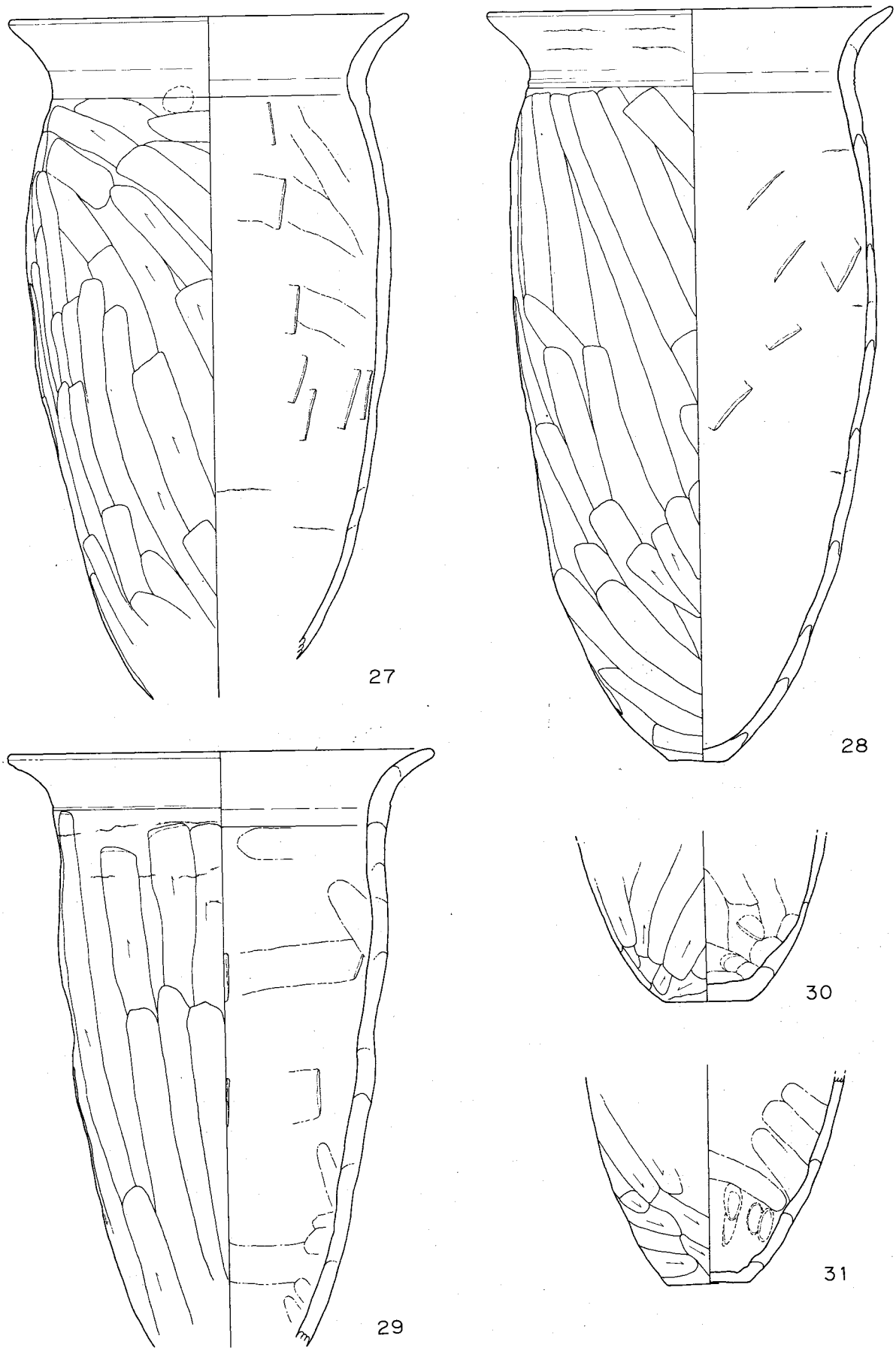
第３７図　１５号住居址出土遺物実測図(1)



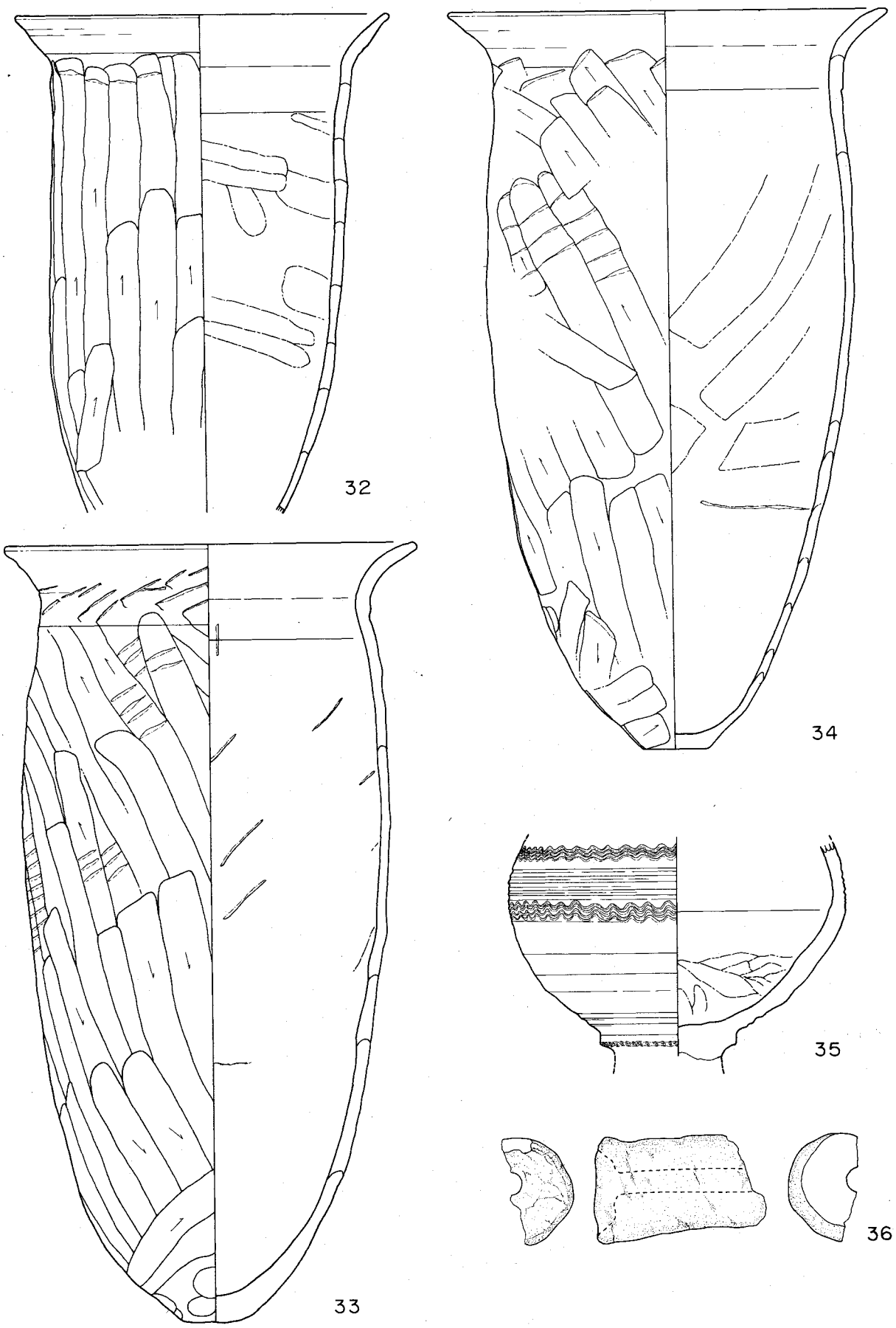
第３８図　１５号住居址出土遺物実測図(2)



第３９図　１５号住居址出土遺物実測図(3)



第４０図　１５号住居址出土遺物実測図(4)



第４１図　１５号住居址出土遺物実測図(5)

カマドは、東壁の南東コーナーよりに幅85㎝、奥行き73㎝、半楕円形に壁を掘り込み最初は袖に川原石（左15㎝×17㎝×34㎝、右12㎝×7㎝×33㎝）を使って構築した後に、左袖には長甕の半載したものと、ほぼ完形の物が存在し、器高は35㎝であった。右袖には自然石（16㎝×15㎝×30㎝）を使用している。焚口には灰掻き穴（62㎝×23㎝、深さ20㎝）が検出された。長甕及び川原石の回りは褐色粘質土でよく固められていた。天井部は崩落して検出されなかった。火床は床面に置き、燃焼部は僅かに窪んでいた。カマド全長は1.05ｍを測る。煙道は緩い傾斜で確認面まで続いている。（約40°）

遺物は、住居内全域から出土している。特にカマド前面には多量に集中し幾重にも重なりあった状態であった。坏だけで17点（№1～17）、長甕8点（№27～34）、長頸壺1点№21、椀3点（№18～20）、甑2点（№24，26）、その他に丸胴甕、鉢、瓮、横瓶、羽口、北西コーナーには細長い川原石16点などが出土している。掘り方は、カマド前面より南側では深く、他の部分は比較的浅めであるが、全体としては荒掘りの時、中央を高く残す工法が認められる。

15号住居址出土遺物観察表

法量の（ ）は推定値

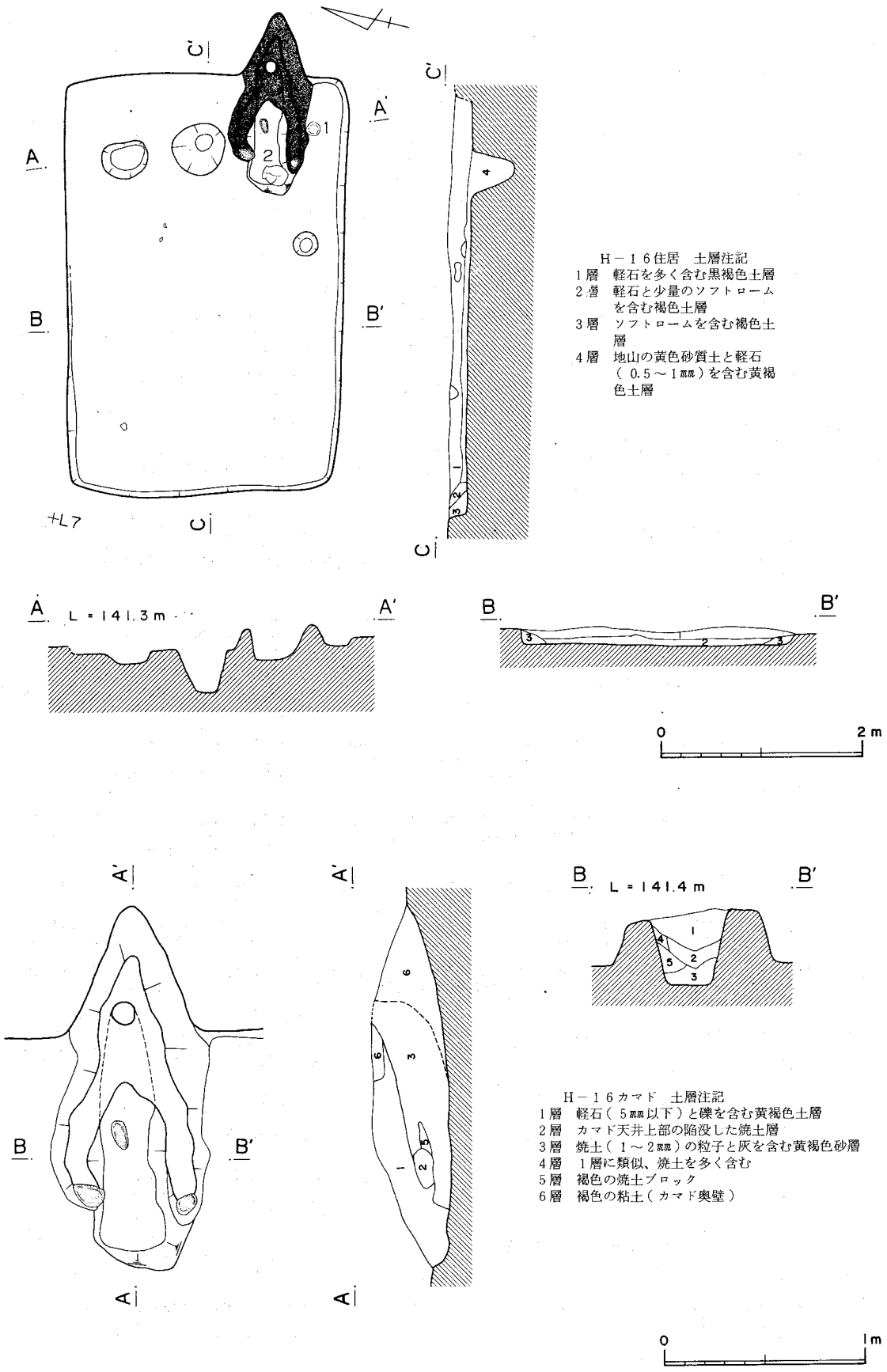
番号	出土位置	種類	法量(㎝)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	南壁より	坏	口：9.8 高：3.2	黒色微砂粒混入 堅緻	橙	口縁部は内傾しながら開く、底部中央が厚くなる。体部と口縁部の境に稜を有する。	外面：口縁部横撫で、体部篦削り後篦撫で。底部全体に煤付着。 内面：荒い撫で、凹凸有り。	口2／3残
2	南西コーナー覆土	坏	口：11.4 高：3.6	微砂粒混入 堅緻	黄橙	口縁は外反しながら開く、ほぼ均一の器厚。外稜は不明瞭。	外面：口縁撫底篦削り後篦撫底1／3煤付着 内面：全体に丁寧な撫で有り。僅か凹凸有り	完
3	中央部	坏	口：11.1 高：3.7	黒色細砂混入 良	赤橙	歪む、きめ荒く楕円形（12.3㎝）を呈す。口縁部は外反し開く。	外面：口縁部横撫で体部篦削り篦撫で 内面：全体撫、底は器厚で丸底。不明瞭な稜	赤色塗彩
4	西壁より	坏	口：11.4 高：4.0	微砂粒混入 堅緻	橙	口縁は外反し口唇部で更に外傾不明瞭な稜を有す。口唇部歪み	外面：口縁部横撫で、一定方向篦削り。 内面：よく撫られているが底部僅か凹凸有り	ほぼ完
5	南壁より覆土	坏	口：11.6 高：4.1	微砂粒混入 堅緻	橙	口縁部は僅か外反しにぶい外稜を有し、底部は丸底を呈す。	外面：口縁部横撫で篦削り後篦調整。 内面：撫で、底部に凹凸がある。	ほぼ完
6	南西コーナー	坏	口：11.8 高：3.7	微砂粒わずか混入 良	橙	口縁部は内湾しながら外傾し開く、体部は篦削り。外稜の一部篦削りで消滅。	外面：口縁横撫で、底部篦削り篦調整。 内面：丁寧な撫で。植物性繊維痕が見られる	完形 きめが荒い
7	中央部	坏	口：11.9 高：3.9	微砂粒混入 堅緻	黄橙	口縁部は外反しながら開く。器肉が厚くもろい。体部と口縁部の境に稜を有する。	外面：口縁横撫で、体部篦削り後篦撫で。 内面：底部に凹凸が見られるが全体によく撫でられている。	体部一部欠
8	中央北より	坏	口：11.9 高：3.9	粗砂粒混入 堅緻	橙	口縁部は内湾し外に開く、底部が肥厚する。僅かに外稜を残す丸底。	外面：口縁横撫で、体部は不定方向篦削り篦調整。 内面：丁寧な撫で。	ほぼ完
9	カマド前	坏	口：12.0 高：4.4	微砂粒混入 堅緻	橙	口縁は内湾しながら外傾し開く稜は篦撫でにより消されている	外面：口縁横撫、体部篦削り後篦撫。ひび割 内面：丁寧な撫が見られるが底部に凹凸有り	完形　内外面赤色塗彩
10	カマド前	坏	口：12.0 高：4.4	微細砂粒混入 堅緻	黄橙	口縁部は内湾しながら口唇部は開く。底部が僅か厚く丸底。	外面：口縁部横撫で、体部は篦削り後篦調整 内面：丁寧な撫で。	1／3残
11	カマド前覆土	坏	口：12.0 高：(4.2)	砂粒を多量に含む 良	橙	口縁部は内湾しながら外傾して開く。底部は丸底、体部は器厚な作りとなる。	外面：口縁横撫で、底部は篦削り後篦撫で一部に煤付着。 内面：丁寧な撫で。	口2／3残
12	南壁より	坏	口：11.8 高：3.6	細砂混入 良	橙	均一な厚みを持つ丸底外稜を持つ、口縁部は外反し開く。	外面：口縁横撫で、体部外面篦削り。 内面：篦調整後篦撫で。	口2／3残
13	中央南より	坏	口：12.2 高：3.8	微砂粒混入 良	赤橙	厚手で重量あり。底部は丸底で口縁部の立ち上がりが少し短く外反しながら開く。	外面：口縁横撫、体部篦削後撫、ひび割れ有 内面：外稜の窪みはほとんどなくなり口縁から体部まで緩やかに傾斜している。	完
14	貯蔵穴	坏	口：12.4 高：4.1	細砂粒混入 堅緻	橙	当住居としては重量のある厚手の杯である。丸底で口縁部は外反しながら開く。	外面：口縁横撫、体部篦削後撫、ひび割れ有 内面：外稜の窪が不明瞭になり緩い傾斜となっている。僅かに布目が見られる。	完
15	カマド前覆土	坏	口：12.5 高：3.9	黒色微砂粒混入 堅緻	外面　橙 内面　黄橙	口縁部は外反しながら開く、ほぼ均一な器厚であり丸底を呈し体部との境に稜を有する。	外面：口縁部篦整形後横撫で体部篦削り。 内面：丁寧な撫で	完
16	西壁より	坏	口：12.6 高：3.7	微砂粒混入 堅緻	黄橙	口縁部は外反しながら開く、体部中位が肥厚する。体部との境に稜を有するが不明瞭。	外面：口縁横撫で、体部は篦削り後篦撫で、ひび割れ。 内面：全体に撫で、凹凸有り。	完
17	南壁より	坏	口：12.6 高：4.5	細砂粒混入 良	赤橙	深い口縁部は体部から直線的に立ち上がり口唇部で強く外反する。底部は丸底で外稜を有す。	外面：口縁部横撫で、底部は左斜方向篦削り後撫で調整。 内面：丁寧な撫で調整。	1／4欠

15 号住居址出土遺物観察表

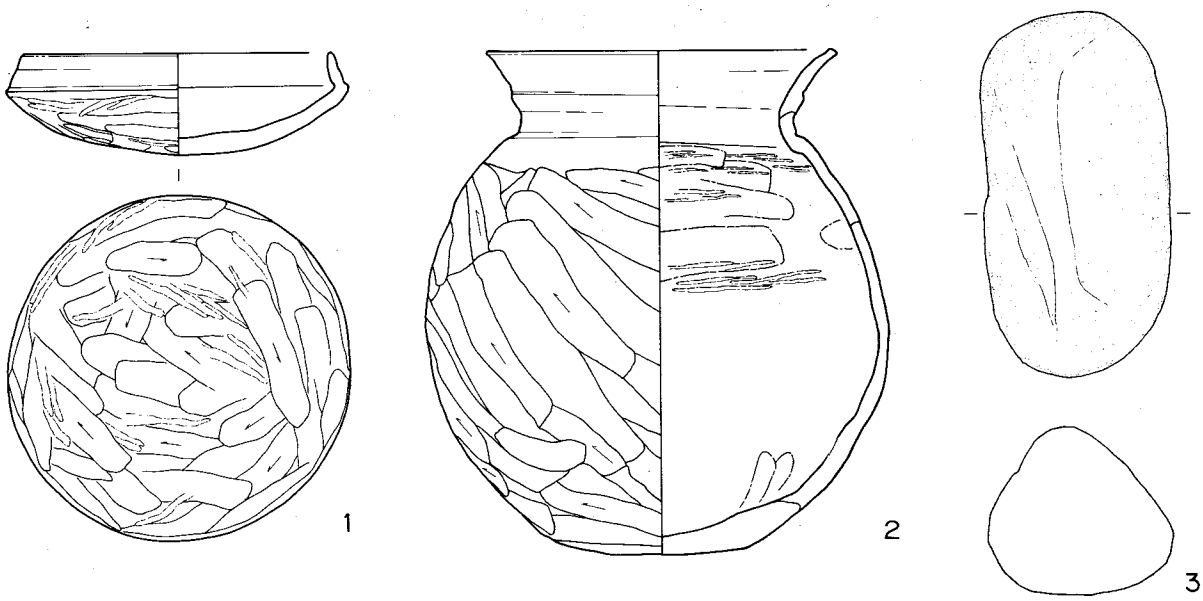
法量の( )は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
18	南壁より	埦形	口：(16.0) 高：(7.2)	微砂粒混入 堅緻	赤橙	口縁部は大きく外反し体部との境に稜を有し、底部は丸底で体部が器厚を呈す。	外面：口縁部横撫、体部は篦削り後撫で調整 内面：丁寧な撫で調整。	1／3 残
19	北西コーナー	埦形	口：(15.8) 高：(7.9)	粗砂を含む 良	橙	口縁部は大きく外反し体部との境に稜を有す。底部は丸底。	外面：口縁は口唇部を先に体部を後から横撫篦削り撫調整、口縁と稜の所に指押え 内面：丁寧に撫で調整されているが凹凸あり	ほぼ完
20	北壁より	埦形	口：(18.0) 高：(9.0)	粗砂を含む 良	橙	口縁部は直線状に立ち上がり稜を有し、底部は丸底、口縁部が器厚となる。	外面：口縁部横撫で、底部荒い篦削り。 内面：丁寧な撫で、凹凸有り。	1／4 強残
21	南壁コーナー	長頸壺	口：9.0 胴：11.3 底：5.1 高：14.2	細砂粒混入 堅緻	赤橙 黄橙 約1／2	長い頸部は直線的に立ち口縁部で外反する。胴部に最大径を持ち、底部は平底を呈す。	外面：口頸部横撫で。篦削り篦磨き、部分的に磨き面が剥離している。 内面：雑な撫で。	完
22	カマド燃焼部	甕	口：(13.2) 胴：(15.3) 高：(11.4)	微砂粒を混入 良	橙	口縁部垂直気味に立ち口唇部で外反する。頸部に撫でにより僅か稜を持つ。胴部は球形を呈す	外面：口縁部横撫で、胴部横方向篦削り。 内面：口縁部横撫で、胴部篦撫で、頸部に刷毛目が見られる。	1／3 残
23	東壁覆土	甕	口：14.2 胴：14.9 底：8.5 高：10.9	砂粒を多量に含む	暗褐色	口縁部は内傾しながら直に立ち上がり口唇部は僅か外反する。胴部は半球形を呈し最大径を中位に持つ。底部は緩い丸底。	外面：口縁部横撫で、胴部と底部は篦削り、胴部表面は荒れている。 内面：胴中位まで横撫で、胴下半部底部は指撫で。	口 1／2 体 1／6
24	カマド天井部	甑	口：16.0 胴：12.8 底：5.8 高：15.4	2㎜大の石英と黒雲母を含む 堅緻	浅黄橙 一部橙 黒褐色	底部から内湾気味に立ち上がり頸部に至る。口縁部は強く外反する。 底部に4cmの孔が穿たれている。	外面：口縁部横撫で、胴部斜方向篦削り。 内面：口～頸横撫で、胴部斜方向篦削り。	ほぼ完
25	カマド周辺	甕	口：22.6 胴：30.8 底：10.4 高：32.8	1～3㎜の砂粒を含む 堅緻	赤褐色	口縁部は直に立ち上がり口唇部で外反する。胴中位下半に最大径を持つ。底部は丸味を持つ平底。	外面：口縁横撫で、胴部は篦削り後篦磨き。底部篦削り、胴下半の一部煤付着。 内面：口縁横撫で、炭化物の付着、胴部は剥離により不明。一部に篦撫でが見られる。	ほぼ完
26	南壁より	甑	口：19.4 底：7.0 高：12.4	白・黒色細砂粒混入 良	暗褐色	底部から口縁部僅か内湾気味に立ち口縁部は外反する。 網目状の甑	外面：口縁部横撫で、胴～底部は篦削り。 内面：胴中位迄丁寧な横撫で、下半部指撫で底部に1 3の小孔有り。	ほぼ完
27	カマド左袖内	甕	口：21.2 胴：19.4	1～3㎜の砂粒を混入 良	橙	口縁は外反、頸部撫による外稜有り、胴全体に張りを持つ、口縁に最大径、胴最大値は中位上半	外面：口縁横撫で、胴斜方向篦削り、頸部に指頭圧痕有り。 内面：口縁横撫で、胴横方向篦撫で、煤付着	口1／3、底部欠。竈の補強材に使用
28	カマド燃焼部	甕	口：22.5 胴：19.0 底：3.1 高：39.9	白色砂粒混入 良	橙	口縁は外半、頸部撫でによる稜有り、胴全体に張らみを持つ。口縁部に最大径、胴中位上半に最大値。	外面：口縁横撫で、頸部に2本の沈線有り、胴部斜方向篦削り、輪積痕有り。 内面：口縁部横撫で、胴部は斜方向篦撫で。	完
29	カマド燃焼部	甕	口：23.0 胴：(17.5)	2㎜大の粒子混入 良	外 橙 内 黒褐色	口縁は外反し頸部に撫でによる外稜を持つ。胴は円錐形を呈する。	外面：口縁横撫で、胴縦方向篦削り、胴下半の一部に刷毛目がみられる。 内面：口縁横撫で、胴横方向篦撫で。	1／2 弱
30	東壁より	甕底部	底：4.6	細砂粒混入 良	底橙 内黒 胴 紫褐色	底部に厚みを持ち平底。胴部は内湾気味に立つ。	外面：胴斜方向篦削り、底部篦削り。 内面：丁寧な撫で。	底部のみ
31	中央部	甕底部	底：4.3	細砂粒混入 堅緻	外 褐色 内 黒色	底は円形の平底を呈する。	外面：胴斜方向篦削り、底篦削り後撫で 内面：篦削り後篦撫、底指撫で、黒色処理。	胴下半部から底部
32	カマド左袖脇	甕	口：20.2 胴：15.9 高：(27.0)	砂粒混入 良	外 黒褐色 内 褐色	口縁部は「く」字状に外反し、頸から胴中位迄直線的で胴下半で急に窄まる。	外面：口縁横撫で、胴縦方向篦削り。 内面：口縁から頸迄横方向撫で、胴篦撫で。	底部欠
33	住居中央部	甕	口：22.1 胴：19.8 底：3.4 高：41.9	細砂粒混入 良	黄褐色	口縁は外反し最大径は口縁に持ち胴の最大値は中位と上半部の境にある。胴中位に輪積痕有り	外面：口縁横撫で頸部篦あて痕が一周する。胴部は篦削り、輪積痕。底部煤付着。 内面：口縁横撫で、胴部篦撫で篦あて痕。	口1／2欠～胴1／3 欠
34	北壁より	甕	口：(23.5) 胴：(19.8) 底：3.4 高：40.2	白色砂粒混入 良	黄褐色	口縁は外反し、最大径を持つ胴部の最大値は中位上半にある。輪積痕。	外面：口縁横撫で、胴部は斜方向篦削り。底部煤付着。 内面：口縁部横撫で、胴部篦撫で。	2／3 残
35	北西コーナー	須恵器	胴：18.0 底：(7.3) 高：(11.0)	砂粒を多量に含む 堅緻	黒灰色	球形の胴部、台部との貼付け痕が見られる。	外面：3条の横書き波状文と4条の沈線、その下にまた3条の波状文が見られる。 内面：下半部は指撫で上半部は刷毛撫で。	胴部1／2 残
36	カマド前覆土	羽口	先端部 外径5.0内径1.0尻部外径5.5内径1.3遺存長9.5 砂粒を混入 良 赤褐色 円筒形尻部で僅か張みを呈す。先端と尻部焼き締りが有る。指押え尻部接合痕を残す。羽口としての使用された形跡が見られない。スサの使用された痕跡が見られる。先端部と尻部の口径に差が無い事、土器なみの焼き締りが見られる事、この遺物を羽口とするには疑問を残す。138.1g					1／3残
37	カマド前	横瓶	胴部径(13.5) 細砂粒を混入 堅緻 灰白色 回転撫で後 胴部に同心円文が施されている。点描部分は灰釉が掛かっている。内面回転撫で。					胴部の一部

16号住居址



第42図　16号住居址・カマド実測図



第４３図　１６号住居址出土遺物実測図

本住居址は、５号住居址の西側２ｍ、Ｋ－７グリット、Ｌ－（７，８）グリットに位置する。主軸をＮ－79°－Ｅにとる。試掘時の第３トレンチにかかっている。北東コーナー部分のプランは不明である。カマドの標高が141.30ｍ、確認面は141.045ｍ、差が25．５cmである。北壁（残部2.0ｍ）推定4.2ｍ、西壁2.72ｍ、南壁4.16ｍ、東壁（残部40cm）推定2.85ｍを測る。壁高は北側15cm、西側18cm、南側10．５cm、東側6cmで本遺跡中一番浅い掘り込みであった。隅丸長方形を呈する。覆土の第１層は軽石を含む黒褐色土層、第２層は軽石を僅か含む褐色土層、 第３層はソフトロームを含む褐色土層である。 カマド周辺で堅い床面がみられるが、壁際では軟弱さが目立った。柱穴は南壁側にＰｉｔ １（３３×３２）cm、深さ１０cmを測る。掘り方にてＰｉｔ ２（４８×３８）cm、深さ11cmが貯蔵穴脇から検出された。貯蔵穴は（５２×５４）cm、深さ41cmがカマド左側から検出された。

カマドは東壁南東コーナー寄りからほぼ完全な形で検出された。床面下を８cm程掘り窪めて焚口とし、燃焼部へと緩やかな傾斜で煙出し直下まで続く。しかも燃焼部左奥に支脚石（河原石）が検出されている。このカマドは床面と壁の高さから掛け穴と煙出しが同じレベルである事がわかる。このカマドを構築するに当たり褐色粘質土をドーム状に積み上げている。住居址外に幅５７cm、長さ６５cm、住居址内には左袖幅１０cm、長さ75cm、右袖幅18cm、長さ８３cm、作り出し袖部末端には補強用の河原石が設置されている。左袖石（１４×１１）cm、高さ24．５cm、右袖石（８×１３）cm、高さ 3.2cm、下部５cmは床面下に埋められている。燃焼部火床には、灰と焼土を含む砂質の黄褐色土で埋没していた。焚口から煙道まで完全な形に近い状態であった。掛け穴の周囲が崩落して拡大化しているものと思われる。

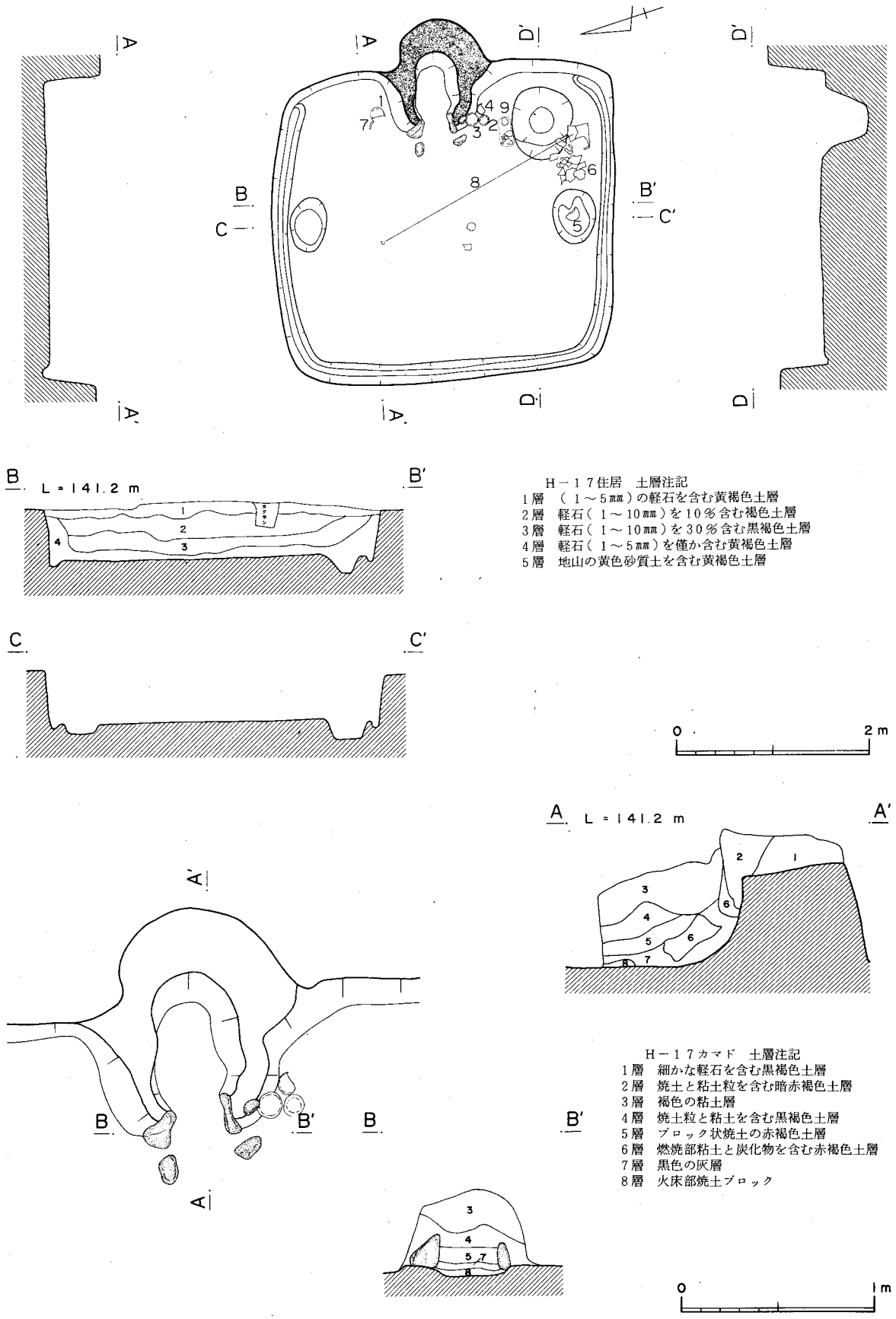
遺物は、焚口部小型甕１点とカマド右袖際より坏が１点出土している。

１６号住居址出土遺物観察表

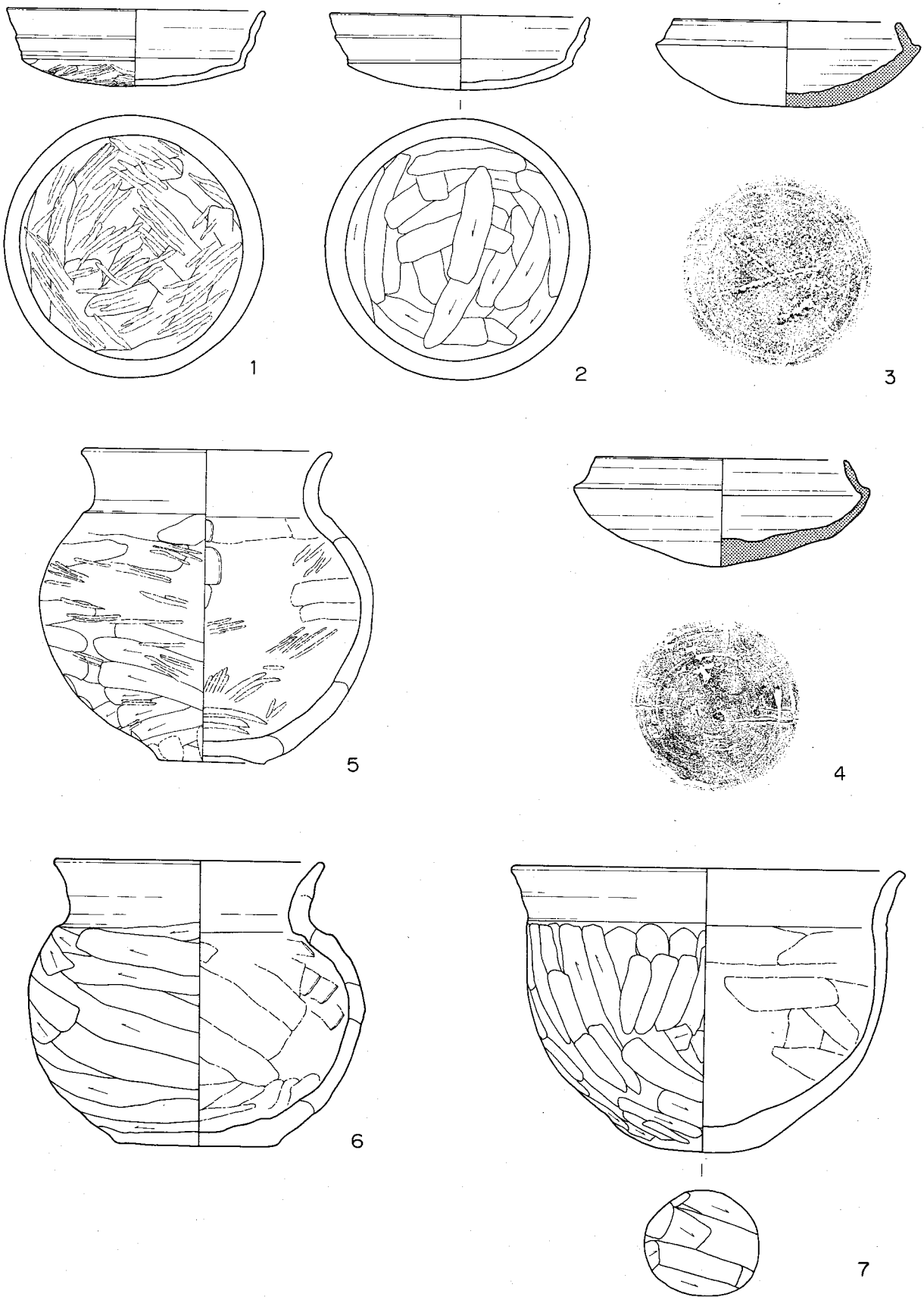
法量の（ ）は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	カマド右脇	坏	口：12.2 胴：13.5 高：4.0	砂粒混入 堅緻	赤橙	底部中央に厚みを持ち体部は偏平で口縁部にかけて次第に薄く内湾気味に立つ、丸底で外稜を持つ。	外面：口縁部は内外面横撫で、体部は篦削り篦磨き。 内面：丁寧な撫で、内外面体部中位に炭化物付着。	完
2	カマド前	甕	口：13.8 胴：18.2 底：8.0 高：20.0	細砂粒混入 堅緻	橙 口、胴一部黒色	底部斜方向篦削り。	外面：口縁部内外面撫で 内面：赤色塗彩	ほぼ完
3	カマド内	支脚石	長辺 14.3　短辺 7.2　厚さ 7.0　重量１０２５.１ｇ石質　輝石安山岩　上部２／３ 燃焼により変色					

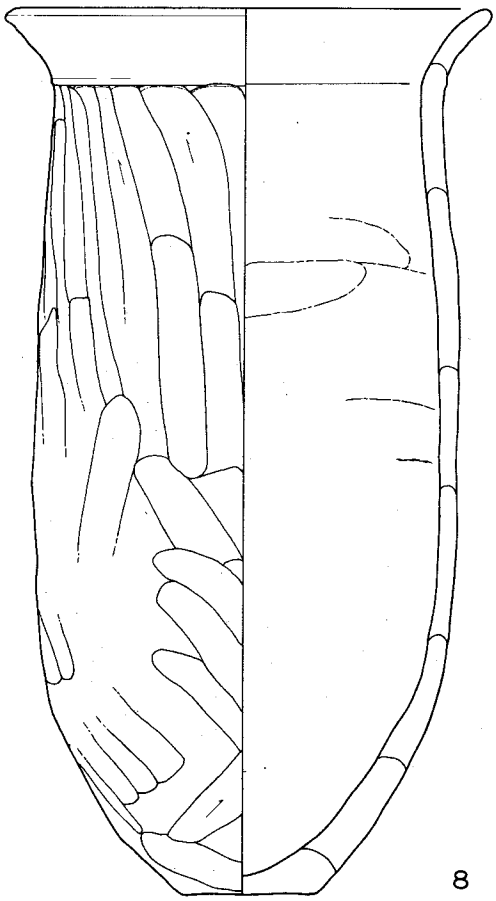
17 号住居址

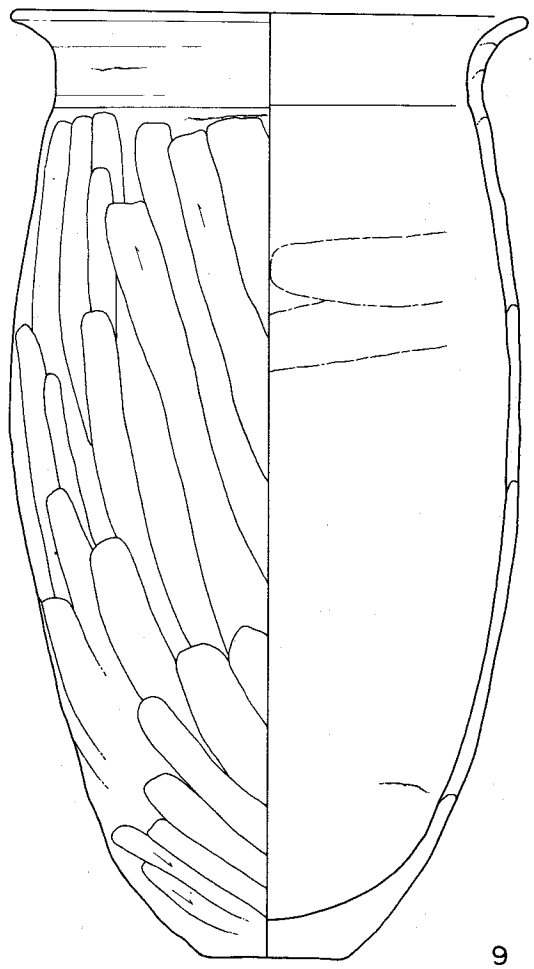


第44図　17号住居址・カマド実測図



第４５図　１７号住居址出土遺物実測図(1)





第４６図　１７号住居址出土遺物実測図(2)

本住居址は、１５号住居の西６０cm、Ｎ－（８，９）グリット、Ｏ－（８，９）グリットに位置する。主軸はＥ－23°－Ｓにとる。北壁3.1ｍ、西壁3.4ｍ、南壁3.15ｍ、東壁3.47ｍを測る。隅丸方形を呈している。掘り込みは北側58cm、西側５０cm、南側５０cm、東側５９cmを測り、地山の黄色砂質層まで掘られており、保存状態は良好である。壁の立ち上がりは85°の傾斜となっている。覆土の第１層は軽石を含む黄褐色土層、第２層は１cm位の軽石を含む褐色土層、第３層は２層より更に軽石を多く含む黒褐色土層、第４層は軽石の少ない黄褐色土層、第５層は１次堆積の黄褐色土層となっている。床面は平坦で全面的に堅く踏み固められており、中央部カマド前面においては顕著である。柱穴はＰｉｔ１（５７×４６）cm、深さ9.5cm、Ｐｉｔ２（５８×４３）cm、深さ20cmの２本である。貯蔵穴は南東コーナーに所在し（７５×６２）cm、深さ46cmを測る。周溝は北東コーナーから西壁を巡って、南東コーナーまで検出された。幅10cm～15cm、深さ２cm～６cm、断面は「Ｕ」字状に、端部は自然に立ち上がり消滅する。

カマドは東壁のほぼ中央に壁を掘り込んで構築されており、長さ1.15ｍ、焚口幅20cm、煙道の長さ53cmを測り、天井部は崩落していた。床面を約５cm程掘り窪めて火床とし、煙道は約85°～９０°の傾斜で立ち上がる。焼土は中央燃焼部において黒褐色土及び粘土と混入して、23cm～33cm堆積していた。袖は左袖が53cm、右袖が６７cm住居址内に褐色粘質土で作り出して居る。遺存状態は煙出し部が耕作により少し攪乱されている程度で良好である。又内面はよく赤褐色に焼けて居った。焚口部は自然石で補強されており、左袖は30cm×３５cm、高さ48cm、右袖は７cm×１４cm、高さ２５cmである。

遺物は、カマドと貯蔵穴の周辺に多く出土している。No.（2, 3, 4）はカマド右袖脇に粘土で小高くなった上に3個体ほぼ完形で出土した。掘り方は荒掘りの段階で東から西へ4cm～14cm、北から南へ16cm～20cmが深く掘り込まれている。貼り床は（4～10）cm軽石と黄色砂質土層の混土をもって貼り詰めている。

17号住居址出土遺物観察表

法量の（ ）は推定値

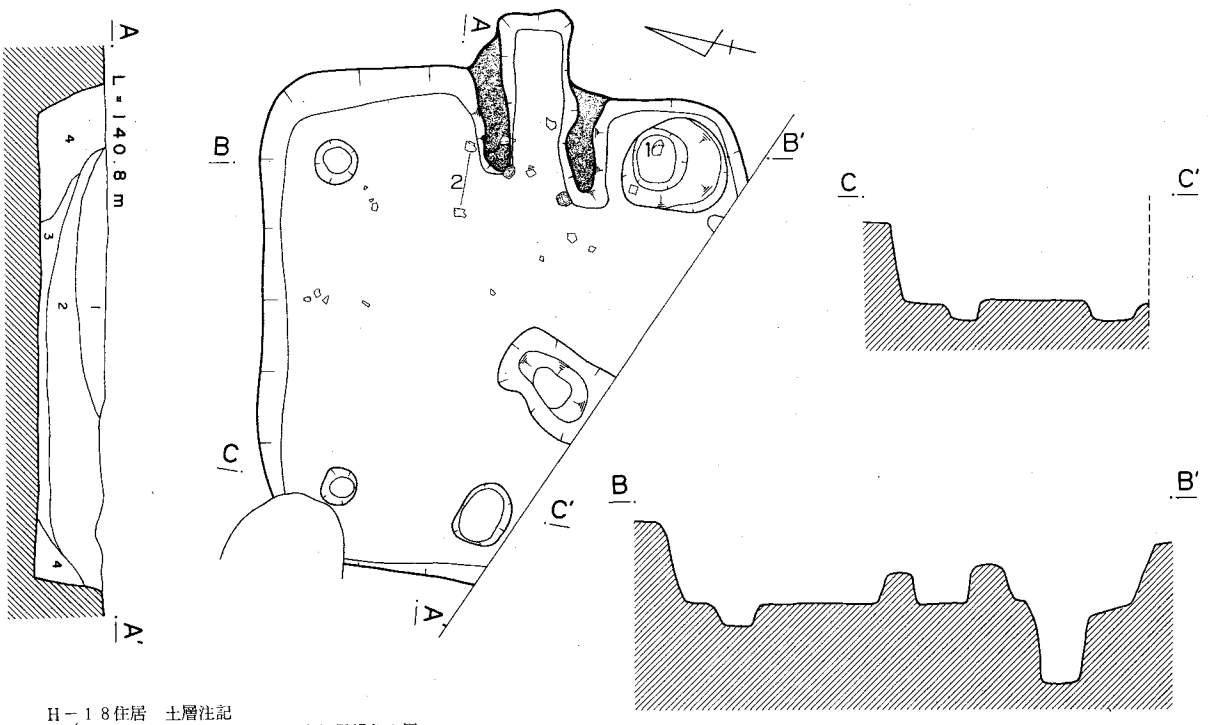
番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	カマド左袖脇	坏	口：13.6 高：4.0	微砂粒混入 赤褐色粘土 良	黒色	口縁部は広く直線状に開き中位に段を持つ。体部との境に稜を有し細い凹線が2本見られる。	外面：口縁撫、底部篦削り後不定方向篦研磨 内面：煤付着、橙色の焼き上がりに内外面黒色処理されている。	完
2	カマド右脇	坏	口：13.6 高：4.0	砂粒混入 堅緻	橙	口縁部は僅か内傾しながら立ち上がり中位に段を持ち体部との境に稜を有す。2本の凹線有り	外面：口縁部内外面横撫で。体部は篦削り。班に黒色が見られる。 内面：丁寧な撫で、2/3黒色塗布されている	完
3	カマド右脇	坏 須恵器	口：11.8 高：4.5	赤褐色砂粒を含む 堅緻	灰褐色	右回転篦削り、立ち上がりは内傾し非常に低い。底部は丸底。	外面：底部は円形、底部中央に篦記号が見られる。ロクロ回転を利用し丁寧な横撫 内面：ロクロ回転を利用し丁寧な横撫で。	完
4	カマド右脇	坏	口：13.0 高：5.7	砂粒を含む 堅緻	灰褐色	立ち上がりは内傾し非常に低い底部中央が尖っている。	外面：左回転篦削り、輪積痕篦撫で 内面：内面全体と外面口縁部は回転を利用し丁寧な横撫で、入念に調整している。	口1/3欠
5	南壁際	甕	口：(13.2) 胴：(17.5) 底：5.5 高：16.3	白色砂粒 わずか礫を含む 堅緻	外 黒褐色 内 紫褐色	頸部稜を持ち口縁部は外反する胴部は球形を呈し、底部は平坦	外面：内外面口縁部横撫で、胴部から底部篦削り。底部に指押え。 内面：篦削り篦撫で。	1/2 弱
6	南壁際とカマド内	甕	口：14.2 胴：17.6 底：8.4 高：14.9	砂粒（長石） 良	赤褐色	広い底部と胴部は良く張り口縁は外反す、輪積痕有り。	外面：内外面口縁部横撫で、胴部左上方向篦調整。 内面：胴部左斜上方向撫で。	口・胴の一部欠 ほぼ完
7	カマド左脇	甕	口：20.5 底：6.0 高：15.0	1mm前後の粒子混入 良	外 赤黄褐 内 黒	口縁部外反気味に立ち上がる。頸部撫でによる稜を持つ。	外面：口縁横撫で。胴部から底部にかけて篦削り 内面：横方向撫で。黒色処理。	1/2 強
8	貯蔵穴と中央部	甕	口：19.3 胴：16.7 底：5.2 高：35.4	砂粒混入 良	橙	口縁は外反し頸部は篦削りにより段を持つ。胴部は円筒形で下半部で窄る。	外面：口縁横撫で、胴部は不定方向篦削り、胴下半部内外に煤付着。 内面：口→頸部横撫で、胴部は丁寧な篦撫で	完
9	カマド右脇	甕	口：20.5 胴：20.2 底：5.7 高：37.7	1～3mm砂粒混入 やや軟	橙	口縁部は外反し頸部には稜を有すが摩耗が著しい。胴部は中位でやや張らむ。輪積痕。	外面：口縁部横撫で、胴部は篦削り、底部篦削り撫で。 内面：口縁部横撫で、頸部に内稜を有す。胴部篦撫で。	ほぼ完

18号住居址

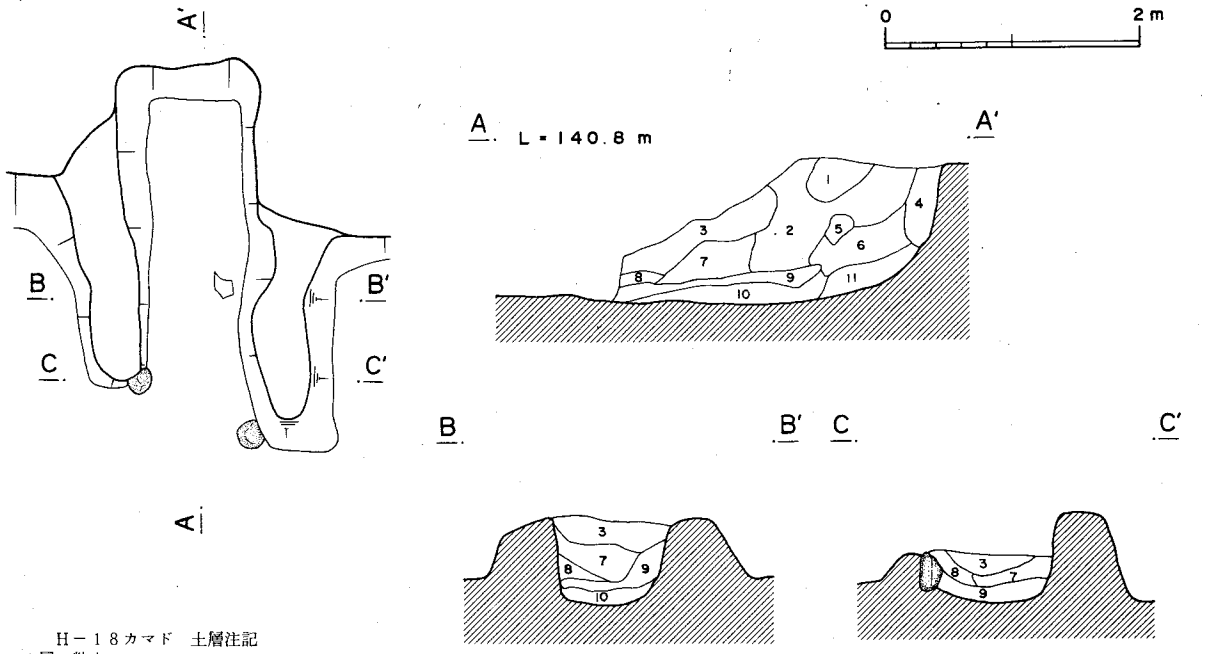
本住居址は、N－5グリット、O－（4, 5）グリットに位置する。住居址南側約1/3程調査区域外に延びるため全容は不明であるが、北壁の検出、東壁における南東コーナーのカーブから推定して、隅丸方形を呈するものと思われる。北壁4.0m、東壁3.8mを測る。主軸はN－78°－Eにとる。覆土は、第1層、黒褐色土層、第2層は軽石とシモフリ状のロームを含む黄褐色土層、第3層は軽石の少ない黒褐色土層、第4層は軽石をほとんど含まない黄褐色土層、第5層はブロック状に混入する浅間のB軽石、黄褐色土層である。床面は平坦によく整えられているが軟弱である。Pit 1（31×28）cm、深さ15cm、Pit 2（50×40）cm、深さ13cm、Pit 3（36×35）cm、深さ19cm、攪乱により床面を（85×65）cm窪められている。貯蔵穴は（92×83）cm、深さ64cm、床面が（36×29）cmであり、土器片2点が出土している。

カマドは、東壁中央部やや南寄りに構築されており、壁を62cm掘り込み左袖は60cm、右袖で80cm作り出しており、袖末端には小さな河原石があり補強材として褐色粘質土に混入されたものと考えられる。火床は床面に置き、両袖内側はよく赤褐色レンガ状に焼け、長期間使用されたことを物語っている。

遺物は、カマド周辺に小破片が散在していた。No.1坏、No.2小型甕、No.3石製模造品各1点が出土している。掘り方は荒掘りで黄色砂質層まで掘り込み、この段階で平坦に掘っているので貼り床も3cm～5cmであった。



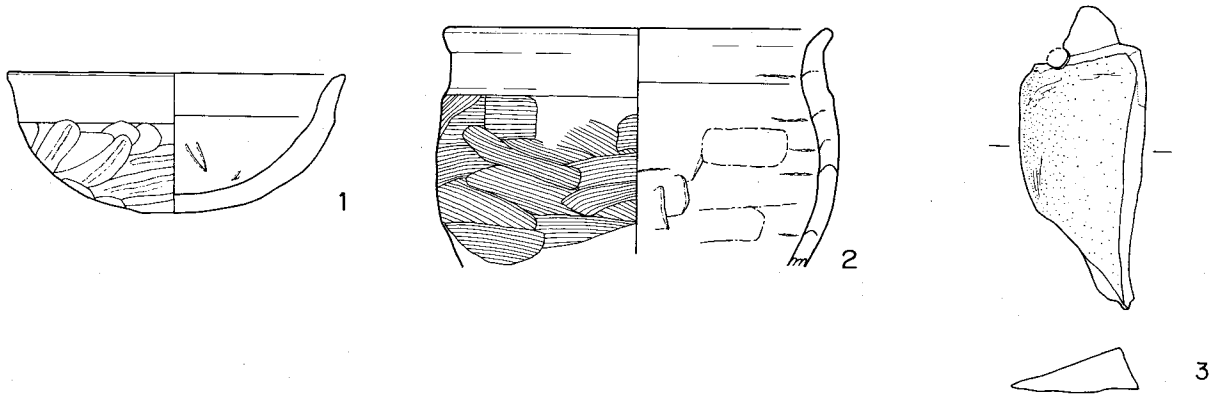
H－18住居　土層注記
1層　（5～10㎜）の軽石を10％含む黒褐色土層
2層　（5～10㎜）の軽石を30％含むシモフリ状にロームを含む黄褐色土層
3層　軽石を僅か（5％）含む黒褐色土層
4層　軽石を殆ど含まない黄褐色土層



H－18カマド　土層注記
1層　粘土
2層　軽石と粘土を多量に含む黄褐色土層
3層　軽石（5㎜以下）を含む黒褐色土層
4層　ブロック状粘土と焼土を含む黄褐色土層
5層　焼土ブロック
6層　焼土粒を含む黒褐色土層
7層　粒状焼土を含む赤褐色土層
8層　ブロック状の粘土と焼土の黄褐色土層
9層　灰を含む暗赤褐色土層
10層　灰と焼土粒を多量に含む暗赤褐色土層
11層　焼土と白い灰を含む灰褐色土層

0　1m

第47図　18号住居址・カマド実測図



第４８図　１８号住居址出土遺物実測図

石製模造品 1／1

18 号 住 居 址 出 土 遺 物 観 察 表

法量の( )は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	貯蔵穴	坏	口：13.4 高：5.5	軽石と赤褐色の砂粒を含む 軟	黒褐色	底部から体部に丸味を持ち口縁部は緩やかに外反する。体部が特に器厚な造りである。	外面：口縁横撫で、底部は不定方向篦削り。 内面：口縁部横撫で、内面全体撫で、篦あて痕が見られる。	2／3 残
2	カマド左脇覆土	小型甕	口：15.4 胴：16.0 高：(9.5)	細砂混入 堅緻	暗赤褐色	口縁下半部はほぼ直立し口唇部付近で急に外反する。 口端部は丸い。	外面：口縁部横撫で、胴部は刷毛整形。 内面：口縁部横撫で、胴部篦撫で。	上半部 2／3 残
3	カマド左袖	剣形模造品　長　4.0　短　1.6　厚さ 0.7　重量 4.254 g 柄部と剣身部との間に段を持ち明瞭な区別がされている。						2／3 残

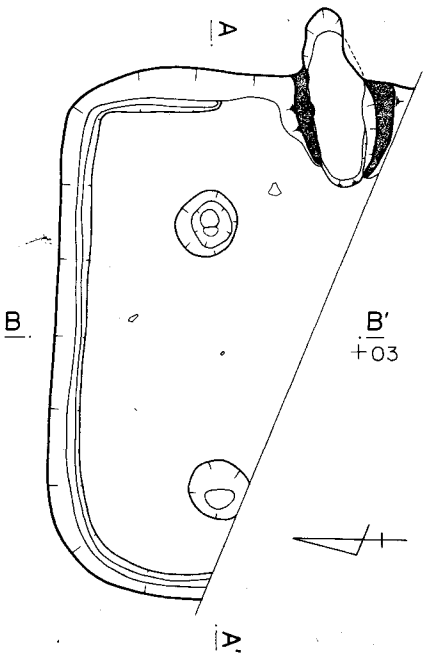
20 号 住 居 址

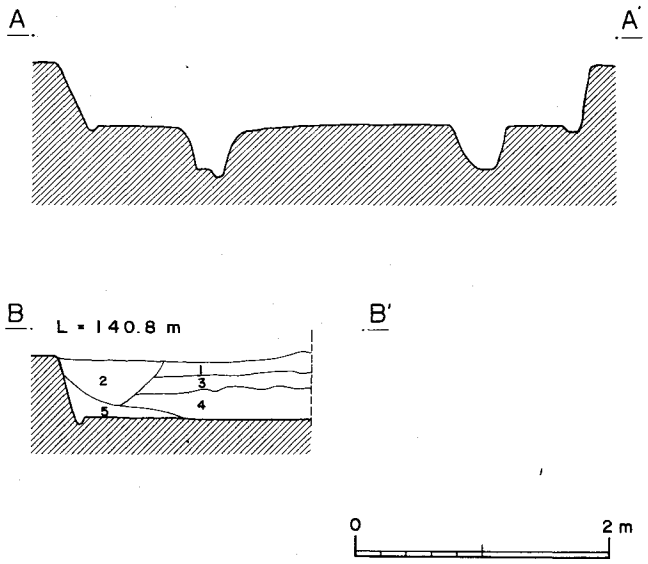
本住居址は、１９号住居址の西 1.5 m、N－（２，３）グリット、O－３グリットに位置する。住居址南側約 1/2 は調査区域外となるため全容は不明である。北西コーナー・北東コーナーから隅丸方形を呈するものと思われる。縦軸の長さ 4.20 mを測り、主軸はＥ－4°－Ｓにとる。壁高は北壁で４９cm、西壁で 48 cm、東壁で 50 cmを測る。覆土は第１層が軽石を含む黒褐色土層、第２層が同じく軽石を含む黄褐色土層、第３層が細かい軽石とロームのブロックを含む黄褐色土層、第４層は壁の崩壊による１次堆積で軽石を含む黒褐色土層。この住居址には一部床面上 10 cmに至る攪乱層が混入している。床面は全体によく踏み固められている。貯蔵穴は不明である。柱穴はＰｉｔ１（45×48）cm、深さ 34 cm、Ｐｉｔ２（50×50）cm、深さ 22 cm、周溝は浅いがカマド左側から調査範囲内西壁まで周っている。

カマドは東壁に構築されている。主軸をＮ－84°－Ｅに取り、壁を馬蹄形に 60 cm掘り込み褐色粘質土で構築されている。左袖 80 cm、右袖 76 cmを住居址内に作り出し焚口部を８cm程掘り窪めている。壁体の赤褐色に良く焼け締まっている事から長期間使用されたことが想像される。火床は床面に置き燃焼部から煙道にかけては緩い傾斜である。煙出しは 65°で地表へ続いている。

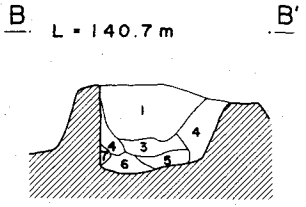
遺物は小量であり、復元して完形となるものは出土していない。坏３片、椀１片、甕の口縁部２片、頸部６片、胴部４片、底部２片が出土している。

坏　口縁部は内埦しながら立ち上がり中位で肥厚し段を持ち口唇部は鋭く外反する。口縁部と体部の境に稜を有する、稜の部分の直径が 12.7 cmが推定される。不定方向篦削り内外面黒色処理内面は特に丁寧に黒色塗彩されている破片が三片出土している。掘り方状況は２～３cmの貼り床がみられ細かい軽石と黒褐色土と地山の黄色砂質土を含む混土層で築かれている。

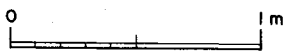


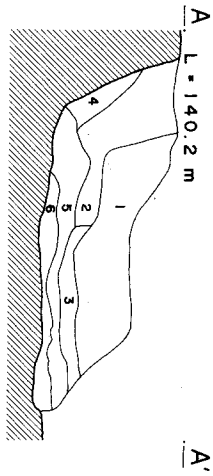


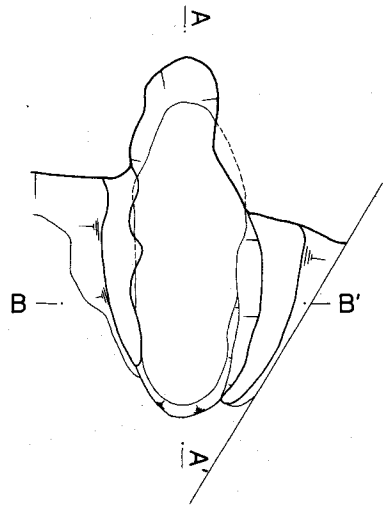
H－２０住居　土層注記
1層　（１～２cm）の軽石を含む黒褐色土層
2層　（0.5～１cm）の軽石を含む黒褐色土層
3層　（１～２cm）の軽石を含む黄褐色土層
4層　（１～５mm）の軽石とロームブロックを含む黄褐色土層
5層　（0.5～１cm）の軽石を含む黒褐色土層



H－２０カマド　土層注記
1層　地山の黄色砂質土を含む黄褐色土層
2層　焼土を含む褐色土層
3層　粘土の焼土ブロックを含む黄褐色土層
4層　焼土を含む砂質の黄褐色土層
5層　燃焼による粘土ブロックの赤褐色土層
6層　黄色砂質土と黒色灰の混土層
7層　地山黄色砂質土のブロック

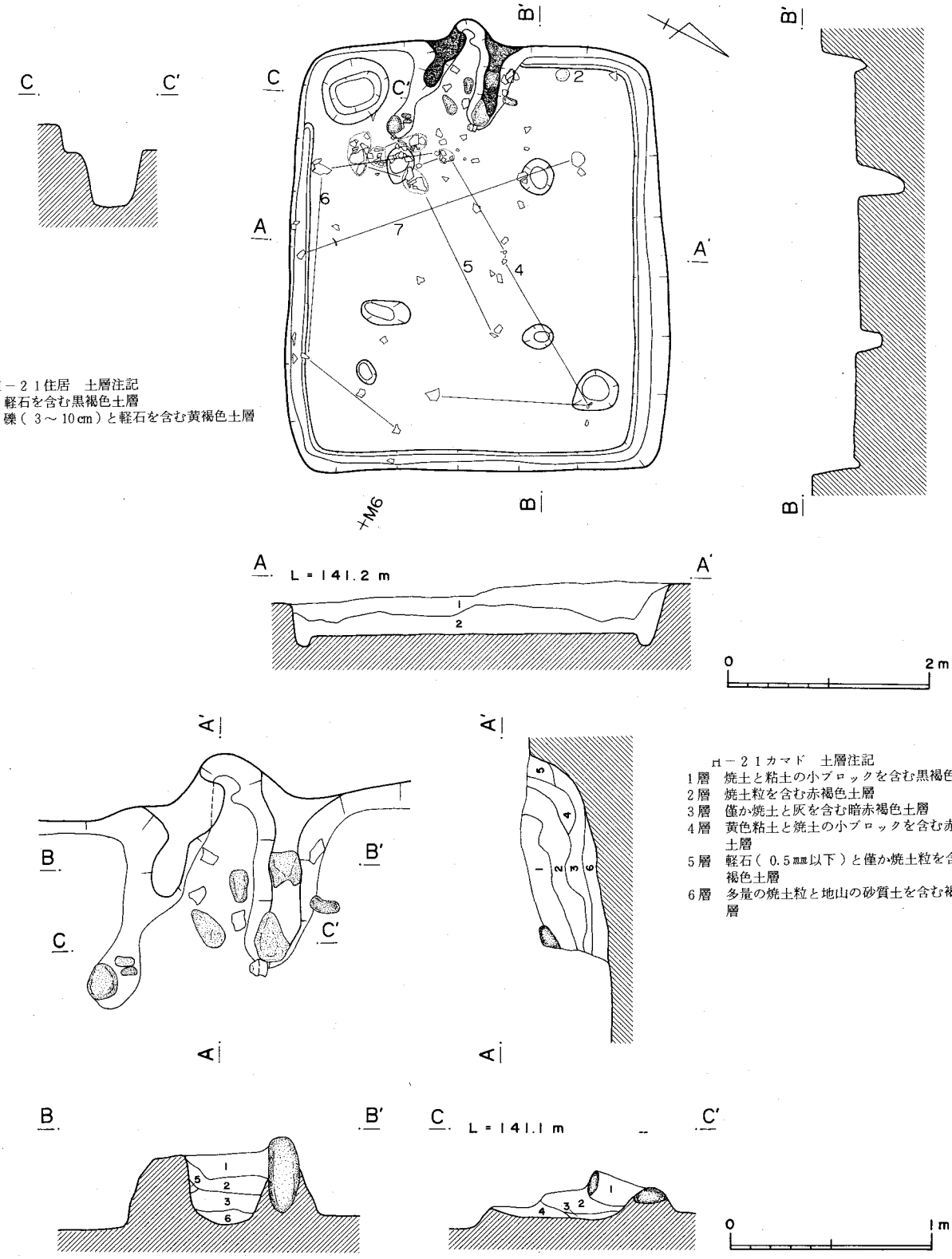






第４９図　２０号住居址・カマド実測図

21号住居址



第50図　21号住居址・カマド実測図

本住居址は、１９号住居址の北側４ｍ、Ｌ－（４，５）グリット、Ｍ－（４，５）グリットに位置する。等高線の集中するところで、白川氾濫原の変化する位置でもある。北壁4.20ｍ、西壁3.35ｍ、南壁4.24ｍ、東壁3.72ｍを測る。隅丸長方形を呈する。主軸はＷ－27°－Ｓにとる。壁高は北側50㎝、西側35㎝、南側31㎝、東側50㎝の立ち上がりとなっている。掘り方を入れて45㎝～75㎝になる。覆土は２層に分けられる。第１層は軽石を含む黒褐色土層、第２層は礫と軽石を含む黄褐色土層である。床面は地山の黄色砂礫土と黒色土の混土を貼り詰めて構築しており、カマド周辺ではよく踏み固められている。周囲は整っているが軟弱さが目立った。柱穴は、主柱穴と思われる４本がコーナーの対角線状に検出され、Ｐｉｔ１（35×33）㎝、深さ45㎝、Ｐｉｔ２（27×37）㎝、深さ35㎝、Ｐｉｔ３（23×50）㎝、深さ33㎝、Ｐｉｔ４（25×30）㎝、深さ20㎝、の計測値が得られたが掘り込みが浅い。他に２本の支柱穴と思われる落込みが確認された。Ｐｉｔ５（17×25×15）㎝、Ｐｉｔ６（40×45×18）㎝、を測る。貯蔵穴は南西コーナーに存在する。長径70㎝、短径60㎝、深さ54㎝の楕円形を呈するが、底面では径36㎝に窄まる。周溝は南西コーナー貯蔵穴脇からカマド右袖までほぼ一周している。幅10～17㎝深さ５～10㎝であった。

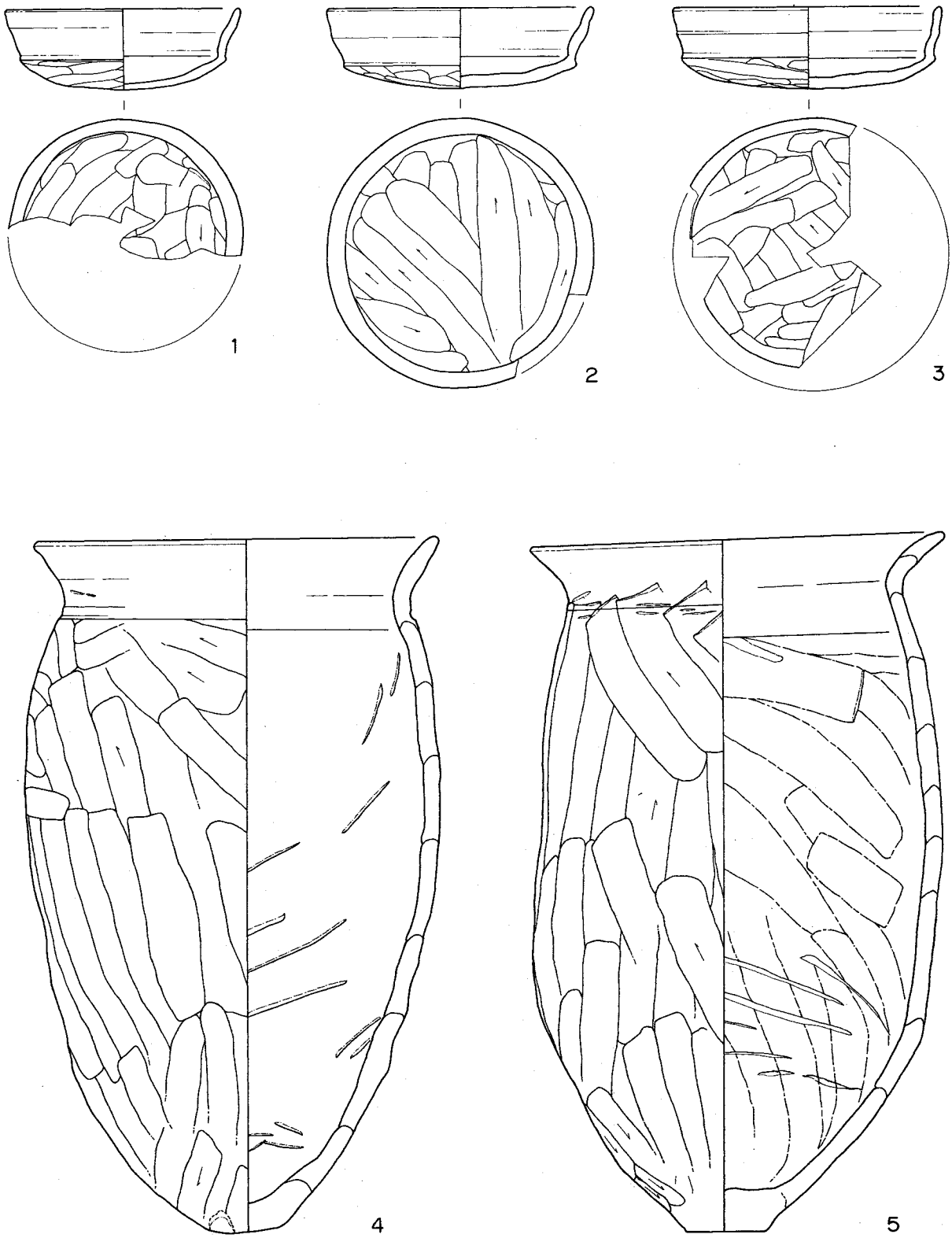
カマドは西壁中央部南寄りに構築されている。荒掘りの段階で壁面を20㎝ほど半円形に掘り込み、褐色粘質土で左袖40㎝、右袖60㎝を住居址内に作り出している。右袖には補強材として自然石が２個埋め込まれ焚口にも設置している。左袖は崩壊したために南側に開いた状態で検出された。カマドの全長は1.0ｍ、火床は床面直上５～６㎝に置かれている。煙道は緩やかに立ち上がり50°の傾斜で煙出しに至る。中央燃焼部に存在した自然石は支脚石が倒れたものと思われる。

遺物は全体から出土しているが、特にカマド前面から貯蔵穴付近に集中して出土した。（No.１～３）坏、（No.4，５）長胴甕、（No.6，７）丸胴甕等が出土した。掘り方は西側カマド付近から南側にかけて深く荒掘りし、北東方向に行くにしたがって浅くなっている。僅かであるが中央部を残す工法がみられる。地山の黄色砂礫土と黒褐色土の混土で埋め戻し、床面は地山の砂礫土と粘土を混入して貼っている。この貼り床は２～５㎝である。

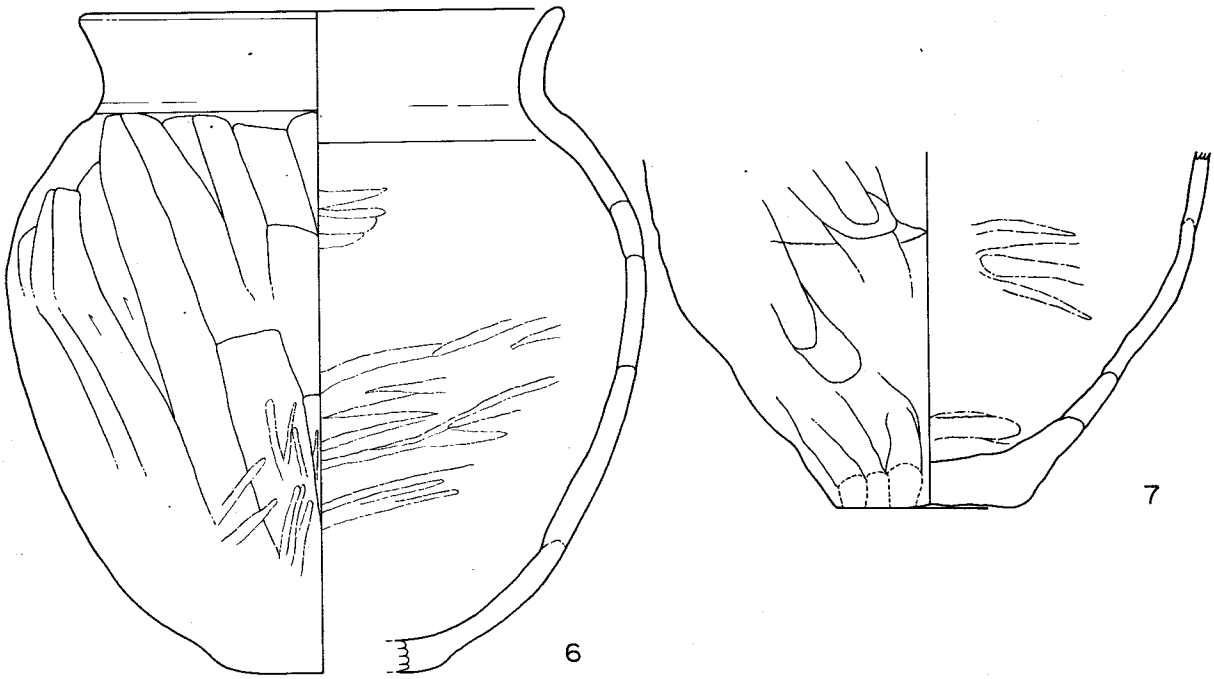
２１号住居址出土遺物観察表

法量の（ ）は推定値

番号	出土位置	種類	法量(㎝)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	覆土一括	坏	口：11.8 高：4.1	微砂粒混入 良	橙	口縁部は外反しながら立ち上がり口唇部で僅か内傾、体部との境に稜を有す。底部は丸底。	外面：口縁内外面横撫で、体部は篦削り摩耗により方向は不明瞭。 内面：丁寧に撫でられているものの凹凸有	1/2 残
2	カマド右脇	坏	口：13.4 高：4.1	砂粒混入 堅緻	暗赤褐色 外底 黒褐	口縁部は外反しながら立ち上がり中位から直線状を呈す。底部は偏平な丸底。	外面：口縁部は刷毛により横撫で、底部は篦削り、最後に一定方向篦削り整形。 内面：全体丁寧な撫で調整中央部に凹有り。	ほぼ完
3	カマド一括	坏	口：(13.6) 高：4.2	細砂粒混入 堅緻	赤橙	底部は丸底、体部は偏平で口縁部は直立し中位に段を持つ。稜を有す。	外面：口縁部外面刷毛による横撫で、底部篦削り。 内面：丁寧な撫で。	1/3 強
4	床面直上	甕	口：21.0 胴：22.0 底：3.7 高：35.2	砂礫混入 やや軟	赤褐色 内 浅黄橙	口縁は外反し頸部は横撫でによる稜有り。胴部は僅か脹みを持ちゆっくりと底部にて締まる。底部平底。	外面：口縁横撫で胴部は不定方向篦削り。上半の一部と下半に煤付着。最大径を胴上位に持つ。 内面：口縁～頸横撫、胴篦撫で篦あて痕明瞭	ほぼ完
5	床面直上	甕	口：20.3 胴：20.5 底：3.5 高：35.0	砂粒を多量に含む やや軟	黒褐色 内 褐色	口縁は「く」字状に外反し最大径を有す。胴部の最大径は中位上半にある。	外面：口縁横撫で、底から口方向へ篦削り。頸部に篦あて痕。輪積痕有り。 内面：口縁横撫で、胴部斜方向篦撫で、胴下半部に篦削り痕を強く残す。	ほぼ完
6	床面直上	甕	口：19.2 胴：(21.7) 底：(8.0) 高：26.8	１～５㎜の砂粒混入 堅緻	赤褐色	口縁は垂直に立ちながら口唇部で外反する。胴部上半部に最大径を持ち、やや張り気味に脹みを持つ。	外面：胴部は中位上半に最大径有り。篦削り後篦磨き。胴上半と底付近に煤付着。中位に剥がれ。 内面：口縁横撫で、全体に丁寧な篦磨き有り	口～底 2/3 残
7	床面直上	甕底	底：7.3	黒雲母微砂粒混入 良	赤褐色	底は円形で平底。底～腰やや丸味を帯びて立ち上がる。	外面：斜方向篦削り。底部付近に指頭圧痕。腰部の一部に煤付着。 内面：篦撫で。	腰～底 1/5 残



第５１図　２１号住居址出土遺物実測図(1)

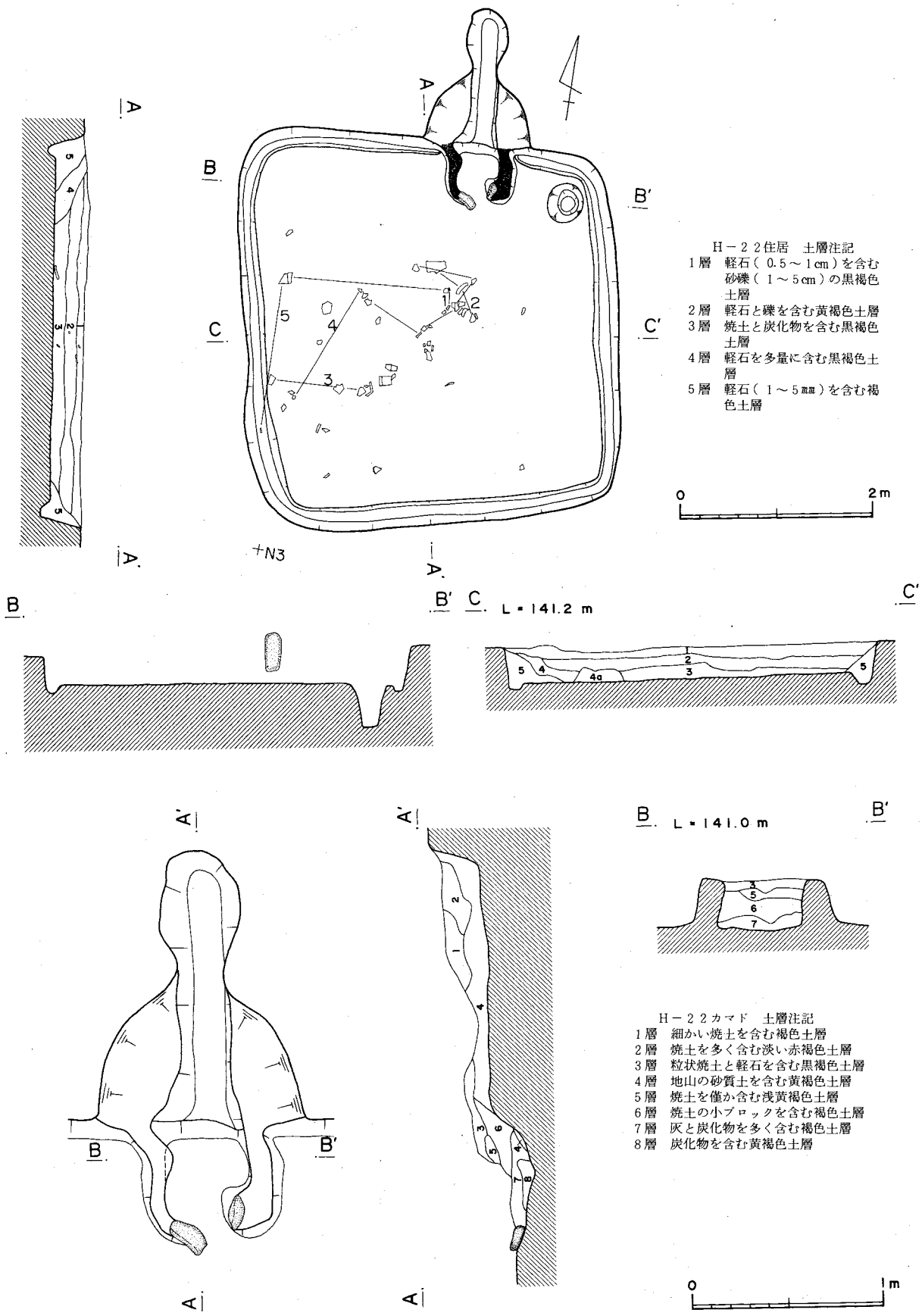


第５２図　２１号住居址出土遺物実測図(2)

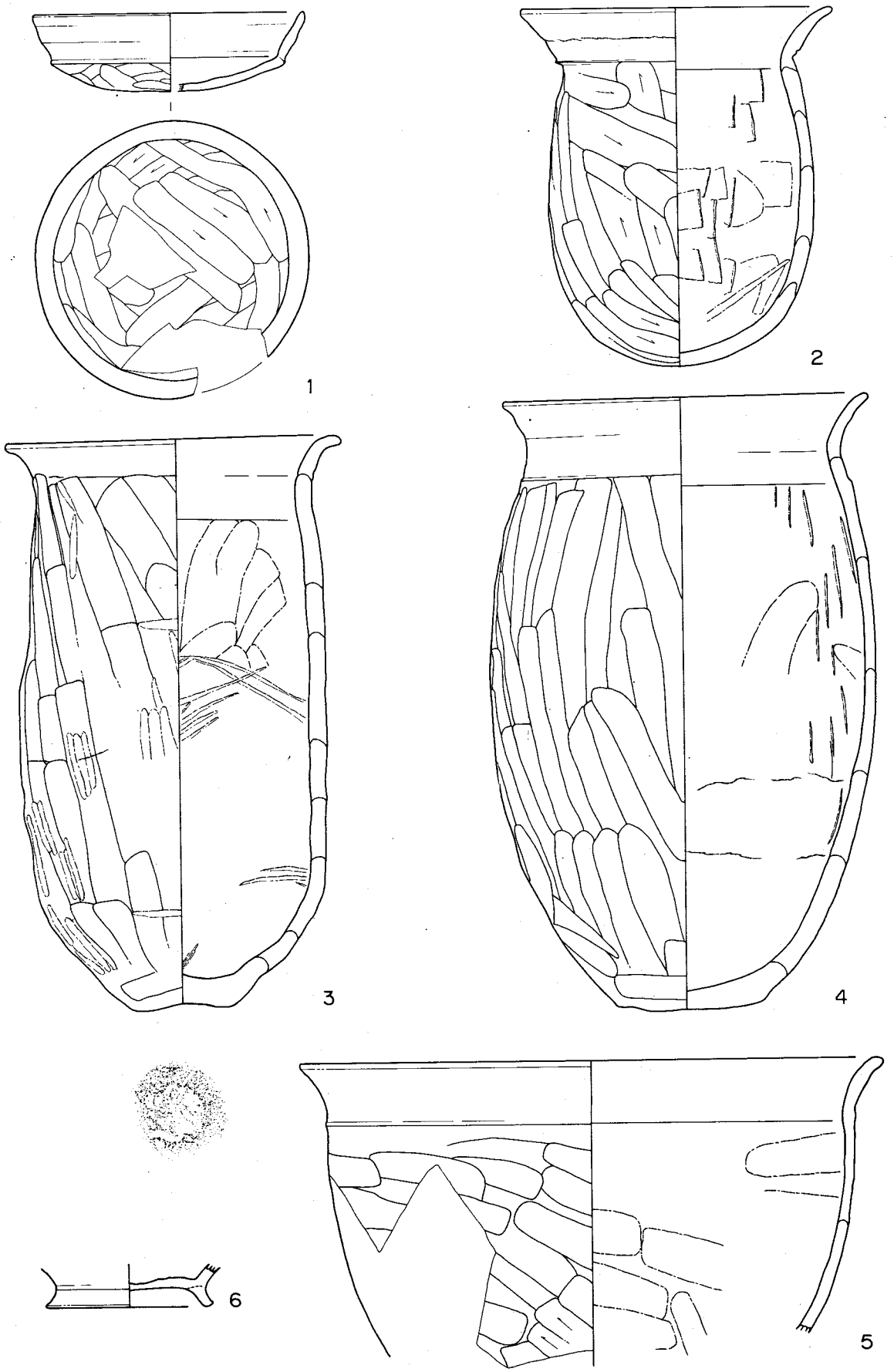
本住居址は２１号住居址の西 3.5 m、Ｌ－（２，３）グリット、Ｍ－（２，３）グリットに位置する。北壁 3.85 m、西壁 4.27 m、南壁 3.74 m、東壁 3.71 mを測る。不正形隅丸長方形を呈する。長軸 4.30 m、短軸 3.74 mで主軸はＮ－ 12°－Wにとる。壁高は北側 39 cm、西側 30 ～ 40 cm、南側 31 cm、東側 34 ～ 43 cm、壁は 80°～ 85° の立ち上がりとなっている。覆土は４層に分けられる。第１層は軽石と砂礫を含む黒褐色土層、第２層は軽石と砂礫を含む黄褐色土層、第３層は焼土と炭化物を含む黒褐色土層、第４層は細かい軽石を含む黒褐色土層、本住居址の場合2,3 層に多量の礫（川原石）がレンズ状堆積にそって流れ込んでいる。床面はよく平坦に踏み固められている。特にカマド前は固くなっていた。柱穴はカマド手前で１箇所検出された。規模は 25 cm× 35 cm、深さ 15 cmである。貯蔵穴はカマド右側北東コーナーに 37 cm× 45 cm、楕円形、深さ 47.5 cmであった。周溝はカマド左袖下から右袖下まで全周している。幅 10 cm～ 15 cm、深さ５～８cmである。

カマドは北壁中央部右寄りに構築されている。壁高の 1/2 を掘り込み幅 15 cm、長さ 141 cmの細長い煙道をつくり燃焼部は住居址内に左袖 60 cm 右袖 52 cmを作り出している。141 cmの煙道の 1/2 は更に広く緩い傾斜で掘り窪められている。焚口は川原石を補強材として使用している。燃焼部中央には支脚を立てる小ピットが存在した。両袖の褐色粘質土の焼け方はこのカマドが長期間使用されたものと考えられる。燃焼部と煙道部の境の傾斜は 40°、煙道から煙出しの傾斜は 85° になっている。

遺物は住居の中央部と南西隅に集中して出土している。No. 1 坏、No. 2，５は小型甕、No. 3，４は長胴甕、No. 6 は須恵器の高台部。本住居址の遺物は大多数が破片であった。多量の自然石の埋没が更にそれを進めたかと考えられる。掘り方は中央部を高く残す工法がみられ深さは５～ 20 cmの浅いものである。



第５３図　２２号住居址・カマド実測図



第５４図　２２号住居址出土遺物実測図

22 号住居址出土遺物観察表

法量の( )は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	住居中央部	坏	口：14.1 高：4.1	微砂粒混入 堅緻	浅黄橙 ～黒褐	やや直線状の口縁部は中位に脹らみを持ち体部との境に稜を有し底部は丸底。	外面：口縁部刷毛撫で、底部篦削り。 内面：同心円状の刷毛目が4cm幅で口縁から口端部に走る。内外面黒色処理。	口辺部一部欠
2	住居中央部	小型甕	口：16.0 胴：13.6 高：18.5	微細砂粒混入 良	浅黄橙	底→口方向篦削り後左上方向篦調整。胴部は直線的で口縁部はシャープに外反する。丸底	外面：口縁部外面撫で、口縁部に3段の輪積み痕有り。 内面：口縁部横撫で、胴部右回転篦整形。	口縁部1／2残
3	西壁付近	甕	口：17.5 胴：16.2 底：5.0 高：29.5	礫（1cm）と砂粒を含む 堅緻	褐色	口縁部は内湾気味に立ち上がり口唇部で外反する。底部は器肉厚くあげ底を呈する。	外面：口縁部撫で、胴部斜方向篦削り後篦磨き。底部葉脈痕有り。 内面：全体幅の広い篦で撫で。胴中下位2mm幅の篦痕、指（7mm幅）痕2条が見られる。	ほぼ完
4	中央と西壁	甕	口：18.7 胴：19.8 底：7.3 高：31.7	微細砂粒混入 堅緻	黄褐色	頸部には稜、胴中央部に最も脹らみを持つ。口～底に行くほど器厚の作りである。	外面：口縁部横撫で、胴部篦削り、底部はやや丸味を持つ平底、胴中位に煤付着 内面：口縁から頸部まで横撫で、胴部篦撫で篦あて痕　輪積痕	完
5	中央と西壁	甕	口：(30.0)	砂粒を多量に混入 良	黄橙	口縁部は外反気味に立ち上がり頸部は撫でによる稜を持ち胴部は丸味を持つ	外面：口縁部横撫で胴部は篦削り 内面：口縁部横撫で　内面全体丁寧な篦撫で	底部欠
6	覆土一括	椀 須恵器	底：8.6	砂粒多量に混入 堅緻	灰白色	底部中央が最も薄く、回転糸切り後高台部を貼付けている。	外面：高台部貼付け後回転撫で。 内面：左回転撫で、底部中央で終わる。	底部と高台部

23 号住居址

本住居址は3号住居址の南3m、J－5グリット、K-（5，6）グリットに位置する。北壁2.9m、西壁3.06m、南壁2.9m、東壁2.9mを測る。東壁より西壁が僅か長いが隅丸方形に類するものと思われる。壁高は35～40cm、主軸はN－83°－Eにとる。長軸3.25m、短軸2.9m、壁高は35～40cm壁は70°～80°の立ち上がりとなっている。覆土は4層に分けられる。第1層は軽石と砂礫を含む褐色土層、第2層は軽石と礫を含む黄褐色土層、第3層は焼土粒と礫を含む黒褐色土層、第4層は1次堆積の黒褐色土層。床面は5～10cmの礫を含む黒褐色土で平坦に整えられているが踏み固めは弱い。柱穴は北西コーナーに1箇所（35×35）cm、深さ23cmが確認できた。貯蔵穴はカマド右脇に（49×45）cm、深さ24cmの楕円形である。周溝はカマド左袖脇から右袖脇まで一周している。幅10cm～15cm、深さ3cm～5cmを測り断面は「U」字状を呈している。

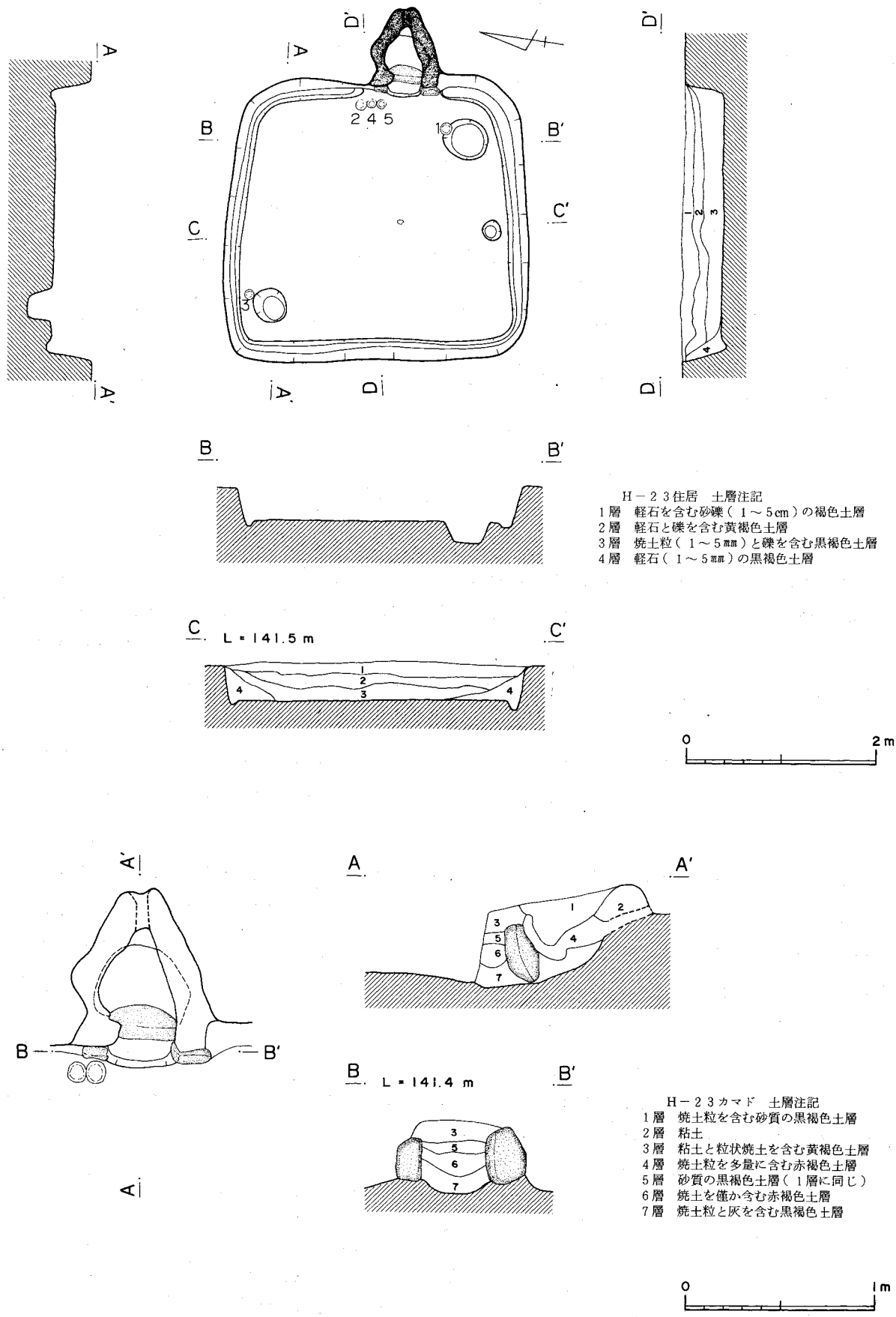
カマドは東壁中央部やや南寄りに構築している。壁面を長さ80cm、幅60cmの三角形に掘り込み焚口部を壁いっぱいに設置し川原石を左右に直立させている。褐色粘質土で壁面を整え燃焼部中央は(6×6)cm、高さ19cmの支脚石が直立した状態で検出された。両袖石の間には53cm×34cm、厚さ36cmの偏平な自然石がいっぱいに塞いだ状態で掘り出されたがこの石は本来鳥居状に設置されたものが崩落したものであろう。燃焼部から煙道部は45°で立ち上がり外部の煙出しへ導いている。ここで特筆されることは煙出し穴が水平に付いていることである。

遺物はカマド左袖脇から3個体、貯蔵穴脇から1個体、Pit 1壁際で1個体、何れも坏が出土している。掘り方は地山の黄色砂礫土と黒色土の混土で築かれていた。

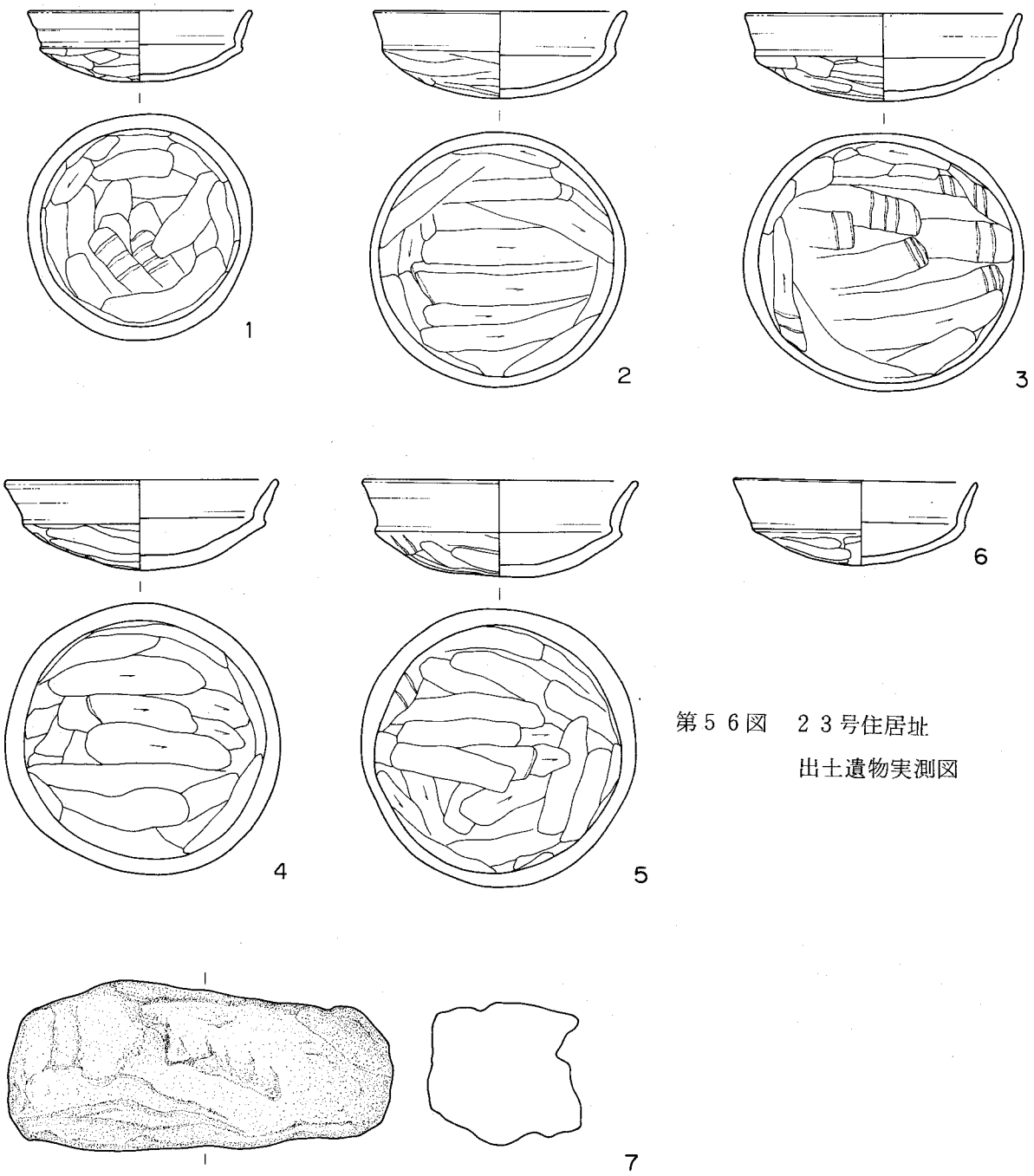
23 号住居址出土遺物観察表

法量の( )は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	貯蔵穴	坏	口：10.2 高：3.3	細砂粒混入 堅緻	橙	口縁部は僅かに外反する。口縁と体部の境に稜を有す。口縁部に歪みが見られる。	外面：口縁部内外面に刷毛が見られる。底部篦削り、篦あて痕有り。 内面：丁寧な撫で調整、凹凸が目立つ。	完
2	カマド左脇	坏	口：11.6 高：4.0	微砂粒混入 堅緻	橙	口縁部は僅か外反し底部は丸底を呈す。外稜を有し器厚はほぼ均一である。	外面：口縁部は内外横撫で、底部は篦削り 内面：篦撫で	ほぼ完



第５５図　２３号住居址・カマド実測図



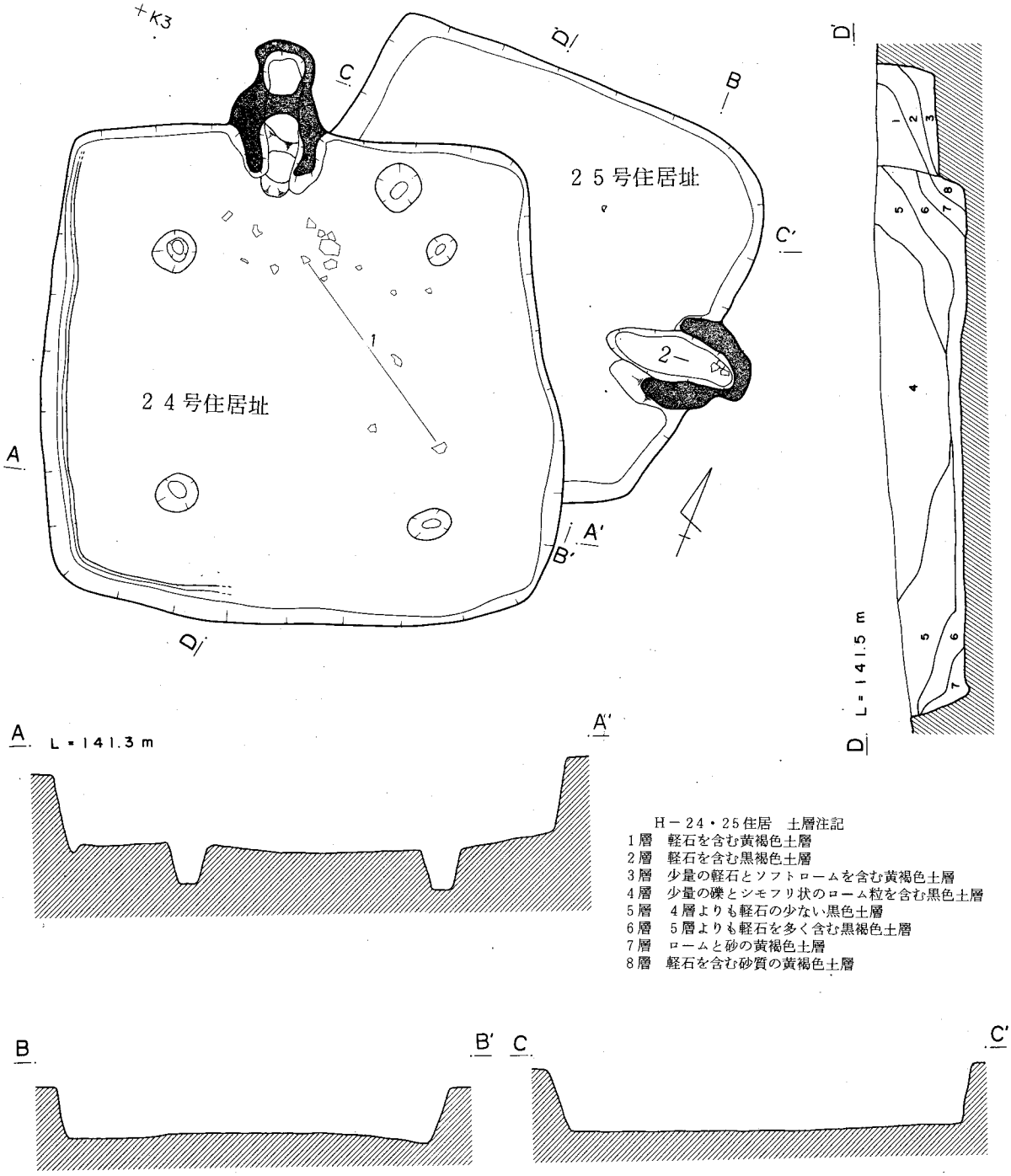
第５６図　２３号住居址
出土遺物実測図

２３号住居址出土遺物観察表

法量の( )は推定値

番号	出土位置	種類	法量 (cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
3	北西コーナー	坏	口：12.6 高：4.0	微砂粒混入 良	赤橙	口縁部は楕円形で外反しながら開く。底部は丸底。	外面：底部摩耗し削り不明瞭、篦あて痕有り 内面：撫で、凹凸がみられる。	ほぼ完
4	カマド左脇	坏	口：12.7 高：4.2	微砂粒混入 堅緻	赤橙	口縁部は外反しながら開く、底部から体部にかけて丸味を持つ外稜を持つ。	外面：口縁部横撫で、底部篦削り、繊維痕有り 内面：撫で、篦あて痕、粘土付着。	ほぼ完
5	カマド左脇	坏	口：12.6 高：4.6	微砂粒混入 良	橙	歪む。口縁部は緩やかに外反し外稜を有す。底部は丸底。	外面：口縁部横撫で、体部から底部は不定方向篦削り、ひび割れ２ケ所あり。 内面：撫で、僅か凹凸が見られる。	完
6	カマド一括	坏	口：(11.1) 高：4.0	赤褐色微細砂粒混入 堅緻	橙	口縁部は緩やかに外反し底部は丸底、不明瞭な稜を持つ器形全体に歪みが目立つ。	外面：口縁部横撫で。底部は篦削り。 内面：撫で、粘土付着。	1／2残
7	カマド内	支脚石	長辺１7.3　短辺 6.5　厚さ 6.5　重量 1,338.0 g 石質 輝石安山岩　上部は燃焼により変色がみられる。					

24・25 号住居址



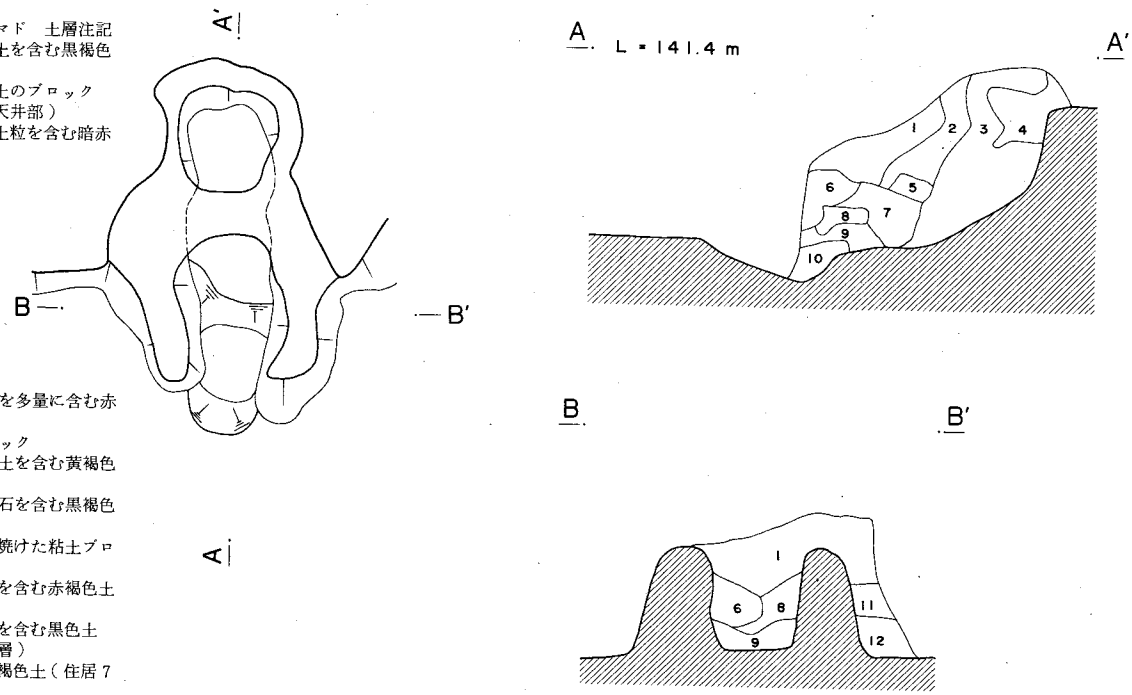
H－24・25住居　土層注記
1層　軽石を含む黄褐色土層
2層　軽石を含む黒褐色土層
3層　少量の軽石とソフトロームを含む黄褐色土層
4層　少量の礫とシモフリ状のローム粒を含む黒色土層
5層　4層よりも軽石の少ない黒色土層
6層　5層よりも軽石を多く含む黒褐色土層
7層　ロームと砂の黄褐色土層
8層　軽石を含む砂質の黄褐色土層

第57図　24・25号住居址実測図

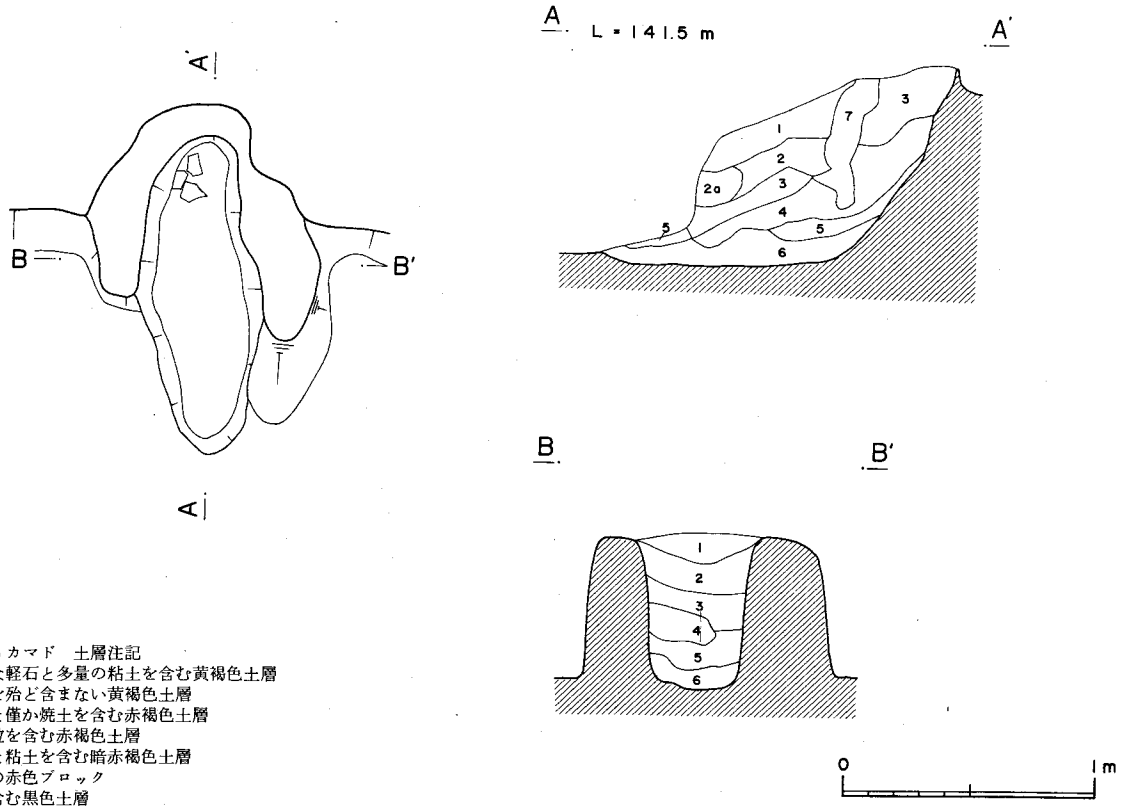
24 号住居址

本住居址は22号住居址の北側2m、K－(3, 4)グリット、L－(3, 4)グリットに位置する。北壁4.4m、西壁4.46m、南壁4.7m、東壁4.4m、僅かに南側に広がりを持つ隅丸方形を呈する。主軸はN－18°－Wにとる。壁高は北側51.5cm、西側49.5cm、南側62.5cm、東側68.5cm、ほぼ75～80°の立ち上がりで

Ｈ－２４カマド　土層注記
1層　焼土、粘土を含む黒褐色土層
2層　焼けた粘土のブロック（カマド天井部）
3層　軽石と焼土粒を含む暗赤色土層
4層　粒状焼土を多量に含む赤褐色土層
5層　粘土ブロック
6層　軽石、焼土を含む黄褐色土層
7層　焼土と軽石を含む黒褐色土層
8層　赤褐色に焼けた粘土ブロック
9層　粒状焼土を含む赤褐色土
10層　黒色灰層
11層　軽石と礫を含む黒色土（住居４層）
12層　砂質の黄褐色土（住居７層）



２４号カマド実測図



Ｈ－２５カマド　土層注記
1層　僅かな軽石と多量の粘土を含む黄褐色土層
2層　焼土を殆ど含まない黄褐色土層
2a層　粘土と僅か焼土を含む赤褐色土層
3層　焼土粒を含む赤褐色土層
4層　焼土と粘土を含む暗赤褐色土層
5層　焼土の赤色ブロック
6層　灰を含む黒色土層
7層　カマド天井部、粘土と焼土ブロック層

第５８図　２４・２５号住居址カマド実測図

ある。覆土は第4層シモフリ状のロームブロックと軽石を含む黒色土層、第2層は第1層より軽石が少ない黄褐色土層、第3層は（0.1～1.0）cmの軽石を含む黒褐色土層、第4層はロームと黄色砂質土の混入する黄褐色土層であった。床面はカマド周辺を除いて全体としては軟弱であった。柱穴は、Pit 1（43×40）cm、深さ45.5cm、Pit 2（40×35）cm、深さ40.5cm、Pit 3（43×30）cm、深さ38.5cm、Pit 4（35×25）cm、深さ45cm、なおPit 1とPit 3は掘り方の段階で確認されたものである。Pit 5はカマドの右側にあり（45×47）cm、深さ42cm、位置的には貯蔵穴の位置ではあるが底面も狭く貯蔵穴としては規模が小さい。周溝は北西コーナーから南側1/3程で止まっている。カマドは北壁中央部に構築している。壁を幅85cm、長さ85cmに掘り込み、焚口から燃焼部は緩い傾斜であるが、煙道から煙出しの間は始め40°の傾斜で、煙出しは80°になっている。左袖幅17cm、長さ46cm、右袖幅21cm、長さ43cmを住居址内に作り出している。焚口上幅32cm、下幅22cm、燃焼部上幅42cm、下幅29cm、煙出しの上の径39cm、下の径20cmを測る。良好な残存状態であった。燃焼部は赤褐色に焼けよく使用されたものと思われる。

遺物はNo.1丸胴甕（口縁から胴部）、No.2坏の2点である。掘り方は中央部を高く残す工法が使われている。中央部は7cm、周囲の深いところで12cm～23cmを測り、土層はロームと地山の砂質層を含む黄褐色混土層である。

24号住居址出土遺物観察表

法量の（ ）は推定値

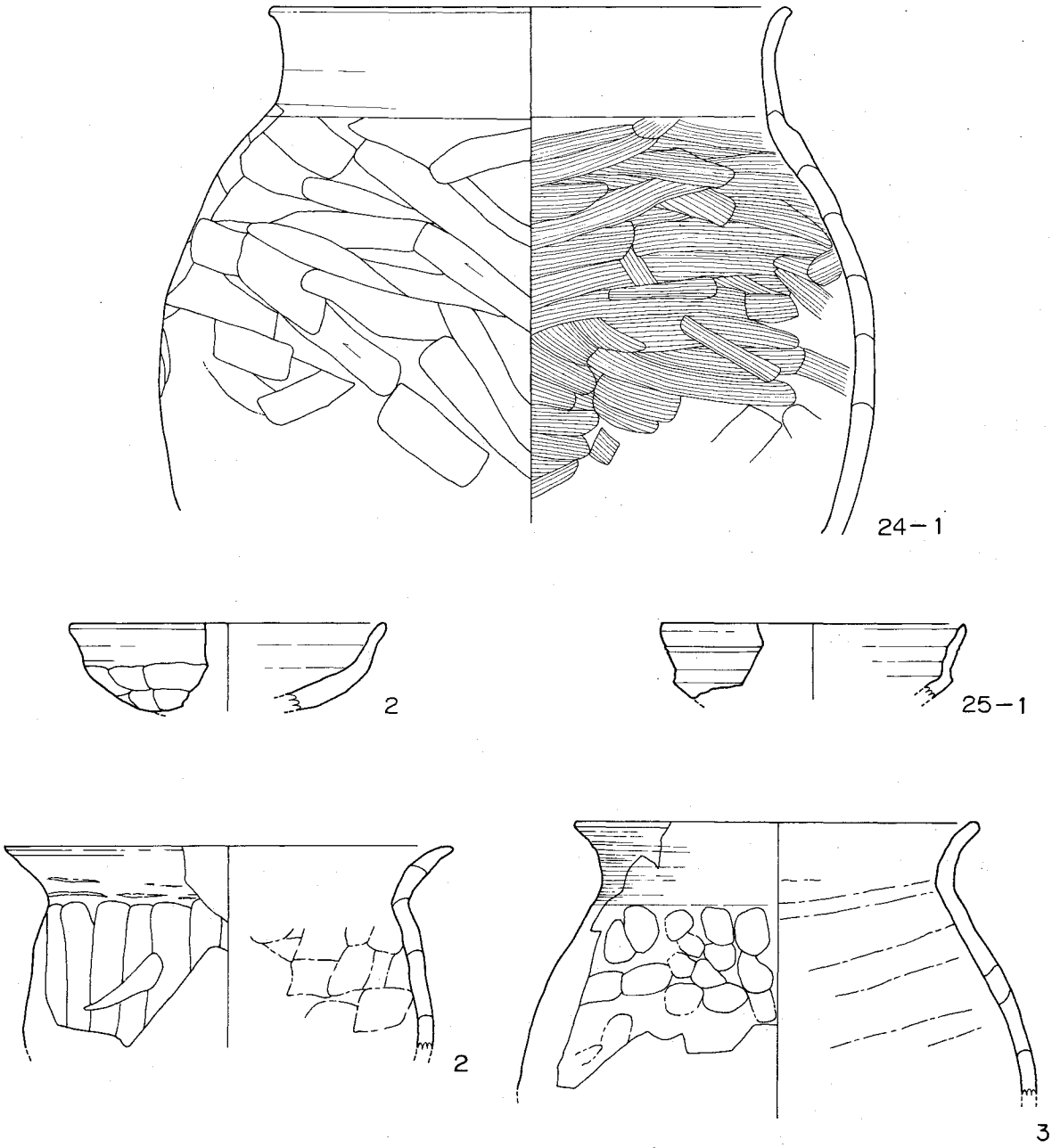
番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	覆土中	甕	口：(22.0) 胴：31.5	細砂と礫（1cm）を含む 堅緻	褐色	口縁部は僅かに外反し頸部に稜を有す。胴中央部に脹を持つ	外面：口縁部横撫で、胴部は斜方向箆削り 内面：口縁横撫で胴部は横方向刷毛撫で胴部の½は灰色を呈す。	1/2残
2	覆土一括	坏	口：13.8	砂粒（黒雲母・軽石）を多量に含む 堅緻	橙	口縁部は内湾しながら立ち上がり口唇部で外傾する。器厚の作りで口～底方向で更に厚くなる	外面：口縁部横撫で、体部箆削り。 内面：全体に回転撫で。	口縁部 1/3残

25 号住居址

本住居址は23号住居址の西2.2m、J－（3, 4）グリット、K－（3, 4）グリットに位置する。24号住居と南西部が重複し床面を切られているので不明の点が多い。北壁3.95m、東壁3.7m、他の2辺は不明である。北西コーナー・南東コーナー・北東コーナーの様子から、隅丸方形を呈するものと思われる。主軸は（N－90°－E）真東を向いている。覆土の第1層は軽石を含む黄褐色土層、第2層は焼土と粘土粒を含む黄褐色土層、第3層は焼土を含む褐色土層であった。床面は地山の黄色砂質層とブロック状ロームの軽石混じりの黒色土でよく整えられているが、軟らかい床面であった。掘り込みは北側で63cm～70cm、東側で55cm～65cmを測る。貯蔵穴はカマドの右側に存在し（50×45）cm、深さ95cm、ほぼ円形を呈している。本住居址では柱穴は1箇所も確認できなかった。また周溝も検出されなかった。

カマドは東壁中央部やや南寄りに構築されている。壁を幅90cm、長さ42cmに掘り込み、住居址内の作り出しは左袖75cm、右袖で84cmである。右袖基部に地山の黄色砂質層が床面より15cmほど残っていることから、荒掘り段階でカマド部分を残していることが推察される。焚口部から燃焼部にかけては緩い傾斜であるが煙道は60°の傾斜で煙出しへと続く。カマドは全長1.37mを測る。長期間使用されたと思われ壁内面は赤褐色に焼けている。

遺物はNo.1坏、No.2長胴甕（カマド内）、No.3甕等の破片が出土している。掘り方は中央部を高く残す工法で構築されたことが窺える。



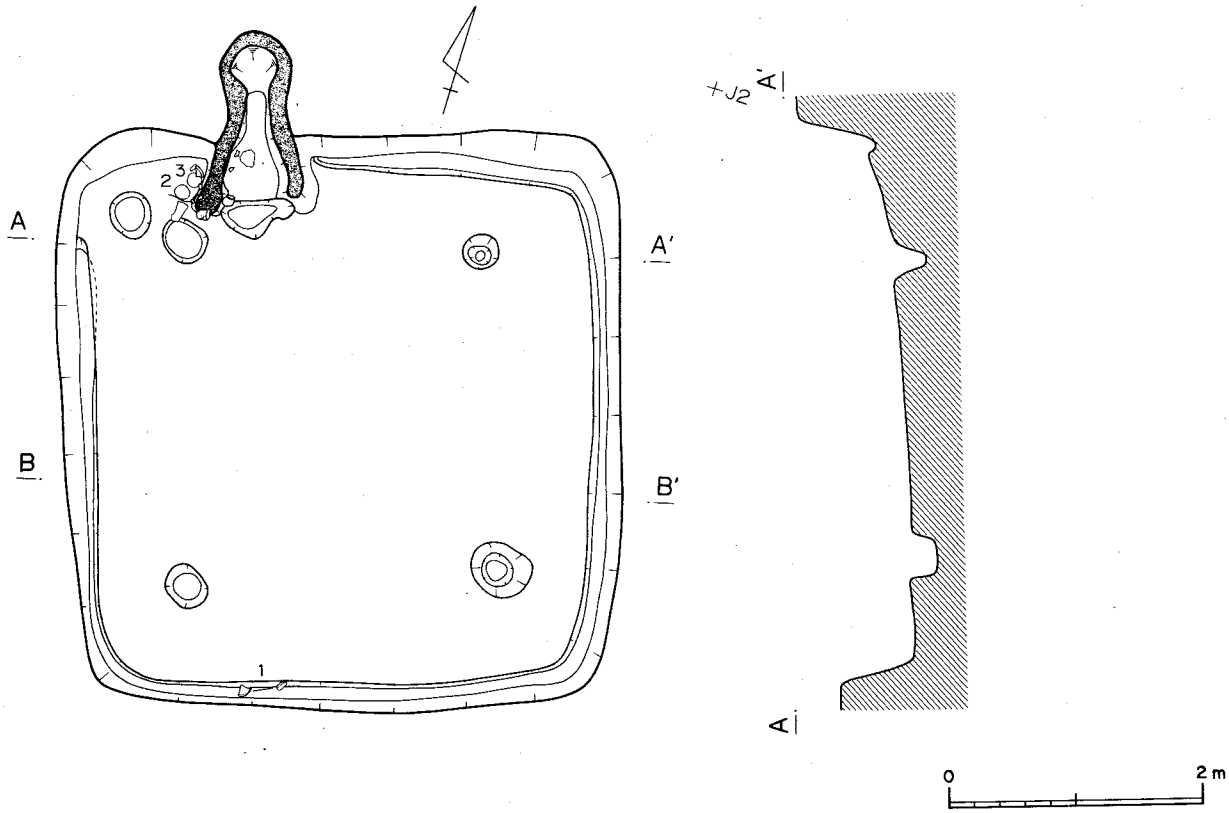
第５９図　２４・２５号住居址出土遺物実測図

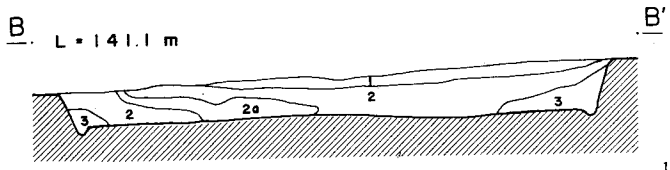
２５号住居址出土遺物観察表

法量の( )は推定値

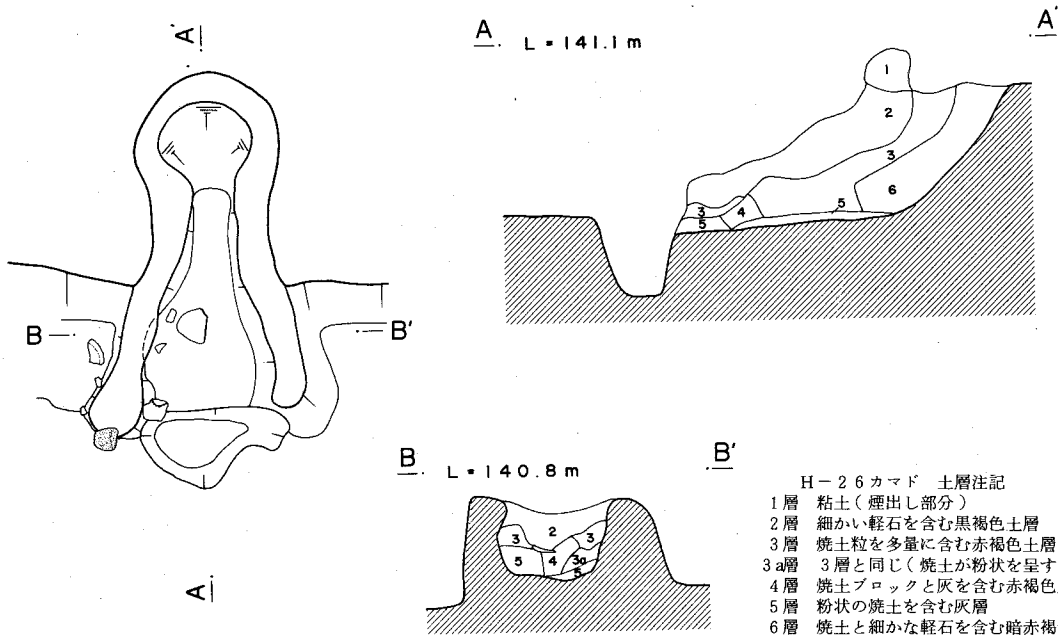
番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	覆土一括	坏	口：(13.4)	１～３mmの砂粒含む　堅緻	黒色	口縁部はゆるく外反しながら立ち上がり２条の沈線がみられる	外面：口縁部横撫で、体部は篦削り。煤付着 内面：口縁部体部とも丁寧な撫で。黒色処理	口～体 1／4残
2	カマド内	甕	口：(20.0)	多量の砂粒を含むやや軟	黄褐色	口縁部は「く」字状に外反し、胴部は僅か脹みを持つ。	外面：口縁は粗い撫、胴縦方向篦削り。頸部篦あて痕有り。 内面：遺存部分については内面全体撫で。	口～胴上半部の1／4残
3	覆土一括	甕	口：(18.0)	礫と砂粒を混入良	赤褐色	口縁部はゆっくり立ち上がり口唇部で外反する。胴部は脹みながら開く。	外面：口～頸は横撫胴部は指頭圧痕、煤付着撫で。 内面：口縁部横撫で、胴部刷毛による斜方向撫で。	口～胴1／5残

26号住居址



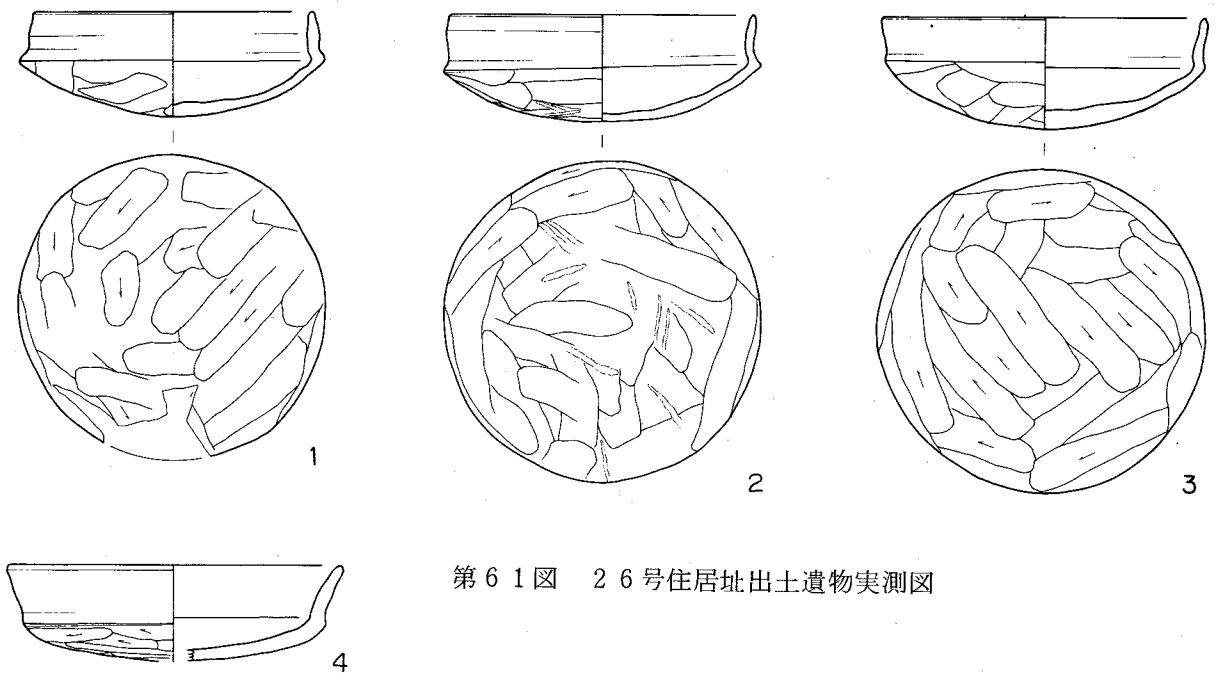


H－26住居址　土層注記
1層　軽石（0.5～1cm）と礫（大20cm小2～3cm）を含む黒褐色土層
2層　1層より礫も軽石も少ない黒褐色土層
2a層　砂質のロームを含む黄色砂質層
3層　礫を含む黒褐色土層（軽石はごく僅か）



H－26カマド　土層注記
1層　粘土（煙出し部分）
2層　細かい軽石を含む黒褐色土層
3層　焼土粒を多量に含む赤褐色土層
3a層　3層と同じ（焼土が粉状を呈す）
4層　焼土ブロックと灰を含む赤褐色土層
5層　粉状の焼土を含む灰層
6層　焼土と細かな軽石を含む暗赤褐色土層

第60図　26号住居址・カマド実測図　0　1m



第６１図　２６号住居址出土遺物実測図

本住居址は２４号住居址の北西3.5ｍ、Ｊ－（０，１，２）グリット、Ｋ－（０，１，２）グリットに位置する。北壁4.45ｍ、西壁4.55ｍ、南壁4.18ｍ、東壁4.55ｍを測る。隅丸方形を呈する。主軸はＮ－19°－Ｗにとる。壁高は北側49㎝、西側36㎝、南側24㎝、東側30㎝を測る。壁は80°～85°の立ち上がりとなっている。覆土は３層に分けられる。第１，２層は二ツ岳軽石と多量の礫を含む黒褐色土層、第３層は軽石が極わずかな黒褐色土層である。貯蔵穴とカマド周辺で堅い床面がみられた。カマドの左側に坏数個体が置ける棚状遺構があり、隣接して貯蔵穴が設けられている。貯蔵穴は80㎝～60㎝、深さ46㎝の長楕円形を呈している。周溝はこの貯蔵穴の南側から始まり一周してカマド右脇で終わっている。柱穴はＰｉｔ１（38×31）㎝、深さ53㎝、Pit2(37×29)㎝、深さ44㎝、Ｐｉｔ３（48×40）㎝、深さ76.5㎝、Ｐｉｔ４（29×27）㎝、深さ61㎝、の４本が主柱穴と思われる。

カマドは北壁1／4で西側に構築されている。荒掘りの段階で幅30㎝、長さ70㎝掘り込んでいる。壁体は褐色粘質土で構築され、左袖は幅20㎝、長さ100㎝、右袖は幅20㎝、長さ85㎝住居址内に作り出している。焚口部前面に（75×35）㎝の灰掻き穴が設置されている。燃焼部火床は床面と同レベルに置かれており、煙道は40°の緩い傾斜で煙出しへ続く。火床、煙道、煙出し共に赤褐色を呈し長期間使用されたと推察される。カマドの主軸と住居の主軸と同一方向（Ｎ－19°－Ｗ）を示している。

遺物はカマドと貯蔵穴で坏４点が出土し、南壁際から坏の破片が出土している。掘り方は中央部を高く残す工法が使用されており（壁高と掘り方を加えると、北68㎝、西56㎝、南36㎝、東62㎝となる）、北西コーナーの貯蔵穴から南西コーナーまでが特に深く荒掘りされている。

26 号住居址出土遺物観察表

法量の( )は推定値

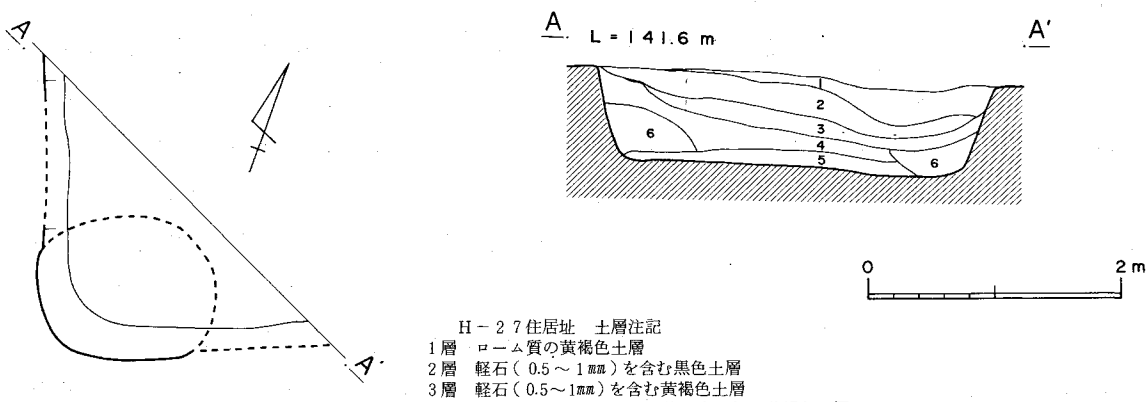
番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	南壁より	坏	口：11.2 高：4.2	白色砂粒混入 堅緻	褐色	口縁部は内湾気味に立ち中位が脹らみ、強い稜を持ち底部は偏平である。内外面黒色塗布	外面：口縁部横撫で、体部篦削り。 内面：撫で、底部は凹凸が目立つ。	ほぼ完
2	カマド左脇	坏	口：12.6 高：4.3	微砂粒混入 堅緻	内外面黒色	口縁部は直線状に立ち、不明瞭な外稜を有し底部は丸底でひび割れが口縁から底部中央に入る	外面：口縁横撫で、底部は篦削り後篦撫で。 内面：口縁部から体部まで横撫で、底部中央は撫で。	完
3	カマド左脇	坏	口：12.8 高：4.5	黒色砂粒混入 良	黄橙	短めの口縁部はまっすぐに立ち底部は丸底。外稜は不明瞭。	外面：口縁横撫で、体部から底部は篦削り。良く丸く整形されている。 内面：丁寧に撫でられているが表面は荒れている。	完
4	一括	坏	口：(13.4) 高：3.8	黒色細砂粒混入 良	浅黄橙 底部黒色	口縁部は僅か外反しながら立ち底部は偏平、稜は不明瞭	外面：口縁部横撫で、底部は篦削り後篦撫で炭化物の付着が見られる。 内面：荒れて整形方法不明。ざらついている	1/3残

27 号住居址

本住居址は7号住居址の北東5.6m、K－15、L－15グリットに位置する。9号土坑と重複する。北側大半が調査区域外に延びるため全容は不明である。

遺構は南西コーナー付近を調査したのみである。壁は確認面から床面まで53cm～60cmを測るが、土層断面の所見から80cm～85cm程の壁高を有していたと推定される。

床面は平坦に整えられているが軟弱であった。西壁、南壁とも攪乱により一部壁が崩壊している。



H－27住居址　土層注記
1層　ローム質の黄褐色土層
2層　軽石（0.5～1㎜）を含む黒色土層
3層　軽石（0.5～1㎜）を含む黄褐色土層
4層　砂質ブロックのシモフリ状に含まれる黄褐色土層
5層　地山のロームを含む黄色砂質層
6層　ソフトロームを含む褐色土層

第62図　27号住居址実測図

29 号遺構

本遺構はH－（1，2）グリット、I－（1，2）グリットに位置し、当遺跡の西端にあたり、石室とH－26、H－2の中間地点に存在する。プラン確認時では二ツ岳軽石を多量に混入する黒褐色土層の落込みが見られた。西壁4.2m、北壁2m、南壁1.7m、東壁は湾曲している。壁もしっかりした立ち上がりでなく、東壁の湾曲中央部にあった焼土粉も僅かであり床面も固く締まっていない。土層は軽石を含む黒褐色土が堆積していた。本遺構は以上の所見から人為的に掘削された物と思われるが使用可能なところまで行かない段階で中途放棄せざるを得なかった物と思われる。29号遺構が住居址構築の荒掘り段階の未完成住居と考えるならばこの段階でカマドの位置を決め火を焚きカマド部分の焼き込み（湿度取り）をしている物と考えられる。

引切１号墳（上毛古墳綜覧記載もれ）

イ、古墳発見の経緯及び墳丘

本古墳所在地には、上毛古墳綜覧勢多郡南橘村第４０号引切塚があった。形状、所在地等は円形　青柳字引切塚875－１番地　径４８尺、高さ１０尺の記載がある。しかし現状においては既に削平され住宅地・畑地・建築資材置場になっており、形状主体部は明らかでない。一部住宅部分河原石の散乱にローム層の堆積があり古墳があったことを想像できる程度である。今回宅地分譲による開発行為に伴う事前発掘調査によって発見された古墳は前記の古墳と違うものである。

本古墳は既に削平されており外観地形からは確認不明であった。引切塚１号墳は住居址の発掘調査のため調査対象外（建築関係の資材置場になっており土は他の分譲地の盛土のため３～４ｍ掘削された部分）の他の地層を精査中に断面部分から河原石が見つかり拡張調査した為に発見できたものである。主体部のみで周掘、墳丘は確認出来なかった。しかし外形は円墳と思われるが確たる証拠はない。

本古墳の構築基盤は浅間山Ｃ軽石、ＦＰ軽石混土の黒色土を２０～２５㎝掘込み石室の根石を設置している。石室の開口部を南に向けており石室羨道部の根石一石づつのみで２段目以上の壁石は既に取り除かれていた。玄室の奥壁の根石も既に除去されている。

ロ、内部施設

主体部は輝石安山岩の自然石の横穴式両袖型石室で、主軸はＮ－０°－Ｅにとっている。

石室各部の寸法は次の通りである。　　単位　㎝

全長	玄室長			玄室幅			羨道長			羨道幅		
	右	中央部	左	奥	中央部	袖	右	中央部	左	袖	中央	入口
465	228	225	226	85	115	115	240	239	237	73	67	68

全長、玄室長に付いては、奥壁部分の石が除去されている為根石のグリ石及び掘込みより復元推定値である。

石室は、当時の表土である浅間Ｃ軽石、ＦＰ軽石混じりの黒色土を２０～２５㎝掘込み、グリ石を置き奥壁及び両側壁の根石を設置している。石材の使用方法としては羨道入口の両側及び袖部の両側の石を小口に据えており他は平の部分を石室内に向けて据えている。石と石の間に小石を詰めている。

玄室と羨道を区切るため玄室入口部に框石４石が壁面と平行に置かれている。玄室、羨道の床面には２０×２０㎝、１０×１０㎝、１０×１５㎝程の河原石が一面敷並べられている。（羨道入口から約５０㎝までの床面部分には敷き詰めていない）川原石敷の下の地盤は叩いて面を固くしている。

羨道入口には５０㎝×４５㎝の石１個が残存し閉塞の役をしている。他の閉塞の石は除去されており不明である。

裏込めは、玄室・羨道の内側より約１ｍで玄室を囲んでおり、何れも河原石を使用し根石部分の平面は馬蹄形を呈する。（しかし右側は不明）

ハ、出土遺物

石室は既に開口し攪乱を受けており、壁体の一石づつしか残存していないため原位置をとどめていないものと思われる。しかし玄室部分から鉄鏃３本、刀子の破片１刀分の出土があった。羨道部分から鉄鏃１本の出土があった。他に前庭から須恵器のハソウと須恵器片が出土している。

ニ、まとめ

遺存状況はあまり良くないので古墳の外形は不明であるが、辛うじて古墳の石室部分の根石が残されていた。

その為石材の使用方法、古墳構築の尺度、企画性を明らかにすることが出来た。

◎本古墳は浅間山Ｃ軽石、榛名山二ツ岳ＦＰ軽石を混入した黒色土層を少し掘り窪めて構築されていた。

◎玄室は、奥壁部分が一番狭く（使用石材の制約があった）一目すると長い台形状に見える。

◎玄室長と羨道長がほぼ同じ長さである。

◎羨道入口幅を１とすると羨道長３、玄室入口の幅が４、奥壁部分が1．２、玄室長が３となる。

◎使用尺度が唐尺を使用しているものと思われる。

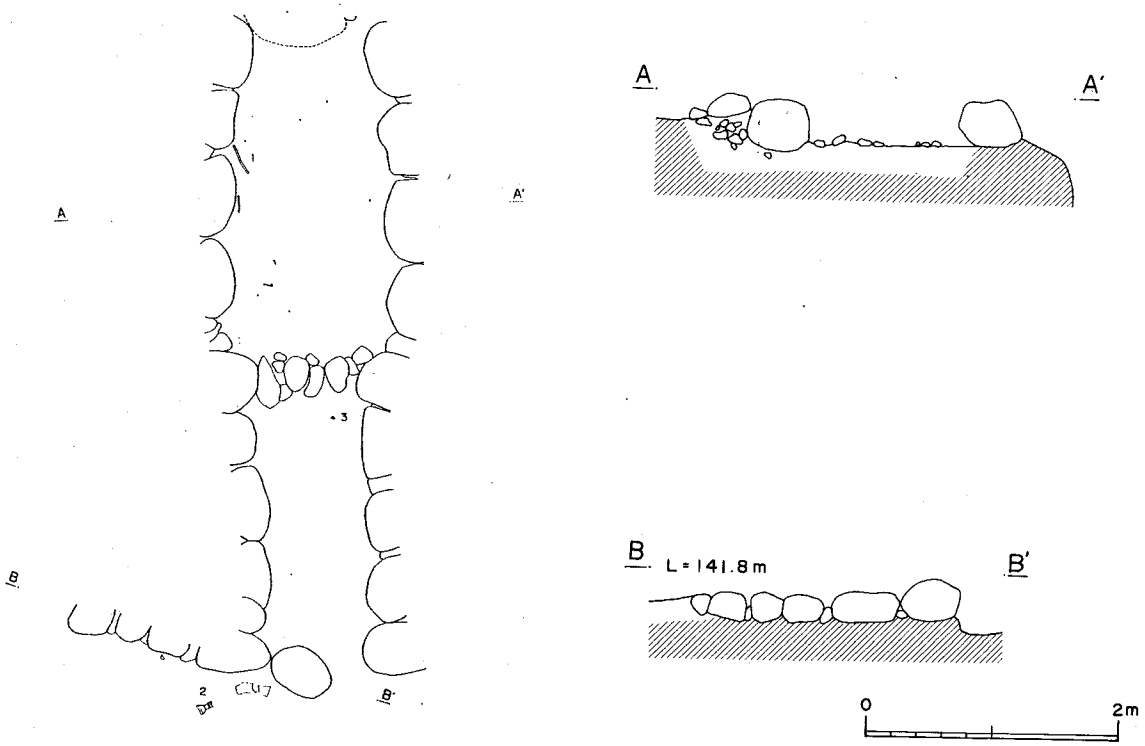
◎玄室の幅と長さが１：２である。

◎以上、構築基盤の地層、古墳の使用尺度企画性、出土遺物からして７世紀中頃に構築されたものと思われる。

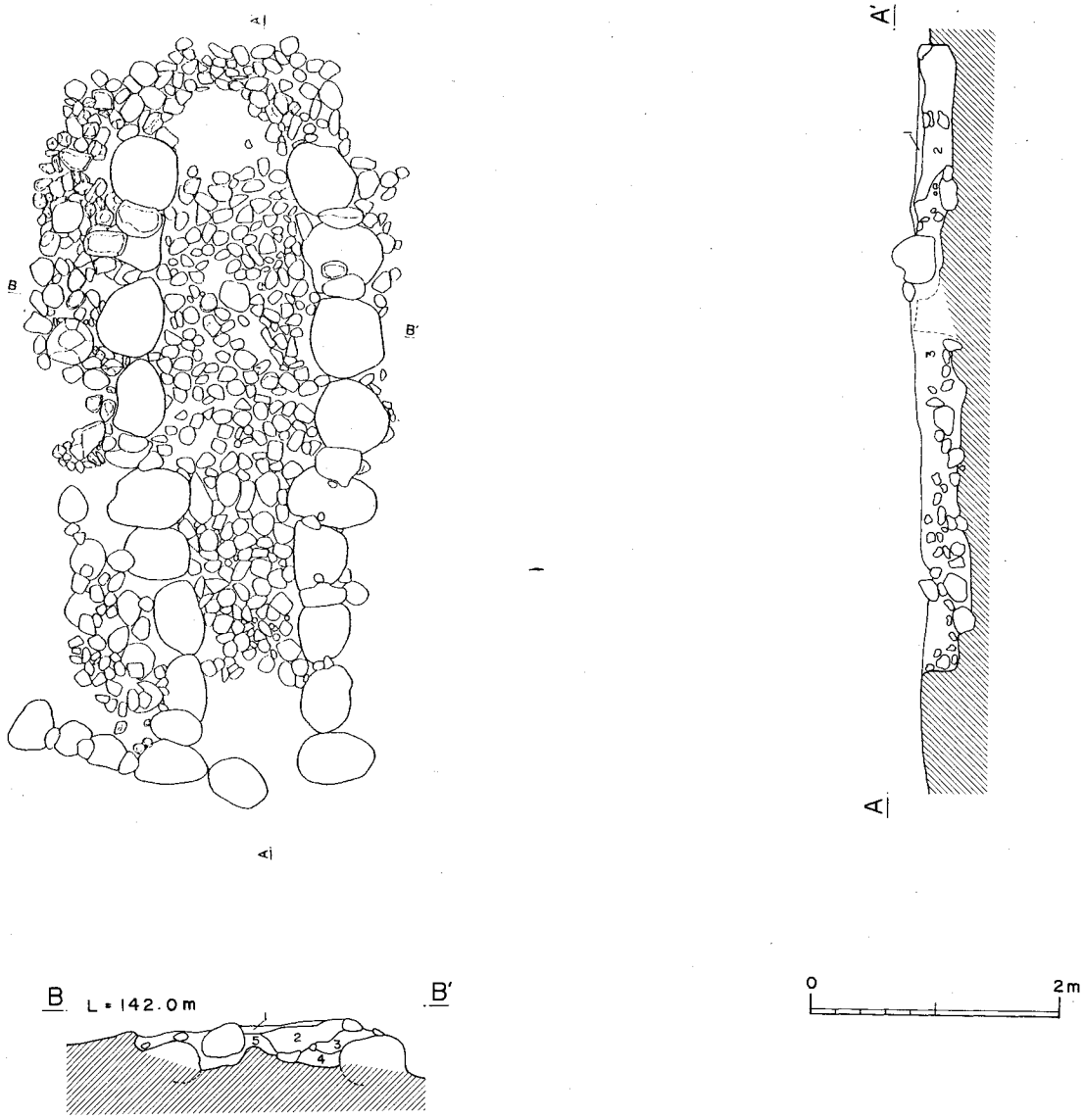
◎古墳時代の河原石から旧利根川の流路を考える一資料が発見された。

◎墳丘の形態はすでに削平されていて不明であり周堀も削平掘削されており明らかではないが、石の大きさ、使用石材の扱い方、企画性から考えると直径９～１０ｍの小円墳と思われる。

◎旧南橘村の丘陵地には、このような小さな古墳が存在していたと考えられるが新たに資料が加えられたことは今後の古墳分布を知る上で大変貴重なものと考えられる。（執筆・福田紀雄）



第６３図　引切塚１号墳石室実測図



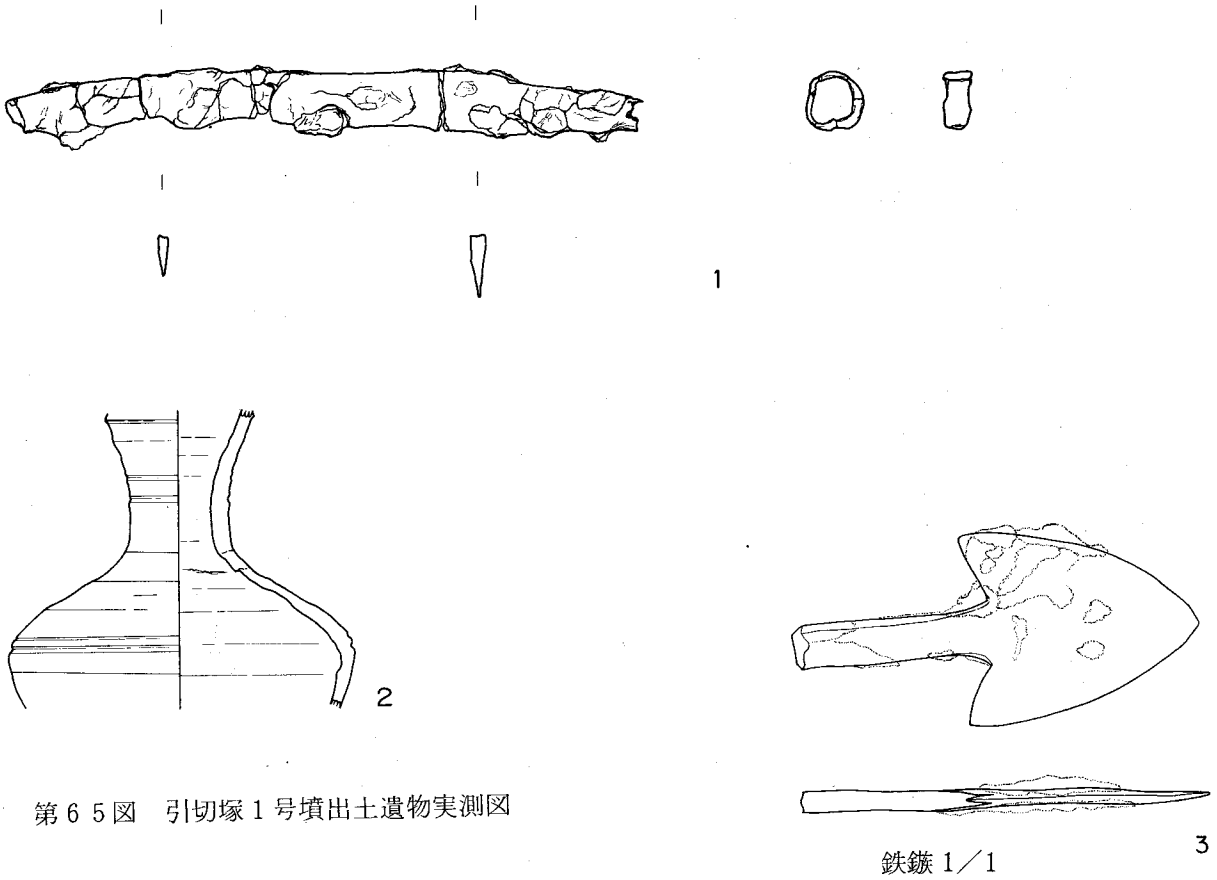
第６４図　引切塚１号墳断面・平面図

1層　ブロック壁の基礎（砕石入）
2層　軽石（0.5～1cm）と流砂を含む黄褐色土層
3層　軽石と少量の礫を含む黒褐色土層（叩いて面を固くしている）
4層　ほとんど軽石を含まない褐色土層
5層　砂質の黄褐色土層

引切塚１号墳出土遺物観察表

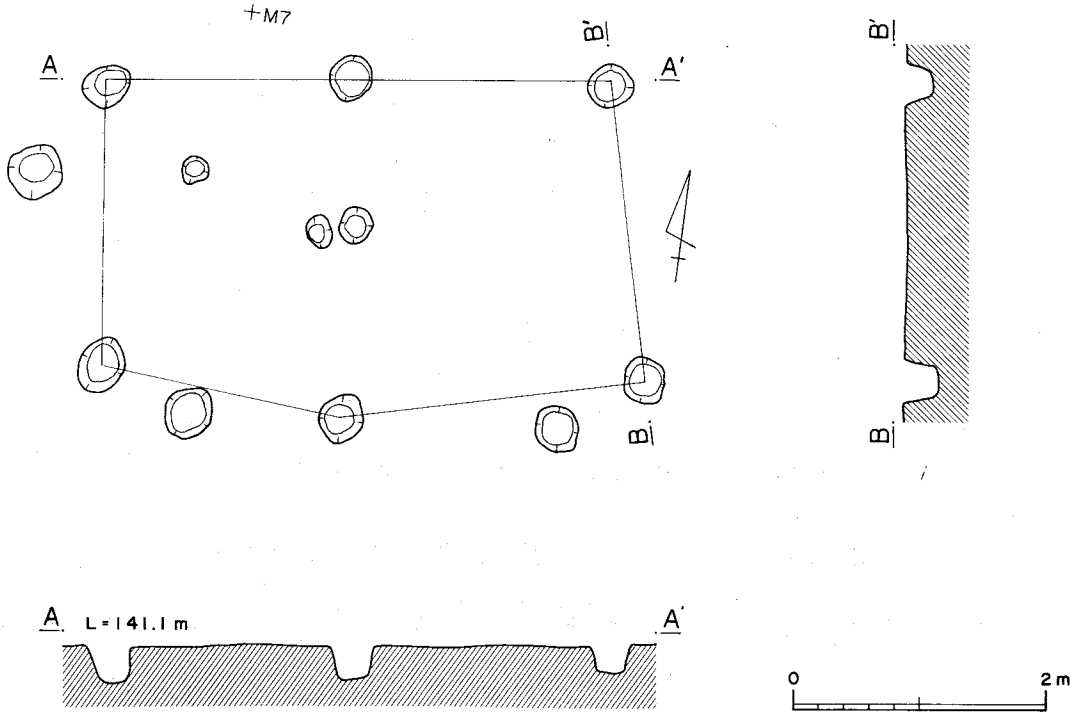
法量の（ ）は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	石室内	刀子	刃部２1.0　長さ２5.3　茎部4.3　平造りの刀身関部に９mmの円筒形の金具が残存した。茎尻を一部欠損する。鉄製品　ほぼ原型の長さを示すものと思われる。錆化が著しい。目釘穴は見られない。重量８4.78ｇ					ほぼ完
2	前庭	ハソウ	頸：（ 3.9） 肩：（13.8）	緻密白・黒色鉱物混入 堅緻　焼締り有り	灰白色	最大径を肩部に持ち３mm幅の沈線を施す。頸部にも２本の沈線が見られ、口縁は大きく外反す	外面：口縁は大きく外反し、肩～胴表面篦削 内面：頸部と胴部の接合痕明瞭。丁寧な回転横撫でが施されている。	頸部から胴部
3	羨道部	鉄鏃	鉄製品　関が８～９mm　茎部が2.5cm残存する。重量6.182ｇ　石室内より出土、有茎　で関が広く張り出す広根式の鏃である。					ほぼ完



第６５図　引切塚１号墳出土遺物実測図

掘立遺構と柱穴群



第６６図　掘立遺構実測図

掘立遺構と柱穴群

N－（6, 7, 8）、O－（6, 7, 8）、P－（6, 7, 8）グリット地区に柱穴群が検出された。この地区では住居址が検出されていない事は古墳時代後期から平安時代までの間に集落を営むに当たり掘立建築をする地域が限定されていたものと思われる。しかもこの集落の中で最大規模の5号住居址とその南西方向の位置に掘立柱遺構が存在している。その内M－6グリット付近で1棟分の掘立遺構が確認された。棟方向は東西で方位はN－87°－Eを示す。桁行2間、梁行1間でわずかに歪みを持つ。

南側中央の柱穴は中央西寄りに位置し、規模は桁行2.05m、梁行1.15m、面積2.36 m^2である。

柱穴はほぼ円形で柱痕は見られない。出土遺物はない。

鬼頭氏は、これらの掘立柱建物は、柱穴からの出土土器が少ないこともあって、時代の前後判定が竪穴住居跡ほどにはつきにくいのだが、一応山田水呑遺跡の場合では竪穴住居とならんでこの集落の全時代を通じて使用されていたものと思われる。他の東国の集落跡でもしばしば見られるのだが、一般的傾向としては掘立柱建物が立てられていた場所には竪穴住居は建てられず、またその逆の場合もない。おそらく掘立柱建物と竪穴住居とを村民が十分意識して、それぞれの場所を設定して、同時に作り営んだもので、時代が降るにしたがって建て替えに際しても二種類の建物をたてる領域が、あまり入り組まなかったことを示しているのではないか。つまり掘立柱建物と竪穴住居とを使い分けて同時に営んでいたわけだ。しかし「どうしてなのか」ということはよくわかっていない。（注鬼頭清明　古代の村　　岩波書店　1985年）

(2) 奈良・平安時代住居址

8 号 住 居 址

本住居址は7号住居址と重複する、M－（12, 13）グリット、N－（12, 13）グリットに位置する。北壁は7号住居址と重複している。北壁3.18m、西壁3.5m、南壁3.16m、東壁はカマドを挟む形で3.5mを測る。　ほぼ隅丸方形住居である。主軸をE－24°－Sにとる。それぞれの壁は70°～80°前後の立ち上がりとなり、重複部分を除いて良好である。覆土は、第1層は細かい二ツ岳軽石を含む褐色土　。第3層は、更に細かい軽石と焼土粒を含む黄褐色土であった。床面は平坦によく整えられているが、床面全体が軟弱である。柱穴、周溝、貯蔵穴とも検出することが出来なかった。

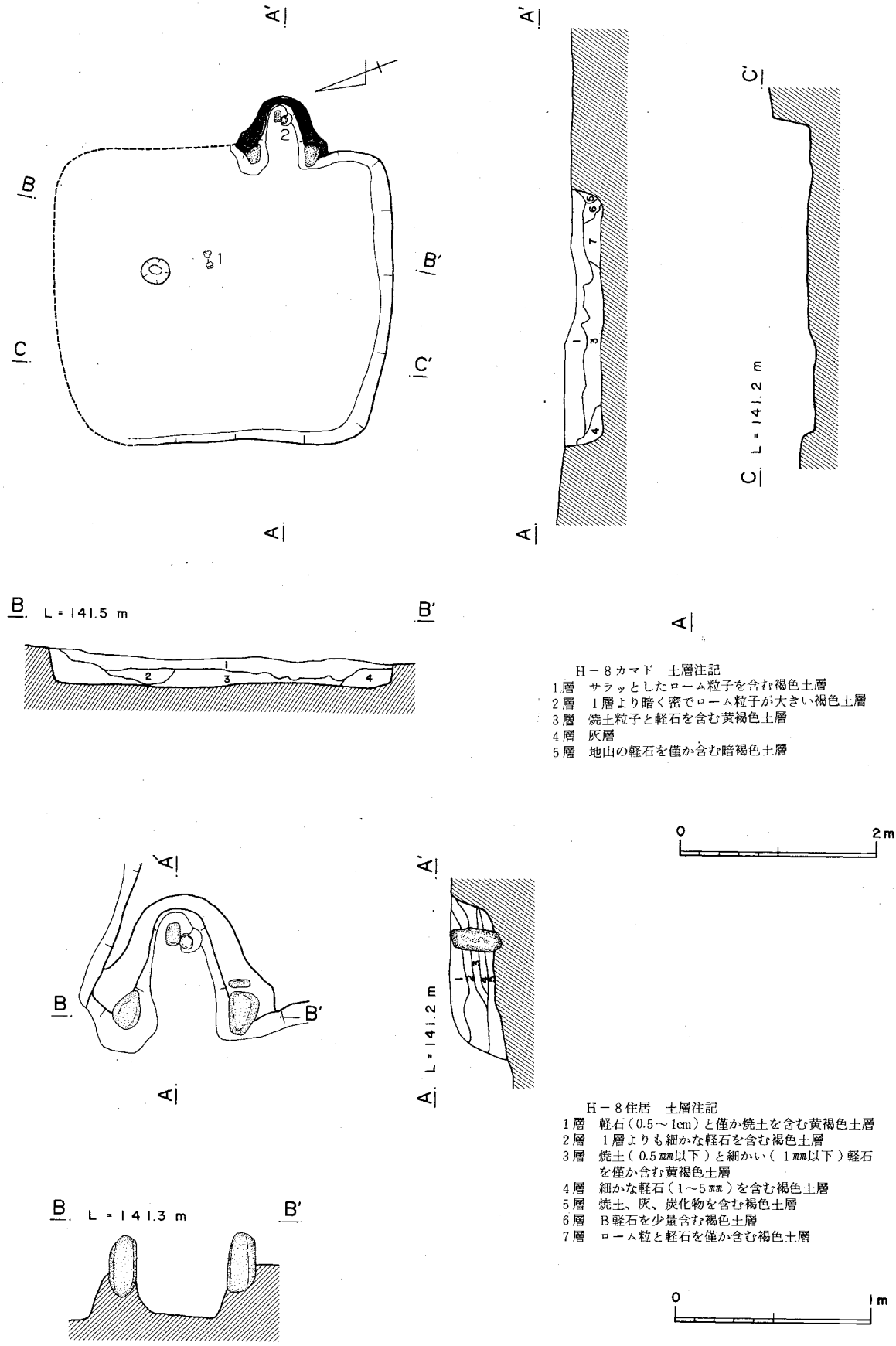
カマドは東壁南寄りに構築されている。東壁を58cmほど馬蹄形に掘り込み、左右両袖には補強材として川原石（左、高さ32cm、幅17cm。右、高さ30cm、幅18cm程）を埋め込み、奥から15cmの所に、やはり高さ30cmの川原石が埋め込まれていた。更にこの3番目の川原石の南側に須恵器埦が伏せた状態で出土している。焚口幅は31cmとなり、カマド全長82cmを測る。火床は床面より5cm高い位置で燃焼させている。煙道は緩やかに立ち上がった後、最後はほぼ直角に煙出しに至る。袖石、中央の川原石、焼土からこのカマドの使用期間は短かったと推定される。

遺物は、カマド内から須恵器埦、床面から坏の破片が4点出土した。掘り方の荒掘り状況を見ると、7号住居址と同じく、中央部と同じレベルまで掘り、黒褐色土と細かい軽石の混土を埋め戻して貼られている。

8 号 住 居 址 出 土 遺 物 観 察 表

法量の（ ）は推定値

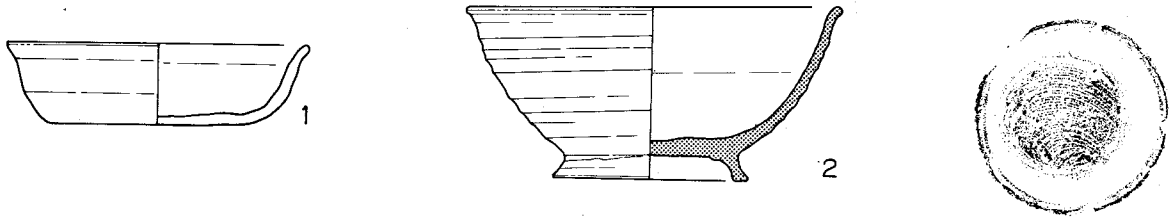
番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	床面直上	坏	口：12.0 高：3.2	微砂粒混入 良	褐色	体部は内湾気味に立ち上がり口唇部は外反する。体部上半でくびれを有する。ほぼ平坦	外面：口辺部横撫で、底部手持ち篦削り 内面：全体撫で	口縁1／3欠
2	カマド内	埦 須恵器	口：18.8 底：7.7 高：7.0	2mm大の白色砂粒混入 堅緻　酸化焔	青灰色	内湾しながら立ち上がる。貼り付け高台接合部は撫調整。	外面：ロクロ痕による凹凸が目立つ。底部は左回転糸切り痕。 内面：丁寧な横ナデ。	口 1／3欠



H－8カマド　土層注記
1層　サラッとしたローム粒子を含む褐色土層
2層　1層より暗く密でローム粒子が大きい褐色土層
3層　焼土粒子と軽石を含む黄褐色土層
4層　灰層
5層　地山の軽石を僅か含む暗褐色土層

H－8住居　土層注記
1層　軽石（0.5～1cm）と僅か焼土を含む黄褐色土層
2層　1層よりも細かな軽石を含む褐色土層
3層　焼土（0.5㎜以下）と細かい（1㎜以下）軽石を僅か含む黄褐色土層
4層　細かな軽石（1～5㎜）を含む褐色土層
5層　焼土、灰、炭化物を含む褐色土層
6層　B軽石を少量含む褐色土層
7層　ローム粒と軽石を僅か含む褐色土層

第67図　8号住居址・カマド実測図



第６８図　８号住居址出土遺物実測図

14　号　住　居　址

本住居址は、１３号住居址の西５ｍ、Ｐ－（９，１０）グリット、Ｑ－（９，１０）グリットに位置する。長軸を南北に持ち、主軸をＮ－１１°　－Ｅにとる隅丸長方形を呈する。北壁３.１ｍ、西壁４.０ｍ、南壁３.１２ｍ、東壁４.２ｍを測る。掘り込みは、黄色砂質層に達し、壁の立ち上がりは、２８㎝～３６㎝、角度は８０°～９０°である。覆土の第１・２層は、　Ｂ軽石を含む黒褐色土層であり、第３層は地山の黄色砂質土を含む１次堆積層である。床面はカマド付近を除き軟弱である。柱穴はＰｉｔ１（２２×２０）㎝、深さ２１.５㎝、貯蔵穴がカマド右側、南東コーナーに（５０×４８）㎝、深さ３７㎝が検出された。周溝はカマド左袖脇から北壁・西壁を巡り、南東コーナーから１.１ｍで収束する。幅は８㎝～１５㎝、深さ５㎝～１２㎝と一定しない。

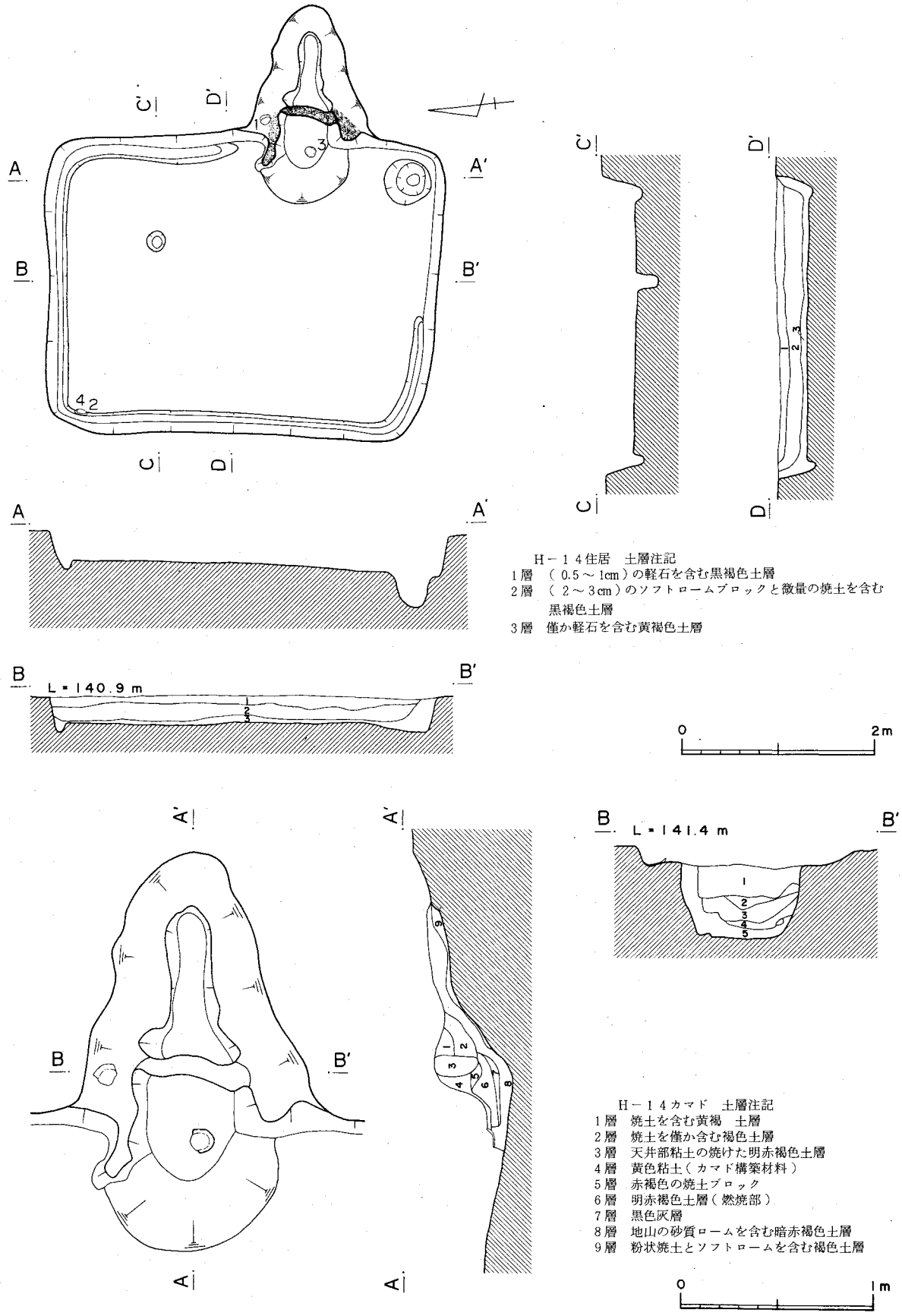
カマドは東壁中央南寄りに構築されている。壁を幅１２０㎝、長さ１１５㎝に三角形に掘り込み壁の１/２を残し煙道部の始まりとしている。　壁の延長線上に支脚を立てたと思われる小窪みが確認された。左袖の一部と思われる粘土塊が２１㎝ほど住居内方向に作り出された形跡がみられる。燃焼部中央付近に須恵器の坏が１点、左袖上にも須恵器の坏１点が出土した。焚口は焼土の分布から壁の掘り込み部分とし、火床は床面より５㎝～１２㎝程掘り窪めて設置されている。１号住居址のカマド等から天井部（掛け穴の裏側）が残存している。燃焼部から煙道に代わる部分で４０°の傾斜で登り、それから煙道は５０㎝ほど緩い傾斜で煙出しに続いている。

遺物は、北西コーナーで須恵器の坏と土師器の坏が組んだ状態で各１点出土しカマド内より須恵器の坏が２点出土している。掘り方は５㎝～１６㎝、軽石と黄色砂質土との混土で貼られている。

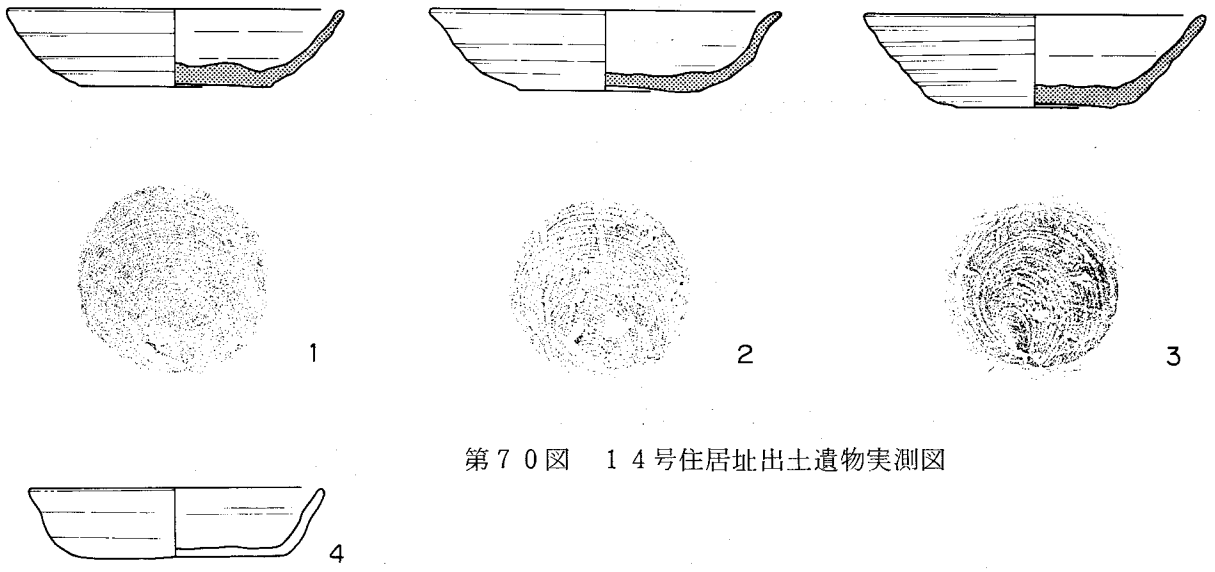
１４号住居址出土遺物観察表

法量の（ ）は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	カマド左袖	坏 須恵器	口:(13.4) 底: 7.6 高: 3.1	黒色微砂粒混入 良	灰白色 一部黒色	器肉の厚い底部から体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁部は僅か外反する。	外面：右回転糸切り痕、体部ロクロ整形痕 内面：底部は上げ底。	口辺～体部２/３欠
2	北西コーナー	坏 須恵器	口:14.0 底: 7.0 高: 3.2	砂粒を含む 堅緻	灰白色	底部は上げ底にして肥厚であり体部は内湾しながら立ち上がり中位はくびれが見られる。	外面：右回転糸切り痕、体部ロクロ整形明瞭 底部に繊維痕、体部上半にくびれ有り 内面：体部内外面ロクロ整形。	ほぼ完 ４とセットで出土
3	カマド掛部	坏 須恵器	口:(13.5) 底: 6.0 高: 3.7	微砂粒混入 堅緻	青灰色	全体に器厚、底部は更に厚い。直線的な口縁部に３回の段を持つ。	外面：右回転糸切り痕。 内面：僅かに上げ底になっている。	口１/３欠
4	北西コーナー	坏 土師器	口:11.7 底: 8.5 高: 2.7	黒色微砂粒混入 堅緻	赤褐色	体部は内湾気味に立ち上がり、体部上半でくびれを有す。ほぼ平底。	外面：口辺部横撫で、体部に指頭圧痕が見られる。底部手持ち箆削り。 内面：全体撫で。	完形



第69図　14号住居址・カマド実測図



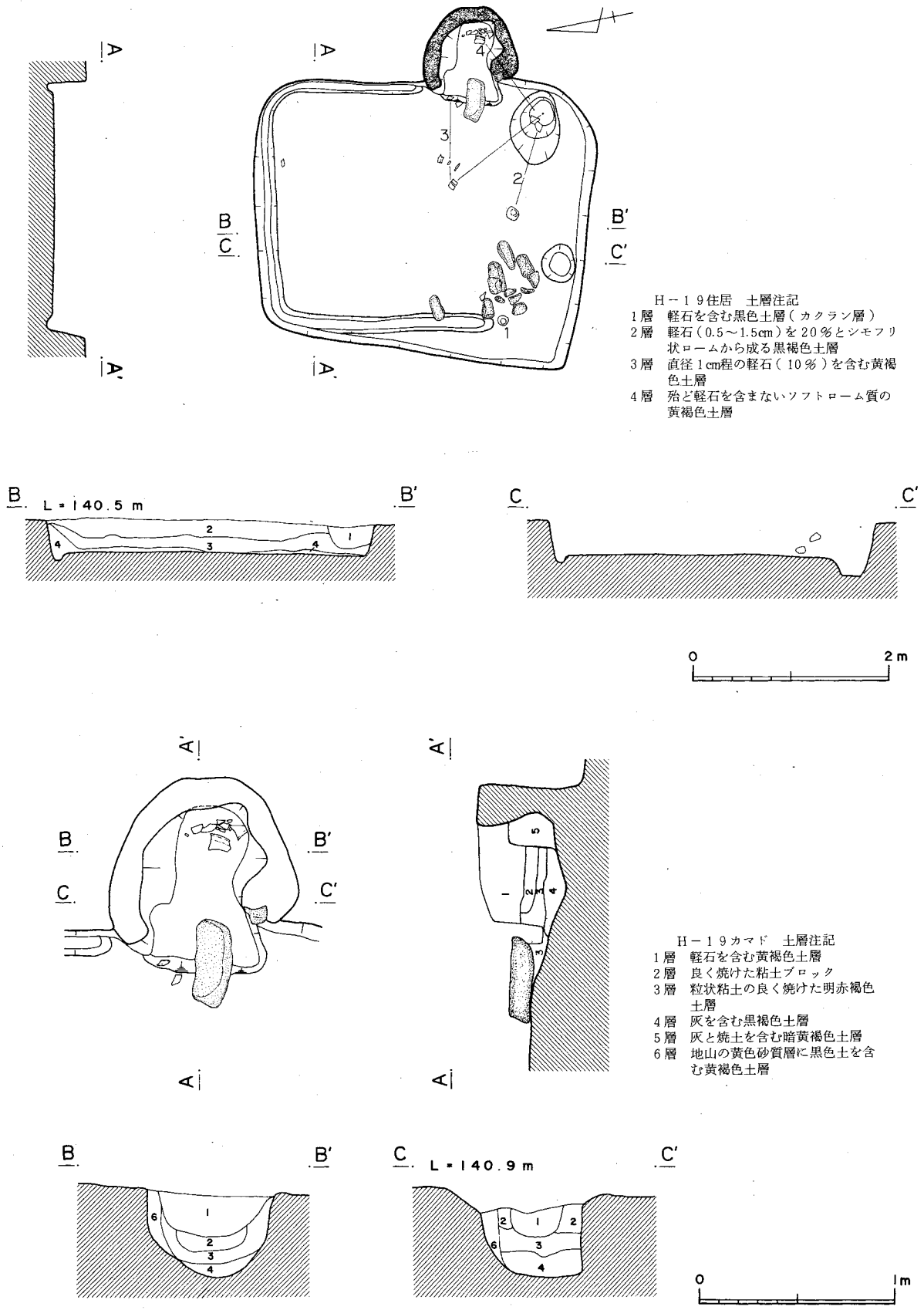
第７０図　１４号住居址出土遺物実測図

19 号 住 居 址

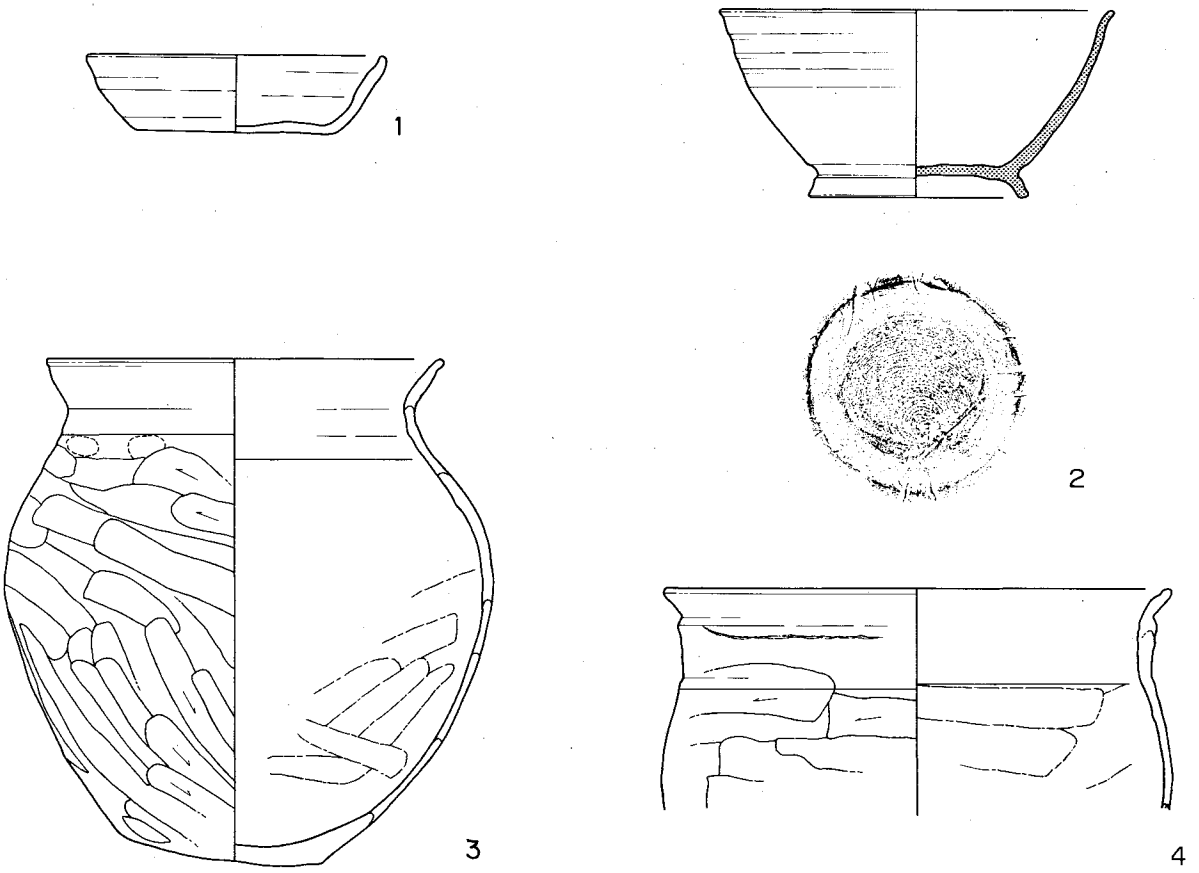
本住居址はＮ－（３，４）グリット、Ｏ－（３，４）グリットに位置する。カマドが１８号住居址の西壁に重複している。南壁は調査区域外に延びるため未調査である。東西の壁はもう少し長いと考えられるが、南西・南東コーナーは僅かカーブを始めているので残りは僅かであろう。主軸はＮ－16°－Ｅに取る。覆土の第１層は軽石を含む黒色土層、第２層は軽石を含む黒褐色土層、第３層は直径１cm程の軽石を含む黄褐色土層第４層は第１次堆積で殆ど軽石を含まないソフトローム質の黄褐色土層である。壁高は東側で27.5 cm、北側で３９cm、西側は28.5 cmである。（南側は表土から69.5 cm）立ち上がりは88°～90°である。床面は黄色砂質層まで達しており、平坦に整えられている。Ｐｉｔ１（４２×３５）cm、深さ11 cm、１箇所である。貯蔵穴は南東コーナー、カマド右側に（７８×５３）cm、深さ44 cm、床面付近から甕（№３）が出土している。周溝はカマド左袖脇から北壁を巡り南西コーナー近くの石組の所で止まっている。幅１０cm～１８cm、深さ4.5 cm～６cmであった。この石組はカマドの縮尺形の型状をしており、僅か黒褐色土の焼土化した形跡がみられたが、使用目的に付いては不明である。

カマドは東壁中央部やや南寄りに構築されており、煙道部は１８号住居址の西壁内に入っている。壁を幅１40 cm、長さ117 cm、馬蹄形に掘り込み、まわりを褐色粘質土で囲み、右袖には河原石（８×１４）cm、高さ28 cmが設置されていた。カマド前面には（19×45）cm、厚さ１１cmの長方形の自然石が出土したが、この石はカマドの袖部に鳥居状に架けられていたものと考えられる。またカマド内から出土した土器片は貯蔵穴底部から出土した土器片と接合され、№３の甕として、ほぼ完形となった。火床は床面より１０cm～１９cm掘り込まれていた。

遺物に付いては、石組付近から坏が１点（№１）、高台付き椀（№２）が貯蔵穴と石組の間で出土している。カマド内より出土遺物の中に「コ」の字状を呈する甕の口縁部（№４）が見られる。掘り方は荒掘り段階で既に殆ど平坦に整えてしまい僅か（６cm以下）に中央部に貼り床の状況がみられた。



第71図　19号住居址・カマド実測図



第７２図　１９号住居址出土遺物実測図

１９号住居址出土遺物観察表

法量の( )は推定値

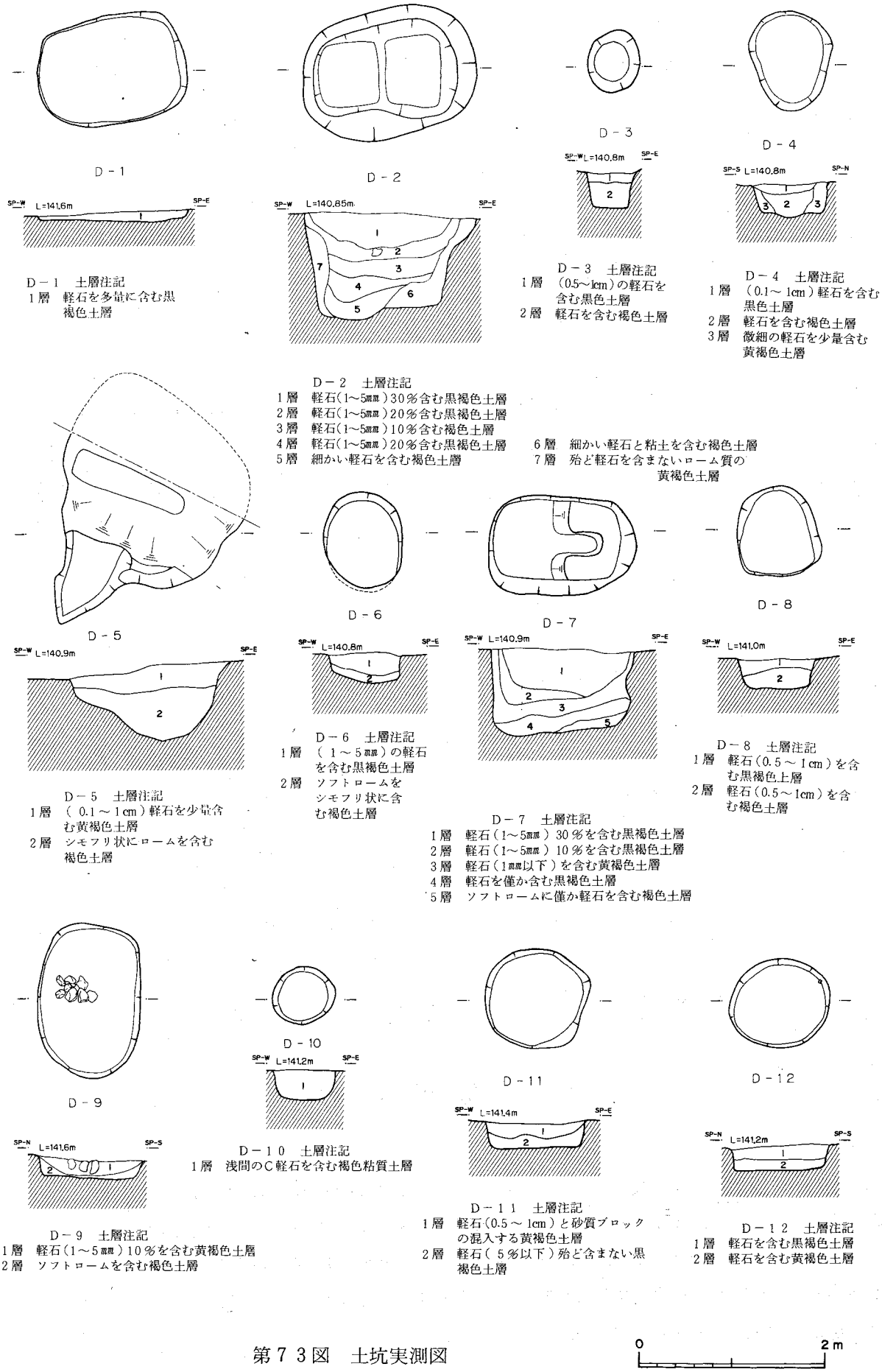
番号	出土位置	種類	法量(cm)	胎土・焼成	色調	器形の特徴	成・整形の特徴	遺存・備考
1	集石付近	坏	口：11.9 底：8.0 高：3.1	微砂粒混入 堅緻	外 黒褐色 内 赤褐色	体部は僅か内湾気味に立ち上がる。ほぼ平底	外面：口辺部横撫で、底部手持ち篦削り。ほぼ平底 内面：内面全体撫で、	完
2	貯蔵穴	高台付腕 須恵器	口：15.6 底：8.6 高：7.5	褐色粗砂粒を含む 堅緻	外 黒色 内 褐色	底部右回転糸切痕、体部は直線状に立ち上がり、口縁部で外反する。	外面：貼付け高台は接合部で撫で調整、高台は「ハ」字状に張り出す。 内面：丁寧な撫で調整。５～８mmの長石片が見られる。	口辺部1/3欠
3	カマド内床直	甕	口：15.8 胴：19.4 底：8.0 高：20.0	微細砂粒混入 堅緻	赤褐色	「コ」字状口縁　器肉が薄い	外面：口縁部横撫で、斜方向篦削り、底部は篦削り、緩い丸底を呈する。口唇部外側沈線が走る。胴部に炭化物の付着。 内面：指撫で。	ほぼ完
4	カマド内	甕	口：20.0	細砂粒混入 堅緻	赤褐色	「コ」の字状口縁を呈す。器肉の薄い、小型甕、頸部に輪積み痕あり。	外面：口縁部横撫で、肩から胴部にかけて横方向篦削り。 内面：撫で。	口3/5残

(3)　その他の遺構遺物

土坑

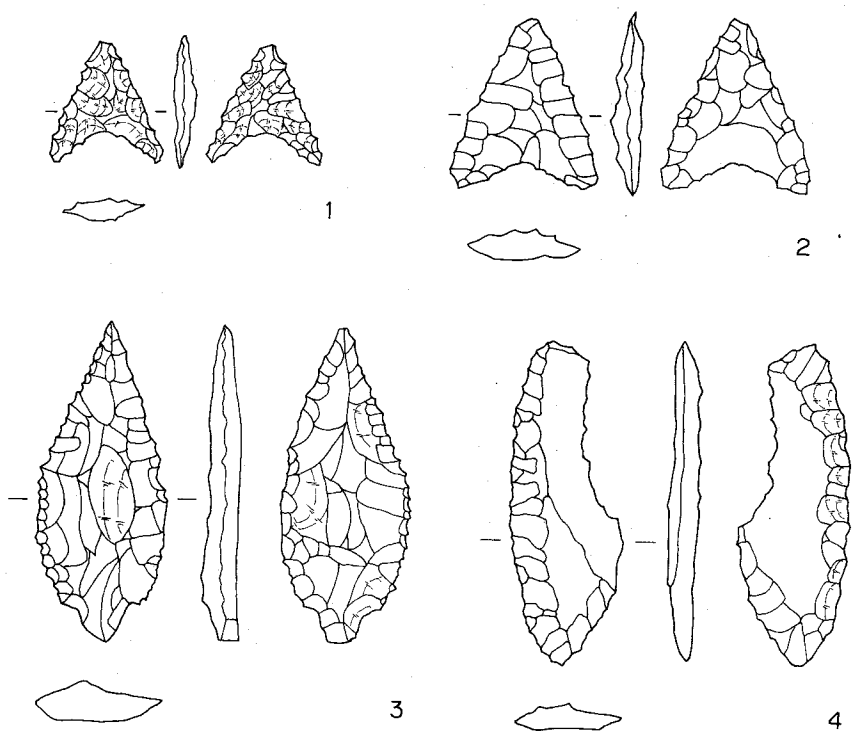
本遺跡では、１２基の土坑が検出された。土坑番号１と９から数点の土器片と自然石が出土したのみで時代決定の資料に乏しい。土坑番号３・４・５・７・８・１１・１２は覆土中にＦ・Ｐが混入することから古墳時代の土坑と考えられる。他の土坑に付いては時期を決める資料が不足がしている。

土坑の形状は１・２・４・７・９が楕円形、３・６・１０・１１・１２は円形を呈し、５は風倒木痕、８は不定形で用途も不明、９は石組が見られた。


D－1
SP-W L=141.6m SP-E
D－1　土層注記
1層　軽石を多量に含む黒褐色土層
D－2
SP-W L=140.85m SP-E
D－2　土層注記
1層　軽石(1～5mm)30%含む黒褐色土層
2層　軽石(1～5mm)20%含む黒褐色土層
3層　軽石(1～5mm)10%含む褐色土層
4層　軽石(1～5mm)20%含む黒褐色土層
5層　細かい軽石を含む褐色土層
6層　細かい軽石と粘土を含む褐色土層
7層　殆ど軽石を含まないローム質の黄褐色土層
D－3
SP-W L=140.8m SP-E
D－3　土層注記
1層　(0.5～1cm)の軽石を含む黒色土層
2層　軽石を含む褐色土層
D－4
SP-S L=140.8m SP-N
D－4　土層注記
1層　(0.1～1cm)軽石を含む黒色土層
2層　軽石を含む褐色土層
3層　微細の軽石を少量含む黄褐色土層
D－5
SP-W L=140.9m SP-E
D－5　土層注記
1層　(0.1～1cm)軽石を少量含む黄褐色土層
2層　シモフリ状にロームを含む褐色土層
D－6
SP-W L=140.8m SP-E
D－6　土層注記
1層　(1～5mm)の軽石を含む黒褐色土層
2層　ソフトロームをシモフリ状に含む褐色土層
D－7
SP-W L=140.9m SP-E
D－7　土層注記
1層　軽石(1～5mm)30%を含む黒褐色土層
2層　軽石(1～5mm)10%を含む黒褐色土層
3層　軽石(1mm以下)を含む黄褐色土層
4層　軽石を僅か含む黒褐色土層
5層　ソフトロームに僅か軽石を含む褐色土層
D－8
SP-W L=141.0m SP-E
D－8　土層注記
1層　軽石(0.5～1cm)を含む黒褐色土層
2層　軽石(0.5～1cm)を含む褐色土層
D－9
SP-N L=141.6m SP-S
D－9　土層注記
1層　軽石(1～5mm)10%を含む黄褐色土層
2層　ソフトロームを含む褐色土層
D－10
SP-W L=141.2m SP-E
D－10　土層注記
1層　浅間のC軽石を含む褐色粘質土層
D－11
SP-W L=141.4m SP-E
D－11　土層注記
1層　軽石(0.5～1cm)と砂質ブロックの混入する黄褐色土層
2層　軽石(5%以下)殆ど含まない黒褐色土層
D－12
SP-N L=141.2m SP-S
D－12　土層注記
1層　軽石を含む黒褐色土層
2層　軽石を含む黄褐色土層
0 2m

第73図　土坑実測図

縄文時代の遺物（石器）



第７４図　石鏃実測図

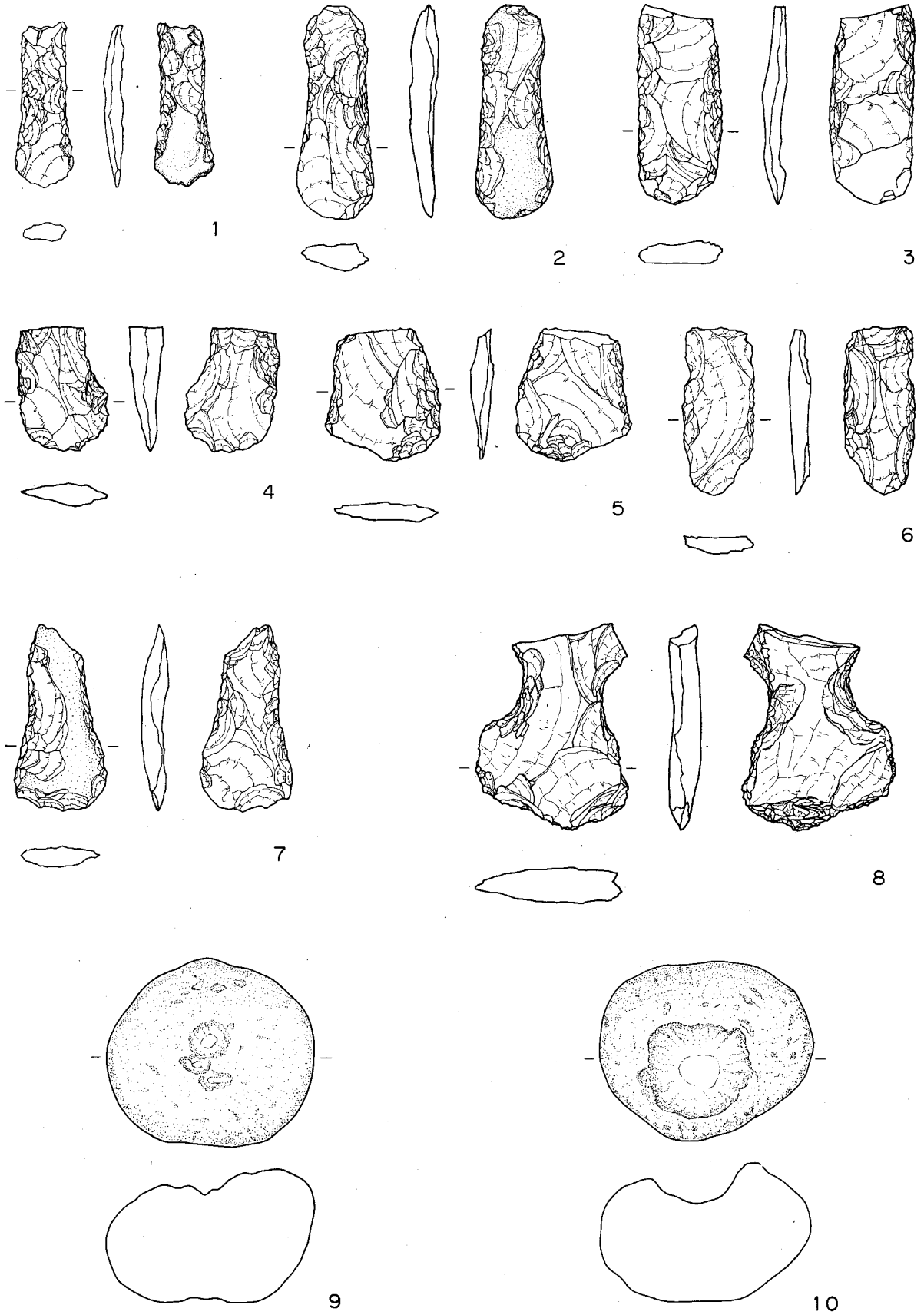
その他出土遺物観察表（石器）

法量の（ ）は推定値

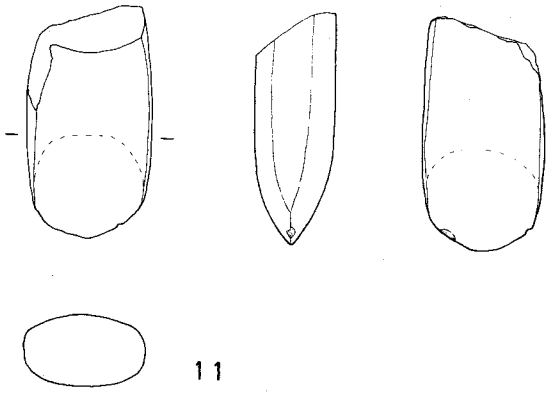
番号	出土位置	種類	長さ	幅	厚さ	重量	石質	特徴・遺存・備考
1	M-16, グリット	石鏃	1.6	1.4.	0.3	0.366g	黒曜石	先端部を欠く　両面からの押圧剥離　無茎
2	１５号住居	石鏃	2.3	1.9.	0.4	1.277g	頁岩	刃部両面からの押圧剥離　断面菱形　無茎
3	１２号住居	石鏃	4.2	1.7.	0.6	3.299g	頁岩	刃部鋸刃状　両面から交互に細かな押圧剥離で鋸刃状刃部を作っている。有茎　１２号住居址より出土　草創期前半かと思われる。
4	１３号住居	石鏃	4.1	1.4.	0.4	2.355g	頁岩	中央部から茎部にかけて剥離により欠損　両面からの押圧剥離

石　斧　観　察　表

番号	出土位置	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	特徴・遺存・備考
1	１２号住居	石斧	8.2	3.1	1.1	30.88	灰色頁岩	短冊型打製石斧　細身で刃部で僅か広がり丸味を持つ。自然面を残す。
2	表土一括	石斧	11.0	3.9	1.4	77.11	灰色頁岩	短冊型　中央部が僅か縊れ、刃部と頭頂部は丸味を持ち自然面を残す。
3	２１号住居	石斧	9.8	4.3	1.2	85.17	黒色頁岩	短冊型を呈し細身で側縁がほぼ平行し、頭頂部欠損僅か自然面を残す。
4	１３号住居	石斧	6.5	4.7	1.8	54.94	灰色頁岩	撥型打製石斧の刃部と思われる。
5	５号住居	石斧	6.8	5.9	1.0	52.57	灰色頁岩	撥型打製石斧の刃部と思われる。
6	表土一括	石斧	8.5	3.6	1.0	44.31	黒色頁岩	撥型を呈し刃部が三角形に尖り、頭頂部は欠損。
7	５号住居	石斧	9.5	4.7	1.3	62.84	黒色頁岩	撥型を呈し刃部は丸味を持つ裏面には自然石面が見られる。
8	K-2 一括	石斧	10.6	7.2	1.8	175.27	黒色　粘版岩	分銅型　縊部が上半部に有り刃部は丸味を持ち湾曲する。
9	５号住居	凹石	10.6	9.6	6.6	704.2	輝石角閃安山岩	円形　表は３ヶ所裏２ヶ所の敲打による凹みがある。
10	５号住居	凹石	10.8	9.0	6.6	650.9	輝石安山岩	ほぼ円形両面敲打による凹み有り。



第７５図　石器（石斧・凹石）出土遺物実測図



第７６図　磨製石斧実測図

磨製石斧注記

当遺跡ではＱ－17グリットから磨製石斧が確認された。基部上半部が欠損しており残存部の長さが9.3㎝幅が4.8㎝の厚さ3.2㎝重量が226.57ｇ材質は緑色の輝石安山岩であった。両凸刃（蛤刃）形に磨かれている。

甌　穴　列

Ｆ－３グリット地区、（15㎝×13㎝、深さ7.5㎝）・（24㎝×21㎝、深さ16㎝）の穴が一列に９個検出された。二ツ岳軽石を含む黒褐色土層に穿たれていた。この穴には軽石と２～３㎜の礫（いわゆる砂）が充填していた。この軽石は鉄分が酸化していて黄褐色に変化しており当引切塚は丘陵の中央部に位置しこの甌穴列は流路となったことを物語っている。明治と第２次大戦後の大災害の時、白川が当遺跡の北東方向から南西方向に横切って氾濫したことが伝えられている。

①、当遺跡北西隅（北壁土層断面の耕作土中）に砂質の部分があり、他の部分は軽石を含む黒褐色土である。

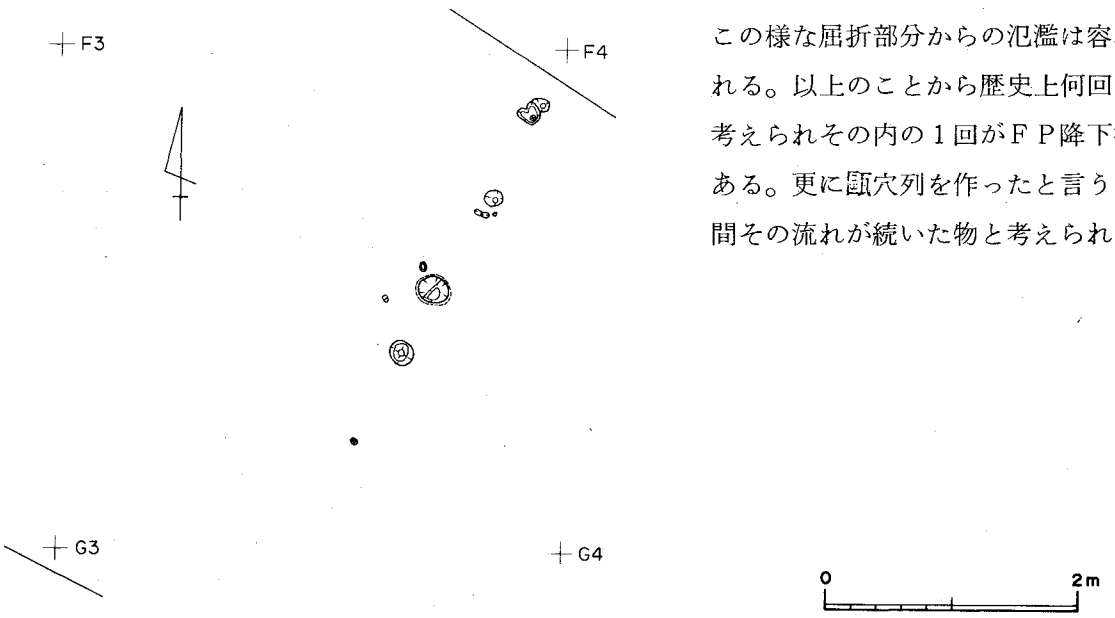
②、軽石を含む黒褐色面（海抜141.98ｍ）に残された甌穴列。

③、5, 6, 16, 21, 22号住居を結ぶ南側の線と4, 3, 2号住居29号遺構とを結ぶ北側の線との間には砂礫層が斜めに横切っている。

④、上記住居と23, 24, 25, 26号住居址の掘り方に見られる黄色砂質層（礫を殆ど含まない）

以上４回の氾濫原と化したことが今度の調査で確認された。

当遺跡の東側を流下している赤城白川は大正用水北約200ｍ上流で大きく屈折している。この様な屈折部分からの氾濫は容易に推定される。以上のことから歴史上何回かの氾濫が考えられその内の１回がＦＰ降下後の氾濫である。更に甌穴列を作ったと言うことは長期間その流れが続いた物と考えられる。



第７７図　甌穴列実測図

第6章　成果と問題点

1. 縄文時代

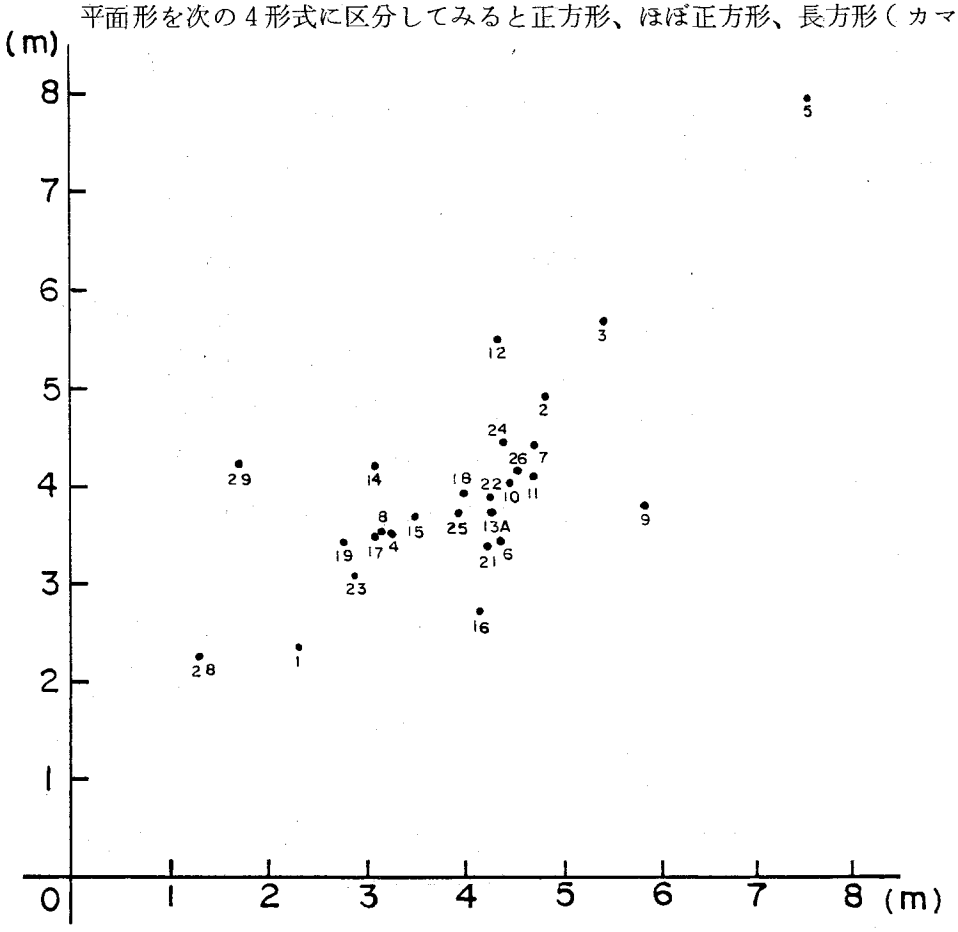
今回の調査では確認面と古墳時代住居址の覆土中より石鏃・石斧・剥片・土器片等が出土している。O－3グリットから出土した土器は、加曽利E式期のものと思われる。第74図－1・2は無茎の石鏃である事から、中期以降のものと考えられる。第74図－3は木葉型で基部に茎を持つ（有舌尖頭）側縁部は鋸刃状を呈する事から草創期の遺物と考えられる。図版75図－1・2・3は短冊型を呈し、一方の面に自然面を残している事から前期から中期のものと考えられる。第75図－4・5・6・7は撥型石斧である。撥型は中期中葉から後半にかけて関東や中部地方で爆発的に増加する打製石斧と思われる。1, 2, 3, 7, 8とも側面から見ると湾曲していることから土掘具と推測される。以上の事から本遺跡内では、縄文時代の遺構は確認されなかったが当遺跡の周辺に縄文時代中期の遺跡が存在する可能性が考えられる。

2. 古墳時代

住居址の規格と規模

本遺跡で検出された住居址は30軒を数える。この内規模を計測することが出来たのは24軒である。各住居址の規模は表1で示した。各住居址の面積にはばらつきが有り統一性は認められないが大別して特大型、大型、中型、小型、超小型の5形態に分類できる。超大型8％、大型21％、中型25％、小型42％、超小型8％であった。この24軒の住居址を温井遺跡の区分方法に超小型を加えて5区分にしたのが第2表である。この結果約半数の住居址が小型にはいる、特大型は少なく、また超小型住居址の検出は今後の調査を待ちたい。

平面形を次の4形式に区分してみると正方形、ほぼ正方形、長方形（カマドの方向を主軸方向とし縦・横方向にわけると）表3の様になる。各形式を百分率で示すと正方形54％ほぼ正方形21％長方形縦方向17％長方形横方向8％となる。住居址の大半が正方形の範疇には入っているが、カマド方向に僅か長い傾向が見られる。特大にはいる5号住居址も40cmは高麗尺の1尺（35cm）以上を示している。本遺跡では長方形への兆しが見られる。正方形及びほぼ正方形の住居址は小型から大型まで存在し、長方形の住居址は小型・中型に多く見られ、大型・特大型住居址には殆ど検出されない。



規模を比較すると、最大の面積を有する5号住と最小の1号住とでは54.92㎡の開きが生じる。特大

表 1

住居番号	規模 長辺×短辺	方位	カマド位置	確認柱穴	貯蔵穴	位置	残壁高 北	西	南	東	竈袖造出し距離 左	右	住居面積(m²)
1	2.30×2.15	N-70°-E	東・中央	1	なし	—	49	48	48	51	0		4.9450
2	4.88×4.58	N-74°-E	東・中央南寄り	4	南東隅	右	50	—	—	42	58	60	22.3504
3	5.65×5.50	N-73°-E	東・中央南寄り	4	南東	右	52	38	47	43	33	32	30.6795
4	6.48×3.28	N-85°-E	南東コーナー	1	竈左袖	左	38	35	20	40	22	33	11.4144
5	7.94×7.54	N-70°-E	東・中央北寄り	10	〃	左	44	20	24	27	82	105	59.8676
6	4.38×3.40	N-83°-E	(東壁)	3	南東隅	右	—	22	6	—	—	—	14.8920
7	4.72×4.41	N-40°-E	北・中央		北東	右	52	—	42	57	—	90	20.8152
9	5.85×3.80	N-80°-E	東・南寄り	4	南東	右	40	30	40	40	50	53	22.2300
10	4.46×4.00	N-80°-E	東・南寄り	5	南東	右	35	27	30	30	38	45	22.0800
11	4.70×4.06	N-75°-E	東・南寄り	1	南東	右	40	40	35	38	30	48	19.0820
12	5.43×4.35	N-83°-E	東・中央	4	南東	右	60	47	30	38	90	93	23.6205
13A	4.33×3.74	N-69°-E	東・南寄り	4	南東	右	70	70	—	70	0	0	16.2808
13B	—×3.05	N-81°-E	東・北寄り	2	南東	右	42	—	45	40	43	62	
15	3.66×3.50	E-30°-S	東・南寄り	0	南東	右	83	53	34	54	56	46	12.8100
16	4.16×2.27	N-79°-E	東・南寄り	2	東中央	左	15	18	10	6	72	80	11.3152
17	3.47×3.10	E-23°-S	東・中央	2	南東	右	58	50	50	59	43	82	10.7570
18	4.00×3.80	N-78°-E	東・中央	3	東中	右					60	60	15.2000
20	4.20×—	E- 4°-S	東・中央	2		—	49	48	—	50	59	75	
21	4.24×3.35	W-27°-S	西・南寄り	6	南西	左	50	35	31	50	30	70	14.2040
22	4.27×3.85	N-12°-W	北・東寄り	1	北東	右	39	40	31	43	52	47	16.4395
23	3.06×2.09	N-83°-E	東・南寄り	2	南東	右	35	40	38	38	0	0	8.8740
24	4.40×4.40	N-18°-W	北・中央	4	北東	右	51	49	62	68	35	32	19.6240
25	3.95×3.70	N-90°-E	東・南寄り	0	南東	右	70	—	—	65	16	31	14.6150
26	4.55×4.18	N-19°-E	北・西寄り	4	北西	左	49	26	24	30	42	33	19.0190
27						—							
28	2.25×1.30		北・東寄り			—					0	0	2.9250
29	4.20×1.70					—							7.1400

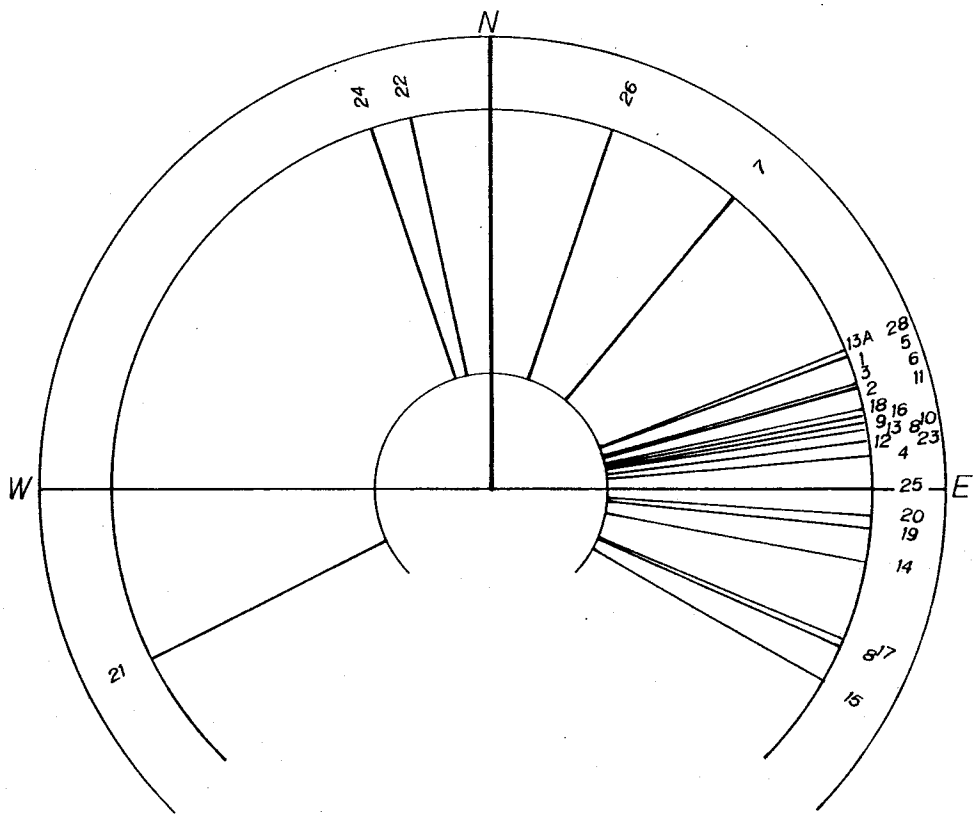
型の5号柱は59.8 m²である。大型(21 m²以上～40 m²)に属する(2・3・9・10・12)号住居においては、4～5本の柱穴を持ち、貯蔵穴を南東コーナーに有している。中型(16 m²～20 m²)は(7・11・13A・22・24・26)号住居の6軒である。正方形又はほぼ正方形で、柱穴は(7・11・22) 号住居では0～1で、しかもあっても浅い(13A)号住居。(24・26)号住居では4本の柱穴を配している。小型(15m²以下)の住居が最も多く10軒(4・6・15・16・17・18・21・23・25・29)号住居があげられる。超小型(5 m²以下)のものは(1・28)号住居の2軒、1号住居址においては当初、住居と考えるには疑問であったが、カマドを有し、床面もしっかり踏み固められ周溝が確認された。

表　2

	規　模　(m²)	住　居　址　名	軒数
超小型	5 m²以下	1, 28	2
小　型	1 5 m² 以下	4, 6, 15, 16, 17, 18, 21, 23, 25, 29 (8, 14, 19)	1 3
中　型	1 6 m² 以上～ 2 0 m²	7, 11, 13A, 22, 24, 26	6
大　型	2 1 m² 以上～ 4 0 m²	2, 3, 9, 10, 12	5
特大型	4 1 m² 以上	5	1

表　3

形	壁長の差	住　居　址　名	軽　数
正　方　形	3 0 cm以内又は	1, 2, 24	
	0～1 0 %以内	3, 4, 5, 7, 15, 18, 22, 23, 25, 26 (8)	13(54%)
ほぼ正方形	1 0～2 0 %	10, 11, 12, 13A, 17 (19)	5(21%)
長　方　形	2 0 %以上	9, 16, 21, 6	4(17%)
偏　　平		28, 29 (14)	2(8%)



次にカマドを比較してみると東壁中央に位置するものが８／２４、東壁南寄りのものが８／２４、東壁北寄りのものが１／２４、北壁に構築されたものが５／２４、西壁で確認されたものが１軒、南東コーナーに設置された４号住等、設置位置があまり固定されていないことがうかがわれる。２５号住では荒掘り段階で袖の部分を意識的にロームを掘り残している。床面と火床の関係を比較してみると、床面よりも火床を低く構築している住居址は（１・７・９・１０・１１・１３Ｂ・１６・２０・２２・２３・２４・２５・２８）号住居床面とほぼ同レベルに火床を有する（２・３・４・５・１２・１３Ａ・１５・１７・１８・２１・２６）号住居等が見られる。掛け部を壁外に設置している住居は（１・３・４・１３Ａ・２３・２８）号住居が上げられる。（２・５・１６・１７・２３・２４・２５・２６）号住居ではカマドを構築した粘土が確認面より上で煙り出し部分を残しており、１６号住居にあってはカマドがドーム状に壁面を覆っている。この事から引切塚遺跡の住居址の壁は１３Ａ号の様に深いものも１６号住のように浅いものまであったと考えられる。当時も当然表土があったであろうが、もしも当時確認面よりも上に厚い表土があったとすれば、１６号住のドーム状のカマドや１３Ａ号住居のような深い掘り込みをしている理由が見あたらない。但し１号住・１３Ａ号住・２３号住居址のカマドの場合、確認面と同じレベルでは煙道部より雨水の流れ込みで使用不可能になってしまうであろう。２３号住の場合など水平方向に付いた煙り出しは使用不可能になってしまうはずである、（黒井峯遺跡のように住居址の周囲に土手を築いた可能性が考えられる。）

本遺跡では、各住居址のカマド位置に対し右側に貯蔵穴を設置するものが大勢を占める。（住居址№２・３・６・７・９・１０・１１・１２・１３Ａ・１３Ｂ・１４・１５・１７・１８・１９・２０・２２・２３・２５)。カマドの左側に位置するもの、（住居址№４・５・１６・２１・２４・２６）。不明のもの（住居址№１・８・２７・２８・２９）があげられる。

出土遺物の分類に付いて（甕・甑・坏・羽口）

土器は土師器を主体に須恵器も僅かながら出土している。その他石製模造品・臼玉・紡錘車・鉄鏃・砥石等が検出された。土師器は坏・高坏・埦・甕・甑・壺、須恵器では坏・壺・ハソウ・横瓶等量的には少ないが器種は多様である。

甕　長胴化が普遍的で①胴部に最大径を持ち球形を呈す。②胴部に最大径をもつもの。③口縁部と同部がほぼ同径を示すもの。④口縁部に最大径を持つものの４種類に大別され、同一住居址において共伴して出土している。

①　胴部に最大径を持ち球形を呈す。１３号住居址（遺物№１１・１２・１３）、１５号住居址（遺物№２２・２３・２５）、１６号住居址遺物№２、１７号住居址（遺物№５・６）、１８号住居址遺物№２、２１号住居址遺物№６、２４号住居址遺物№１

②胴部に最大径を持つもの。

a　上半部に最大径を持つもの。　１２号住居址（遺物№４・５）、２１号住居址遺物№４

b　中央部に最大径を持つもの。　２号住居址遺物№３、４号住居址遺物№５、５号住居址（遺物№７・８・９）、７号住居址遺物№８、９号住居址遺物№３、１０号住居址遺物№６、１３号住居址遺物№10、２２号住居址遺物№４、２５号住居址遺物№３

③口縁部と胴部がほぼ同径を示すもの。　１１号住居址（遺物№２・５・６・７）、１２号住居址遺物№３　１７号住居址遺物№９

④口縁部に最大径を持つもの。

a　胴部の脹みを上半部に持つもの。７号住居址（遺物№１４・１５）、１０号住居址遺物№５、１１号住

居址遺物№４、１２号住居址遺物№６、１３号住居址遺物№７、１５号住居址（遺物№２７・２９・３２・３３）

b　胴部の脹みを中央部に持つもの。　１５号住居址（遺物№２８・３４）、１７号住居址遺物№８、２１号住居址遺物№５、２２号住居址（遺物№２・３）

c　鉢型を呈するもの。１７号住居址遺物№７、２２号住居址遺物№５

甑

単孔式と多孔式があり鉢型を呈する。単孔式１５号住居址遺物№２４は頸部が僅かくびれ口縁部は外反する。１５号住居址遺物№２６と１３号住居から多孔式のものが出土している。頸部は締まらず僅かに張る。外面はヘラ削り後縦位の撫でを加え、内面は丁寧な撫で下半部は指撫でが施されている。

坏

①全体に偏平となっている。口縁部は内湾気味に立ち上がり器肉は底部に厚みを持ち、口縁部はやや薄くなる。体部外面は右方向篦削り、内面は丁寧な撫でが施されている。１２号住居址遺物№１

②体部は内湾気味に口縁部はやや内傾気味に立つ、口縁部と体部の境は僅かな稜により区分される。口縁部高と体部高の比は１：１で深みがあり、器肉はほぼ均一で薄い。2号住居址遺物№２、5号住居址遺物№３、１３号住居址遺物（№２・４）、23号住居址遺物№３、25号住居址遺物№１、26号住居址遺物（№２・３・４）

③体部は偏平な感があるが丸みを持つ。口縁部は直線状に開き、中位に篦調整による２～３段の稜を持つ器肉はほぼ均一で薄い。5号住居址遺物（№４・５）、7号住居址遺物（№５・７）、9号住居址遺物№１、10号住居址遺物№１、13号住居址遺物（№１）、17号住居址遺物（№１・２）、21号住居址遺物（№１・２・３）、22号住居址遺物№１。

④体部の断面形はやや三角形を呈し、底部中央に最深部がある。口縁部は外反し内外面とも篦調整後指頭による横撫で、体部との境に稜を持つ。口縁部高と体部高がほぼ同じで器肉はほぼ均一した厚みを持つ。体部は不定方向の篦削り、内面は丁寧な篦撫で。1号住居址遺物№１、７・28号住居址遺物（№１・２・３・４）9号住居址遺物№２、13号住居址遺物№３、15号住居址遺物（№1.　2.　3.　4.　5.　6.　7.　8.　9.　１0.　１1.　１2.　１3.　１4.　１5.　１6.　１７）、　23号住居址遺物（№1.　2.　3.　4.　5.　6.）

④－ｂ　口縁部は外反し全体が器厚なつくりである。体部と口縁部の境に稜線を有し丸底である。２住居址遺物№１、5号住居址遺物№１、7号住居址遺物№６、9号住居址遺物№２、18号住居址遺物№１、24号住居址遺物№１。

⑤体部は薄く平底で口縁部は内傾する。器肉は底部にもっとも厚みを持ち安定感がある。体上半部は横方向の篦削り、底部は不定方向である。口縁部は横撫でで体部の境に篦調整による段を持つ。５住居址遺物（№２・６）、16号住居址遺物№１、26号住居址遺物№１。

体部は浅く口縁部は僅か外反しながら立ち、稜は丸みを持ち不明瞭。26号住居址遺物№４。

羽口

羽口はおもに製錬用、鍛冶用、鋳物用、鋳銭司跡、梵鐘の鋳造跡等に伴って出土する。出土状況は大抵の場合灼熱を受け消耗したり折損していて断面形状は判るが長さや先端・末端のいずれかは定かでない場合が多い。材料は粘土を焼成して製作したもので、いずれの時代のものも同様な形態をしている。形状としては角形羽口（四角・六角・八角）とラッパ状羽口がある。当遺跡で検出された１３号住居址№１５は円錐形で先端部から尻部が１０.７cm測れる。先端部には高熱により溶解してガラス質が付着している。№１６は円錐形で全長8.8cm、№１７は全長6.8cmの角形である。尻部側は灰褐色で高熱を受けてない部分がある。この部分に付いて清

里・陣場遺跡の中で「吹子の口に差し込まれた部分と推測される」としているが、「鋸」（法政大学出版局 吉川金次著）によると、炉と鞴及び溶体と鞴の間に竹管を利用して鞴自体の熱変化を防ぐとしている。

１５号住居址№３６は9.5cmの円筒形で熱を受けておらず多の羽口とは違って土器のような焼き締りがあり孔は細く同径を呈す。

調査の結果羽口と鉄滓が１３号住居址から検出された。

奈良・平安時代の住居址

住居番号	規模 長辺×短辺	方位	カマド位置	確認柱穴	貯蔵穴	位置	残壁高 北 西 南 東	袖造り 煙出し 距離 右 左	住居面積（m^2）
8	3.50×3.16	E-24°-S	東・南寄り	—	—	—		0	11.0600
14	4.20×3.10	E-11°-S	東・南寄り	1	南東	右	31 29 28 36	18 0	13.0200
19	2.76×3.43	E- 6°-S	東・中央	1	南東	右	39 29 — 28	0	9.4392

この期に相当する遺構は上表の通り３軒である。古墳時代後期と比較すると興味深い現象である。出土遺物も少なく、規模は３軒とも古墳時代後期の区分では小型に入る。カマドの方向を主軸とするならば横方向の長方形である。

結　　語

前橋市青柳地区では遺跡調査例は少なく、このたび引切塚遺跡の宅地造成事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査により旧利根川左岸の段丘上に古墳・奈良時代の住居址古墳綜覧記載もれの古墳が確認された事は意義深いことと思われる。引切塚遺跡の調査結果はこれまで述べてきたが、次の様な成果と問題点が提示される。

◎古墳時代後期の住居址２７軒と奈良時代の住居址３軒とでは開きがある。

◎本遺跡ではカマドの残存状況が極めて良好である事。

◎カマドは概ね東壁に設置されているが、僅かながら北壁西壁にも設けられている。

◎荒掘り段階で既にカマドの位置を決めている事。

◎カマドの煙出し部分まで確認出来た事は当時の表土面に極めて近いものと考えられる。

◎カマドを構築するに当たって粘土にスサを入れている事。

◎掘り方に中央を高く残す工法が見られたが、砂礫層の上に築かれた住居ではその必要がなかったと思われる。

◎カマド内に支脚石が立った状態で出土した物が４個、掛部に倒れた状態で検出された物が２個確認された。

◎カマドの右側の壁が左側より僅かながら外方向に造り出している住居が８軒確認された。

◎カマドの両袖が壁に密着している住居址が８軒確認された。

◎カマド焚口部に天井石を残し鳥居状を呈していたもの３軒とカマド内に落下していたもの３軒が確認された。

◎５・１５号住居址ではカマドの袖の造り足しが見られた。

◎古墳時代の住居址のカマド煙道部両脇に棚状施設を持ったものが見られた。

引切塚遺跡も既に住宅が完成し居住している。調査に当たっては万全を記し記録保存に勤めたつもりであるがまとめに当たり反省するところが多い。本報告書の執筆にあたっても、多くの方々に貴重な助言を戴きながら、それを生かせ得なかった事は、ひとえに担当者の微力の致す所である。

最後になってしまったが、御指導御助言を戴いた諸先生方、また発掘作業に従事してくれた方々に心から感謝し、御礼申し上げる次第です。

1. 引切塚遺跡（上空より）

2. 遺跡近景（東側より）

3. 遺跡近景（西側より）

4. 遺跡近景（南側より赤城山を望む）

5. 遺跡近景（北側より）

図版2

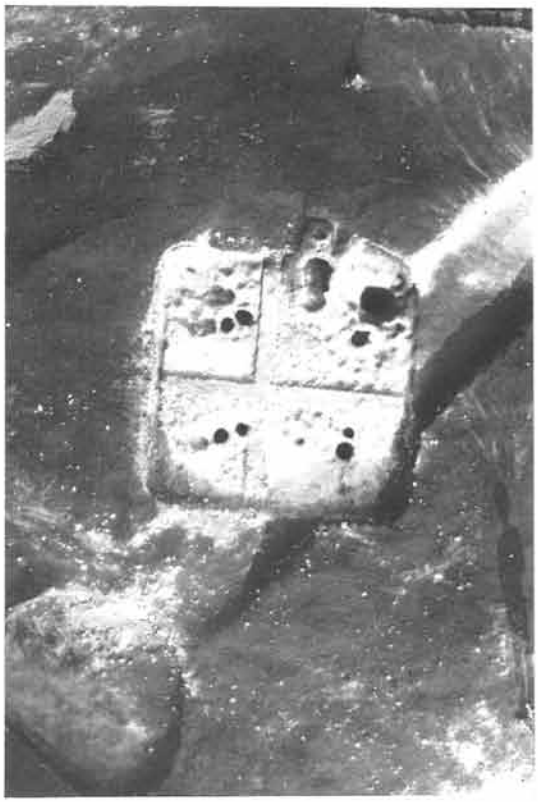
1.　1号住居址全景

2.　同　遺物出土状況

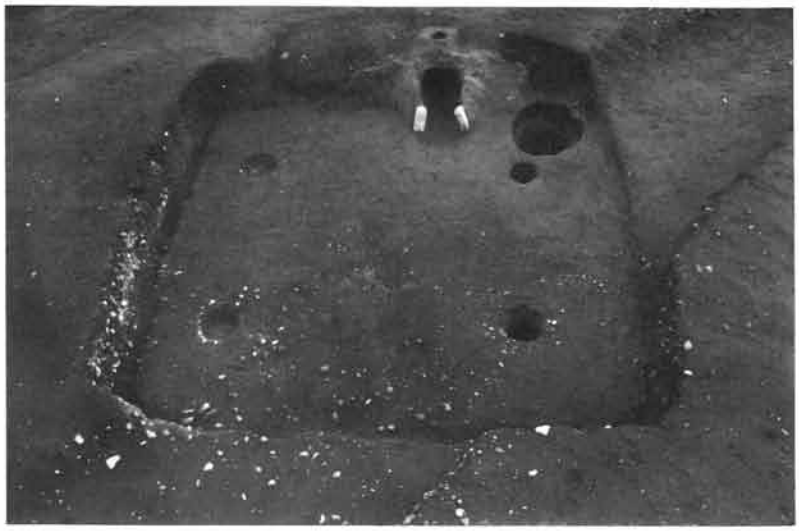
3.　同　土層断面

4.　同　カマド全景

5.　同　カマド近景



1.　2号住居址全景掘り方



2.　同　生活面

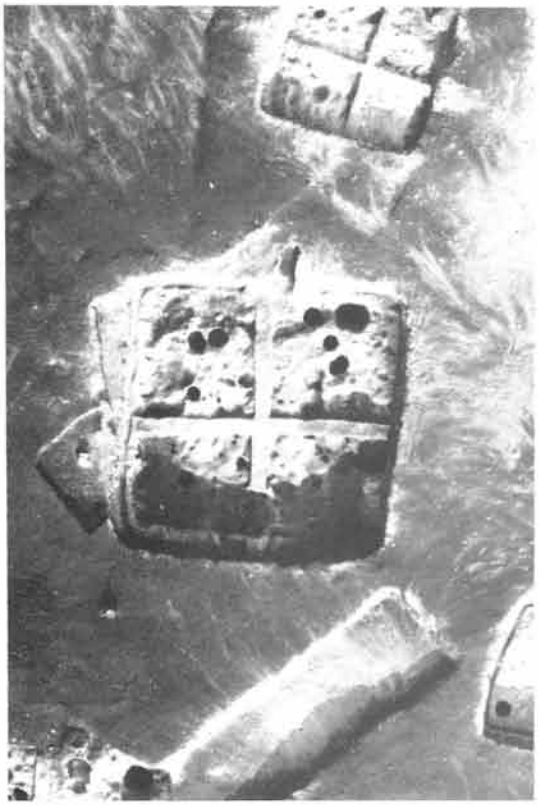
3.　同　貯蔵穴

4.　同　土層断面

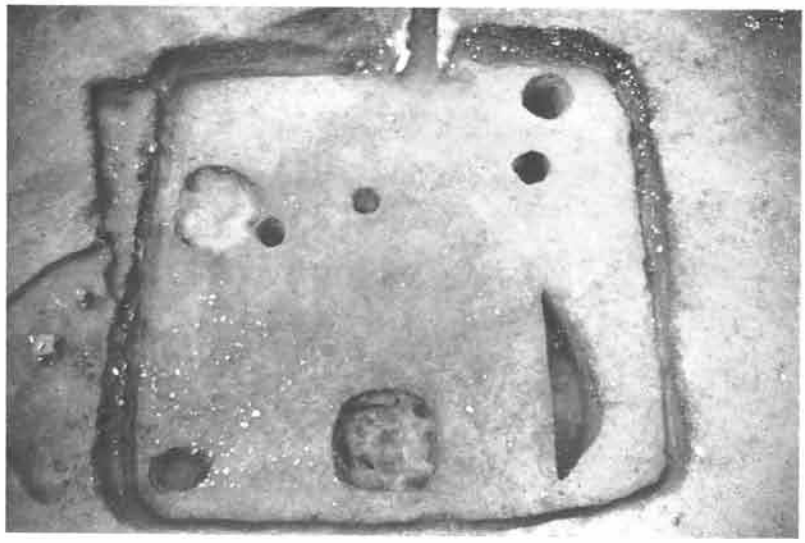
5.　同　カマド全景

6.　同　カマド近景

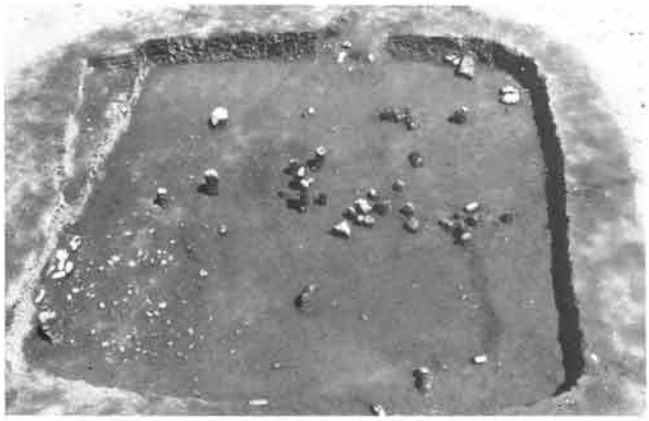
図版4



1.　3号住居址全景掘り方



2.　同　生活面



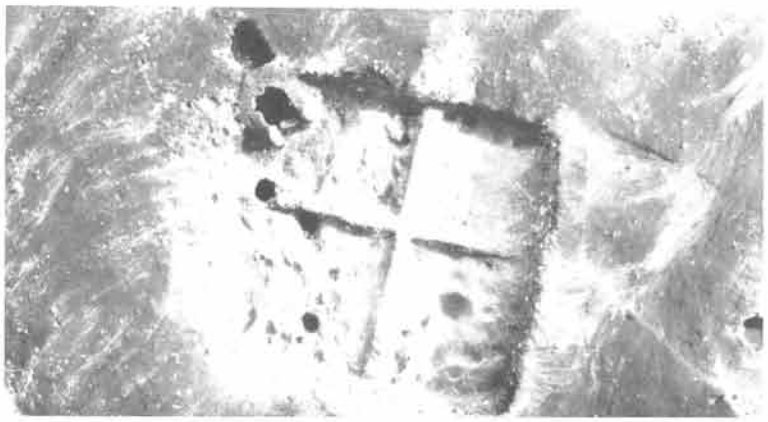
3.　同　遺物出土状況

4.　同　土層断面

5.　同　遺物出土状況近景

6.　同　カマド近景

1. 4号住居址全景



2. 同 掘り方

3. 同 遺物出土状況

4. 同 カマド近景

5. 同 遺物出土状況

図版6

1.　5号住居址全景

2.　同　遺物出土状況

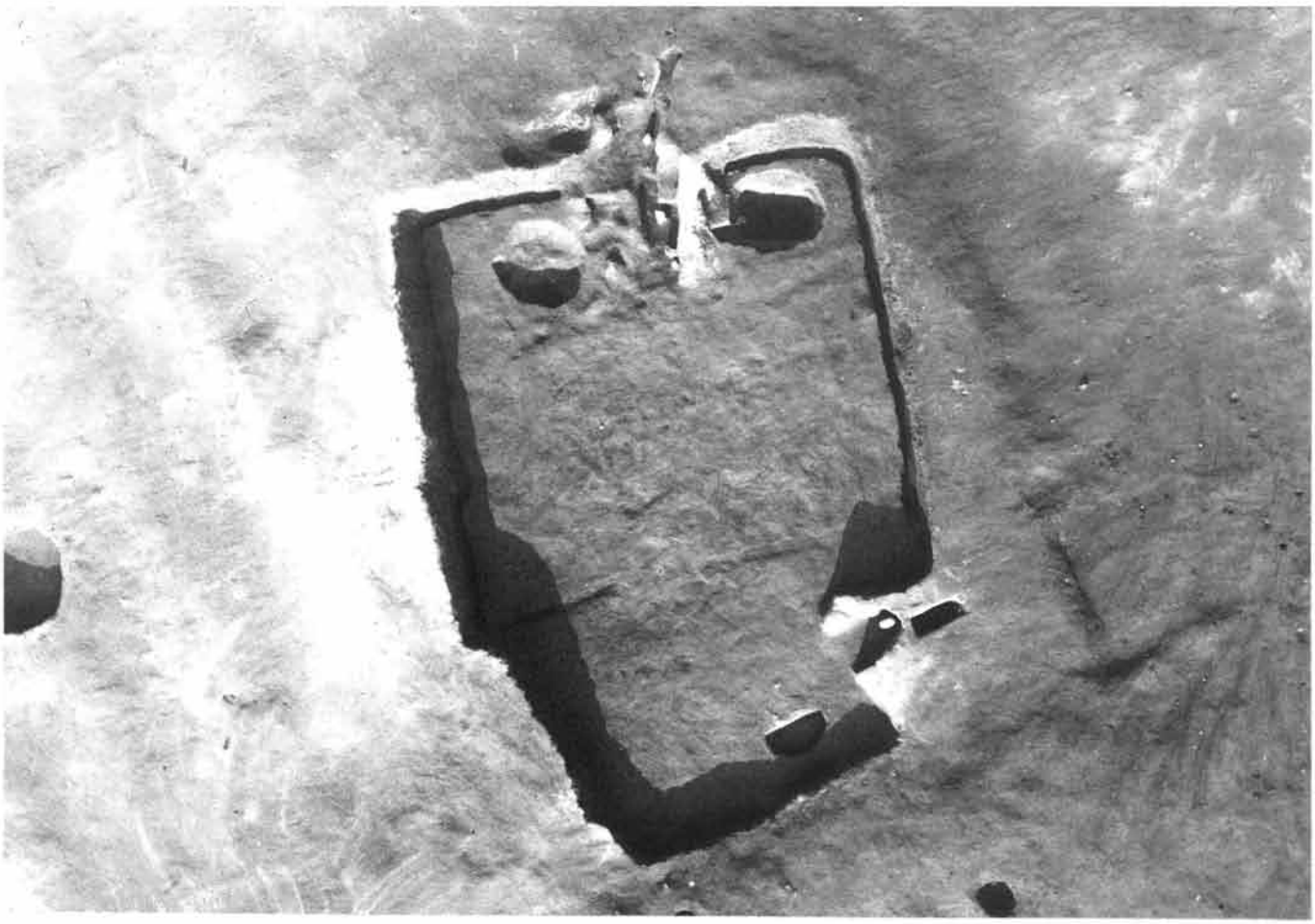
3.　同　貯蔵穴内遺物出土状況

4.　同　遺物出土状況

5.　同　カマド近景

1.　6号住居址全景

2.　同　掘り方



3.　7・8・28号住居址全景

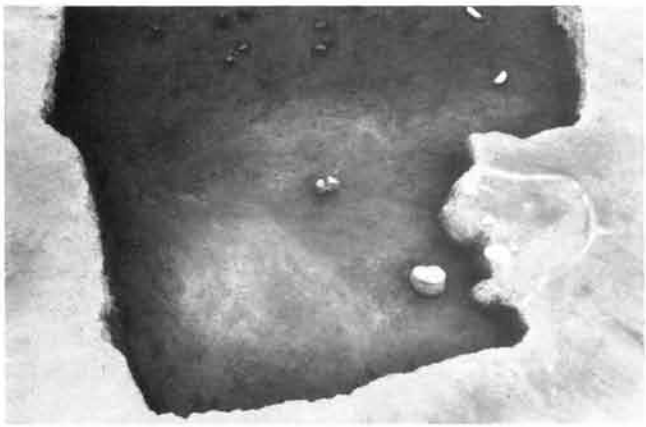
図版8

1.　7号住居址全景

2.　同　遺物出土状況

3.　同　貯蔵穴土層断面

4.　同　カマド付近遺物出土状況



5.　8号住居址全景

6.　同　カマド土層断面

7.　同　カマド全景

8.　同　カマド内遺物出土状況

1.　9 号住居址全景

2.　同　遺物出土状況

3.　同　遺物出土状況近景

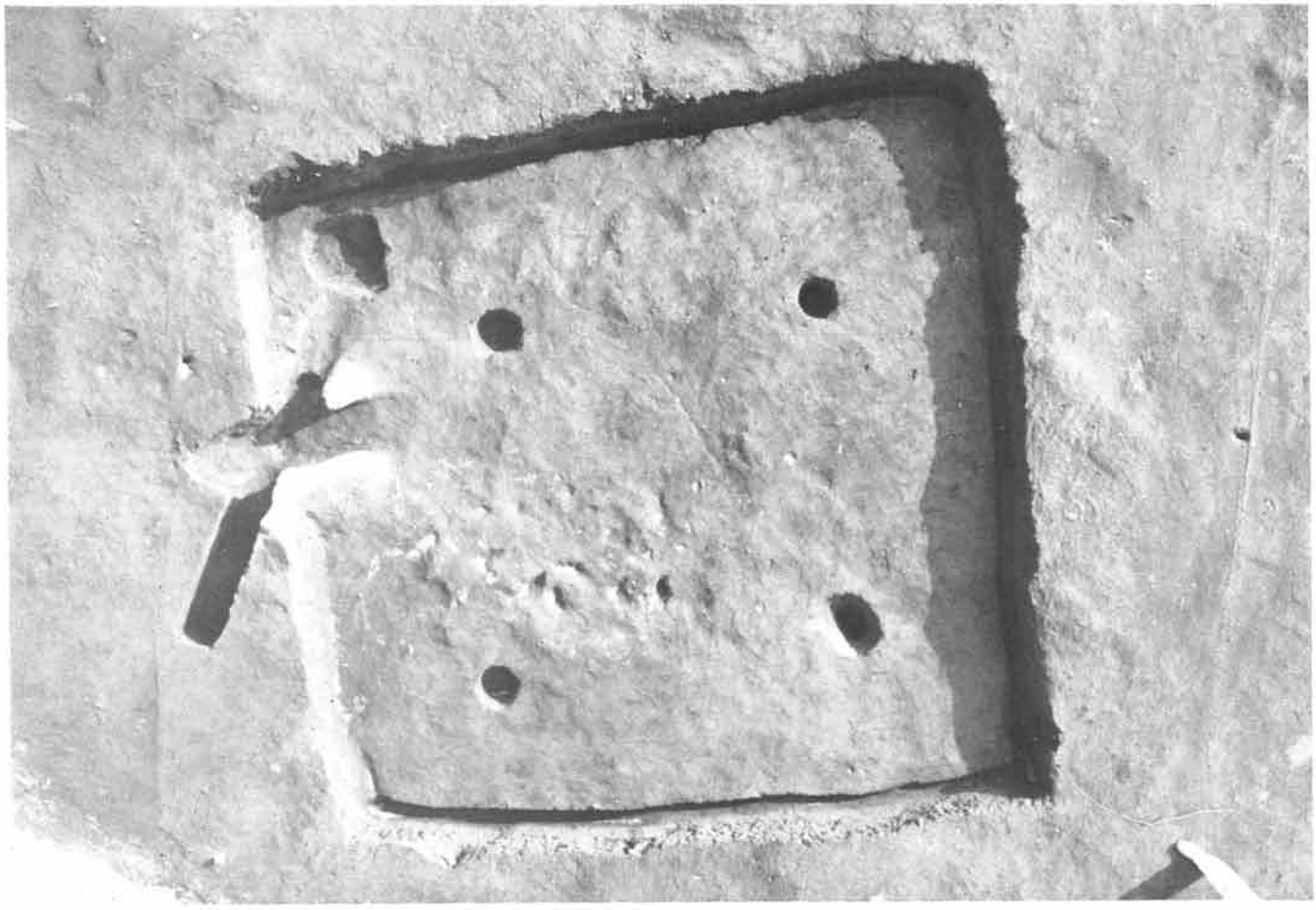
4.　同　遺物出土状況近景

5.　同　遺物出土状況近景

図版１０

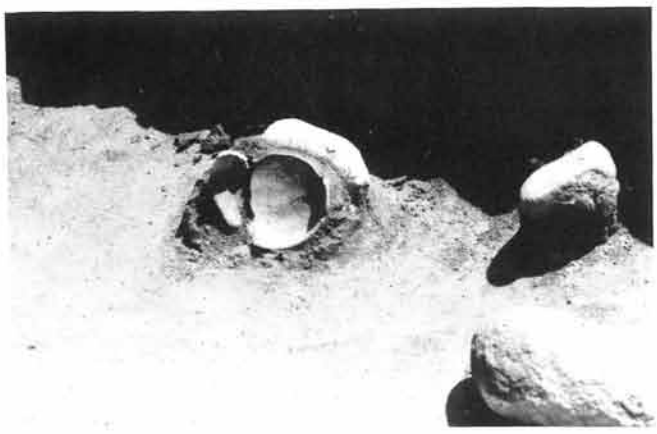
1.　９号住居址遺物出土状況

2.　同　カマド近景



3.　１０号住居址全景

4.　同　遺物出土状況

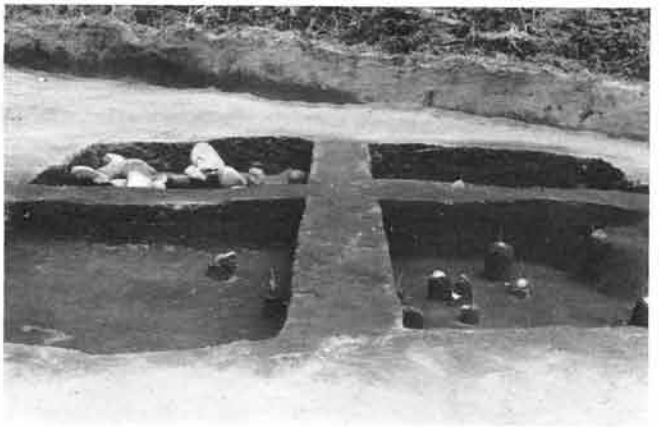


5.　同　遺物出土状況近景

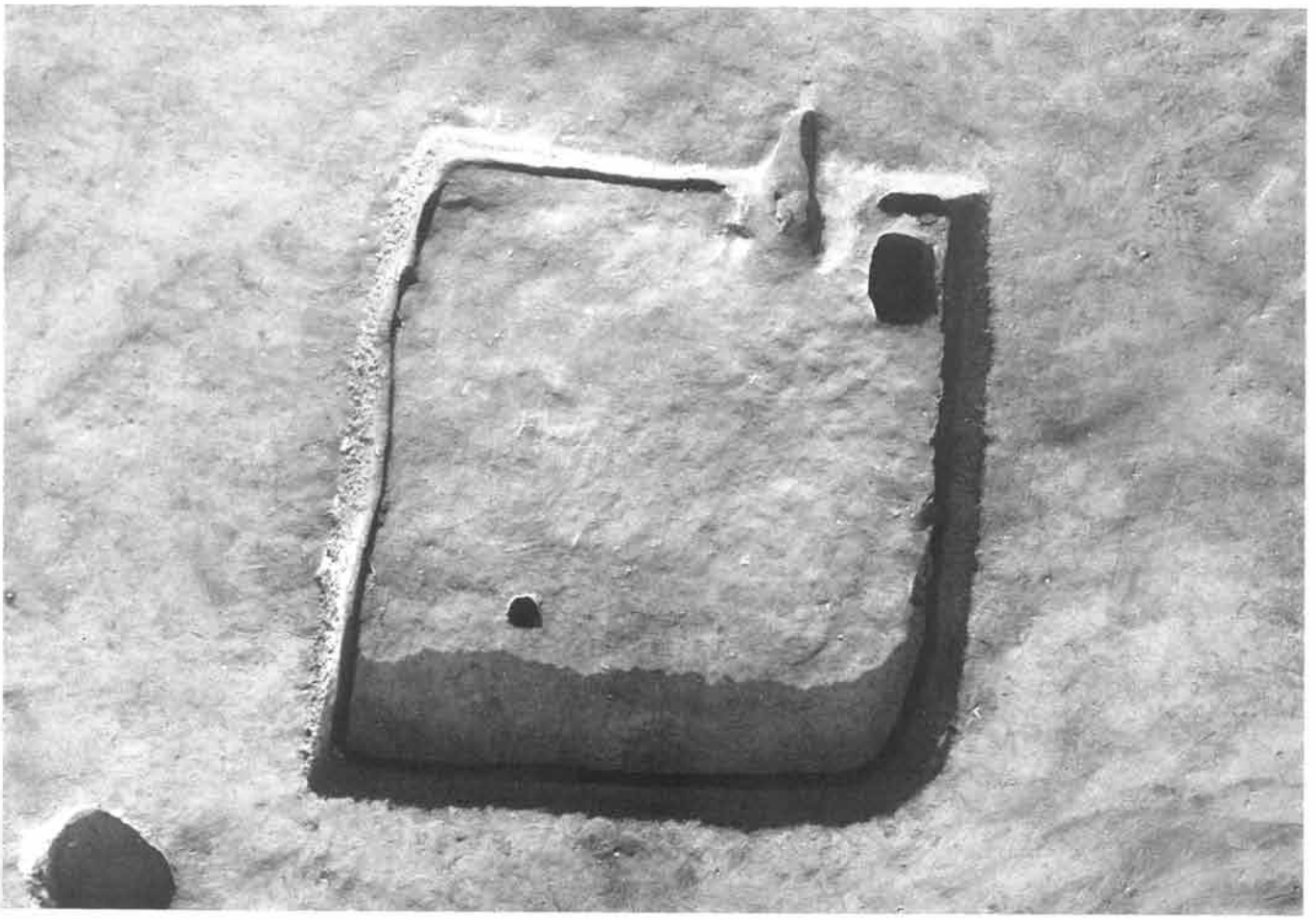
1. 同　遺物出土状況

2. 同　遺物出土状況近景

2. 同　カマド近景



4. 同　土層断面



5. 11号住居址全景

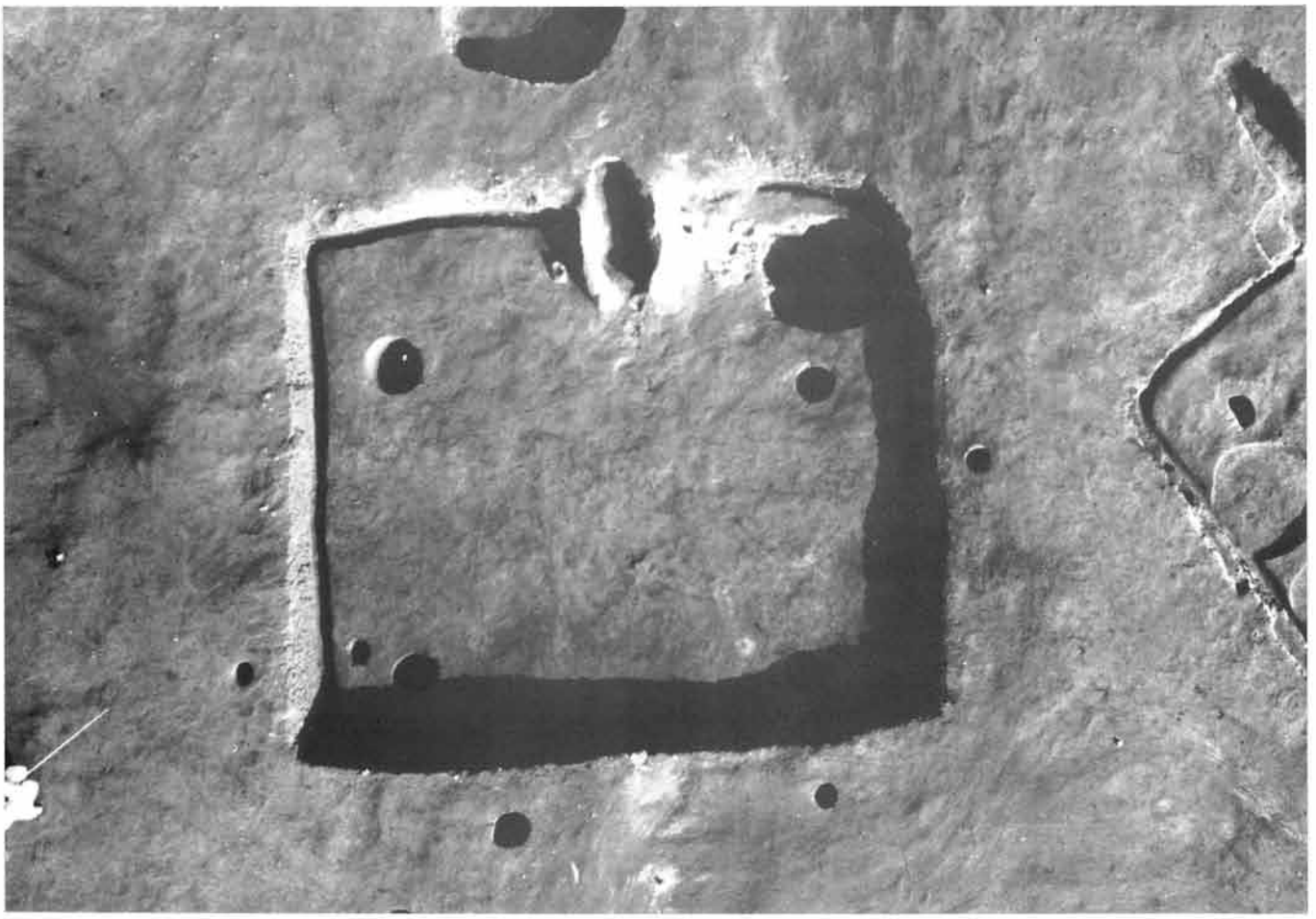
図版１２

1.　１１号住居址遺物出土状況

2.　同　遺物出土状況近景

3.　同　カマド近景

4.　同　土層断面



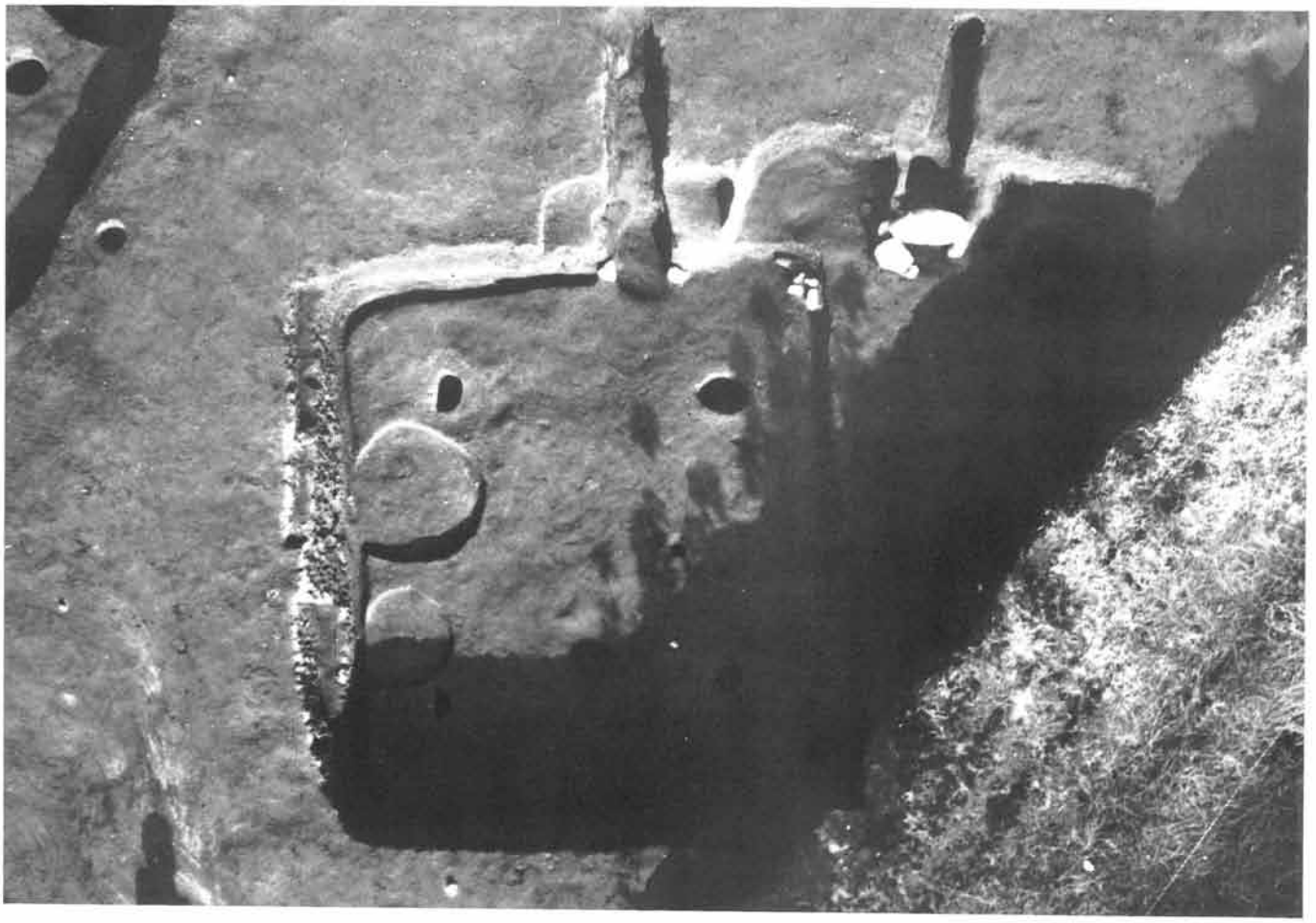
5.　１２号住居址全景

1.　12号住居址遺物出土状況

2.　同　遺物出土状況近景

3.　同　貯蔵穴近景

4.　同　カマド全景



5.　13A・13B号住居址全景

図版１４

1.　１３Ａ・１３Ｂ号住居址全景

2.　１３Ｂ号住居址貯蔵穴近景

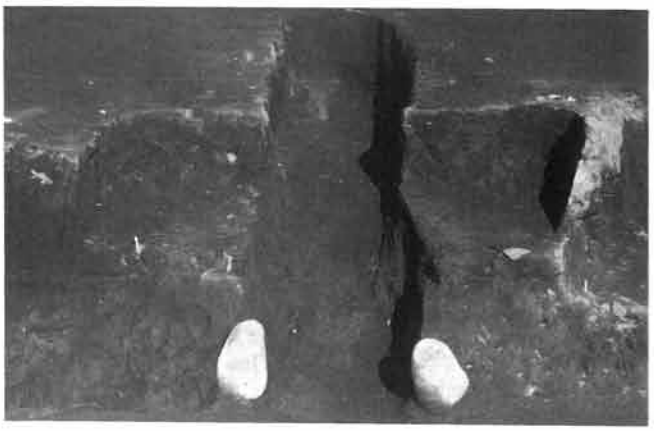
3.　１３Ａ号住居址遺物出土状況

4.　同　羽口出土状況

5.　１３Ａ号住居址遺物出土状況

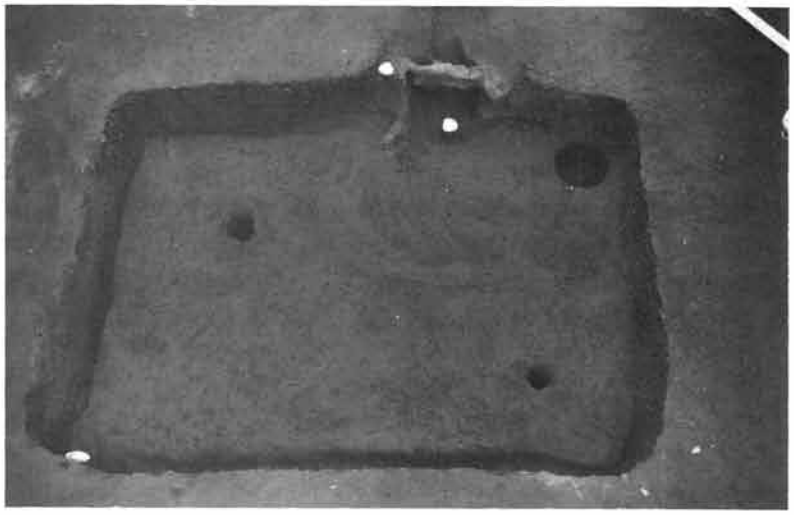
6.　１３Ｂ号住居址カマド内遺物出土状況

7.　１３号住居址土層断面

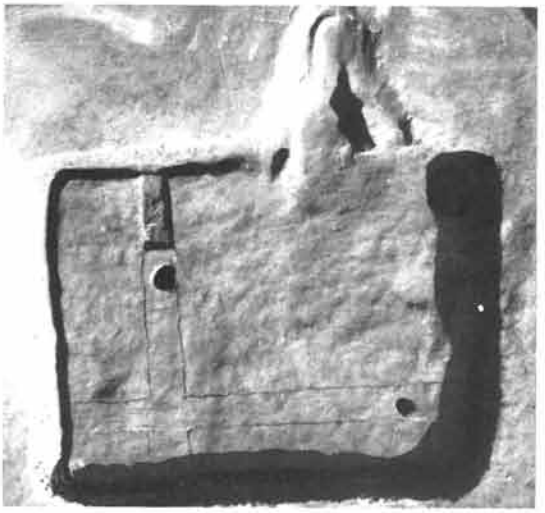


1.　13A号住居址カマド全景

2.　13B号住居址カマド全景



3.　14号住居址遺物出土状況



4.　同　全景

5.　同　土層断面

6.　同　カマド全景

図版１６

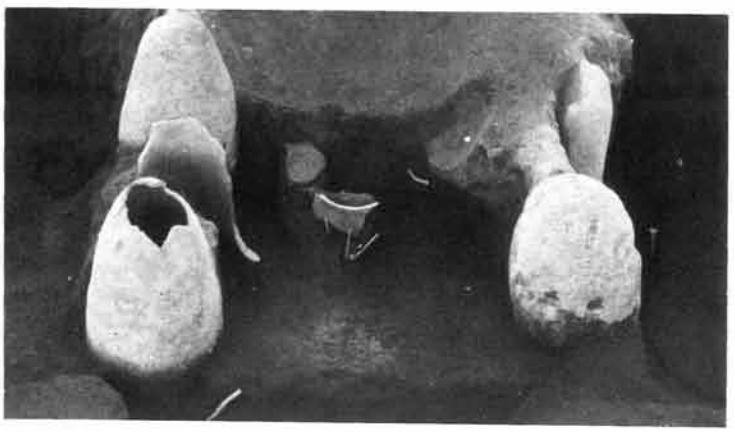
1.　１５号住居址全景

2.　同　遺物出土状況

3.　同　近景

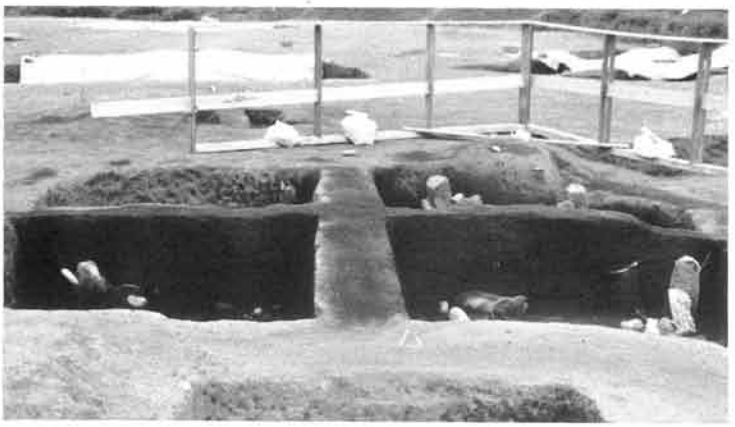
4.　同

5.　同



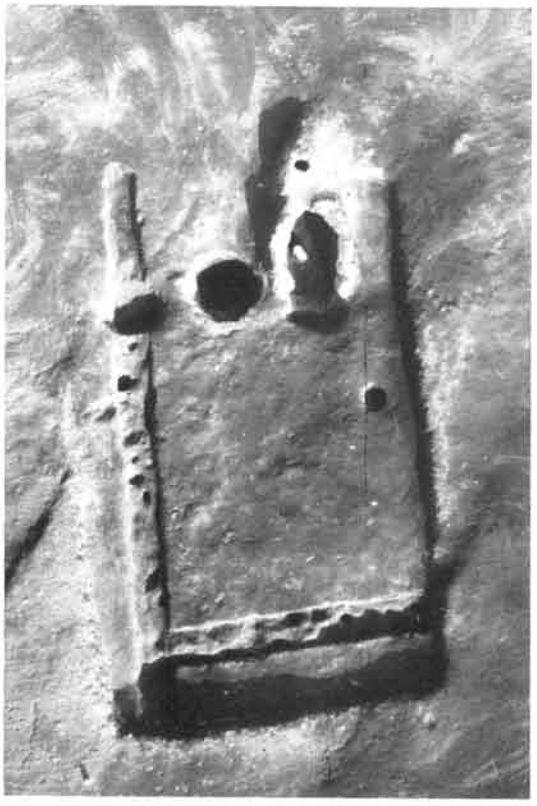
1.　15号住居址カマド近景

2.　同　集石

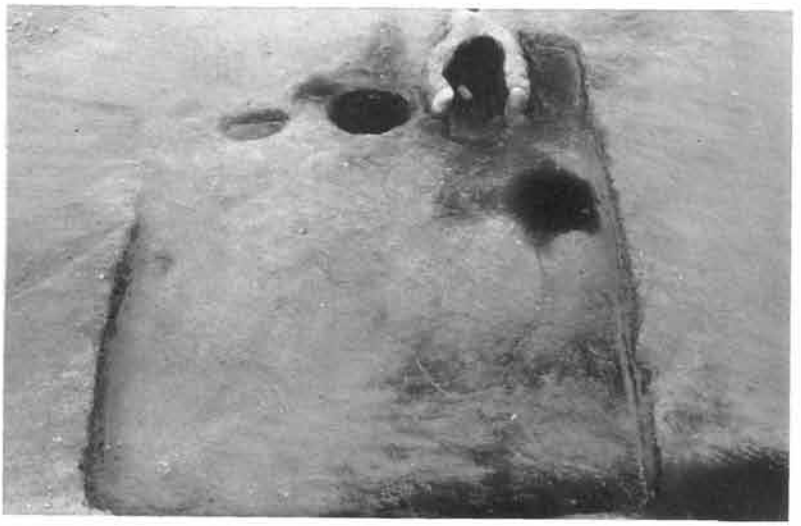


3.　同　土層断面

4.　同　カマド全景



5.　16号住居址全景



6.　同　生活面

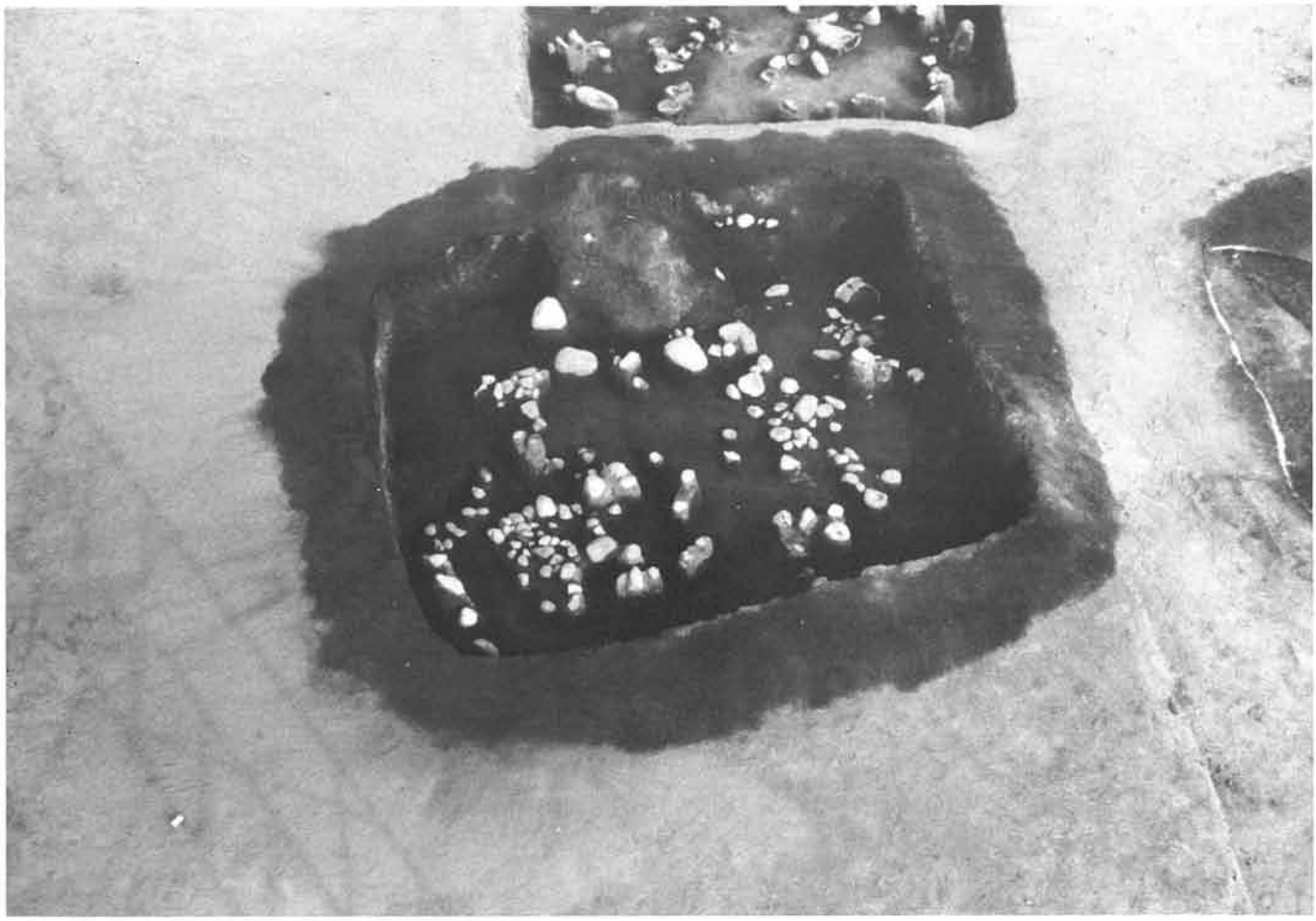
図版１８

1.　１６号住居址遺物出土状況

2.　同　近景

3.　同　カマド全景

4.　同



5.　１７号住居址遺物出土状況

1.　１７号住居址遺物出土状況近景

2.　同

3.　同　カマド

4.　同　カマド付近遺物出土状況

5.　１８・１９号住居址全景

図版20

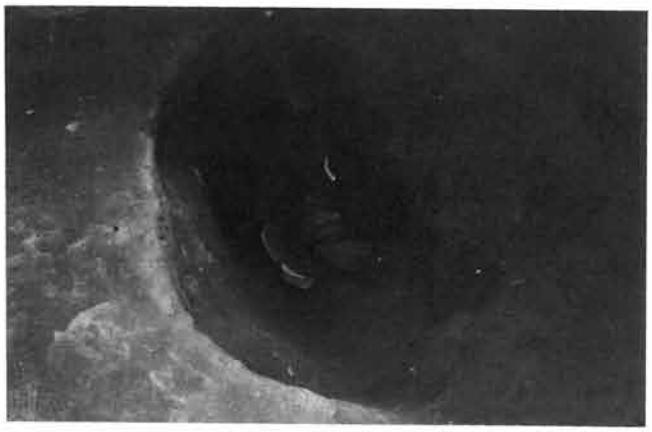
1.　１８号住居址遺物出土状況

2.　同　土層断面

3.　同　カマド全景

4.　同　カマド内遺物出土状況

5.　１９号住居址遺物出土状況



1.　19号住居址貯蔵穴内遺物出土状況

2.　同　集石

3.　同　カマド全景

4.　同　カマド土層断面

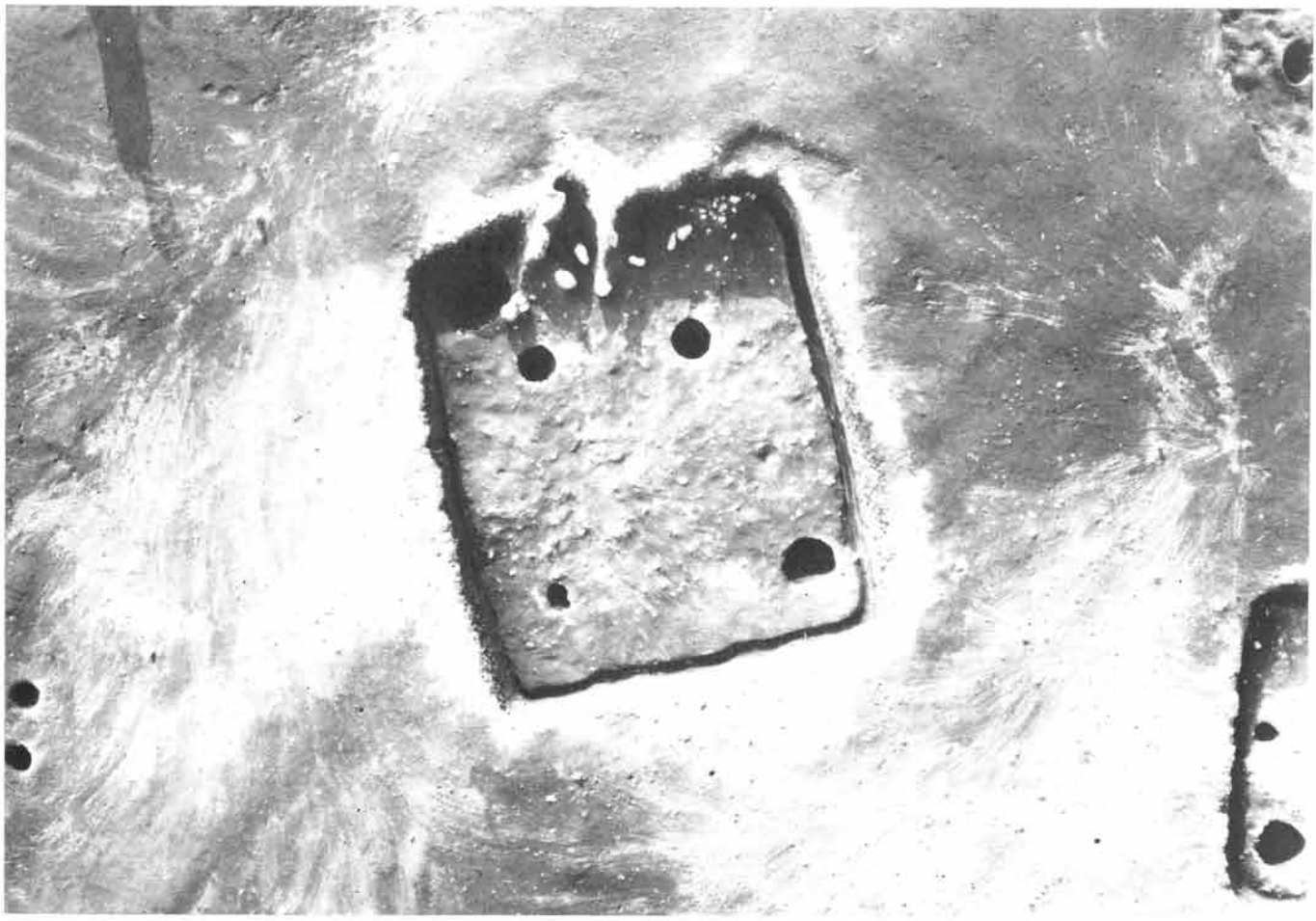
5.　18・19・20・22号住居址全景

図版２２

1.　２２号住居址カマド全景

2.　同　カマド土層断面

3.　同　土層断面



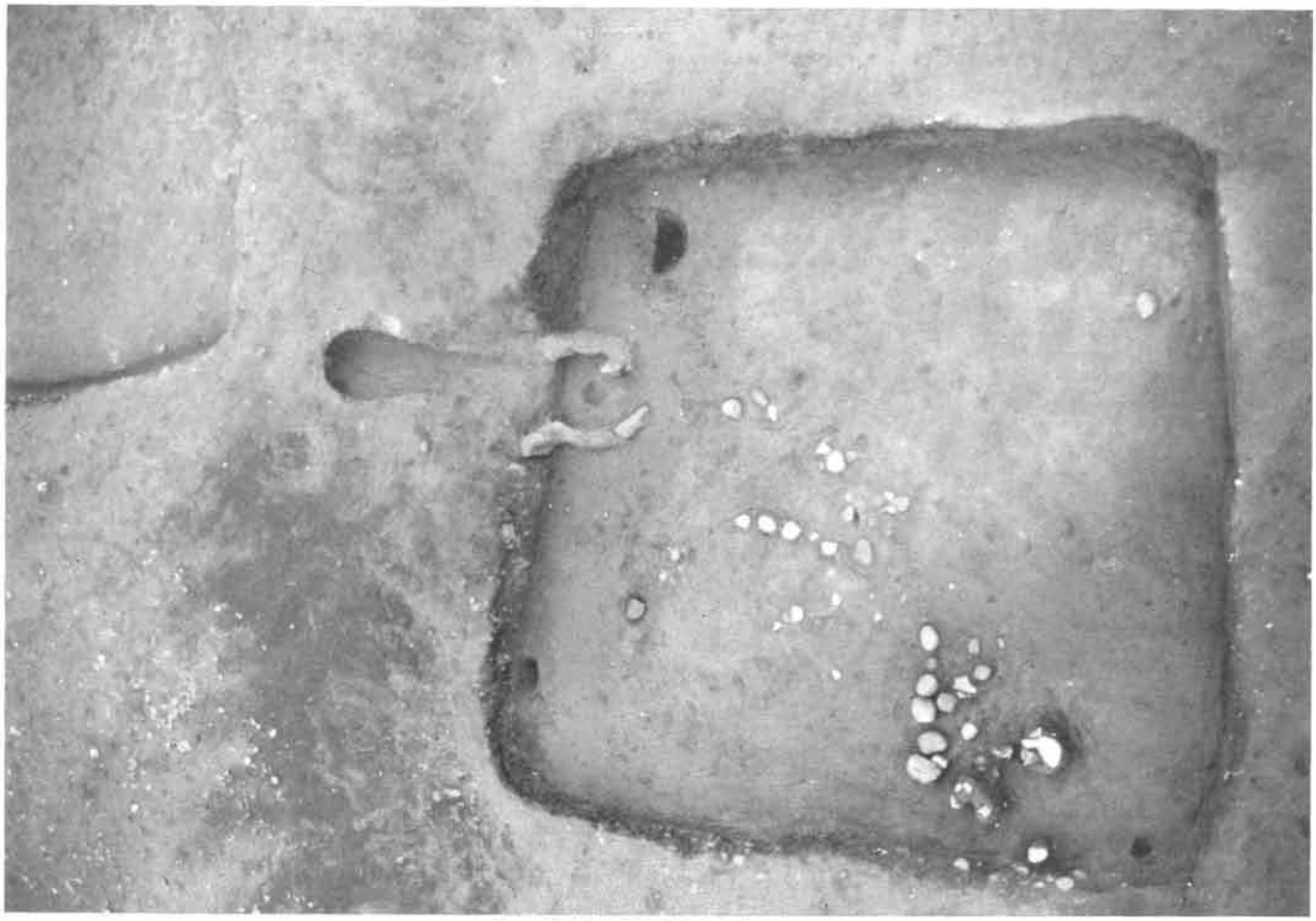
4.　２１号住居址全景

1.　21号住居址遺物出土状況

2.　同　カマド全景

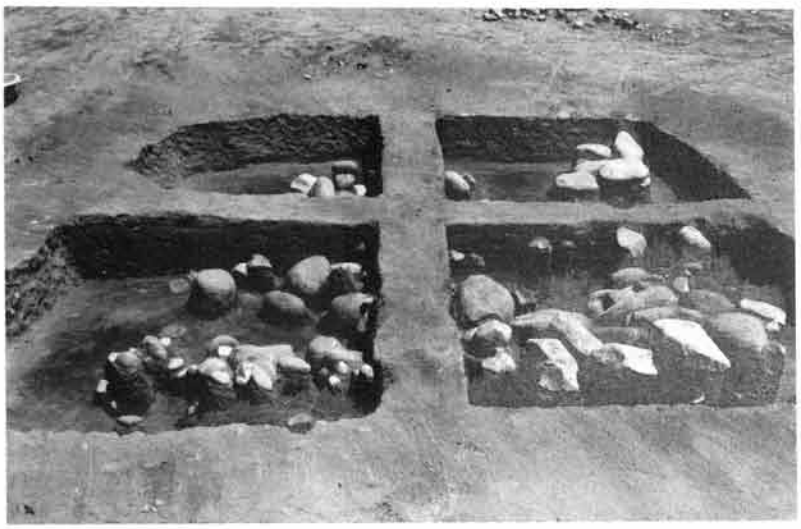
3.　同　遺物出土状況近景

4.　同　カマド土層断面

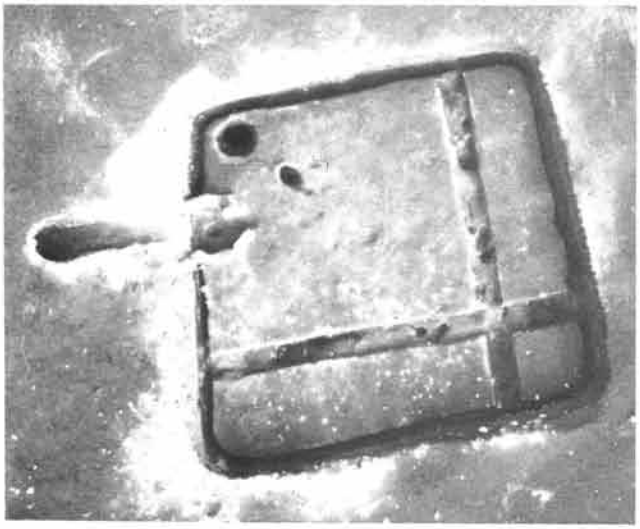


5.　22号住居址全景

図版24



1.　22号住居址土層断面



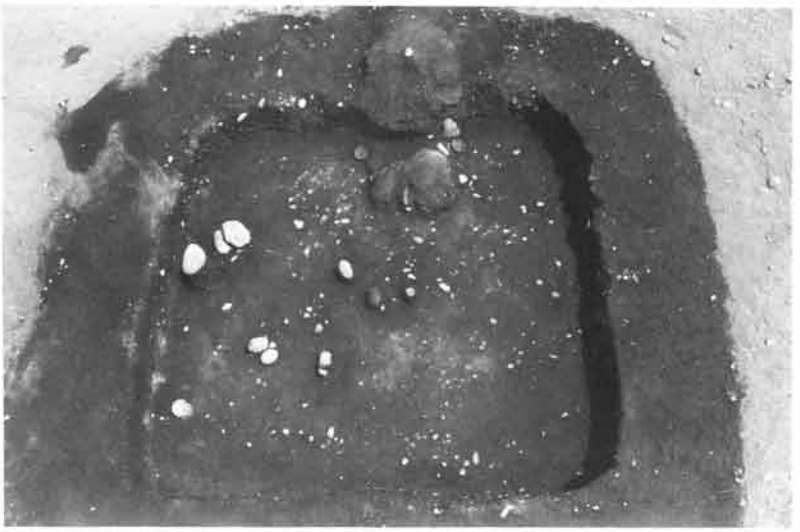
2.　同　掘り方

3.　同　遺物出土状況

4.　同　カマド全景

5.　同　カマド土層断面

1.　23号住居址全景



2.　同　遺物出土状況

3.　同　土層断面

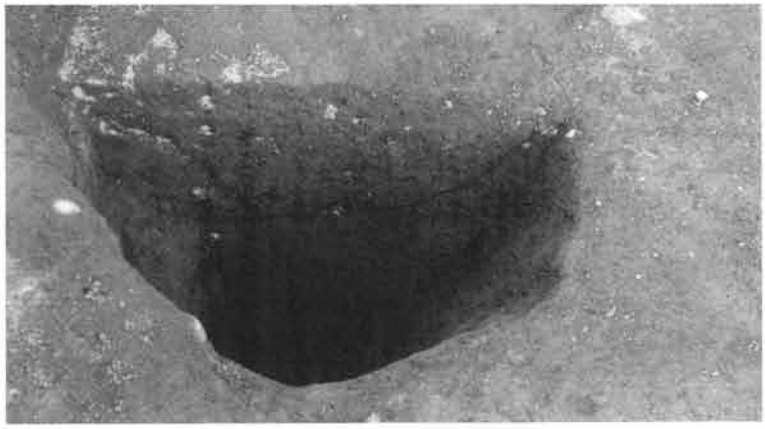
4.　同　カマド土層断面

5.　同　カマド全景

6.　同　天井石除去状況

図版２６

1.　２４・２５号住居址全景



2.　２４号住貯蔵穴土層断面

3.　同　カマド全景

4.　同　遺物出土状況

5.　同　カマド土層断面

1.　26号住居址全景

2.　同　土層断面

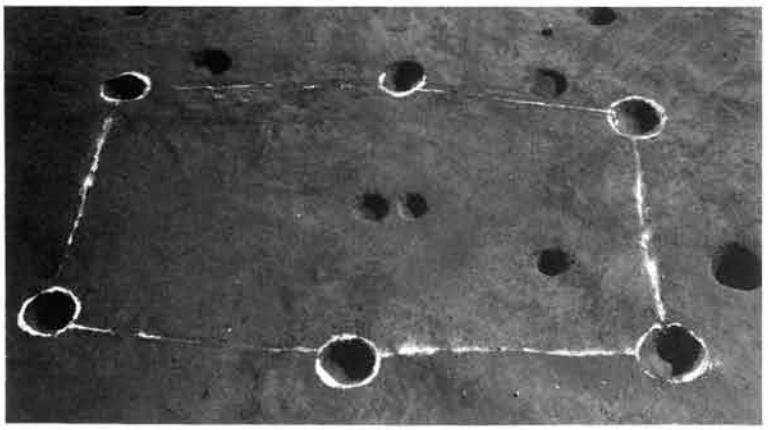
3.　同　カマド付近遺物出土状況

4.　同　カマド土層断面

5.　同　カマド全景

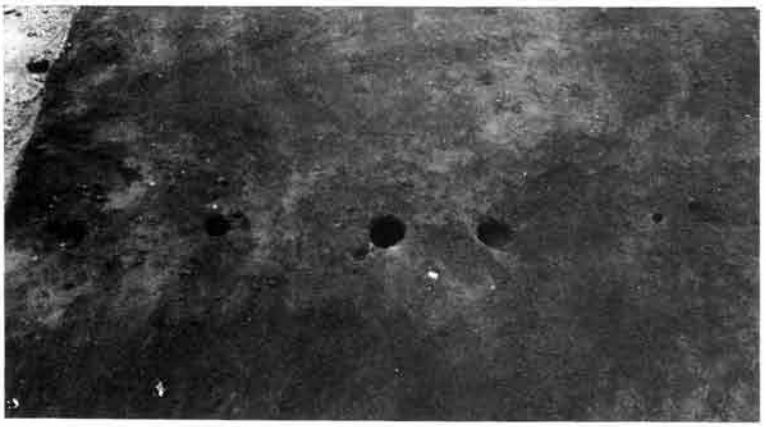
図版28

1.　27号住居址土層断面



2.　掘立遺構全景

3.　甌穴近景



4.　同　全景

5.　同

1.　２８号住居址全景（掘り方）

2.　同　遺物出土状況近景

3.　同　カマド付近

4.　７・２８号住居址カマド

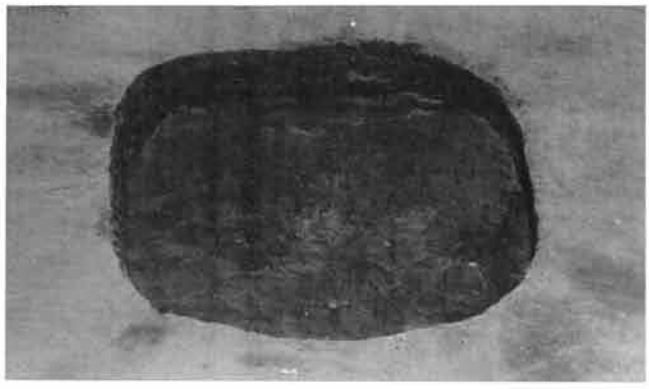
5.　同　全景

図版30

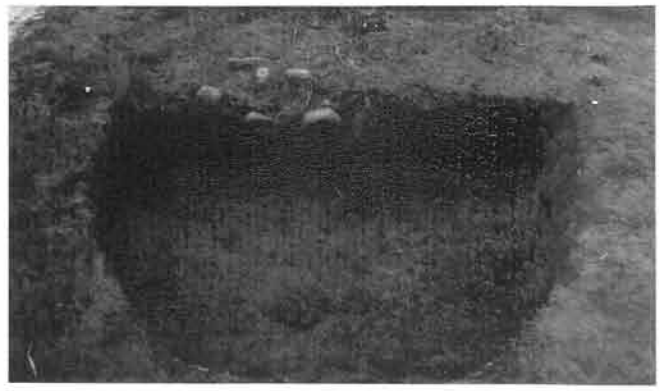
1. 引切塚1号墳石室

2. 同

3. 同　刀子出土状況



4. 9号土坑全景



5. 同　土層断面

1－1

2－2

2－4

4－4

5－1

2－1

2－3

3－1

4－3

4－5

4－6

5－2

5－3

5－7

5－8

5－9

5－１２

6－１

7－１

7－２

7－７

7－８

7－９

7－１２

図版34

8－1

7－15

8－2

9－1

9－4

9－3

10－5

10－1

１０－６（上半部）

１０－６（下半部）

１１－１

１１－４

１１－６

１２－２

１２－１

12－3

12－5

12－6

13－1

13－2

13－4

13－5

13－6

13－10

13－12

13－13（上半部）

13－18

13－13（下半部）

14－1

14－2

14－3

14－4

15－2

15－3

15－4

15－5

15－6

15－8

15－12

15－15

15－16

15－18

15－19

15－21

15－25

15－23

15－24

15－24

図版４０

１５－２６

１５－２６

１５－２８

１５－３４

１５－３３

１５－３５

１６－１

１６－２

１７－３

１７－４

１７－７

１７－１

１７－５

１７－６

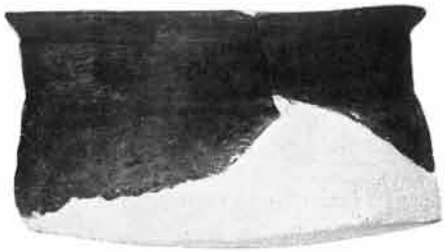
１７－８

図版４２

１７－９

１９－１

１９－２



１９－４

１８－１

１８－２

１９－３

２１－２

21－4

21－5

21－6

22－2

22－3

22－4

22－1

22－5

22－6

２３－１

２３－２

２３－３

２３－４

２４－１

２６－１

２６－２

２６－３

２６－４

古墳－２

３－２

２８－１５

１５－３６

１３－１７

１３－１５

１３－１６

１２－８　　３－３

９－５

５－１４

１３－１９　　１８－３

石鏃－４

石鏃－３　　石鏃－２　　石鏃－１

石斧－８

石斧－２

石斧－１

古墳－３

古墳－１

大胡町文化財蔵書印

引切塚遺跡

昭和63年3月15日 印刷
昭和63年3月20日 発行

編集 スナガ環境測設株式会社

発行 前橋市教育委員会
前橋市埋蔵文化財発掘調査団

印刷 (有)サクラヤ印刷所

H-1
H-2
H-3
H-4
H-5
H-6
H-7
H-8
H-9
H-10
H-11
H-12
H-13A
H-13B
H-14
H-15
H-16
H-17
H-18
H-19
H-20
H-21
H-22
H-23
H-24
H-25
H-26
田H-1
D-1
D-2
D-3
D-4
D-5
D-6
D-7
D-8
D-9
D-10
D-11
D-12
BM:142.50m
BM:142.50m
10m